

鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅶ

平成3年度

鹿児島大学埋蔵文化財調査室

1992年3月

序

昭和60年に発足いたしました鹿児島大学埋蔵文化財調査室の活動も、各学部の御理解御協力により順調な歩みを続け、ここに『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅶ』を発行する運びとなりました。

ここには、平成3年2月より12月までに行った本調査1件、試掘調査2件、立合調査8件の調査結果を載せています。大学全体として埋蔵文化財についての認識が高まり、小規模の工事に伴う立合調査まで確実に行われるようになったことは喜ばしい限りです。特に本年度は、理学部南西島弧地震火山観測所の建設予定地である教育学部寺山実習地の試掘も行われており、調査地域は更に拡大しております。吉野台地は、鹿児島県の縄文遺跡の学術的調査が最初に行われた地域でもありますから、寺山地域の埋蔵文化財については、試掘調査のみで結論を出すことなく、観測所の建築に当たっては十分注意して調査することが大学の責務であると考えられます。

郡元・下荒田地区キャンパス将来計画案も公表され、その決定も最終段階を迎えようとしています。何れの案に決定したとしましても、「遺跡の上に建つ大学」の再開発には、埋蔵文化財の調査を欠くことはできません。また、長期的展望に立てば、発掘した遺物などの保管が今の状態でいいはずはなく、大学内の遺物・遺跡を有効に研究・教育に利用するためにも、研究のための人と場所について本格的に考える時期にもきているのではないかと思います。各学部の、更に一層の御理解と御協力を御願ひする次第です。

最後に、鹿児島大学埋蔵文化財調査室の発足以来、調査室主任として御尽力頂いてまいりました松永幸男氏が、1月末をもって転出されました。長い間のご苦勞に感謝すると共に、新任地での御活躍を祈ります。

平成4年3月

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会
委員長 安藤 保

例 言

1. 本年報は鹿児島大学構内において鹿児島大学埋蔵文化財調査室が平成3年2月1日から平成3年12月31日までに行った調査活動の成果をまとめたものである。調査報告は平成2年度分（平成3年2～3月）を第Ⅰ部、平成3年度分（平成3年4月～12月）を第Ⅱ部とする。
2. 昭和60年6月1日の埋蔵文化財調査室の設置を機として、鹿児島大学構内におけるこれからの埋蔵文化財調査に便であるように鹿児島大学構内座標を郡元団地と宇宿団地とに設定した。
その設置基準は以下のようである。
 - (1) 郡元団地では、国土座標第2座標系（ $X = -158.200$, $Y = -42.400$ ）を基点として一辺50mの方形地区割りを行った（図版1参照）。
 - (2) 宇宿団地では、国土座標第2座標系（ $X = -161.600$, $Y = -44.400$ ）を基点として一辺50mの方形地区割りを行った。
3. 本年報において報告を行った調査地点については、立合調査地点を除き、図版1にその位置を示している。
4. 本年報の執筆は第Ⅰ部については松永幸男が、第Ⅱ部については第1章を松永が、第2章を有馬孝一が、第3章を松永・有馬が担当している。また、付編については、Ⅰを中村直子が、Ⅱを松永・中村・黒木綾子・有馬孝一が執筆した。
5. 本年報掲載の遺構・遺物の実測・製図・写真撮影は中村・有馬・松永・黒木綾子が行った。
6. 付編Ⅰ・Ⅱはそれぞれ平成2年度に埋蔵文化財調査室が行った教育学部附属小学校プール上屋建設工事に先立つ発掘調査、及び工学部情報工学科校舎建設に先立って実施した発掘調査の報告で、『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅵ』に掲載の調査報告概要の欠を補うものである。
7. 本書の編集は室長上村俊雄の指導を受けて、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が行った。

目 次

第Ⅰ部 平成2年度（平成3年2～3月）鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告	1
第1章 平成2年度（平成3年2～3月）調査の概要	3
第2章 鹿児島大学郡元団地B－8・9区（課外活動施設建設予定地） における試掘調査報告	5
1. 調査に至る経過及び調査体制	5
2. 調査の経過	5
3. 層序	6
4. 遺構	6
5. 遺物	7
6. まとめ	10
第3章 平成2年度（平成3年2～3月）立合調査報告	11
第Ⅱ部 平成3年度（平成3年4～12月）鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告	17
第1章 平成3年度（平成3年4～12月）調査の概要	19
第2章 鹿児島大学教育学部寺山実習地内における試掘調査報告	20
1. 調査に至る経過	20
2. 調査組織	20
3. 調査の経過	20
4. 層序	20
5. まとめ	23
第3章 平成3年度（平成3年4～12月）立合調査報告	24
・鹿児島大学構内遺跡調査要項	29
・購入・受贈図書目録	32
付 編	37
I. 鹿児島大学郡元団地S・T－6・7区（教育学部附属小学校プール上屋 建設地）における発掘調査報告	39
1. 調査に至る経過	39
2. 調査組織	40
3. 調査の経過	40
4. 層序	40
5. 遺構と遺構出土遺物	40
6. 包含層出土遺物	66

7. まとめ	71
II. 鹿児島大学郡元団地H-11・12区（工学部情報工学科校舎建設予定地）	
における発掘調査報告	74
1. 調査に至る経過	74
2. 調査の経過	75
3. 基本土層	80
4. 遺構と遺構出土遺物	80
5. 包含層出土遺物	89
6. プラント・オパール分析結果	95
7. まとめ	97
・遺物観察表・計測表	100

挿 図 目 次

・鹿児島大学郡元団地B-8・9区（課外活動施設建設予定地）における試掘調査	
第1図 調査地点位置図	5
第2図 No.1トレンチ層位断面図	6
第3図 No.1トレンチ検出ピット	7
第4図 出土土器	8
第5図 出土土製品	9
第6図 出土軽石製品	10
・平成2年度立合調査	
第7図 唐湊学生寮立合調査地点位置図	11
第8図 立合調査時出土遺物（1）	13
第9図 教養部環境整備工事に伴う立合調査地点位置図	15
第10図 立合調査時出土遺物（2）	15
・鹿児島大学教育学部寺山実習地内における試掘調査報告	
第11図 調査地点位置図	21
第12図 土層断面図	22
・平成3年度立合調査	
第13図 教養部外灯取設電気工事に伴う立合調査地点位置図	24
第14図 工学部情報工学科校舎新営空調和設備その他工事に伴う立合調査 地点位置図	25
第15図 立合調査時出土遺物（1）	25

第16図	法文学部等電気幹線改修工事に伴う立合調査地点位置図	26
第17図	課外活動施設(厩舎)新営その他工事に伴う立合調査地点位置図	27
第18図	立合調査時出土遺物(2)	28
・鹿兒島大学郡元団地S・T-6・7区における発掘調査		
第19図	調査地点位置図	39
第20図	層位断面図(1)	41
第21図	層位断面図(2)	42
第22図	層位断面図(3)	43
第23図	遺構全体図	44
第24図	No.1 トレンチ実測図	45
第25図	No.2 トレンチ実測図(1)	46
第26図	No.2 トレンチ実測図(2)	47
第27図	No.2 トレンチ遺構出土遺物(1)	47
第28図	No.2 トレンチ遺構出土遺物(2)	48
第29図	No.3 トレンチ実測図	49
第30図	No.3 トレンチ遺構出土遺物	49
第31図	No.4 トレンチ実測図	50
第32図	No.4 トレンチ遺構出土遺物	50
第33図	No.5 トレンチ実測図	51
第34図	No.6 トレンチ実測図	51
第35図	No.7 トレンチ実測図	52
第36図	No.9 トレンチ実測図	53
第37図	No.10 トレンチ実測図	53
第38図	No.11 トレンチ実測図	54
第39図	No.12 トレンチ実測図(1)	55
第40図	No.12 トレンチ実測図(2)	56
第41図	No.12 トレンチ実測図(3)	56
第42図	No.12 トレンチ遺構出土遺物(1)	57
第43図	No.12 トレンチ遺構出土遺物(2)	58
第44図	No.12 トレンチ遺構出土遺物(3)	58
第45図	No.13 トレンチ実測図(1)	59
第46図	No.13 トレンチ実測図(2)	59
第47図	No.13 トレンチ遺構出土遺物	60
第48図	No.14 トレンチ実測図	61
第49図	No.14 トレンチ遺構出土遺物	61
第50図	No.15 トレンチ実測図	62

第51図	No.15トレンチ遺構出土遺物	63
第52図	No.16トレンチ実測図	64
第53図	No.16トレンチ遺構出土遺物	64
第54図	No.17トレンチ実測図	65
第55図	No.17トレンチ遺構出土遺物	66
第56図	I層出土遺物	67
第57図	II層出土遺物	68
第58図	III層出土遺物	69
第59図	III・IV層出土遺物	70
・郡元団地H-11・12区における発掘調査		
第60図	調査地点位置図	74
第61図	調査区南壁土層図	76・77
第62図	f・i-⑩区西壁土層図	78・79
第63図	河1実測図	81
第64図	河1出土遺物(1)	82
第65図	河1出土遺物(2)	84
第66図	河1出土遺物(3)	85
第67図	河2・3実測図	86
第68図	河3出土遺物	88
第69図	I層出土遺物	90
第70図	III層出土遺物(1)	91
第71図	III層出土遺物(2)	92
第72図	IV層出土遺物(1)	93
第73図	IV層出土遺物(2)	94
第74図	プラント・オパール資料分析結果	97

表 目 次

・郡元団地S・T-6・7区における発掘調査		
表 1	ピット一覧表	73
・郡元団地H-11・12区における発掘調査		
表 2	鹿児島大学構内遺跡郡元団地H-11・12区における プラント・オパール定量分析結果	95
表 3	プラント・オパール分析による生産量推定結果	96

・遺物観察表, 計測表

表 4	郡元団地B-8・9区出土土器観察表	100
表 5	郡元団地B-8・9区出土石器計測表	100
表 6	平成2年度立合調査出土土器観察表	100
表 7	平成2年度立合調査時出土土器観察表	101
表 8	平成3年度立合調査時出土遺物観察表	101
表 9	郡元団地S・T-6・7区出土遺物観察表	102
表 10	郡元団地S・T-6・7区出土石器計測表	106
表 11	郡元団地H-11・12区出土遺物観察表	106
表 12	郡元団地H-11・12区出土石器計測表	110

図 版 目 次

図版 1	鹿児島大学郡元団地構内図	113
・鹿児島大学郡元団地B-8・9区(課外活動施設建設予定地)における試掘調査		
図版 2	郡元団地B-8・9区(1)	114
	①調査地点全景(北東から)	②No.1トレンチ東壁
	③No.1トレンチ北壁	④No.1トレンチ4層上面検出遺構(西から)
	⑤No.2トレンチ完掘状況(西から)	
図版 3	郡元団地B-8・9区(2)	115
	出土遺物(1)	
図版 4	郡元団地B-8・9区(3)	116
	出土遺物(2)	
・平成2年度立合調査		
図版 5	平成2年度立合調査時出土遺物	117
・鹿児島大学教育学部寺山実習地内における試掘調査報告		
図版 6	寺山実習地における試掘調査	118
	①調査地点全景(南から)	②No.1トレンチ南壁
	③No.1トレンチ西壁南側	④No.1トレンチ西壁北側
	⑤No.2トレンチ北壁	⑥No.2トレンチ東壁
	⑦No.3トレンチ西壁	⑧No.3トレンチ北壁
・平成3年度立合調査		
図版 7	平成3年度立合調査時出土遺物	119

・鹿児島大学郡元団地S・T-6・7区における発掘調査

図版 8	郡元団地S・T-6・7区発掘調査(1)	120
	①調査区全景(東から)	
	②調査区全景(北から)	
	③No.1トレンチ西壁	
	④No.3トレンチ南壁	
	⑤No.4トレンチ南壁	
	⑥No.13トレンチ南壁	
	⑦No.14トレンチ北壁	
	⑧No.15トレンチ東壁	
図版 9	郡元団地S・T-6・7区発掘調査(2)	121
	①No.1トレンチ遺構(北から)	
	②No.2トレンチH1(西から)	
	③No.2トレンチH2(東から)	
	④No.2トレンチH3・H5(西から)	
	⑤No.2トレンチSD1・H4(西から)	
	⑥No.3トレンチ遺構(北から)	
	⑦No.3トレンチH6(西から)	
	⑧No.3トレンチSD2(北から)	
図版10	郡元団地S・T-6・7区発掘調査(3)	122
	①No.4トレンチ遺構(西から)	
	②No.4トレンチSD3(北から)	
	③No.4トレンチH4(西から)	
	④No.5トレンチ完掘状況	
	⑤No.6トレンチV層上面(北から)	
	⑥No.7トレンチV層上面(西から)	
	⑦No.7トレンチH17(西から)	
	⑧No.7トレンチH17埋土	
図版11	郡元団地S・T-6・7区発掘調査(4)	123
	①No.9トレンチ遺構(西から)	
	②No.10トレンチ遺構(西から)	
	③No.11トレンチ遺構(東から)	
	④No.11トレンチ遺構(南から)	
	⑤No.12トレンチ遺構(東から)	
	⑥No.12トレンチSD5(東から)	
	⑦No.12トレンチH8・H9(東から)	
	⑧No.12トレンチH8・H9(北から)	
図版12	郡元団地S・T-6・7区発掘調査(5)	124
	①No.13トレンチ(南から)	
	②No.13トレンチH10(東から)	
	③No.13トレンチH12(西から)	
	④No.13トレンチH11(北から)	
	⑤No.14トレンチ遺構(南から)	
	⑥No.14トレンチ遺構(北から)	
	⑦No.14トレンチH13(西から)	
	⑧No.14トレンチH13(東から)	
図版13	郡元団地S・T-6・7区発掘調査(6)	125
	①No.15トレンチ遺構(東から)	
	②No.15トレンチH14(南から)	
	③No.15トレンチH15(西から)	
	④No.15トレンチH15埋土	
	⑤No.15トレンチSD6(東から)	
	⑥No.15トレンチSD6埋土	
	⑦No.15トレンチピット(北から)	
	⑧No.16トレンチ遺構(東から)	
図版14	郡元団地S・T-6・7区発掘調査(7)	126
	①No.16トレンチH15(東から)	
	②No.16トレンチSD7(東から)	
	③No.16トレンチSK2(西から)	
	④No.16トレンチH16	
	⑤No.17トレンチ遺構(東から)	
	⑥No.17トレンチSK3(北から)	
	⑦No.17トレンチSK3(西から)	
	⑧No.17トレンチSK3埋土	

図版15	郡元団地S・T-6・7区発掘調査(8)	127
	出土遺物(1)	
図版16	郡元団地S・T-6・7区発掘調査(9)	128
	出土遺物(2)	
図版17	郡元団地S・T-6・7区発掘調査(10)	129
	出土遺物(3)	
図版18	郡元団地S・T-6・7区発掘調査(11)	130
	出土遺物(4)	
図版19	郡元団地S・T-6・7区発掘調査(12)	131
	出土遺物(5)	
図版20	郡元団地S・T-6・7区発掘調査(13)	132
	出土遺物(6)	
図版21	郡元団地S・T-6・7区発掘調査(14)	133
	出土遺物(7)	
・郡元団地H-11・12区における発掘調査		
図版22	郡元団地H-11・12区発掘調査(1)	134
	①g-⑩区西壁	②f-⑩区西壁
	③h-⑩区西壁	④i-⑩区南壁
	⑤i-②区南壁	⑥i-③区南壁
	⑦i-④区南壁	⑧i-⑤区南壁
図版23	郡元団地H-11・12区発掘調査(2)	135
	①河1完掘状況(南から)	②河1完掘状況(南から)
	③河1完掘状況(南東から)	④河1完掘状況(北西から)
	⑤河1埋土遺物出土状況	
図版24	郡元団地H-11・12区発掘調査(3)	136
	①河2調査状況(西から)	②河2調査状況(西から)
	③~⑧河2埋土遺物出土状況	
図版25	郡元団地H-11・12区発掘調査(4)	137
	①河2-3全景(南から)	②河2埋土
	③河2-3中央部(西から)	④河2-3中央部(北から)
	⑤河2-3中央部(東から)	⑥河2-3東側部分(南から)
	⑦河3-1(南東から)	⑧河3-1(北から)
図版26	郡元団地H-11・12区発掘調査(5)	138
	①河2-4全景(南から)	②河2-4全景(東から)
	③河2-4全景(南東から)	④河2-4東側部分(南から)
	⑤河2-4西側部分(南から)	⑥河2-4中央部分(南から)

	⑦河3-2完掘状況(北西から)	⑧河3-2完掘状況(北から)	
図版27	郡元団地H-11・12区発掘調査(6)	郡元団地H-11・12区発掘調査(6)	139
	出土遺物(1)		
図版28	郡元団地H-11・12区発掘調査(7)	郡元団地H-11・12区発掘調査(7)	140
	出土遺物(2)		
図版29	郡元団地H-11・12区発掘調査(8)	郡元団地H-11・12区発掘調査(8)	141
	出土遺物(3)		
図版30	郡元団地H-11・12区発掘調査(9)	郡元団地H-11・12区発掘調査(9)	142
	出土遺物(4)		
図版31	郡元団地H-11・12区発掘調査(10)	郡元団地H-11・12区発掘調査(10)	143
	出土遺物(5)		
図版32	郡元団地H-11・12区発掘調査(11)	郡元団地H-11・12区発掘調査(11)	144
	出土遺物(6)		
図版33	郡元団地H-11・12区発掘調査(12)	郡元団地H-11・12区発掘調査(12)	145
	出土遺物(7)		

第 I 部 平成 2 年度（平成 3 年 2 ～ 3 月）
鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告

- 第 1 章 平成 2 年度（平成 3 年 2 ～ 3 月）調査の概要
- 第 2 章 鹿児島大学郡元団地 B - 8 ・ 9 区（課外活動施設建設予定地）における試掘調査
- 第 3 章 平成 2 年度（平成 3 年 2 ～ 3 月）立合調査報告

第1章 平成2年度（平成3年2～3月）調査の概要

平成3年2～3月には、下記のように、本調査1件、試掘調査1件、立合調査4件を実施した。なお、このうち工学部情報工学科校舎建設予定地において実施した本調査は、平成2年12月6日から開始したもので、この報告については、付編Ⅱとして、本年報に掲載している。

・本調査

①工学部情報工学科校舎建設予定地における発掘調査（平成2年12月6日～平成3年3月19日、郡元団地H-11・12区）

・試掘調査

①課外活動施設（厩舎）建設予定地における試掘調査（平成3年3月20～28日、郡元団地B-8・9区）

・立合調査

①唐湊学生寮公共下水道接続工事（平成3年2月18～22日・3月5・6・8・13・15日）

②郡元地区市水（飲料）配管工事（平成3年3月13・14・18～20・26日、郡元団地各地点）

③教養部構内環境整備工事（平成3年3月20・25・28日、郡元団地I・J-4・6区）

④教養部外灯取設工事（平成3年3月22日、郡元団地I-4区）

工学部情報工学科校舎建設地は郡元団地の西側ほぼ中央北寄りに位置するが、本地点からは成川式土器の包含層、及び自然河川痕が検出された。自然河川からは縄文時代以降の遺物が大量に出土している。これらの出土遺物の内、弥生時代以前の資料は、その摩耗が著しいことや、当該期の遺物包含層が周辺に検出されていないことなどから考えて、より西方の、郡元団地外の高所からの流れ込みであろうと推測された。また、自然河川の流路についても、他地点検出の自然河川痕⁽¹⁾との対応関係を検討することによって、これが時期によって流路を変えながらも、ほぼ東西方向に流れることを知ることができた。

試掘調査が実施された厩舎建設予定地は郡元団地の北端部にあたり、この付近ではこれまでも農学部温室改築予定地、あるいはR I 共同施設増築予定地などにおいて、試掘調査が行われている⁽²⁾。これらの調査においては、いずれも厚い二次堆積土の下から中近世の遺構・遺物が検出されているが、今回の試掘調査においても1.5mほどの二次堆積土の下からピット列や土壌が検出された。また、二次堆積土中には、瓦片やガラス瓶、陶器等をはじめとする現代の遺物が多数含まれていたが、これらに混じって、ごくわずかではあるが、輸入陶磁器片、成川式土器片等が採集されている。

立合調査においては、今回、唐湊学生寮において初めて調査を実施した。調査の結果、造成の際の削平を免れたプライマリーな層中から、縄文時代後期の指宿式土器が検出され、本地点に該期の良好な包含層が存在することが知られたのである。また、造成時の盛土中からは、弥生土器・成川式土器・内黒土師器等も採集されており、本地域一帯については、かなり長期にわたって営まれた

複合遺跡である可能性も考えられよう。

郡元団地内で行われた立合調査のうち、②・④は、掘削深度が浅いことや、可能な限り既掘部を利用して工事が進められたため、埋蔵文化財への影響はほとんど無かった。しかし、教養部において実施された③については、これまでの調査成果⁽³⁾に同じく、地表下60cm以下の部分に成川式土器を多量に含む遺物包含層が存在することが再確認された。遺物の分布密度は極めて密であり、今後も本地域の開発にあたっては、埋蔵文化財に対する配慮が必要である。

註

- (1) 松永幸男「昭和60年度（昭和61年2～3月）鹿児島大学構内における立合調査」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅱ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1987年
松永幸男「鹿児島大学郡元団地G・H-9・10区（電子計算機室増築地）における発掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅲ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1988年
池畑耕一「鹿児島大学電子計算機室新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（昭和58年度鹿児島県教育委員会調査）」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅵ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1991年
- (2) 本田道輝「鹿児島大学郡元団地内遺跡（B～D・9、10地点）－鹿児島大学農学部温室改築及び実験温室、網室等新設に伴う試掘調査報告書－」鹿児島大学農学部・鹿児島大学法文学部考古学研究室 1987年
坪根伸也「鹿児島大学郡元団地B-8区における試掘調査」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅱ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1987年
- (3) 鹿児島県教育委員会『埋蔵文化財発掘調査事業報告 釘田遺跡』1975年
松永幸男「昭和60年度立合調査結果」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅰ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1986年
松永幸男「鹿児島大学郡元団地I・J-4区における試掘調査」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅱ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1987年
松永幸男・砂田光紀「昭和63年度（平成元年2～3月）鹿児島大学構内における立合調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅴ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1990年

第2章 鹿児島大学郡元団地B-8・9区（課外活動施設建設予定地）における試掘調査

1. 調査に至る経過及び調査体制

鹿児島大学では老朽化した現厩舎の建て替えを計画し、その建設地として農学部北側の実習地北端部が予定された。本地点から動物飼育棟の間に広がる実習地の間においては、昭和58年及び60年に試掘調査が行われており、その結果、中近世の遺物が出土し、同時期の水田址の存在も推定されている⁽¹⁾。

このため鹿児島大学埋蔵文化財調査室では、本建設予定地において試掘調査を行い、埋蔵文化財包蔵の有無を確認することとなった。本試掘調査は平成3年3月20日から28日にかけて、下記の体制で行われた。

調査主体者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室長 上村 俊雄

調査担当 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

室長 上村俊雄

室員 松永幸男・中村直子・栗林文夫・黒木綾子

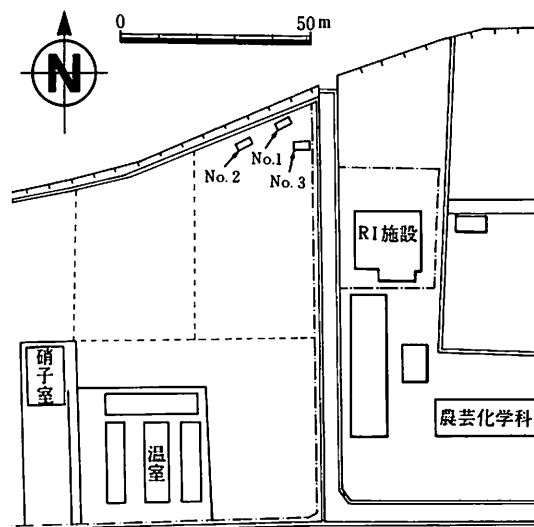
発掘調査作業員

石谷サチコ・岩戸エミコ・名越ヒデコ・野下ヨブコ・盛満アイコ

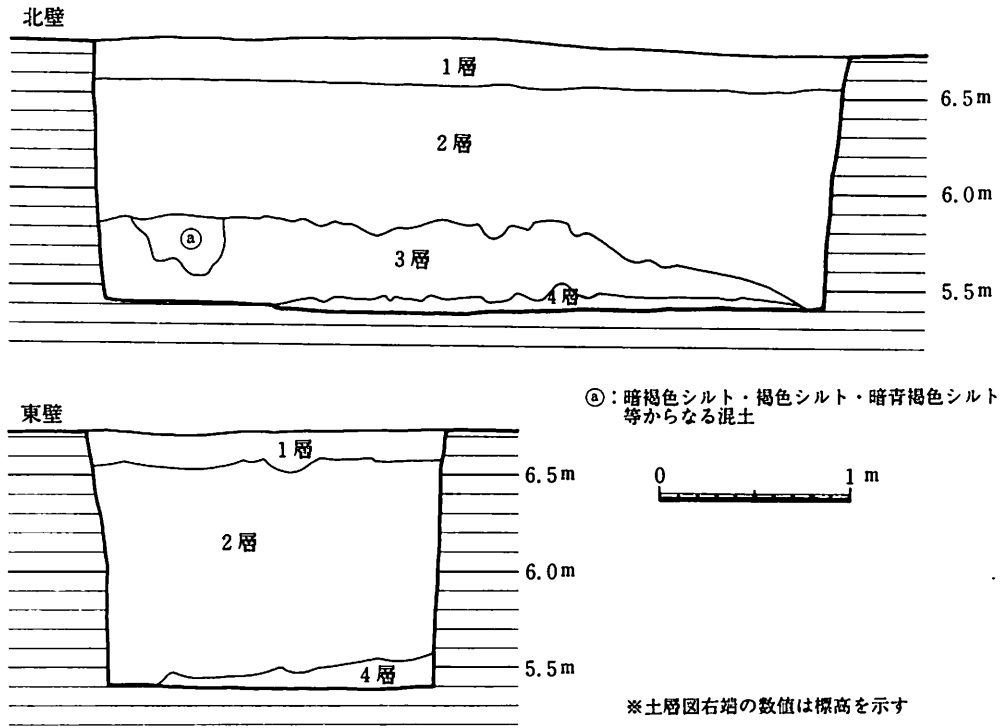
2. 調査の経過

試掘トレンチは、建物の配置に沿って、第1図のように、2m×4mのトレンチを3カ所設定した。掘り下げにあたっては、建築の際の掘削が覆い屋を支える支柱のみであることを考慮し、支柱設置に必要な深さである1.5mまで掘り下げることにした。

調査の結果、No.1・3トレンチともに深さ1.5mほどまで現代の遺物を含む攪乱層ないし二次堆積土であることが知られた。ただ、No.2トレンチにおいては、これらの層の下に暗褐色粘質シルト層が認められ、この上面で数基のピット及び土塀を検出した。No.1・3トレンチについては完掘状況の写真撮影後、またNo.2トレンチについては土層図並びに遺構平面図の作成後に埋め戻しを行い、作業を終了した。



第1図 調査地点位置図（1/2,000）



第2図 No1トレンチ層位断面図 (1/40)

3. 層序 (第2図)

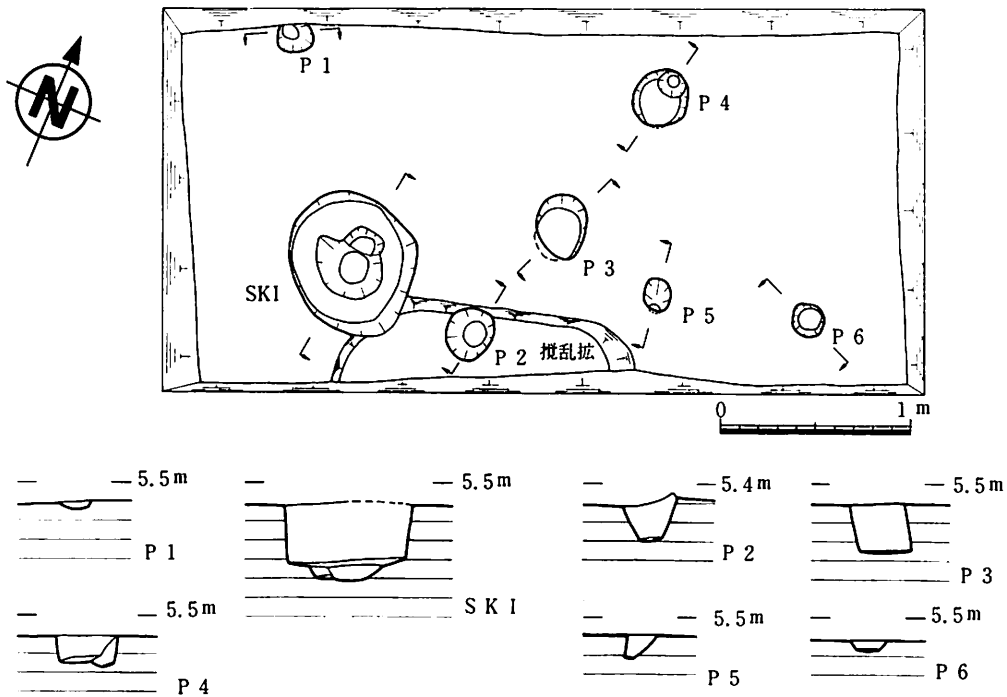
No.2 トレンチの層序を以下に示す。

- 1層：耕作土
- 2層：濁灰色シルトと濁褐色シルトの混土（コンクリート塊、瓦片、合成樹脂製品等を含む）
- 3層：淡濁褐色砂質シルト層（軽石、コンクリート塊等を含む）
- 4層：暗褐色粘質シルト層

4. 遺構 (第3図)

No.2 トレンチ 4層上面においてピットが6基（P1～P6）、土壌（SK1）が1基検出されている。SK1及びP1・4・5・6の埋土は、茶褐色を基調とし、これに灰色土や4層土がブロック状に混じる土で、人為的に一時に埋め戻された可能性も考えられる。P2は2層土を、P3は灰褐色砂を埋土とする。

SK1は長径78cm、深さ38cmを測る二段に掘り込まれた土壌で、深さ30cmほどのところにテラス状の部分形成されている。P1は径18cm、深さ4cmほどの、またP6は径16cm、深さ5cmほどの、現状ではごく浅い皿状を呈する窪みである。P3・P5は斜めに掘り込まれたピットである



※ Pit 断面図の基準線横の数値は標高を示す。

第3図 No1 トレンチ検出ピット (1/40)

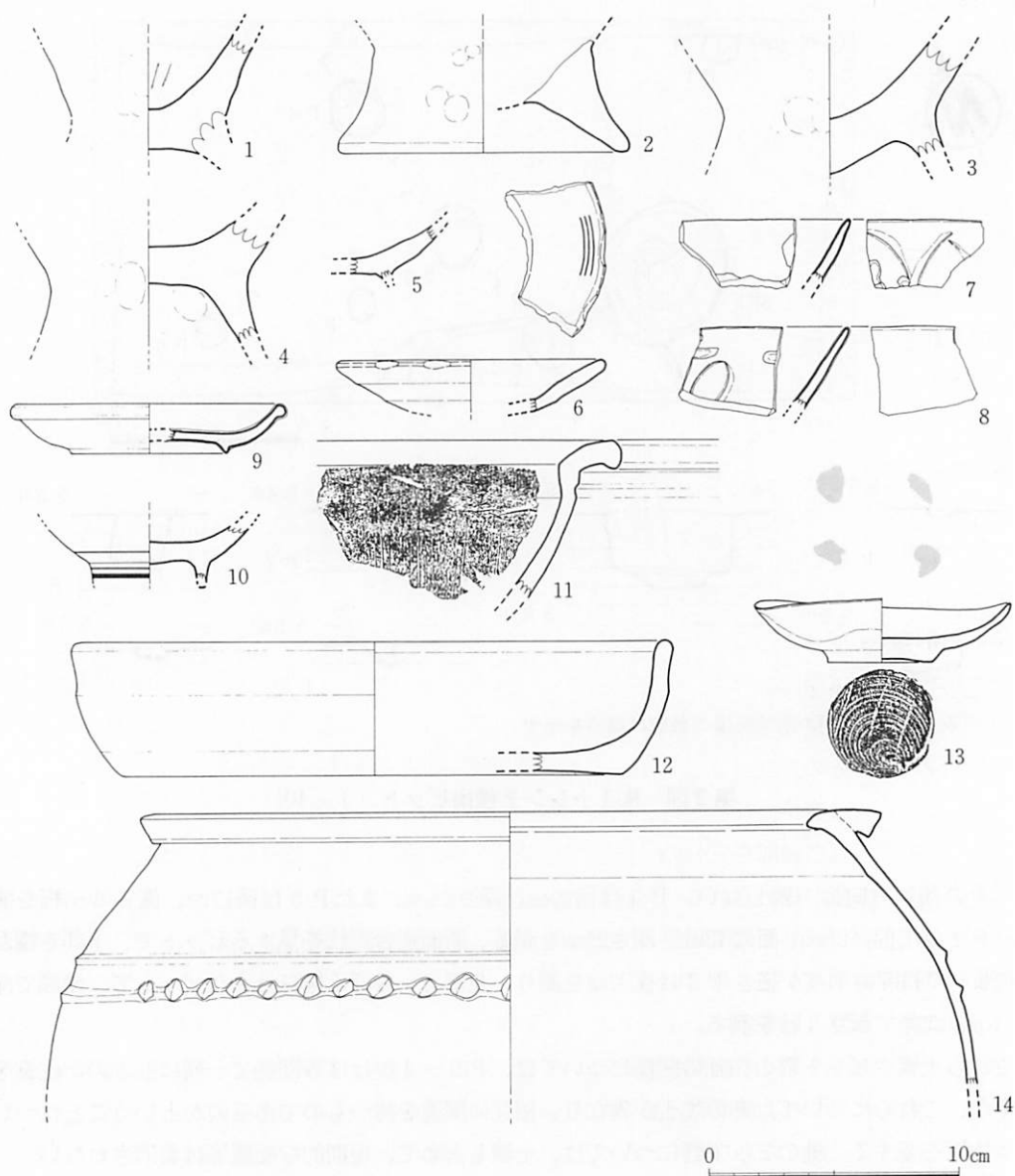
が、その傾斜方向は一致しない。P3は径29cm、深さ25cm、またP5は径17cm、深さ6cm程を測る。P2は上面径29cm、底径13cm、深さ25cmを測る、断面逆台形状を呈するピットで、上部を攪乱坑によって削平されている。P4は径32cmを測り、北側を一段深く掘り込んだピットで、南側で深さ14cm、北側で深さ4cmを測る。

これら土壌やピット群の相互の関係については、P2～4がほぼ等間隔で一列に並ぶのが注意を引くが、これらについてはその埋土が異なり、相互に関連を持つものであるのかということについては検討を要する。他のピット群については、土壌も含めて、規則的な配置等は看取されない。

5. 遺物(第4・5・6図)

第4図に示した遺物は攪乱層及び1～2層出土遺物であるが、層序の項で述べたように、これらの層はコンクリート塊が出土する等、現代の二次的な移動を受けた層と考えられる。このためここではこれらの出土遺物を一括し、ほぼ時代順に説明を行うこととする。

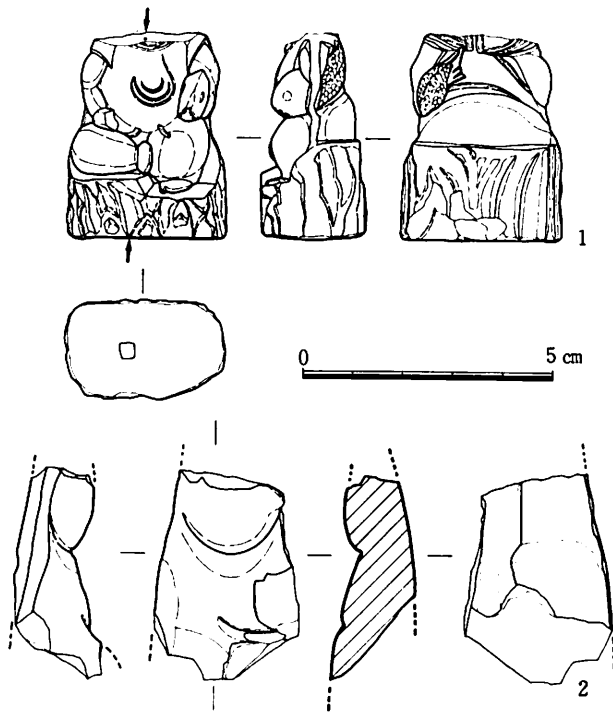
1～4は成川式の甕ないし鉢の底部片で、いずれも脚を伴っている。2の脚部は接合面で底部本体から剥離している。これら底部の形態には下方にやや突出するものと、平坦なもののがみられる。5は内黒土師器の碗底部片で、高台を欠く。6は青磁稜花皿口縁部片である。口縁部内面には



第4図 出土土器 (1/3)

三本の平行沈線文を巡らせるが、判然としない。釉にはあまり光沢がなく、また磁胎も気泡を若干含む。7・8は青磁碗口縁部片で、7は外面に蓮弁文を、8は内面に草花文を、それぞれ片切彫りによって描いている。9は青磁皿で、光沢のある若干青みがかった淡緑白色を呈する釉が、畳付部を除く内外全面にかかる。釉の厚さは、高台見込み部を除き概して厚い。10は磁器染め付け碗の底

部片である。胴部外面下部に一条の、高台側面に二条の圈線が巡る。高台内側は若干突出する。11は口縁部が外方へ強く外反する播鉢口縁部片で、内面にはスリ目がほぼ3mm間隔で刻まれる。内外面ともに褐色の釉が薄くかかる。12は盤形を呈する素焼きの土器で、底面に高台や脚などは付かないようである。内外面ともヨコナデによって平滑に仕上げられているが、底面は削りの痕を軽くナデ調整によって消しているのみで、ユビオサエの痕

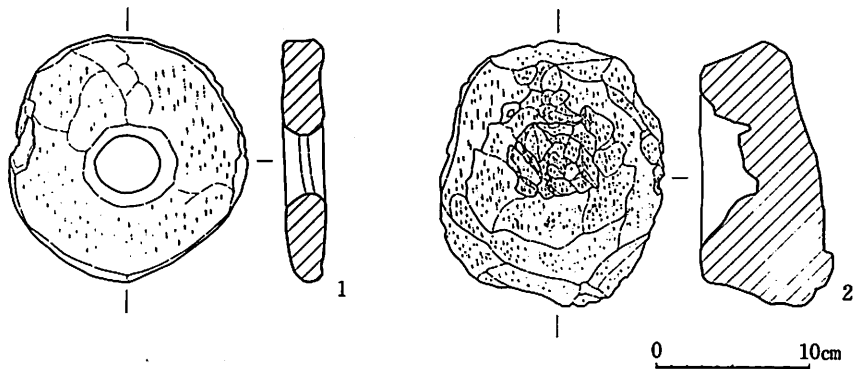


第5図 出土土製品 (2 / 3)

も明瞭に残る。13は口縁部を三分の一ほど欠く陶器皿である。内面には全面に釉がかかり、見込み部には重ね焼きの痕が認められる。外面には口縁部付近にわずかに釉がかかる。底面には回転糸切り痕も見られる。14は外面に暗褐色の釉がかかる甕で、胴上部に二条の突帯を持つ。下方の突帯には大振りの斜位の刻みが施されている。

第5図には、土製人形を示す。1・2ともに型作りである。1は、左脇に魚を挟み込んだ恵比寿天で、頸部及び右手を欠く。細部まで比較的良く表現されているものの、前後からの型の合わせ目が若干左右にずれており、側面に不整合な部分がみられる。底面にみられる方形孔は焼成前に施されたもので、徐々に細くなりながら頸部へと貫通する。焼成時の破裂を防ぐための穿孔であろう。2は、胴部右半身前部に当たると思われる破片で、裏面は二面貼り合わせが剥げたような状態になっている。復元後の体部中央に相当すると考えられる部分は溝状にくぼんでいる。

第6図1・2は、軽石加工品である。1は、径約16cm、厚さ28cmのドーナツ状加工品で、中心部には径3.6cmの孔が穿たれている。器面は全面にわたり削りによって整形されている。鶴丸城二之丸跡に類例が知られるが、本例の方が若干薄手である。2は片面に中央部を中心として凹部を作り出した軽石製品で、凹部内面は凹凸が激しく、抉り取ったような痕がみられる。1・2ともに、時期・用途等不明である。



第6図 出土軽石製品 (1/5)

6. まとめ

今回の試掘調査地点は、農学部北側の実習地北端部にあたり、昭和58年・60年にはこの南に隣接する地点を鹿児島大学法文学部考古学研究室が調査している。

調査の結果、本地点においては1.5m以上の厚い二次堆積層が広がるものの、これ以下にはピット・土壙等の遺構が存在することを確認した。隣接地での法文学部考古学研究室の調査とほぼ同様な所見を得ることができたといえよう。

厩舎の建設予定対象地の西半部については二次堆積土層が1.5mを越えるものの、東半部については掘削が遺構検出面に及ぶこととなるため、改めて本調査を実施することが必要であると判断される⁽²⁾。

註

- (1) 鹿児島大学農学部・鹿児島大学法文学部考古学研究室『鹿児島大学郡元団地内遺跡（B～D・9，10地点）－鹿児島大学農学部温室改築及び実験温室、網室等新設に伴う試掘調査報告書－』1987年
- (2) その後、試掘調査結果をもとに、掘削が遺構検出面に達しないように、設計の変更がなされた。本年報第Ⅱ部第3章参照。

第3章 平成2年度（平成3年2～3月）立合調査報告

平成3年2月から3月においては、下記の工事に伴い立合調査を実施した。

- ①唐湊学生寮公共下水道接続工事（平成3年2月18～22日・3月5・6・8・13・15日）
- ②郡元地区市水（飲料）配管工事（郡元団地各地点、平成3年3月13・14・18～20・26日）
- ③教養部構内環境整備工事（郡元団地I・J-4・6区、平成3年3月20・25・28日）
- ④教養部外灯取設工事（平成3年3月22日）

④においては埋蔵文化財への影響はみられなかったが、①～③においては多数の遺物の出土がみられた。以下、①～③の立合調査結果について、順に報告を行う。

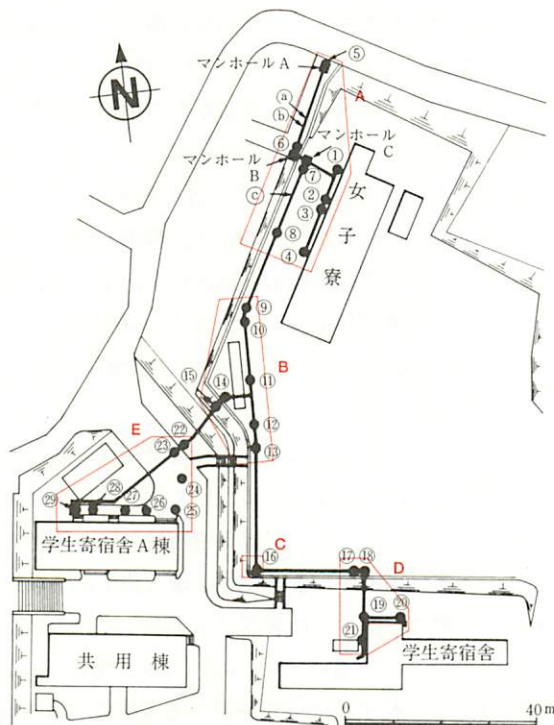
唐湊学生寮公共下水道接続工事（第7・8図）

本立合調査は、唐湊学生寮における埋蔵文化財関係の初の調査であった。工事によって第7図の太線部が幅1m、深さ2mにわたり掘削されることとなったが、工事に先立ち、図中の29地点において既設配管の位置を確認するために試掘が行われた。そこで、埋蔵文化財調査室ではこの機会を利用し、各地点について本工事時における立合調査の必要の有無について検討することとした。

以下、説明の便宜上、上記の29地点をA～Eの5地区に分けて記述を進める。

A地区：女子寮西側に設定された①～⑧をA地区とする。このうち①～④は女子寮建物際の既掘部であったが、⑥・⑦において縄文時代後期指宿式土器が出土した。

B地区：女子寮南側に位置する自転車小屋周縁部の⑨～⑮をB地区とする。北側の⑨・⑩は表土直下にシラスが認められた。また、⑪・⑭においては表土直下に「薩摩」火山灰層が検出された。⑪



第7図 唐湊学生寮立合調査地点位置図（1/1,600）

においては、この「薩摩」火山灰層上面が南東方向に傾斜していることが観察され、本地点東半部には暗褐色粗砂混じりシルト層がのる。㊸は㊶から南へ10mほどの所であるが、本地点においては厚さ約35cmの表土下に上から順に濁褐色砂混じりシルト（層厚約60cm）、粗砂を多量に含んだ濁灰色砂質シルト（層厚約25cm）、砂質シルトを混じえた暗灰色粗砂層（層厚約20cm）、灰白色シルトが堆積しており、これらがプライマリーな層であるならば、㊶・㊸地点から南へ「薩摩」火山灰層がかなり急激に傾斜していることが予想される。なお、「薩摩」火山灰層直上の暗褐色粗砂混じりシルト層からは縄文時代早期の遺物の出土も予想されたが、立合調査時に検出することはできなかった。

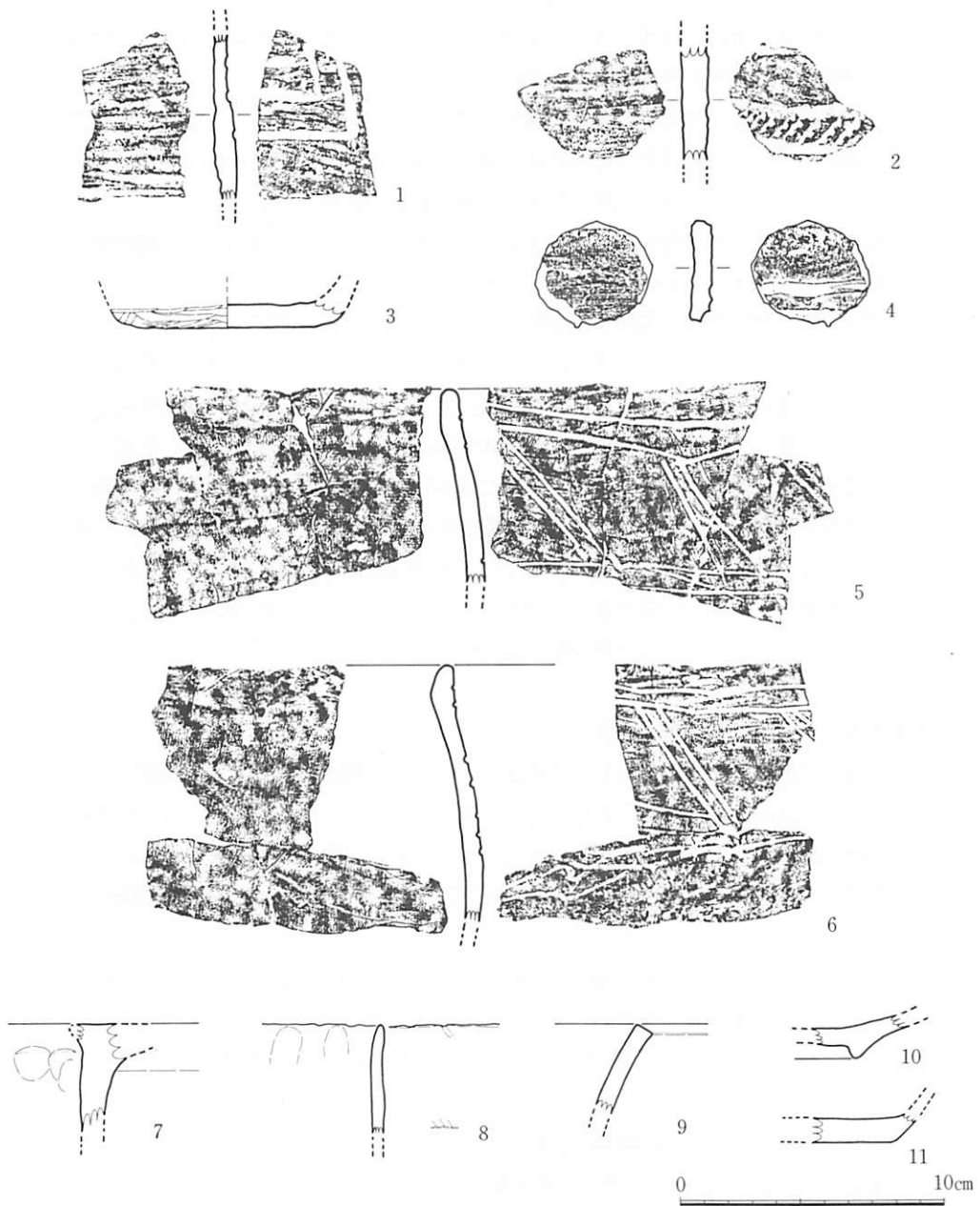
C地区：㊸地点をC地区とする。㊸においては、幅0.6m、長さ1.6mの範囲を深さ1.2m程掘り下げた。本地点においては20cm程の客土下に厚さ20～25cm程の上辺下辺の境界が不明瞭な粗砂層を挟んで、アカホヤの二次堆積土と思われる層が堆積している。粗砂層下のアカホヤ二次堆積土は上方のこれより色調が若干濁っており、また、これら上下のアカホヤ二次堆積層及び粗砂層には黄色パミスや炭小粒が含まれている。なお、本地点においては、遺物の出土は見られなかった。

D地区：グランド南辺中央部から水産学部周縁部に位置する㊶～㊸をD地区とする。水産学部寮周縁部の㊶～㊸は土質がかなり硬質であり、また配管が掘削時に破損し浸水したため、0.8m程の掘り下げにとどまり土層観察も十分には行えなかった。㊶・㊸は㊶～㊸との間に3m程の比高差をもって下方に位置する。㊶は土層観察前に埋め戻されたため、土層等の観察を行うことができなかった。㊸については、表土直下に「薩摩」火山灰が認められたが、この「薩摩」火山灰はかなり他の土を混じえて色調が濁っており、二次的な堆積と考えられた。これと同質の「薩摩」火山灰は㊶・㊸南側斜面においても観察されている。

E地区：学生寄宿舍A棟北側の㊶～㊸をE地区とする。これらはそれぞれ現地地表下約1.5mまで掘り下げが行われた。㊶を除き、掘削部はすべて造成時の盛土中であった。㊶においては盛土中から中世の土師器杯底部片が出土している。㊸においては、65cm程の盛土の下に、上から順に濁灰色砂混じりシルト（層厚約20cm）、褐色砂混じりシルトが堆積するが、後者には上層の土が混じっており、二次的に移動した可能性も考えられる。

以上の結果から、A地区においては縄文時代後期の良好な包含層が存在することが確認されたので、本工事实施に伴い、本地区については改めて立合調査を行うこととした。以下、A地区での立合調査時の所見を述べ、次いで出土遺物について報告する。

A地区の調査は市道から女子寮への進入路である坂道の傾斜よりも若干緩やかな傾斜をなしており、また、㊶地点以南の現地表面は水平をなす。このため、A地区においては㊶地点付近が最も削平の程度が少ない。㊶地点付近においては、地表下2.2m程掘り下げが行われ、約1mの客土（以下①層）の下に、わずかに粘質を帯びる濁灰色シルト層（層厚約30cm、以下②層）、濁黄灰褐色シルト層（層厚約20cm、以下③層）、黄色軽石を含む濁褐色粘質シルト（以下④層）が堆積する。この④層以下には、㊸地点付近の所見から、濁青褐色粗砂混じりシルト（以下⑤層）、「薩摩」火山灰



第8図 立合調査時出土遺物 (1) (1/3)

層（以下⑥層）が見つことが知られる。これら6層の内、③層には指宿式土器が包含されていることが壁面清掃時に確認されている。この③層は第7図⑥、⑧地点付近まで残存している。⑤層は

⑩地点においても認められているが、A地区においては⑧地点以南には連続しない。この地点以南の「薩摩」火山灰層上面がほぼ水平なラインであることを考えると、ある時期にこの付近において人為的に平坦面が形成された可能性も考えられる。

以上の立合調査結果から考えて、今後唐湊学生寮における開発計画については、埋蔵文化財包含層の存在が確認された女子寮付近はもちろん、盛土が覆い旧地形が改変されていないと考えられる男子学生寮付近も含めて、埋蔵文化財に対する配慮が必要である。

本立合調査時に出土した遺物を第8図に示す。1～6は、3を除き縄文時代後期前葉に位置づけられる土器である。1・2・4は、やや幅広の沈線によって二平行沈線文が描かれているが、2の沈線間には斜位の二枚貝腹縁刺突列が施されている。4は土器片の周縁部を打ち欠いてほぼ円形に整形しており、いわゆる「土製メンコ」にあたる資料である。なお、周縁部は、打ち欠いたままである。5・6は、指宿式土器である。二平行沈線によって、平行四辺形状の区画を横位に展開させる。両者とも同じ様な文様構成を示すが、別個体である。3はかなり径が大きい平底であるが、内外両面ともに全面に、やや幅広のケンマが丁寧に施されている。立ち上がり部は、底面から胴部外面にかけて丸みを帯びている。7は弥生時代中期前半の甕口縁部片で、口縁端部は内外両方向に拡張されている。8・9は成川式土器甕口縁部片で、8の口縁端部が先ずぼまりの形状をとるのに対し、9は口縁端部に平坦面を形成する。10は内黒土師器と考えられる碗の底部片で、11は土師器杯底部片である。11の底面は、ヘラ切り離し痕を軽いナデ調整で整えている。

郡元地区市水（飲料）配管工事（図版1）

本工事は郡元団地北半部各地点において実施されたが、工事計画の段階で掘削部は可能な限り掘削部に重なるよう計画がなされた。また、工事に先立つスポット掘りの結果、さらに埋蔵文化財への新たな影響が及ばないよう計画が変更された。この結果、図版1のA～D地点において立合調査を実施することとしたが、このうちC・D地点については既掘部ないし盛土内に掘削がおさまった。

A地点については深さ80～90cmの掘り下げがなされ、40cm程の盛土の下に、灰色砂質シルト層（層厚約40cm、上部は小粒軽石を含み、下部にはマンガンを含む）、鉄分の浸透が見られる灰白色シルト質砂層（層厚10～15cm）、及びマンガンを含む灰色砂質シルト層の堆積が観察されたが、遺物の出土はなかった。

B地点は道路横断部にあたり、幅50cm、長さ4mの範囲が深さ80cmまで掘り下げられた。掘削部のうち、東側2.6m程は配管のためその中央部幅30cm程を残して既に掘削を受けており、残る西側1.4m程の範囲で土層観察を行った。本地点においては厚さ14cm程のアスファルト舗装を含む表土（①層）の下に濁灰褐色砂質シルト層（層厚6cm、②層）、鉄分を含む明褐色砂質シルト（層厚6cm、③層）、マンガンを含む灰色砂混じり砂質シルト層（層厚28cm、④層）、明褐色砂混じり砂質シルト層（層厚6～14cm、⑤層）、灰色砂混じり砂質シルト層（層厚17cm、④層とほぼ同日であるが、④層よりもマンガンの浸透が強くやや粘質を帯びる、⑥層）、淡褐色細砂層（⑦層）が堆積する。⑥層からは成川式土器が出土している。本層は、土質・色調から考えて情報工学科校舎建設地

の③層に対応するものと思われる。

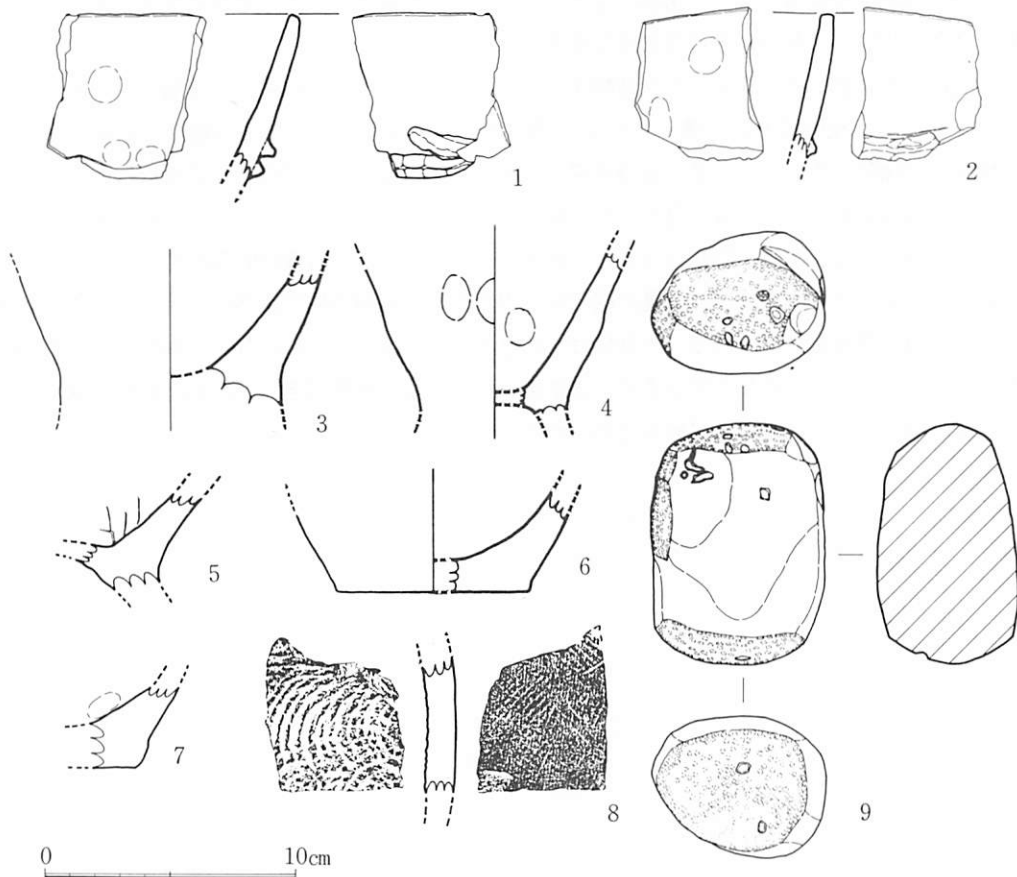
教養部構内環境整備工事に伴う立合調査 (第9・10図)

本工事によって教養部文科研究棟及び講義棟一帯で、アスファルト舗装工事、側溝敷設工事、及び植栽が行われることになった。このうち後二者については、埋蔵文化財包含層への影響が懸念された。側溝敷設部



第9図 教養部環境整備工事に伴う立合調査地点位置図 (1/2, 250)

については、工事対象部分の土層堆積状況が把握できるよう、第9図に示す位置においてスポット掘りを行った。この結果、地表下60cm以下に成川式土器を多量に含む遺物包含層が存在することが



第10図 立合調査時出土遺物 (2) (1/3)

確認された。このため掘削がこれ以下に及ぶマンホール設置部分（第9図A）、及び植栽部分において、工事実施時に立合調査を行った。

A～G一帯においては、表土（層厚約30～60cm、以下①層）、明褐色砂混じりシルト層（層厚約15cm、以下②層）、灰褐色砂混じりシルト層（層厚約10cm、以下③層）、暗灰褐色砂混じりシルト層（以下④層）が上から順に堆積し、古墳時代成川式土器を多数包含する④層は現地表下50～60cm以下に存在する。④層は1～2cm大の軽石を含んでおり、土器片は小片が多いが、上縁部においては部分的に敷き詰められたように集中して存在している。このような出土状況は、昭和61年3月に教養部講義棟東側で実施した試掘調査の際に検出した成川式土器包含層のあり方とほぼ同様である。なお、④層からの遺物の出土量は、東方の地点ほど多く、西へ行くに従い若干少なくなるようである。

昭和50年の鹿児島県教育委員会の調査成果から、教養部構内には古墳時代成川式期の集落が広がることが知られている。本地点は、西接する理学部構内と共に鹿児島大学構内遺跡の古墳時代の中心をなす地域であり、また、学史的にみても、それまで決定的な資料を欠いていた須恵器と成川式土器との共伴関係を明確に示した遺跡でもある。このような観点からも本地域の開発にあたっては一層の埋蔵文化財への配慮が求められるであろう。

第10図に立合調査の際に採集された遺物を図示しているが、これらはすべて④層中から出土している。1～7には成川式土器の甕（1～5）・壺（6・7）を示す。1・2は甕の口縁部片で、若干外傾する口縁部下方にいわゆる「絡縄突帯」がめぐる。1は突帯両端の会合部付近にあたり、一端が上方にはねあがる。3～5は甕の胴部下端から底部にかけての破片で、4・5は脚部を欠いている。3については、本来、脚が伴うかどうか不明である。6・7は壺の底部片で、やや径の大きい平底を呈するようである。8は大甕の胴部片と思われる須恵器小片で、外面に平行叩き目、内面に同心円の当て具痕が認められる。外面には、叩きを施した後、さらにかなり丁寧なナデ調整が行われている。9は、手ごろな自然石をそのまま用いたと考えられる叩き石である。長軸方向の上下両端、及び側面の一部に密な敲打痕が認められる。

第Ⅱ部 平成3年度（平成3年4～12月）

鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告

- 第1章 平成3年度（平成3年4～12月）調査の概要
- 第2章 鹿児島大学教育学部寺山実習地内における試掘調査報告
- 第3章 平成3年度（平成3年4～12月）立合調査報告

第1章 平成3年度（平成3年4～12月）調査の概要

平成3年4月から12月にかけては、下記のように、試掘調査1件を実施した他、以下の工事に伴う立合調査を実施している。

・試掘調査

①教育学部寺山実習地内における試掘調査（平成3年9月2～17日、鹿児島市吉野町10857-1）

・立合調査

①教養部外灯取設電気工事（平成3年4月3・15日、郡元団地I-4区及びK-4・5区）

②工学部情報工学科校舎新営空調設備その他工事（平成3年8月5・6・9日、郡元団地H-11区）

③工学部情報工学科校舎建設に伴う建柱工事（平成3年8月8日、郡元団地G-11・12区）

④法文学部等電気幹線改修工事（平成3年12月2・3日、郡元団地I-9・10区及びH-8区）

⑤課外活動施設（厩舎）新営その他工事（平成3年12月4～6・9日、郡元団地B-8・9区）

教育学部寺山実習地における試掘調査は、理学部南西島弧地震火山観測所の建設予定地として、本地点が候補にあげられたのに伴い実施されたものである。寺山実習地は、その南北において、それぞれ新牧遺跡、金木崎遺跡という周知の埋蔵文化財包蔵地に接しており、この実習地内にも埋蔵文化財包蔵地が広がる可能性は極めて高いと考えられた。今回の調査地点は、実習地中央東側の錦江湾を望む東斜面に位置する。調査においては、現地表下3.5mほどのレベルにある薩摩火山灰層上面まで掘り下げたが、遺構・遺物は検出されなかった。小規模な発掘調査であり、薩摩火山灰層下については調査が不可能であったこと、及び今回の調査地点がかなりの傾斜面であったことを考えると、寺山実習地内での埋蔵文化財包蔵の有無については今後も慎重な検討が必要であろう。

立合調査は、郡元団地の各地点で実施された。上記の調査の内、①・③・④は部分的に若干プライマリーな層を掘削することとなったものの、埋蔵文化財への影響はほとんど無かった。ただ、①においては、地表下約1.2mで成川式土器包含層の上部に達しており、改めて教養部地域においては良好な埋蔵文化財包含層が広がることを認識させられることとなった。

②は平成2年度に埋蔵文化財発掘調査を実施した工学部情報工学科校舎建設地の東に接する部分での工事であり、埋蔵文化財包含層に影響が及ぶことは必至と考えられた。本工事においては、先の調査結果から予想されたように、自然河川の埋土、及びこの自然河川の南側に広がる遺物包含層を掘削することとなった。

⑤は平成3年3月の試掘調査の結果をもとに実施したもので、掘削部はプライマリーな遺物包含層に達しないものの、上層の二次堆積土中に古墳時代から近世にかけての遺物が含まれていることから、行ったものである。調査の結果、量的には少なかったものの、古墳時代成川式土器をはじめとする遺物が採集された。

第2章 鹿児島大学教育学部寺山実習地内における 試掘調査報告

1. 調査に至る経過

鹿児島大学では、理学部南西島弧地震火山観測所の建設を予定している。建設予定地は教育学部寺山自然教育研究施設実習地内（鹿児島市吉野町10857-1）に所在し、北側に弥生～古墳時代の埋蔵文化財包蔵地である金木崎遺跡、南側に同じく新牧遺跡が存在する。当調査地点付近はほとんど開発が行われておらず埋蔵文化財包蔵の可能性があった。そのため埋蔵文化財調査室では本建設予定地において発掘調査を実施し、その有無を確認する事となった。

2. 調査組織

本試掘調査は下記の体制で平成3年9月2日から9月17日まで行った。

調査主体者	鹿児島大学埋蔵文化財調査室長 上村俊雄
調査担当	鹿児島大学埋蔵文化財調査室
室員	松永幸男、中村直子、黒木綾子、有馬孝一
作業員	石谷サチ子、坂口ミエ子、名越ヒデ子、福永花江、盛満アイ子

3. 調査の経過

今回の調査においては、北東-南西方向に長軸をとる2×4mのトレンチと同じく北東-南西方向に長軸をとる2×3mのトレンチ、東西方向に長軸をとる2×3mのトレンチを設定し南から順にNo.1トレンチ、No.2トレンチ、No.3トレンチと称した（第11図）。

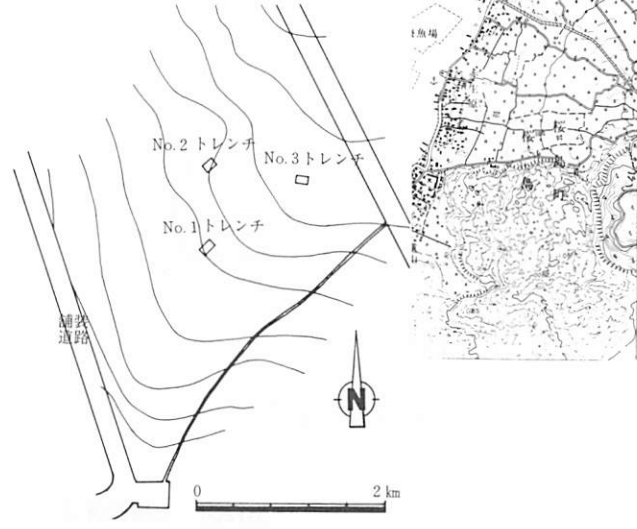
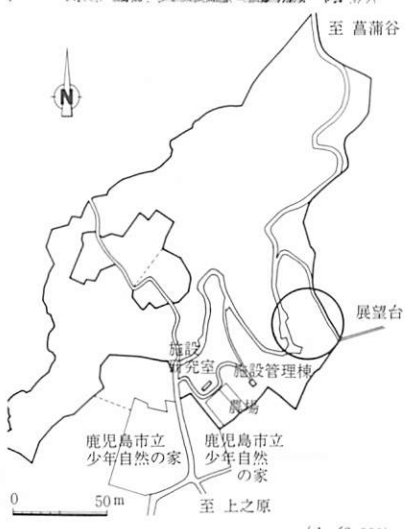
トレンチの掘り下げはNo.1、No.3、No.2トレンチの順で行われ、No.1トレンチは約1.2m掘り下げた後南側半分を地表下約2mまで深堀した。No.3トレンチは地表下約1.3mのところまで調査期間の関係上掘り下げをやめた。No.2トレンチは地表下約1.7m掘り下げた後北側半分を地表下約3.2mまで深掘りし「サツマ」火山灰層の上面を検出した時点で調査を終了した。調査の結果No.1トレンチは6層、No.2トレンチは9層、No.3トレンチは4層に分層できた。しかし遺構や遺物は検出されなかった。

4. 層序（第12図）

I～Ⅲ層は各トレンチに共通した土層の堆積状態を示し、Ⅳ層以下に一部異なる部分を示した。分層した内、Ⅲ層についてはサツマ火山灰層の二次堆積ではないかという意見とB. P. 4, 900年の桜島起源の火山灰ではないかという二つの意見をご教示頂いた。以下、2トレンチの説明をすることにする。

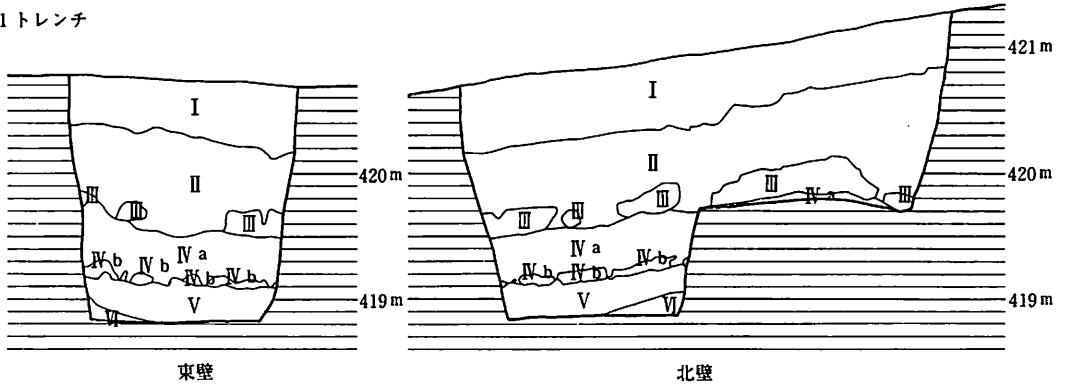
I層 表土 黒褐色

Ⅱ層 暗黄褐色シルト質砂層。（上部）黄色パミスを少し含む。

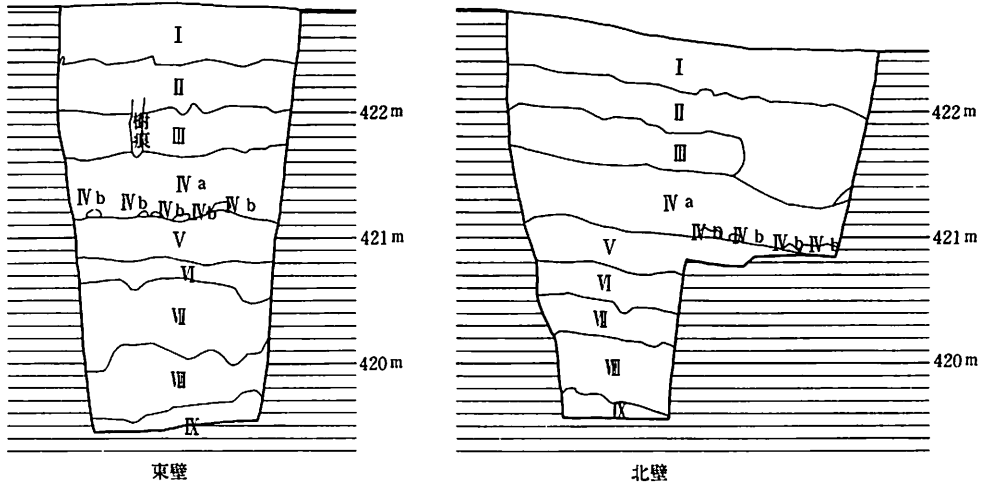


第11図 調査地点位置図 (1/50,000)

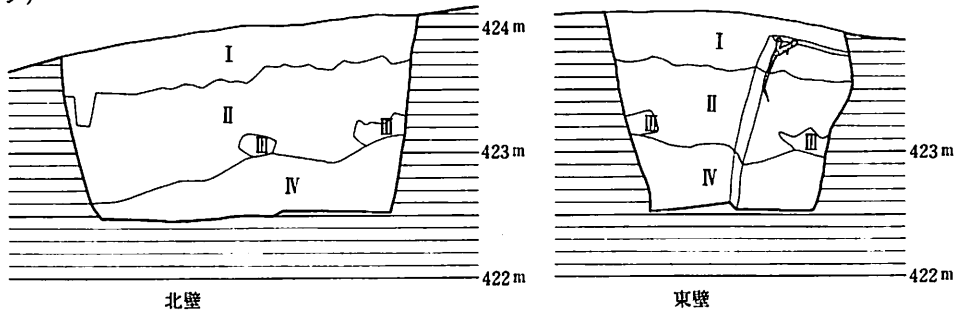
No 1 トレンチ



No 2 トレンチ



No 3 トレンチ



※ ローマ数字は基本土層に一致。
 ※※ 土層図右側の数値は標高を示す。



第12図 土層断面図 (1/60)

- Ⅲ層 黄褐色粗砂層。黄色パミス（1～2センチ大）を多く含む。
- Ⅳa層 明茶褐色砂質シルト層（アカホヤ2次堆積?）。黄色パミス少し含む。
- Ⅳb層 明茶褐色砂質シルト層（アカホヤ）。黄色パミス少し含む。
- V層 褐色シルト層。黄色軽石を含む（1～2センチ大）。
- Ⅵ層 濁褐色シルト層。黄色の軽石を含む（1cm大）。
- Ⅶ層 暗濁褐色シルト層。黄色の軽石粒を多数含む。
- Ⅷ層 サツマ火山灰層（ベースサージのような硬い層）をブロック状に含む黒褐色シルト層。軽石粒（1cm大）を若干含む。
- Ⅸ層 サツマ火山灰層。非常に硬くしまっている。

5. まとめ

今回、試掘調査を実施した地点は弥生～古墳時代の遺跡である金木崎遺跡と新牧遺跡の中間地点に位置し、埋蔵文化財の包蔵が予想された。しかし今回の調査では遺構、遺物ともに検出されなかった。なお層序のところで問題となったⅢ層がB. P. 4, 900年の桜島起源の火山灰であるならば、この層を鍵に今後この付近の発掘調査で遺構、遺物の時期確定がより確実に行われるようになることが期待される。

第3章 平成3年度（平成3年4～12月）立合調査報告

平成3年4月から12月にかけては、下記の工事に伴う立合調査を実施している。

- ①教養部外灯取設電気工事（平成3年4月3・15日、郡元団地I-4区及びK-4・5区）
- ②工学部情報工学科校舎新営空調設備その他工事（平成3年8月5・6・9日、郡元団地H-11区）
- ③工学部情報工学科校舎建設に伴う建柱工事（平成3年8月8日、郡元団地G-11・12区）
- ④法文学部等電気等幹線改修工事（平成3年12月2・3日、郡元団地I-9・10区及びH-8区）
- ⑤課外活動施設（厩舎）新営その他工事（平成3年12月4～6・9日、郡元団地B-8・9区）

教養部外灯取設電気工事（第13図）

工事は、教養部講義室北東、法文学部講義研究室北西、及び教養部理科実験研究室中央北側で実施された。マンホール部分で120cm、配管部で60cmほどの掘削が行われた。これらの工事に際しては、遺物の出土はほとんどみられなかったものの、前二工事地点においては、プライマリーな層に掘削が及んだ。以下に、その土層観察結果を示す（説明にあたっては、土層観察地点を便宜的に、A・B1・B2地点と呼称し、その位置を第13図に示している）。

A地点

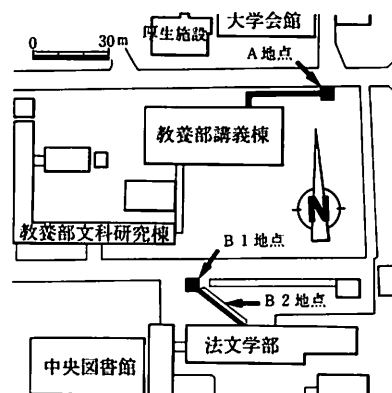
- I層：客土（層厚75cm）
- II層：灰色シルト質砂層（層厚10cm）
- III層：黄灰色シルト質砂層（鉄分浸透、層厚10cm）
- IV層：灰色シルト質砂層（マンガン含む、層厚16cm）
- V層：暗灰褐色シルト層（成川式土器包含層）

B地点

- I層：客土（層厚60cm）
- II層：灰色シルト層（層厚15cm）
- III層：黄褐色シルト質砂層（層厚5cm）
- IV層：黒褐色砂質シルト層

C地点

- I層：客土（層厚20cm）
- II層：灰褐色シルト質砂層（軽石を含む、鉄分浸透、層厚15cm）
- III層：灰色シルト質砂層（軽石含む、層厚25cm）



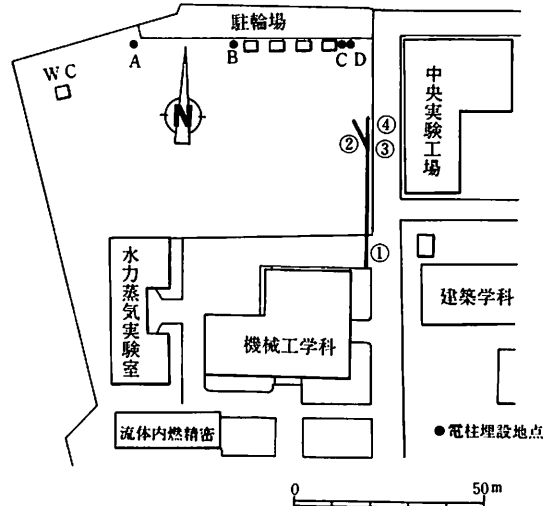
第13図 教養部外灯取設電気工事に伴う立合調査地点位置図（1/3,000）

工学部情報工学科校舎新営空気調和設備その他工事に伴う立合調査（第14・15図）

本工事では工学部情報工学科校舎建設予定地東側において、下水管、マンホール及びガス管埋設のための掘削が行われた。今回の工事地点は平成2年度に発掘調査が行われた部分に隣接しており、前調査で確認された古墳時代～中・近世の遺物包含層への影響が考えられた。掘削は幅70～150cm、長さ39m、深さ約150cmにわたって行われた。以下第14図に示す任意の4地点で行った土層観察の結果を記す。

①地点

- I層：アスファルト、バラス（層厚10cm）
- II層：褐色砂質シルト層（層厚13cm）
- III層：軽石粒と砂を含む灰色砂混じりシルト層（層厚11cm）
- IV層：軽石礫を含む明褐色細砂層（層厚17cm）
- V層：砂を多量に含む灰色砂混じりシルト層（層厚25cm）
- VI層：シルト混じり淡褐色細砂層（層厚14cm）
- VII層：暗褐色砂混じり粘質土層（層厚16cm）
- VIII層：褐色細砂層（層厚40cm）
- IX層：淡濁黄白色粘土層（層厚10cm）
- X層：濁暗灰色シルト層（底面まで）



第14図 工学部情報工学科校舎新営空気調和設備
その他工事に伴う立合調査地点位置図（1/2,000）

②地点

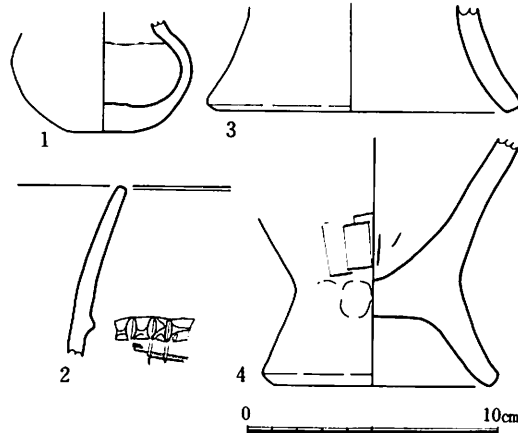
- I層：表土（層厚40cm）
- II層：濁灰褐色砂混じりシルト層（層厚15cm）
- III層：黄色砂層

③地点

- I層：表土
- II層：濁灰褐色砂混じりシルト層
- III層：黄色砂層
- IV層：淡灰白色細砂層

④地点

- I層：表土（層厚50cm）



第15図 立合調査時出土遺物（1）（1/3）

Ⅱ層：灰褐色砂質シルト層（層厚10cm）

Ⅲ層：黄色シルト質砂層（底面まで）

②地点、③地点、④地点のⅢ層は本調査（付編Ⅱ、参照）で確認された河2の埋土に相当すると考えられる。

遺物は①地点Ⅴ層から成川式小片2点、④地点Ⅳ層から埴形土器片ほか2点が出土しており、排土中から嬰脚部片、その他数点を採集している。そのうち辛うじて図化が可能であった4点について報告を行う。1は③地点Ⅳ層から出土し2～4は排土中からの採集である。第15図1は埴形土器底部片で内面をナデ調整している。また内面肩部には接合痕も認められる。2は成川式土器の嬰口縁部片で幅6～7mmの突帯を一条巡らす、なお突帯にはへら状工具による刻みを施し、胴部にも刻み痕が及んでいる。3、4は成川式土器の嬰の底部及び脚部片である。3の内面、外面には横方向のナデ調整が認められる。4の脚部内面は横方向のナデ調整、底部付近外面には縦方向の刷毛目調整が認められる、また底部と脚部の接合部付近には若干のユビオサエ痕が残る。

工学部情報工学科校舎建設に伴う建柱工事（第15図）

第15図A～Dの4地点において、電柱建柱のための掘削が行われた。掘削坑の径は40～60cmほどで、このため下部の土層観察は困難であった。A～D地点の掘削深度は、順に、1m、1.3m、1.2m、0.5mであり、これらにおいて観察された土層は、次のようである。なお、遺物の出土はみられなかった。

I層：客土（層厚60cm）

Ⅱ層：茶褐色シルト質砂層（瓦片を含む、層厚40cm以上）

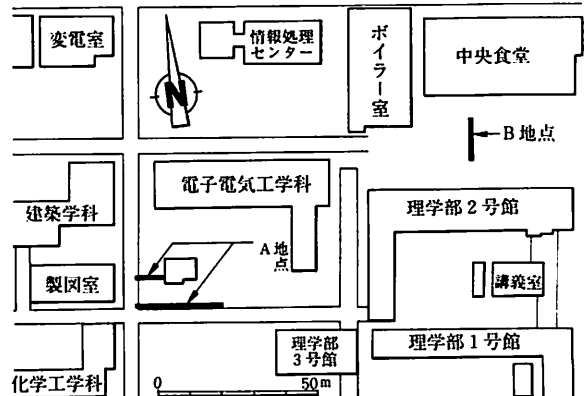
Ⅲ層：灰色砂混じりシルト質砂層（部分的に明褐色味をおび、鉄分の浸透がみられる）

Ⅳ層：灰色砂混じりシルト質砂層（部分的に暗褐色味をおび、マンガンを含む）

法文学部等電気幹線改修工事（第16図）

工事は、電子電気工学科南側、及び中央食堂南側で実施された。以下、これらの工事地点を、便宜的に、順にA地点、B地点と呼称する。

A地点：工学部電子電気工学科校舎と、サークル棟とのほぼ中間を東西にのびるアスファルト道路の北側に添うような形で掘削が行われた。西端部は、南北にのびるアスファルト道路中央部に及ぶ。アスファルト道路以外の工事部分は盛土で行われており、アスファルト道路路面より30cmほど高い。掘削深度はアスファルト道路部分で



第16図 法文学部等電気幹線改修工事に伴う立合調査地点位置図（1/2,400）

1.2m、東端マンホール部分で1.4m、両地点間で70cmを測る。プライマリーな土層は、東端マンホールの中央部でごくわずかに残存していたのみであった。土層観察結果は、以下のようである。

I層：客土（層厚75cm）

II層：淡明褐色砂質シルト層（層厚15cm）

III層：淡灰白褐色砂混じりシルト層（層厚10cm）

IV層：灰褐色砂混じりシルト層（成川式土器小片2点採集、層厚40cm）

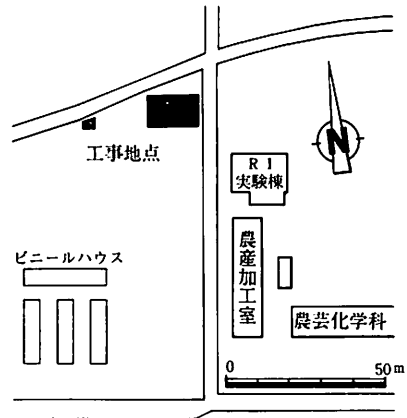
V層：淡褐色粗砂層

B地点：中央食堂南側のマンホールと理学部2号館北側の共同溝とを南北に結ぶように約18mにわたり、深さ60cmほどの掘り下げられた。本地点においては、深さ60cmほどで旧側溝が検出されており、これより上の部分は、すべてシラス等の盛土であった。

課外活動施設（厩舎）新営その他工事（第17・18図）

本地点は、平成3年3月に実施した試掘調査によって、地表下1.5m以下にプライマリーな層が存在することが確認されている地点である。厩舎の建設にあたっては、支柱基礎部分設備に伴う掘削が現地地表下1メートルほどにおさまるよう設計がなされたが、上方の二次堆積土中からも、成川式土器・輸入陶磁器・中近世陶器などが採集されていたため、今回、工事に伴い立合調査を行うこととなった。

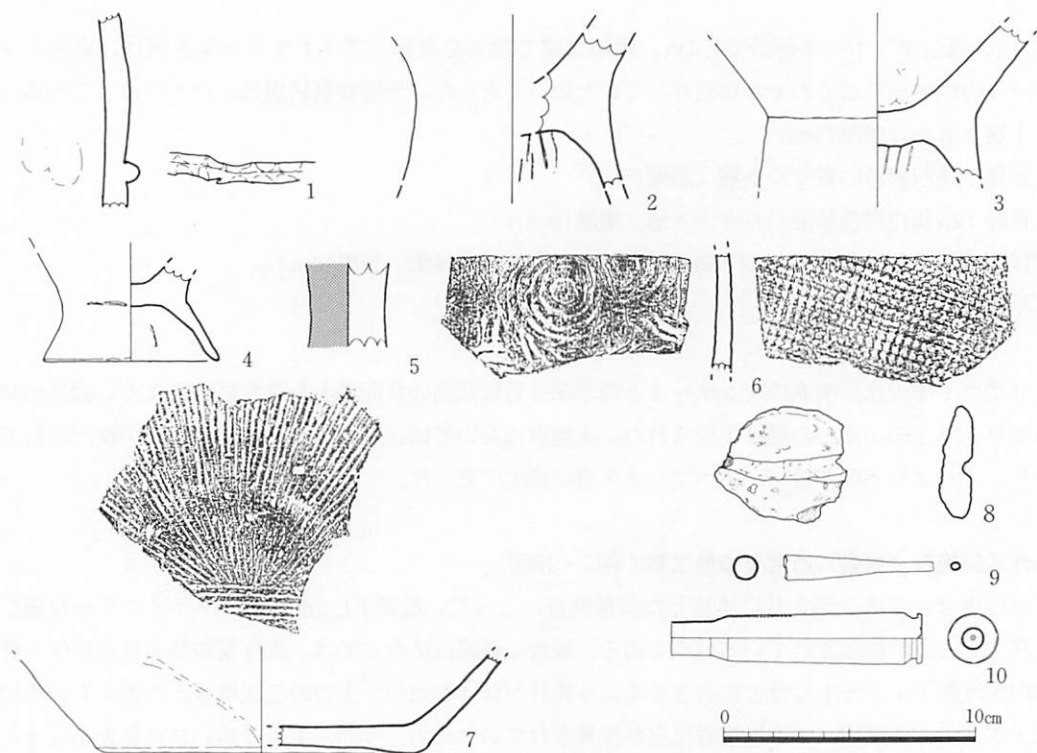
掘削工事は、第17図の支柱基礎設置部分16ヶ所とこれらの間を縦横に結ぶ基礎梁設置部分、及び堆肥舎設置部分について行われた。掘削工事は重機を用いて行われたため、これらがすべて二次堆積土であることを考え、重機が掘りだした排土中から遺物を採集するという形で立合調査を行った。この結果、排土中から少量ではあったものの、成川式土器をはじめとする遺物を採集することができた。なお、今回の掘削部は、すべて二次堆積土内におさまっていた。



第17図 課外活動施設（厩舎）新営その他工事に伴う立合調査地点位置図（1/2,400）

出土遺物（第18図）

1から4は、成川式の甕の破片である。1は、胴部片で、断面略三角形の絡縄突帯を一条貼付する。口縁部を欠くために傾きは不明である。2から4は、脚部片である。2は、脚裾方向へ向かって緩やかに外湾する脚である。また脚部内面には板状工具痕を認めることができる。3は、脚裾方向へ向かって直線的にやや外開きする脚で、また胴部は上方へ向かって直線的に外開きする。脚部内面付け根付近にはユビオサエ痕と板状工具痕が認められる。4は、脚裾方向へ向かって直線的に外開きする脚で、外底面は平坦面を形成する。5は、高杯の脚上部片である。外面には赤色顔料が少量残存している。6は、須恵器の大甕の胴部片で、口縁部を欠くために傾きは不明であり、内面



第18図 立合調査時出土遺物 (2) (1/3)

に同心円状の当て具痕が、また外面には格子状のタタキ痕が認められる。7は、播鉢の底部から胴部にかけての破片である。底部は、少々上げ底状を呈している。また内面、外面の両面には不透明の暗茶褐色釉がかかっている。8は、略円形を呈する軽石製品である。オモテ面には、横位に、幅約8mmの沈線が一条施されている。ウラ面は欠損しているため、本来の状態は不明で、長さ5.25cm、幅4.5cm、厚さ1.2cm、重さ8.5gを呈する。9は、青銅製の煙管の吸い口である。両側が少し欠損し長さ5.9cm、幅1.0cm、厚さ0.5mmを呈する。10は、葉莢で、胴部径20mm、首部径13mm、長さ9.9mm、厚さ0.5mmを呈し、底面の中央部には打痕が認められる。形状からみて「12.7mm重機関銃」で使用されたものであろうと思われる⁽²⁾。

註

葉莢の説明にあたっては、下記文献を参考にした。

鹿児島県教育委員会 「一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書(Ⅲ)中ノ原遺跡(Ⅱ)、中原山野遺跡、西原掩体壕跡(第五分冊)」 1990年 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(52)

鹿児島大学構内遺跡調査要項

・鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則

(設置)

第1条 本学に、鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(審議)

第2条 委員会は、本学の施設計画を円滑に行なうため埋蔵文化財に関する次の事項を審議する。

- (1) 基本計画の策定に関すること。
- (2) 調査結果に基づく対策に関すること。

(組織)

第3条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 学長
- (2) 各学部長、教養部長、附属図書館長、医学部附属病院長及び歯学部附属病院長
- (3) 事務局長
- (4) 学生部長

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、学長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

(議事)

第5条 委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立し、議事は出席委員の3分の2以上をもって決する。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことが出来る。

(調査委員会)

第7条 委員会は、本学の埋蔵文化財の調査を行なうため、埋蔵文化財調査委員会（以下「調査委員会」という。）を置く。

第8条 調査委員会は次の事項を審議する。

- (1) 調査実施計画に関すること。
- (2) 第13条に規定する調査室の室長等の選任に関すること。
- (3) 第13条に規定する調査室の予算に関すること。
- (4) その他埋蔵文化財及び第13条に規定する調査室の業務に関すること。

第9条 調査委員会は、次に掲げる委員をもって組織し、学長が任命する。

- (1) 各学部及び教養部の教授、助教授、講師の中から選任された者各1名
- (2) 第15条2項に規定する調査室長

2 前項第1号の委員の任期は2年とし、委員に欠員を生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第10条 調査委員会に委員長を置き、前項第1項第1号の委員の中から互選により選出する。

2 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

第11条 調査委員会は、委員の過半数の出席をもって成立し、議事は、出席委員の過半数をもって決する。

第12条 調査委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。
(調査室)

第13条 調査委員会に、本学の埋蔵文化財の調査に関する業務を行なうための埋蔵文化財調査室(以下「調査室」という。)を置く。

第14条 調査室は、次の業務を行なう。

- (1) 調査実施計画の立案
- (2) 発掘調査、分布調査及び確認調査
- (3) 調査報告書の作成
- (4) その他必要な事項

第15条 調査室に、室長、主任及びその他必要な職員を置く。

2 室長は、本学の考古学に関する教官の中から委員会が推薦し、学長が任命する。

3 室長は、調査委員会の定める方針に基づき調査室の業務を掌理する。

4 室長の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

5 主任は、調査室の職員の中から、特に埋蔵文化財に関する専門知識を有する者を調査委員会が推薦し、学長が任命する。

6 主任は、室長の命を受けて調査室の業務を処理する。

7 職員は、調査室の業務に従事する。

(その他)

第16条 埋蔵文化財に関する事務は、事務局施設部において行なう。

付 則

1 この規則は、昭和60年4月18日から施行する。

2 この規則の施行後最初に任命される委員及び室長の任期は、第9条第2項及び第15条第4項の規定にかかわらず、昭和62年3月31日までとする。

3 鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則(昭和51年1月22日制定)は、廃止する。

・鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会委員(平成3年4月1日現在)

委員長 井形 昭弘(鹿児島大学学長)

委員 中村 雅麿(法文学部長)

浅地 明(教育学部長)

早坂 祥三(理学部長)

福田 健夫(医学部長)

仙波 輝彦（歯学部長）	宮内 徳之（工学部長）
植木 健至（農学部長）	平田 八郎（水産学部長）
田川日出夫（教養部長）	河原田禮次郎（連合農学研究科長）
大山 勝（医学部附属病院長）	税所 俊郎（附属図書館長）
辰村 吉康（学生部長）	自見 忠（歯学部附属病院長）
伊藤才一郎（事務局長）	

・鹿兒島大学埋蔵文化財調査委員会委員（平成3年4月1日現在）

委員長 安藤 保（教育学部教授）	
委員 原口 泉（法文学部助教授）	立野 洋人（理学部助教授）
秋山 伸一（医学部教授）	小椋 正（歯学部教授）
徳廣 育夫（工学部教授）	西中川 駿（農学部助教授）
尾上 義夫（水産学部教授）	新田 栄治（教養部助教授）
上村 俊雄（調査室長併任 法文学部教授）	

・鹿兒島大学埋蔵文化財調査室（平成3年4月1日現在）

室長（併） 法文学部教授	上村 俊雄
主任（併） 法文学部助手	松永 幸男
（併） 法文学部助手	中村 直子
技術補佐員	有馬 孝一
技術補佐員	黒木 綾子

購入・受贈図書目録（1991年2月1日～1991年12月31日）

購入図書

日韓交渉の考古学 弥生時代篇
小田富士男・韓炳三編 六興出版

寄贈図書

単行本
釧路湿原とワイズユース＝日本初のラムサール条約登録湿地 釧路市立博物館
柳之御所跡 姿を現した居館跡

（財）岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財センター
躍動する若狭の大家たち―前方後円墳の時代―

福井県立若狭歴史民族資料館
昔、むかしの上総―記念展図録―

（財）君津都市文化財センター
設立10年記念誌 10年のあゆみ

（財）君津都市文化財センター
栃木県文化振興事業団 10年のあゆみ

（財）栃木県文化振興事業団
図録 大阪城跡の調査 1 （財）大阪文化財センター

藤の木古墳と古代の河内 文化財講座記録集 3
（財）八尾市文化財調査研究会

遺跡ガイド 1 安満遺跡 高槻市教育委員会
遺跡ガイド 2 今城塚古墳 高槻市教育委員会

遺跡ガイド 3 阿武山古墳 高槻市教育委員会
遺跡ガイド 4 高槻城跡 高槻市教育委員会

枚方の鎬物師（一）
枚方市教育委員会・（財）枚方市文化財研究調査会

考古学におけるパーソナルコンピューター利用の現状
第1回 帝塚山考古学研究会

考古学におけるパーソナルコンピューター利用の現状
第2回 帝塚山考古学研究所

考古学におけるパーソナルコンピューター利用の現状
第3回 帝塚山考古学研究所

考古学におけるパーソナルコンピューター利用の現状
第4回 帝塚山考古学研究所

横穴式石室を考える―近畿の横穴式石室とその系譜―
帝塚山考古学研究所

荒神谷遺跡の謎を解く ブックレット①
島根県斐川町教育委員会

荒神谷遺跡の謎を解く ブックレット②
島根県斐川町教育委員会

「甘木絞り」企画展示資料集 甘木歴史資料館
本渡市の文化財 本渡市教育委員会

はるかなる長江―中国武漢文物展 大分市歴史資料館

定期刊行物・雑誌

釧路市博物館館報 No.325 釧路市立博物館
釧路市博物館館報 No.326 釧路市立博物館
釧路市博物館館報 No.327 釧路市立博物館
釧路市博物館館報 No.328 釧路市立博物館
釧路市博物館館報 No.329 釧路市立博物館
釧路市博物館収蔵資料目録（X I） 釧路市立博物館
釧路市博物館紀要 第16輯 釧路市立博物館
埋文あおもり 第10号

青森県埋蔵文化財調査センター
金沢大学 資料館だより 第2号 金沢大学資料館

君津都市文化財センター年報No.9 平成2年度―
（財）君津都市文化財センター

研究紀要V （財）君津都市文化財センター
千葉県立房総風土記の丘だより 第22号

千葉県立房総風土記の丘
年報 10（平成2年度） 茨城県教育財団

歴史人類 第19号 筑波大学歴史・人類学系
埋蔵文化財センター年報第1号（平成3年度）

（財）栃木県文化財振興事業団埋蔵文化財センター
栃木県埋蔵文化財保護行政年報〔平成元年度〕

栃木県教育委員会
栃木県埋蔵文化財センター通信No.1

やまかいどう91夏号 栃木県埋蔵文化財センター
長野県埋蔵文化財センター紀要 2 1988

（財）長野県埋蔵文化財センター
長野県埋蔵文化財センター紀要 3 1989

（財）長野県埋蔵文化財センター
長野県埋蔵文化財センター紀要 6 1989

（財）長野県埋蔵文化財センター
長野県埋蔵文化財センター紀要 7 1990

（財）長野県埋蔵文化財センター
長野県埋蔵文化財ニュースNo.28

（財）長野県埋蔵文化財センター
長野県埋蔵文化財ニュースNo.29

（財）長野県埋蔵文化財センター
長野県埋蔵文化財ニュースNo.30

（財）長野県埋蔵文化財センター
長野県埋蔵文化財ニュースNo.31

（財）長野県埋蔵文化財センター
長野県埋蔵文化財ニュースNo.32

（財）長野県埋蔵文化財センター
名古屋市博物館だより 第78号 名古屋市博物館

名古屋市博物館研究紀要 第14巻 名古屋市博物館

- 名古屋市博物館だより 第80号 名古屋市博物館
 名古屋市博物館だより 第81号 名古屋市博物館
 名古屋市博物館だより 第82号 名古屋市博物館
 名古屋市博物館だより 第83号 名古屋市博物館
 文化財保護センターだより きずな 創刊号
 (財)岐阜県文化財保護センター
 文化財保護センターだより きずな 第2号
 (財)岐阜県文化財保護センター
 三重県埋文センター通信 みえNo.3
 三重県埋蔵文化財センター
 滋賀埋文ニュース 第130号
 滋賀県埋蔵文化財センター
 滋賀埋文ニュース 第131号
 滋賀県埋蔵文化財センター
 滋賀埋文ニュース 第132号
 滋賀県埋蔵文化財センター
 滋賀埋文ニュース 第133号
 滋賀県埋蔵文化財センター
 滋賀埋文ニュース 第134号
 滋賀県埋蔵文化財センター
 滋賀埋文ニュース 第135号
 滋賀県埋蔵文化財センター
 滋賀埋文ニュース 第136号
 滋賀県埋蔵文化財センター
 滋賀埋文ニュース 第137号
 滋賀県埋蔵文化財センター
 滋賀埋文ニュース 第138号
 滋賀県埋蔵文化財センター
 滋賀埋文ニュース 第139号
 滋賀県埋蔵文化財センター
 滋賀埋文ニュース 第140号
 滋賀県埋蔵文化財センター
 大阪市文化財情報 葦火 第30号
 (財)大阪市文化財協会
 大阪市文化財情報 葦火 第31号
 (財)大阪市文化財協会
 大阪市文化財情報 葦火 第32号
 (財)大阪市文化財協会
 大阪市文化財情報 葦火 第33号
 (財)大阪市文化財協会
 大阪市文化財情報 葦火 第34号
 (財)大阪市文化財協会
 大阪文化財研究一創刊号一
 (財)大阪文化財センター
 東大阪市文化財協会ニュースVol.5, No.2
 (財)東大阪市文化財協会
 東大阪市文化財協会ニュースVol.5, No.3
 (財)東大阪市文化財協会
- 枚方市文化財年報Ⅹ (財)枚方市文化財研究調査会
 ひらかた文化財だより 第6号
 (財)枚方市文化財研究調査会
 ひらかた文化財だより 第7号
 (財)枚方市文化財研究調査会
 ひらかた文化財だより 第8号
 (財)枚方市文化財研究調査会
 ひらかた文化財だより 第9号
 (財)枚方市文化財研究調査会
 京都府埋蔵文化財情報 第38号
 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
 京都府埋蔵文化財情報 第39号
 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
 京都府埋蔵文化財情報 第40号
 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
 京都府埋蔵文化財情報 第41号
 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
 奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1990
 奈良市教育委員会
 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第5号
 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
 蒜山研究所研究報告 第16号
 岡山理科大学蒜山研究所
 広島県立歴史博物館ニュース 第5号
 広島県立歴史博物館
 広島県立歴史博物館ニュース 第8号
 広島県立歴史博物館
 年報 平成元(1989)年度
 広島県立歴史民俗資料館
 山口大学埋蔵文化財資料だより No.13
 山口大学埋蔵文化財資料館
 九州文化史研究所紀要 第36号
 九州大学文学部九州文化史研究施設比較考古学部門
 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館ニュース(USM)
 No.25 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館ニュース(USM)
 No.26 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
 宇佐風土記の丘歴史民俗資料館年報1990
 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
 大分市歴史資料館ニュースNo.7 大分市歴史資料館
 大分市歴史資料館ニュースNo.8 大分市歴史資料館
 大分市歴史資料館ニュースNo.9・10 大分市歴史資料館
 大分市歴史資料館ニュースNo.11 大分市歴史資料館
 大分市歴史資料館ニュースNo.12 大分市歴史資料館
 大分市歴史資料館年報 1990 大分市歴史資料館
 南九州縄文通信No.4 南九州縄文研究会
 鹿児島大学 南科研資料センター報告 No.46
 南方科学研究資料センター

- 沖縄県立博物館紀要 第17号 沖縄県立博物館
 沖縄県立博物館年報 No. 24 沖縄県立博物館
- 調査報告書
 調査年報 3 平成2年度
 (財)北海道埋蔵文化財センター
 堂ヶ作山古墳Ⅰ 会津若松市教育委員会
 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点
 東京大学医学部附属病院
 東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点
 点 第1分冊 山上会館地点の調査
 東京大学庶務部庶務課広報室
 東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点
 点 第2分冊 御殿下記念館地点の調査
 東京大学庶務部庶務課広報室
 東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点
 点 第3分冊 考察編
 東京大学庶務部庶務課広報室
 東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡
 東京大学文学部
 下鶴間甲一号遺跡 下鶴間甲一号遺跡調査団
 神奈川県埋蔵文化財調査報告33 神奈川県教育委員会
 天然記念物総合診断報告書(第1報)
 神奈川県教育委員会
 南金原下遺跡 神奈川県土木部津久井土木事務所
 南口遺跡 (財)君津都市文化財センター
 君津都市文化財センター研究紀要Ⅳ
 (財)君津都市文化財センター
 寒沢遺跡・向萩原遺跡・向山野遺跡
 (財)君津都市文化財センター
 君津都市文化財センター年報No.8 平成元年度一
 (財)君津都市文化財センター
 末園崎遺跡 (財)君津都市文化財センター
 植ノ台遺跡 (財)君津都市文化財センター:
 株式会社セイシン産業
 下谷古墳・下谷遺跡
 (財)君津都市文化財センター:山王不動産
 天神台遺跡発掘調査報告書
 (財)君津都市文化財センター:石井み弥
 宮花輪遺跡 (財)君津都市文化財センター:
 千葉県木更津市土地改良事務所
 請西遺跡群Ⅰ 一大山台29号墳・30号墳 諏訪谷横穴墓
 群一 (財)君津都市文化財センター:
 木更津市請西第二区画整理組合
 日本旧石器時代から縄文時代への推移に関する構造的
 研究 千葉大学文学部考古学研究室 麻生優
 桜山古墳 茨城県教育財団
 石山神遺跡 茨城県教育財団
- 五平遺跡・蔵田千軒遺跡・権現古墳群
 茨城県教育財団
 柴崎遺跡Ⅱ区・中塚遺跡(上) 茨城県教育財団
 柴崎遺跡Ⅱ区・中塚遺跡(下) 茨城県教育財団
 神谷森遺跡 茨城県教育財団
 西郷遺跡・南丘遺跡・長峰遺跡・数光遺跡・宮塚遺跡
 ・右杖館跡・内路地台遺跡 茨城県教育財団
 二の宮貝塚・大日山古墳群・思川遺跡(上)
 茨城県教育財団
 二の宮貝塚・大日山古墳群・思川遺跡(下)
 茨城県教育財団
 和尚塚古墳 茨城県教育財団
 畑田川波遺跡・畑田城跡 茨城県教育財団
 萱振遺跡発掘調査概要報告
 (財)八尾市文化財調査研究会
 八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度
 (財)八尾市文化財調査研究会
 東郷遺跡 一第23次・第24次発掘調査報告一
 (財)八尾市文化財調査研究会
 平成2年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告
 (財)八尾市文化財調査研究会
 藤阪東遺跡発掘調査概要報告
 (財)八尾市文化財調査研究会
 鏡伝池遺跡発掘調査報告書
 (財)枚方市文化財研究調査会
 嶋上郡衛跡他関連遺跡発掘調査概要・15
 高槻市教育委員会
 新池遺跡 高槻市立埋蔵文化財調査センター
 高槻市文化財年報 昭和63・平成元年度
 高槻市立埋蔵文化財調査センター
 雪野山古墳第3次調査 現地説明会資料
 八日市市教育委員会・雪野山古墳発掘調査団
 京都市内遺跡試掘立合調査概報 平成2年度
 京都市文化観光局
 平安京跡発掘調査概報 平成2年度
 京都市文化観光局
 北野廃寺・北白川廃寺発掘調査概報 平成2年度
 京都市文化観光局
 京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅶ
 京都大学埋蔵文化財研究センター
 満久谷遺跡
 河内城・満久谷遺跡調査会 奈良大学・考古学研究室
 奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成2年度
 奈良市教育委員会
 平城京東市跡推定地の調査Ⅸ 第11次発掘調査概報
 奈良市教育委員会
 国道9号線建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書
 Ⅷ 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会

草戸千軒町遺跡—第42・43次発掘調査概要—	鹿児島県の民家（離島編）	鹿児島県教育委員会
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	民俗文化財映像記録保存事業シナリオ集	
広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報IX		鹿児島県教育委員会
広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査委員会	鹿児島市寺院跡	鹿児島市教育委員会
山口大学構内遺跡調査研究年報VII	道重遺跡	曾於郡志布志町教育委員会
山口大学埋蔵文化財資料館	野大野A遺跡・上瀬田A遺跡	南種子町教育委員会
山口大学構内遺跡調査研究年報IX	川上（市来）貝塚	日置郡市来町教育委員会
山口大学埋蔵文化財資料館	仮牧段遺跡	日置郡東市来町教育委員会
江口遺跡第1次調査	具志川島遺跡群発掘調査概報	伊是名村教育委員会
愛媛大学法文学部考古学研究室	県立博物館総合調査報告書 VII	沖縄県立博物館
金川・中島田遺跡		甘木市教育委員会
平塚大願寺遺跡		甘木市教育委員会
春日地区遺跡群VI		春日市教育委員会
戊遺跡		三日月町教育委員会
枝去木山中遺跡		唐津市教育委員会
唐ノ川高峰遺跡（I）		唐津市教育委員会
唐ノ川西ノ吸遺跡		唐津市教育委員会
唐津市内遺跡確認調査（5）		唐津市教育委員会
山田団六遺跡（I）		唐津市教育委員会
菅牟田西川遺跡（I）		唐津市教育委員会
千々賀古園遺跡		唐津市教育委員会
竹木場前田遺跡（I）		唐津市教育委員会
中津二ツ枝（I）		唐津市教育委員会
唐津市内遺跡確認調査（6）		唐津市教育委員会
湊松本遺跡（I）		唐津市教育委員会
人吉市遺跡地図		熊本県教育委員会
茂木根横穴群確認調査報告書		本渡市教育委員会
久末京徳遺跡		安岐町教育委員会
上原遺跡		大分県大野郡千歳村教育委員会
高添台地の遺跡		大分県大野郡千歳村教育委員会
おかこい山		中津市教育委員会
相原廃寺 III		中津市教育委員会
松山遺跡 第二次発掘調査		別府大学附属博物館
平成2年度 遺跡発掘調査概報		都城市教育委員会
史跡旧集成館「鋳物場跡」発掘調査報告書		
	(株)島津興業	
中園遺跡		始良郡牧園町教育委員会
建昌城跡		始良町教育委員会
野中遺跡・松美堂遺跡		伊佐郡菱刈町教育委員会
羽山遺跡・姪原遺跡		横川町教育委員会
名主原遺跡・荷掛原遺跡		肝属郡吾平町教育委員会
水流遺跡・横井坂遺跡		肝属郡吾平町教育委員会
木落遺跡 高源寺遺跡		金峰町教育委員会
寺掘遺跡		串木野市教育委員会
上屋久町歴史民俗資料館資料目録及び解説 上		
		熊毛郡上屋久町教育委員会
上屋久町歴史民俗資料館資料目録及び解説 下		
		熊毛郡上屋久町教育委員会
橋牟礼川遺跡発掘調査報告書		指宿市教育委員会

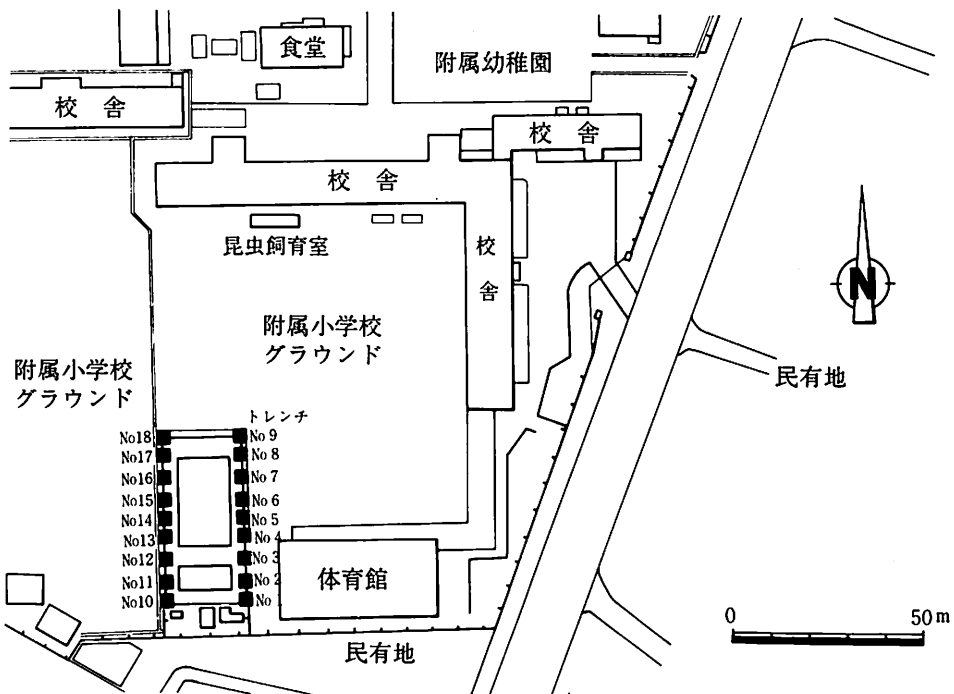
付 編

- I. 鹿児島大学郡元団地S・T-6・7区（教育学部附属小学校
プール上屋建設予定地）における発掘調査報告
- II. 鹿児島大学郡元団地H-11・12区（工学部情報工学科校舎建
設予定地）における発掘調査報告

I. 鹿児島大学郡元団地S・T-6・7区（教育学部附属小学校プール上屋建設予定地）における発掘調査報告

1・調査に至る経過

鹿児島大学教育学部附属小学校では、プールに火山灰よけの上屋を設置することになった。この工事にともない、上屋支柱の基礎部分として、18ヶ所掘削することとなった。これをうけて鹿児島大学埋蔵文化財調査室では、平成2年8月6日～10日に建設予定地において試掘調査を実施したが、この結果、古墳時代の遺物包含層と遺構の存在を確認した。このため、平成2年11月19日～平成3年1月10日にかけて、プール上屋基礎部分を対象として、建設工事にともなう事前の埋蔵文化財発掘調査を行うことにした。



第19図 調査地点位置図 (1/200)

2. 調査組織

本発掘調査は、以下の組織で行った。

調査主体者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室室長 上村俊雄

調査担当 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

室長 上村俊雄

室員 松永幸男・中村直子・栗林文夫・黒木綾子

発掘調査作業員 石谷サチ子・岩戸エミ子・岡崎カオル・坂口ミエ子・寺光ミツ子・名越ヒデ子
・野下ヨシエ・野下ヨブ子・福永花江・盛満アイ子

3. 調査の経過

調査は平成2年11月19日から平成3年1月10日にかけて実施した。先述したように調査区は、上屋の基礎部分のみ調査対象区とし、約3×3mの方形の区画を18ヶ所設定し、東側を南からNo.1～9トレンチ、西側を同じく南からNo.10～18トレンチとそれぞれ呼称した(第19図)。本調査区は、試掘によって古墳時代の遺物包含層とその包含層直下から遺構が確認されていたが、その直上まではプール建設時による攪乱と盛土であったため、まず重機による盛土の除去を行ない、その後遺物包含層の掘り下げを行った。その結果、Ⅲa・Ⅲb・Ⅳ層から古墳時代を中心とした多量の遺物が出土し、Ⅳ・Ⅴ層上面から住居や溝・ピットなどの遺構を検出した。ただし、北側ほど攪乱による掘削を深く受けており遺物包含層を失っていた。調査は、地山であるⅤ層上面までの掘り下げを行い、終了した。

4. 層序(第20～22図)

基本土層は、Ⅰ～Ⅴ層までを確認した。Ⅰ・Ⅱ層はプール造成時による攪乱と考えられる。また、遺構埋土など、Ⅲ層以下はかなり分層できたが、図中において観察所見を提示する。Ⅲa～Ⅳ層より土器・須恵器・鉄器などの古墳時代を中心とする遺物が多量に出土し、その直下であるⅣ層上面・Ⅴ層上面よりⅢ・Ⅳ層土およびそれに類似した埋土をもつ遺構が検出した。以下、基本土層の説明を行う。

Ⅰ層 盛土。

Ⅱ層 暗褐色シルト質砂。茶褐色土をブロック状に含む。

Ⅲa層 黒褐色砂質シルト。粒子が細かく、硬い。小粒の軽石を含む。

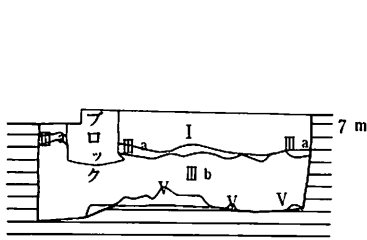
Ⅲb層 少し褐色味を帯びた黒色シルト質砂。小粒の軽石をふくむ。フカフカしている。

Ⅳ層 茶褐色シルト。軽石を少し含む。

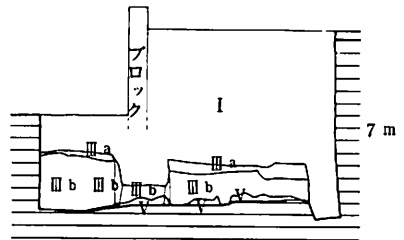
Ⅴ層 明黄褐色粗砂。

5. 遺構と遺構出土の遺物

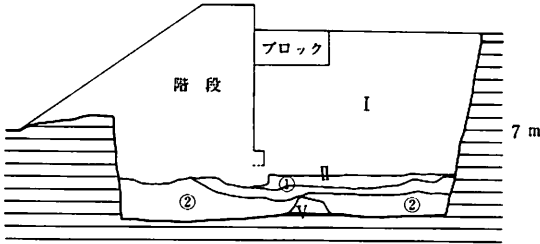
本調査区では住居址、溝状遺構、土塋、ピット等の遺構を確認した(第23図)が、18ヶ所のトレンチによる調査のため、全形を知り得るものはピット以外ではほとんどなかった。そのため、各ト



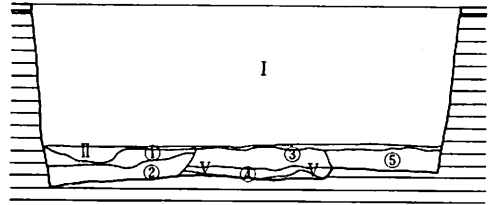
No 1 トレンチ南壁



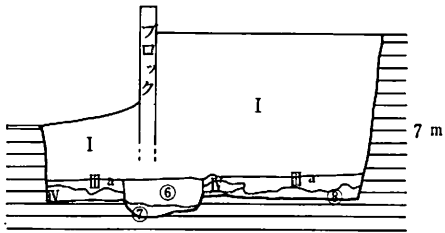
No 1 トレンチ西壁



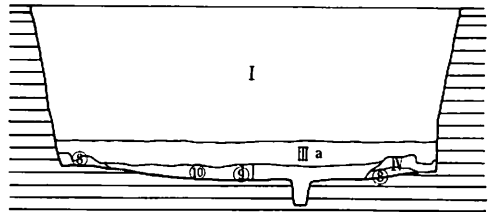
No 2 トレンチ南壁



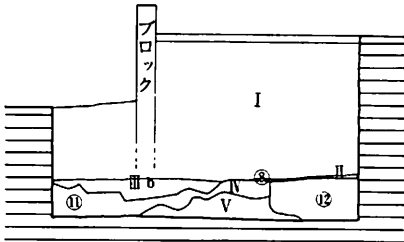
No 2 トレンチ西壁



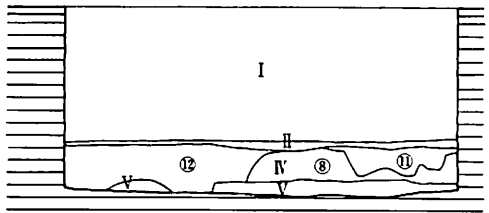
No 3 トレンチ南壁



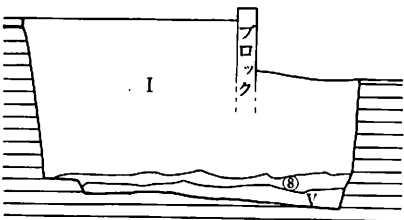
No 3 トレンチ西壁



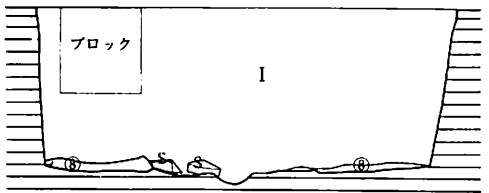
No 4 トレンチ南壁



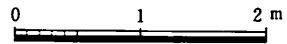
No 4 トレンチ西壁



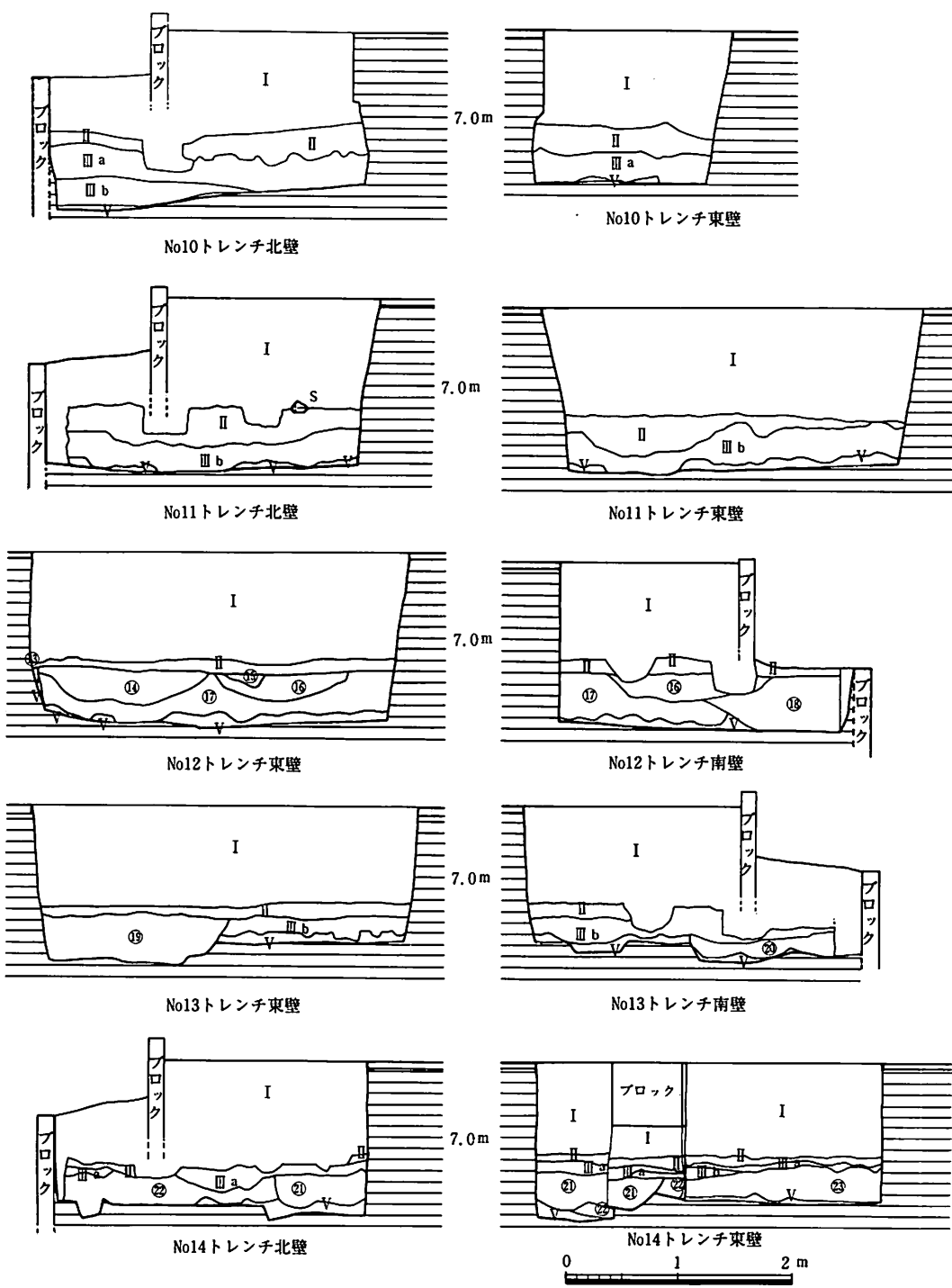
No 7 トレンチ北壁



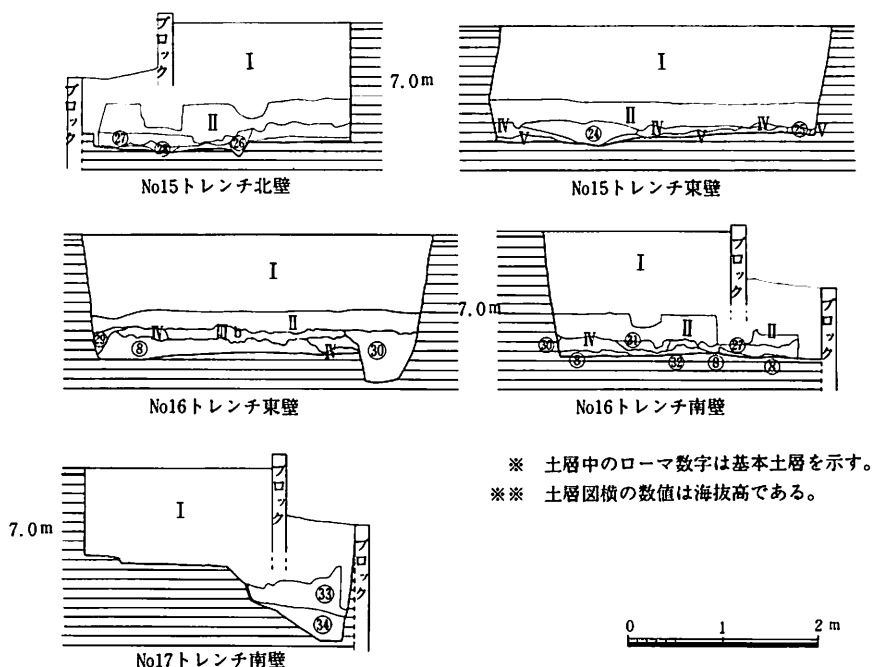
No 7 トレンチ西壁



第20図 層位断面図(1) (1/60)

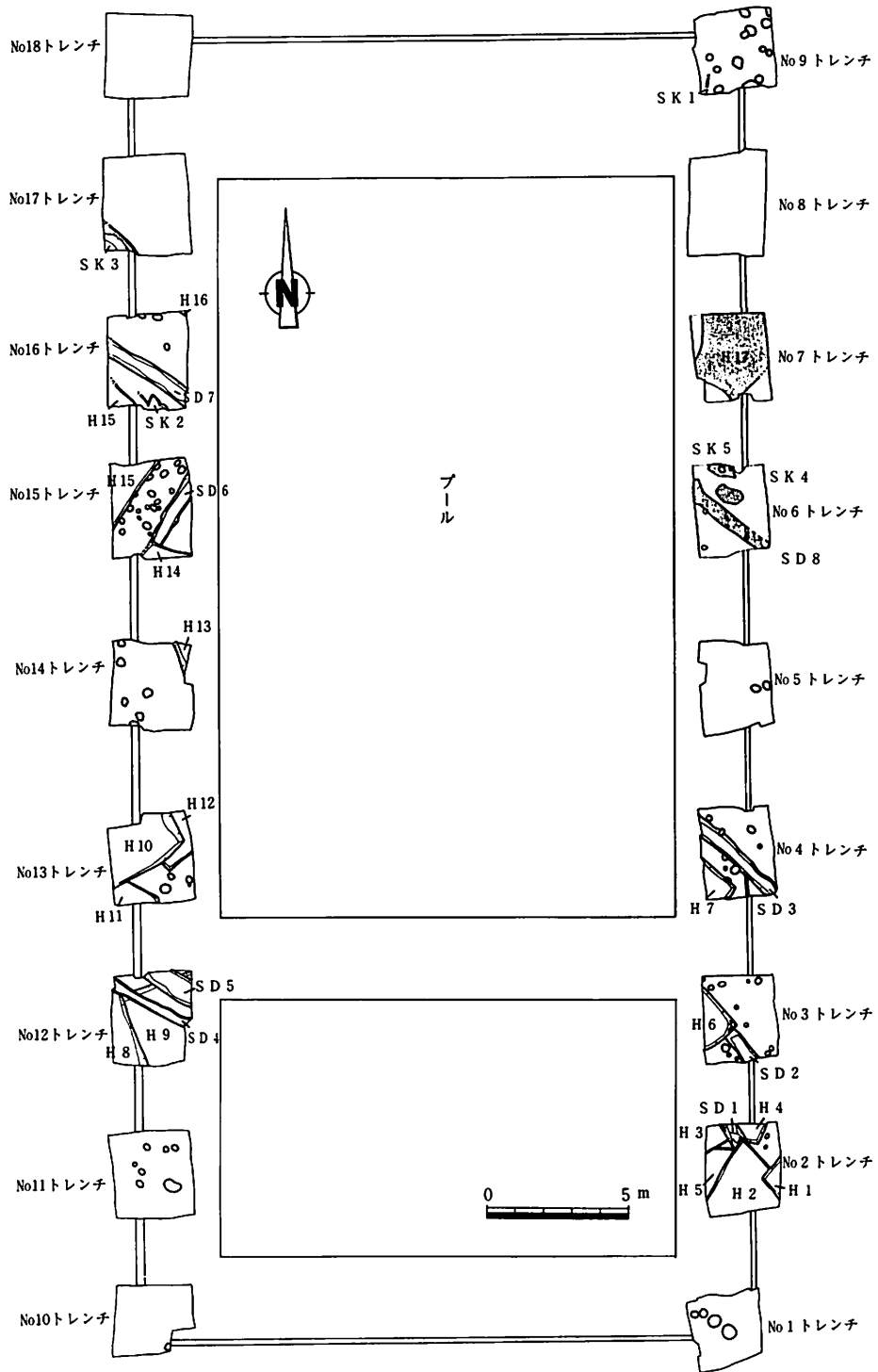


第21図 層位断面図(2) (1/60)

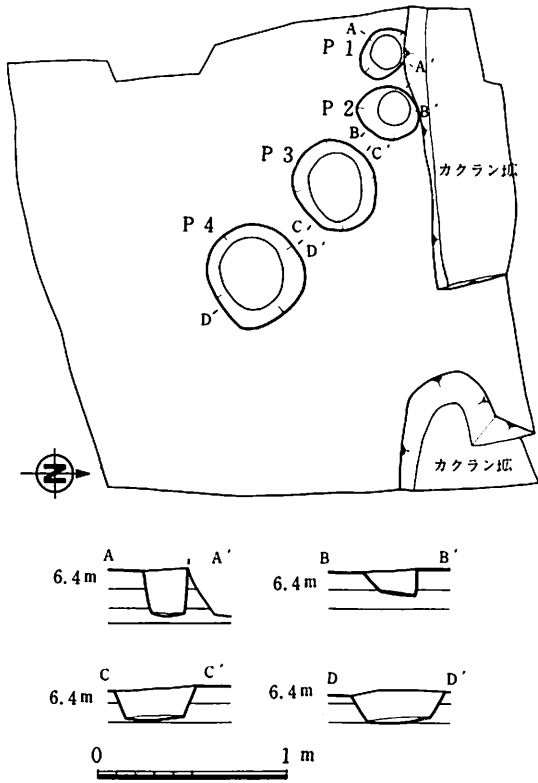


第22図 層位断面図(3) (1/60)

- ①：濁黒灰色砂泥じりシルト（やや硬くしまっており、軽石礫を含む。断面観察においてかなり土器片が認められる。H 2埋土）
- ②：濁黒灰色砂泥じりシルト（①とほぼ同質であるが、硬くしまっていない。H 2埋土）
- ③：濁黒灰色砂泥じりシルト（①②に比べ灰色味が強い。H 5埋土）
- ④：③層土と大型軽石からなる混土（住居貼床土に相当するものか。H 5埋土）
- ⑤：黒褐色砂泥じりシルト（やや硬くしまっており、軽石礫を含む。H 3埋土）
- ⑥：濁黒灰色砂泥じりシルト（硬くしまっている。軽石小礫、炭粒を含む。）
- ⑦：⑥層土と黄色軽石との混土（S D 2埋土）
- ⑧：明灰褐色砂（硬くしまり、大きな軽石礫を非常に多く含む。）
- ⑨：濁灰色砂泥じりシルト（大きな軽石礫を含む。）
- ⑩：Ⅲ a層土とⅣ層土との混土（H 6埋土）
- ⑪：暗褐色を基調とする砂質シルト（黒色のシルト土が混ざる、小粒の軽石を含む。S D 3埋土）
- ⑫：暗褐色を基調とする砂質シルト（黒色のシルト土が混ざる。H 7埋土）
- ⑬：黒褐色シルト質砂（小粒の軽石を含む。P 114埋土）
- ⑭：暗褐色シルト質砂（軟らかい軽石を含む。S D 5埋土）
- ⑮：黒褐色砂質シルト（硬く、軽石を含む。S D 4埋土）
- ⑯：⑭と同質
- ⑰：黒褐色砂泥じりシルト質砂（軽石を含む。H 9埋土）
- ⑱：黒褐色粗砂泥じりシルト質砂（小粒の軽石を多く含む。H 8埋土）
- ⑲：濁黒灰色砂泥じりシルト（軽石礫を多く含む、下部には粗砂をレンズ状に含む、若干硬くしまる。H 11埋土）
- ⑳：⑲とほぼ同じだが、フカフカしている。（H 12埋土）
- ㉑：黒色シルト質砂（軽石を含む。H 13埋土）
- ㉒：暗黄褐色砂質土に21層土がブロック状に含む。
- ㉓：黒褐色シルト質砂（軽石を含む）
- ㉔：暗褐色砂質シルト（小粒の軽石を含む。S D 6埋土）
- ㉕：黒褐色シルト（軽石を含む。）
- ㉖：暗褐色砂質シルト（軽石を含む、Ⅳ層土をブロック状に含む。）
- ㉗：黒色シルト（暗灰褐色、茶褐色をブロック状に含む。H 15埋土）
- ㉘：㉗土、黄白色軽石、Ⅳ層土の混土
- ㉙：濁灰色シルトと濁褐色シルトとの混土（硬くしまっていない。H 16埋土）
- ㉚：黒褐色砂泥じりシルト（フカフカしている、軽石礫を含む。）
- ㉛：暗黒灰色シルト（フカフカしている、ごくわずかに黒褐色土泥じり。S K 2埋土）
- ㉜：黒灰褐色シルト（フカフカしている）
- ㉝：暗灰褐色シルト（黒色シルト土をブロック状に含む、フカフカしている。S K 3埋土）
- ㉞：暗褐色シルト（フカフカしている。S K 3埋土）



第23図 遺構全体図 (1/250)



第24図 No.1 トレンチ実測図 (1/40)

レンチ検出の遺構間の関係についても不明な点を残すこととなった。ここでは、トレンチごとに遺構と出土遺物について説明を加えることにする。なお、ピットが多数検出しているが、これについては表1にまとめて記述した。出土遺物は図示できるもののみについて説明を加えた。

No.1 トレンチ (第24図)

No.1 トレンチではV層上面からピットを検出した (P1~P4)。これらはトレンチ中央から北東方向へ4基並んで位置している。いずれも遺物は出土しなかった。

No.2 トレンチ (第25~28図)

No.2 トレンチではⅢb層直下の⑤層上面から5基の住居址と1条の溝が切り合って検出し

た。以下、遺構ごとに説明を加える。

H1 (第25図)

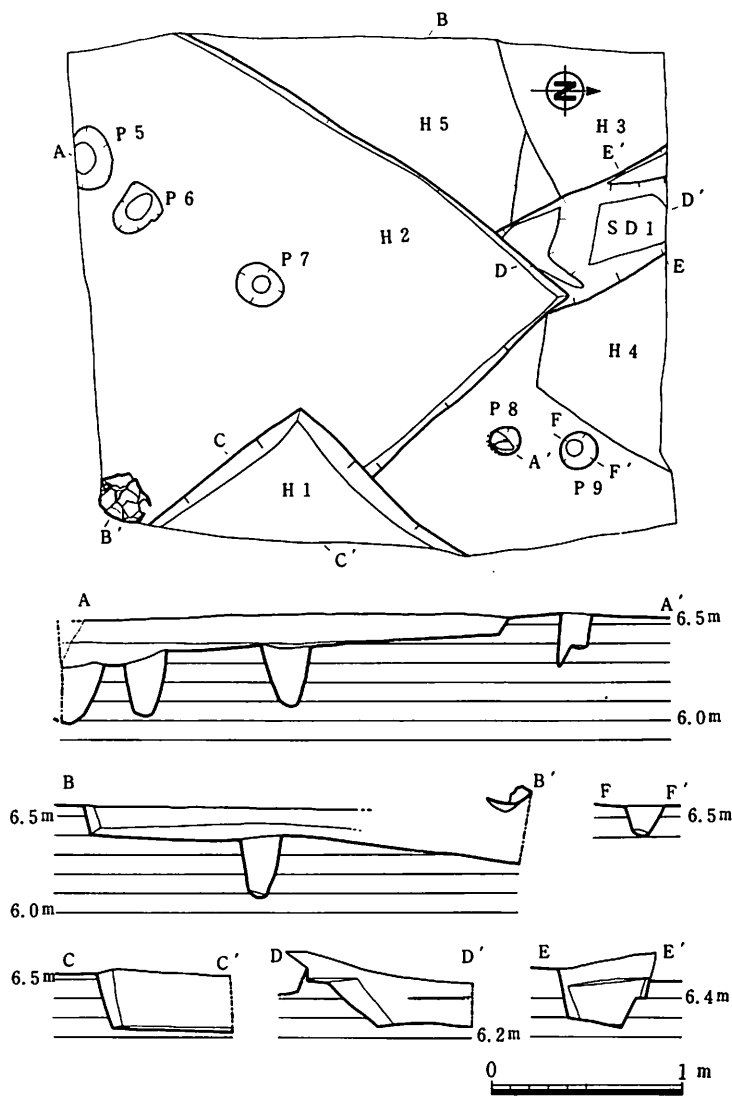
No.2 トレンチの東側に位置する。西側コーナーを挟んで南西壁と北西壁の一部を確認し、東側は調査区外に広がっている。平面プランは方形を呈すると考えられる。検出面から床面までの深度は約30cmである。埋土はⅢb層に類似した黒褐色の砂質シルト土である。上部は硬く、下部はフカフカしている。H2を切っている。

出土遺物 (第28図1~3)

1は弥生時代中期後葉に位置づけられている山之口式の甕の口縁部である。やや上向きで、外面には口縁部の接合線を残しており、口唇部はヨコナデによって窪んでいる。2は脚台部である。径が小さく、低いいため、鉢ではないかと考えられる。3は扁平な磨製石器である。表面には細かい擦過痕が認められる。

H2 (第25図)

No.2 トレンチ南側に位置する。H1に切られ、H5を切っている。北側コーナーをSD1と接す



第25図 No. 2 トレンチ実測図(1) (1/40)

の巾と耳部の巾がほぼ等しい形態を呈する。内面にはV字状の溝を持つ。

H 3 (第26図)

No. 2 トレンチ北西隅に位置する。SD 1 に切られ、H 5 を切る。検出面から床面まで深さ10cmを測る。埋土は黒褐色砂混じりシルト土で、やや硬くしまり、軽石礫を含む(層位断面図中⑤)。

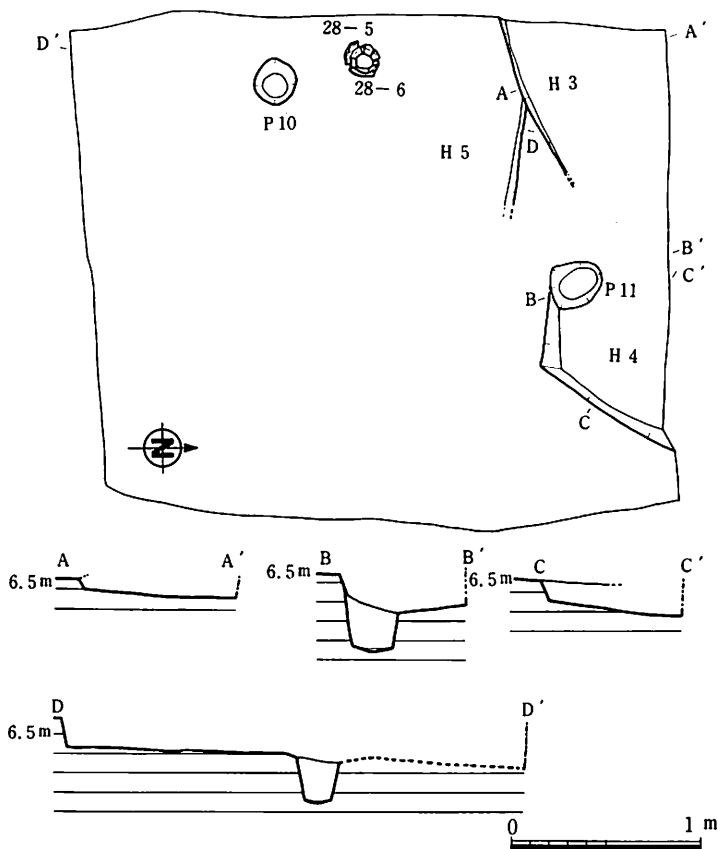
H 4 (第26図)

南コーナーと壁の一部を検出し、東半分は調査区外に広がっている。SD 1 に切られている。検

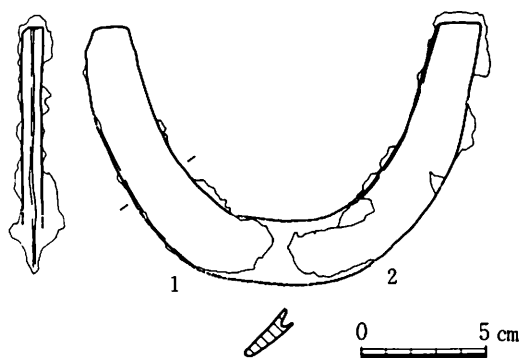
る。平面プランは方形を呈し、検出面から床面までの深度は約30cmを測る。床面に南西～北東方向に並んだ3基のピットをもつ(P 5～P 7)。埋土はⅢ a・Ⅲ b層に似た黒褐色砂質シルトで硬くしまった上部と硬くしまっていない下部に分かれる(層位断面図中①・②)。トレンチ南東隅に壺の底部付近の破片が出土したが、出土レベルは床面から約20cm上である。他の遺物も同様であった。

出土遺物(第28図4・第27図)

4 は甕の口縁部である。直立し、絡縄突帯を一条施している。第27図1・2は鉄製の鋤先である。1・2とも巾、厚さとも類似しているため、同一個体であろうと考えられる。中央部は欠損しているものの、U字型で刃先



第26図 No. 2 トレンチ実測図(2) (1/40)



第27図 No. 2 トレンチ遺構出土遺物(1) (1/3)

SD 1 (第25図)

No. 2 トレンチ北側に検出した。H 3・H 4・H 5を切り、H 2の北側のコーナーと接する。幅50 cm、検出面から床面までの深さは約20~30cmを測る。床面はH 2の肩部に向かって立ち上がり、両者は切りあわないことから、同時期のものと考えられる。H 2に接する部分と西壁側にテラ

出面から床面までは約10~15cmを測る。南壁に接して、P 11がある。これは、床面にほぼ垂直に掘り込まれている。埋土はⅢ a層に似た黒褐色砂質シルトで、軽石を含んでいる。上部は若干硬いが、下部は砂混じりで軟らかい。

H 5 (第26図)

No. 2 トレンチ西側で検出した。H 2とH 3に切られている。北壁一部のみ検出し、他は調査区外に広がっている。検出面から床面まで約20cmを測る。埋土は黒褐色シルト質砂である(層位断面図中③・④)。

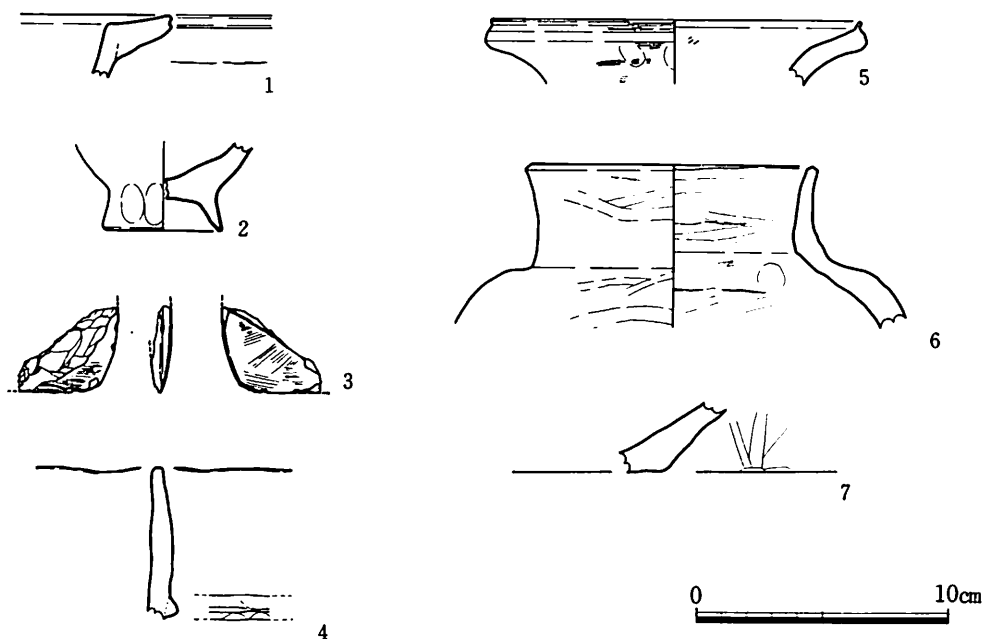
出土遺物(第28図5・6)

5・6は壺の口縁部である。5は湾曲しながら外反し、口唇部上端はつまみ出されたように突起状を呈する。丁寧な作りである。6は、直立する短い口縁部をもち、肩部は張る。調整は粗雑である。これらは5を下にして、口縁部を下向きに重なり合うように出土したが、床面からは約20cm上のレベルで出土した。

ス状の段をもつ。ただし床面のレベルと東側に隣接するH 4の床面レベルがほぼ等しく、また、S D 1とH 4の埋土が類似しているため、S D 1の落ち込みラインはS D 1に切られたH 4の南壁と西壁のラインである可能性もある。埋土は黒灰色砂混じりシルト質砂である。

ピット出土の遺物（第28図7）

壺の底部で、平底である。外面に丁寧なナデを施している。P 8の埋土中より出土した。



第28図 No 2 トレンチ遺構出土遺物(2) (1 / 3)

No. 3 トレンチ (第29・30図)

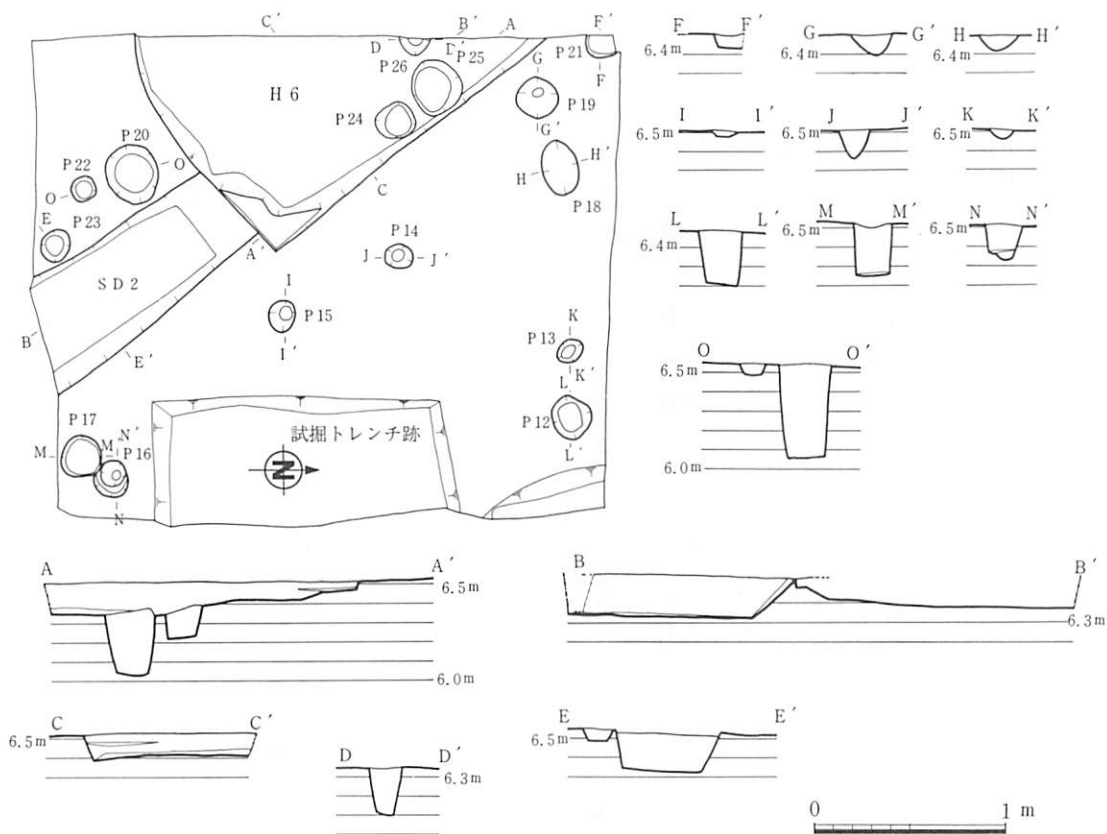
No. 3 トレンチはIV層上面から住居址1基と、溝状遺構1条、ピット13基を出土している。以下、遺構ごとに説明を加える。

H 6 (第29図)

No. 3 トレンチの西側に位置する。東コーナーをはさんで南壁と東壁の一部を検出し、西側は調査区外に広がっている。東コーナーにはテラス状の段を有す。また、コーナーに接してS D 2が南東方向に延びている。検出面から床面までは深さ10~15cmを測り、床面検出のピットを3基確認した。埋土は、III a層土とIV層土の混土である(層位断面図中⑩)。

出土遺物(第30図1)

壺の頸部が出土している。口縁部端部と肩部以下は欠損している。



SD 2 (第29図)

第29図 No.3 トレンチ実測図 (1/40)

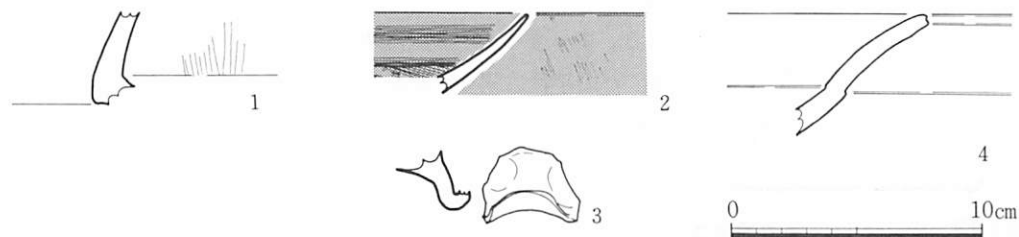
No.3 トレンチ南側に位置する。H 6 の南壁に接して南東方向へ延びる。幅50cm、検出面からの深さ約20cmを測る。SD 2 もSD 1 と同様、H 6 と切りあわず、H 6 の南東壁に向かって立ち上がっている。埋土は2つに分層できた。上層は黒灰色の砂混じりシルトで、硬くしまっている。炭粒を含む。下層は黄灰色の軽石と上層土との混土である。

出土遺物 (第30図 2・3)

2 は高杯の杯部である。内面ともハケ調整が認められる。また、赤色顔料が付着している。3 は、器種は不明だが脚部であろう。端部はめくれ上がるような形態を呈し、全体に粗雑な作りである。

ピット出土遺物 (第30図 4)

P 20 の埋土中から出土した。高杯の杯部で、頸部に内面・外面ともに段をもち、そこから湾曲しながら外反する。口唇部はヨコナデによってくぼんでいる。



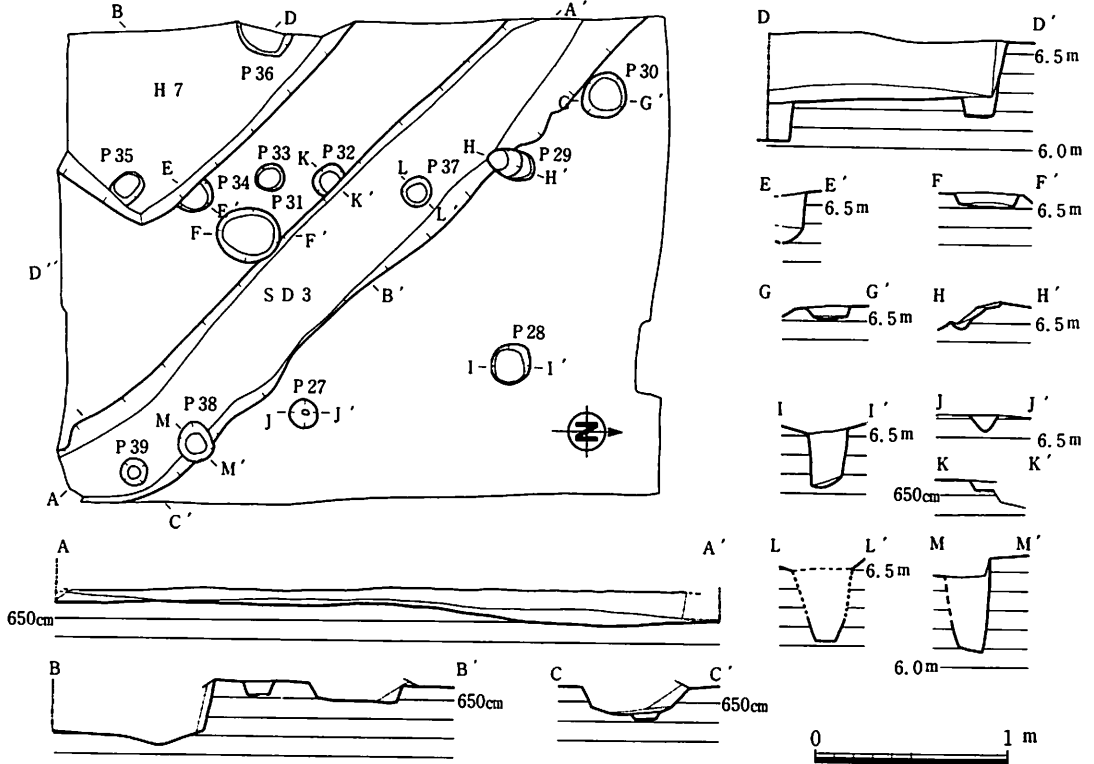
第30図 No 3 トレンチ遺構出土遺物 (1/3)

No. 4 トレンチ (第31・32図)

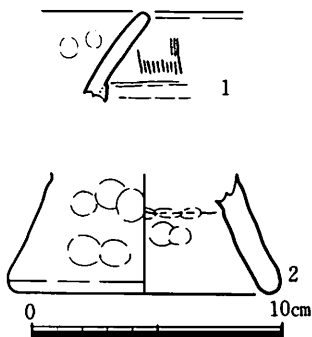
No. 4 トレンチはNo. 3 トレンチと同じく、IV層上面から住居址1基、溝状遺構1条、ピット13基を検出している。以下、遺構ごとに説明を加える。

H 7 (第31図)

No. 4 トレンチ南西隅で検出した。東コーナーをはさんで、南東壁・北東壁が検出し、他は、調査区外へ広がっている。検出面から床面まで、深さ30cmを測る。平面プランは方形を呈する。埋土は暗褐色砂質シルトと黒褐色シルトの混土である。小粒の軽石を含む(層位断面図中⑫)。床面検出



第31図 No. 4 トレンチ実測図 (1/40)



第32図 No. 4 トレンチ遺構出土遺物 (1/3)

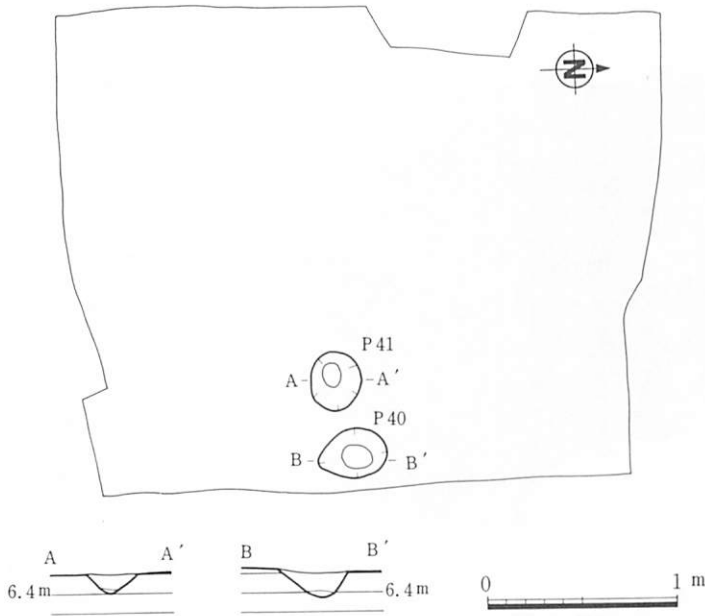
のピットを2基確認している。東壁はSD 3と平行である。

出土遺物 (第32図)

1は甕の口縁部にも類似しているが、口縁部から突帯までの長さも短く、つくりも小さいことから、鉢ではないかと考えられる。まっすぐ外へ開く形態を呈する。2は、甕の脚部である。ハの字状に開く形態を呈し、内面上部には接合線が認められる。

SD 3 (第31図)

No. 4 トレンチの北西隅から南東隅へトレンチを対角線状に走っている。H 7の北東壁に平行に走っている。幅50cm、検出



第33図 No. 5 トレンチ実測図 (1/40)

物は出土していない。

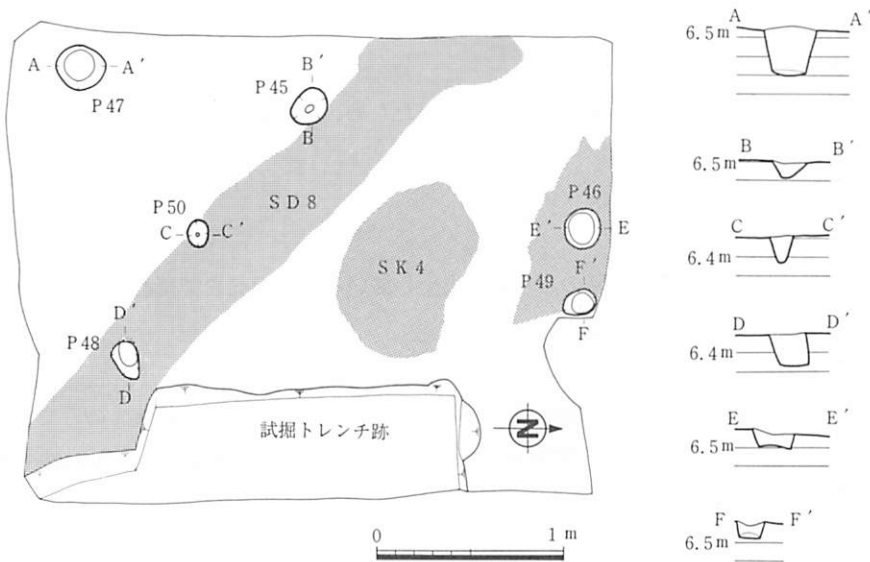
面から深さ10~15cmを測る。床面検出のピットを2基確認している。埋土はⅢa層土とⅣ層土の混土である。

No. 5 トレンチ (第33図)

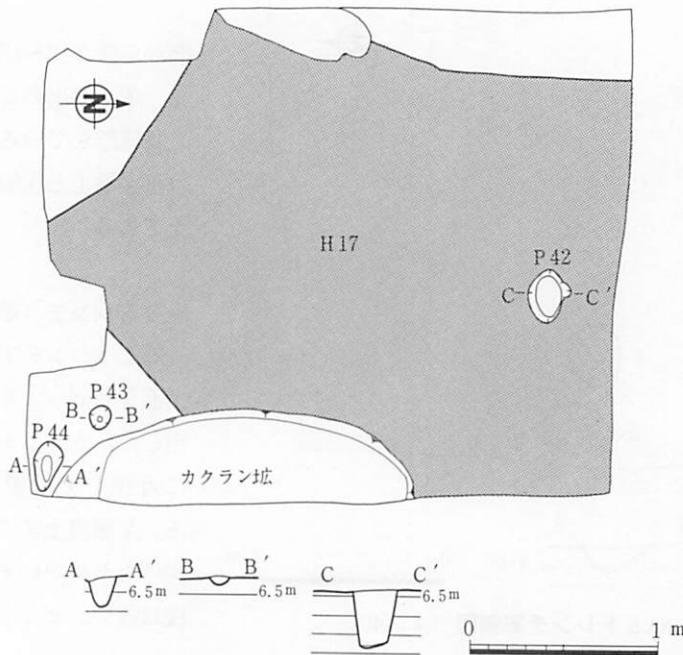
No. 5 トレンチではV層上面からピットを2基検出した。トレンチの東側に近接して位置している。V層直上まで攪乱を受けたためかいずれも深度は浅い。ピットから遺

No. 6・7 トレンチ (第34・35図)

No. 6 トレンチ・No. 7 トレンチにおいてV層上面より軽石層(層位断面図中⑧層)を埋土とする遺構を検出した。No. 6 トレンチでは幅40cmの溝状を呈したSD 8、その北側に楕円形を呈するSK 4



第34図 No. 6 トレンチ実測図 (1/40)



第35図 No.7トレンチ実測図 (1/40)

・SK5が確認できた。しかしこれらは検出ラインから上部を後世の攪乱によって失っており、ごく薄く⑧層土である軽石が残存しているのみで、平面形のラインしか確認できなかった。No.7トレンチでは平面形が方形を呈すると考えられるH17を検出した。これは底面からの深さ約10

cmを測る。しかし、埋土の軽石の隙間にはV層土が混入しており、掘りNo.6トレンチ遺構図込まれているV層と埋土との境界はあまりはっきりしない。以上のことから、これらは⑧層土が砂層であるV層上面の窪地に自然に堆積したものとも考えられるが、SD8の方向が他の溝状遺構と平行もしくは垂直方向であること、また、H17も同様に方向がほぼ同じであること(第23図参照)から、遺構として取り扱うことにした。なお、遺物は出土していない。

No.8トレンチ

No.8トレンチは、V層上面まで掘削がおよんでいたため、包含層が存在せずしかも、遺構も認められなかった。

No.9トレンチ (第36図)

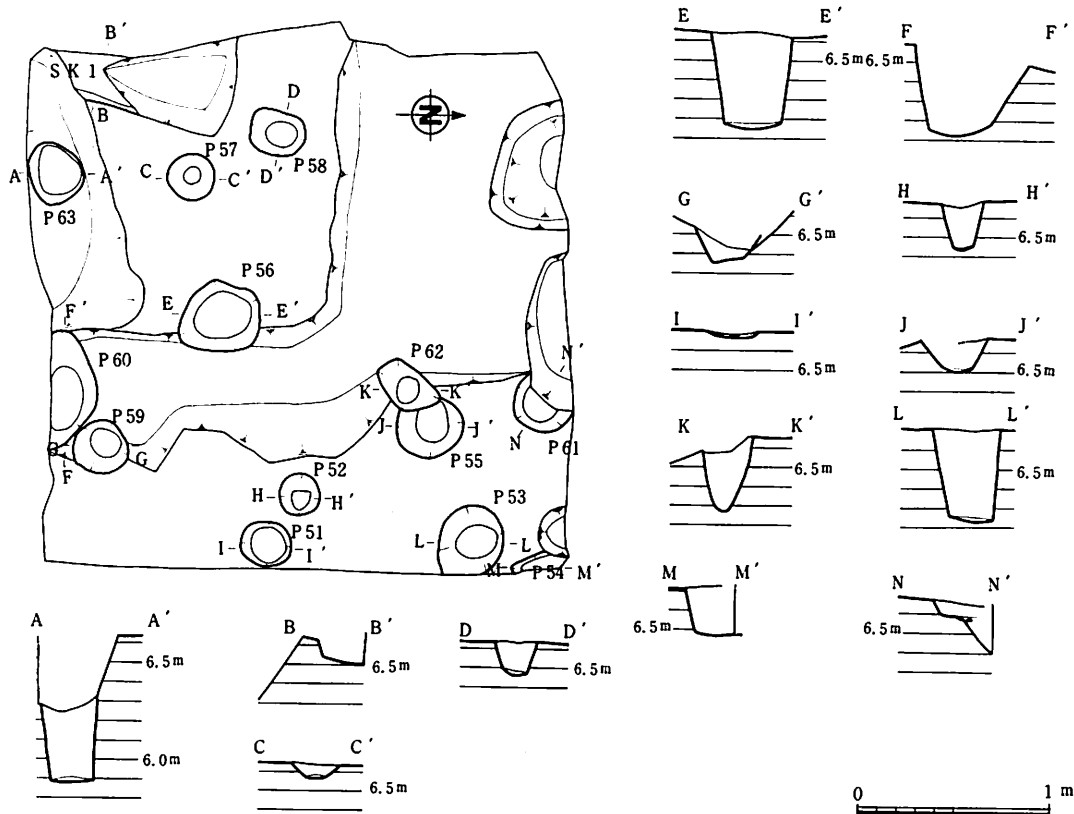
No.9トレンチでは土壌1基と13基のピットが出土している。検出面まで攪乱が及んでいたため、いずれもV層上面から確認している。

SK1 (第36図)

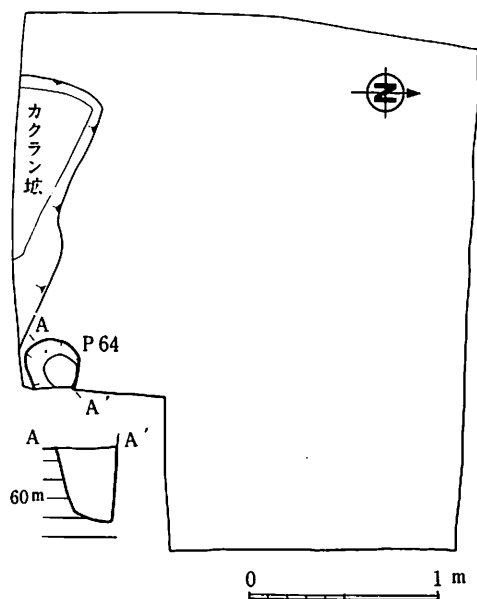
No.9トレンチの西側に位置する。攪乱坑に切られているため、東壁を一部残すのみで、また、調査区外に広がっている。検出面から床面まで深さ約15cmを測る。住居跡という可能性も考えられる。埋土は黒色シルト質砂である。

No.10トレンチ (第37図)

V層上面からピットが1基検出した。ピットからは遺物は出土していない。



第36図 No.9 トレンチ実測図 (1/40)



第37図 No.10 トレンチ実測図 (1/40)

No.11 トレンチ (第38図)

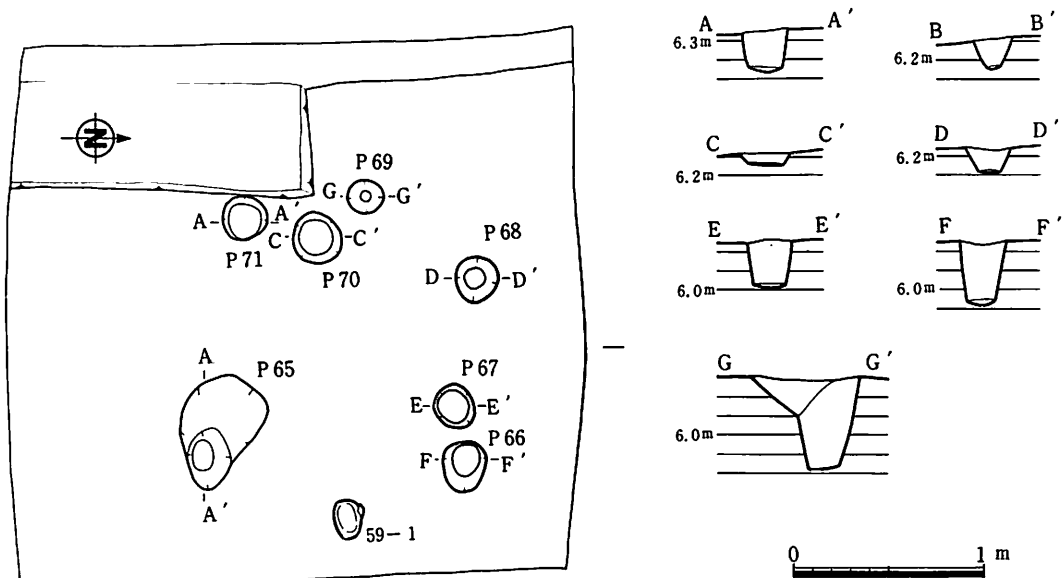
No.11 トレンチからはV層上面からピットを7基検出した。ピットからは図示できる遺物は出土しなかった。

No.12 トレンチ (第39~44図)

No.12 トレンチからは住居址2基、溝状遺構2条を検出した。以下、遺構ごとに説明を加える。

H 8 (第40図)

H 8はSD 5・SD 6に切れ、H 9を切っている。東壁の一部を検出し、あとは調査区外へ広がっている。検出面から床面まで深さ約30cmを測る。埋土はⅢ b層に類似しているが、小粒の軽石を多く含み、軟



第38図 No.11トレンチ実測図 (1/40)

らかい(層位断面図中㉔)。

出土遺物(第42図1~3)

1は壺の底部である。平底だが器壁は厚く、特に底は厚く仕上げられている。2は高杯の口縁部である。あまり内湾せず、直線的に立ち上がる形態を呈し、外面には赤色顔料を施している。外面の調整は、ハケ調整のちミガキを加えたらしく、一部にハケ目が残存している。3は埴の底部である。底面に小さな突起をもつ。作りは粗雑である。

H9(第41図)

12トレンチで検出している。SD5・SD6・H8に切られている。北壁一部のみを検出し、検出面から床面までの深さ30cmを測る。床面検出のピットを1基確認した。埋土はⅢb層に似た黒褐色シルト質砂で砂混じりである(層位断面図中㉗)。ピットの北側からは甕形土器の上半部が横倒しに出土した(第42図4)が床面から約10~20cm浮いたレベルである。

出土遺物(第42図4・5)

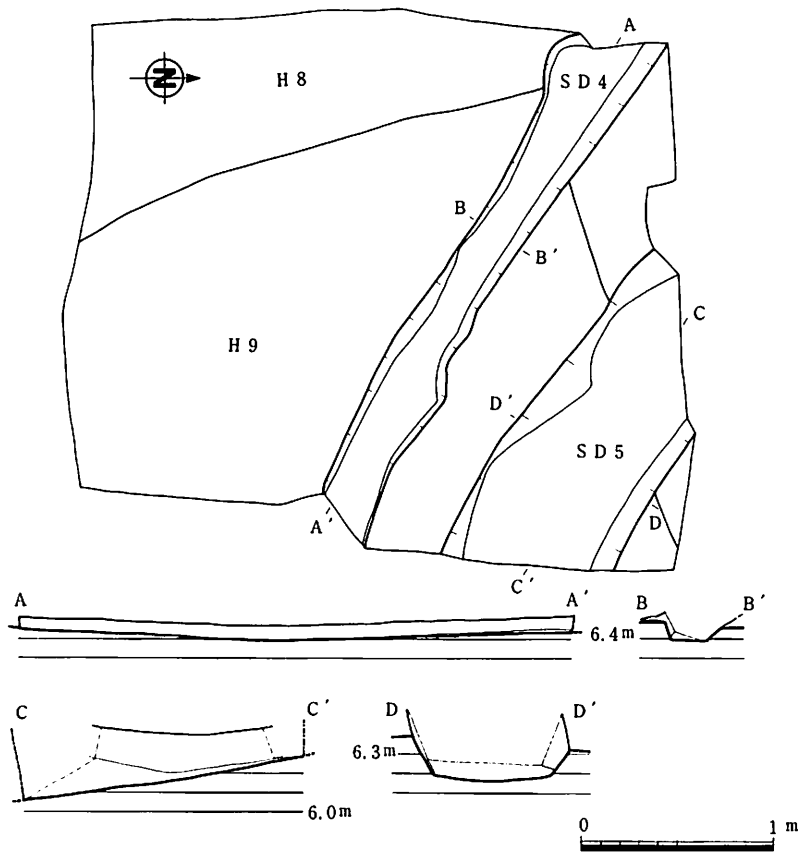
4は甕の上半部である。若干内湾する口縁部で、突帯を1条もつ。突帯はユビオサエが明瞭な絡縄突帯である。5は石庖丁である。外湾型直刃形で、穿孔を2孔もつ。穿孔の周りには紐ズレが認められる。

SD4(第39図)

No.12トレンチの北側を東西にSD5と平行に横断している。H13・H14を切っている。幅約40cm、検出面から床面まで8cmを測る。埋土は黒褐色砂質シルトである(層位断面図中㉕)。

出土遺物(第43図1~3)

1は甕の脚台部である。2は、壺の底部で平底を呈する。3は、高杯の脚裾部だが、器壁は薄く、小形品であると考えられる。



第39図 No.12トレンチ実測図(1) (1/40)

SD 5 (第39図)

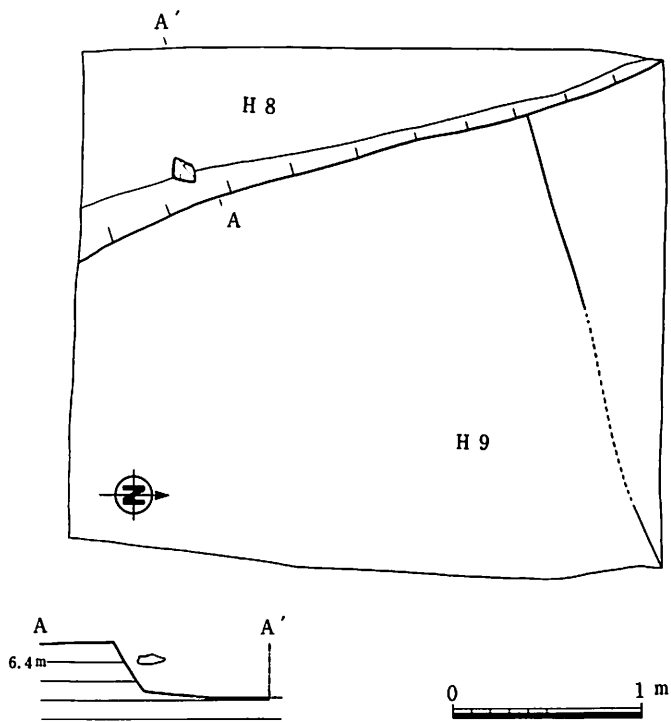
SD 5と平行で、H13・H14を切っている。幅約50cm、検出面から床面まで22cmを測る。埋土は暗褐色シルト質砂である(層位断面図中⑭)。

出土遺物(第43図4~11, 第44図)

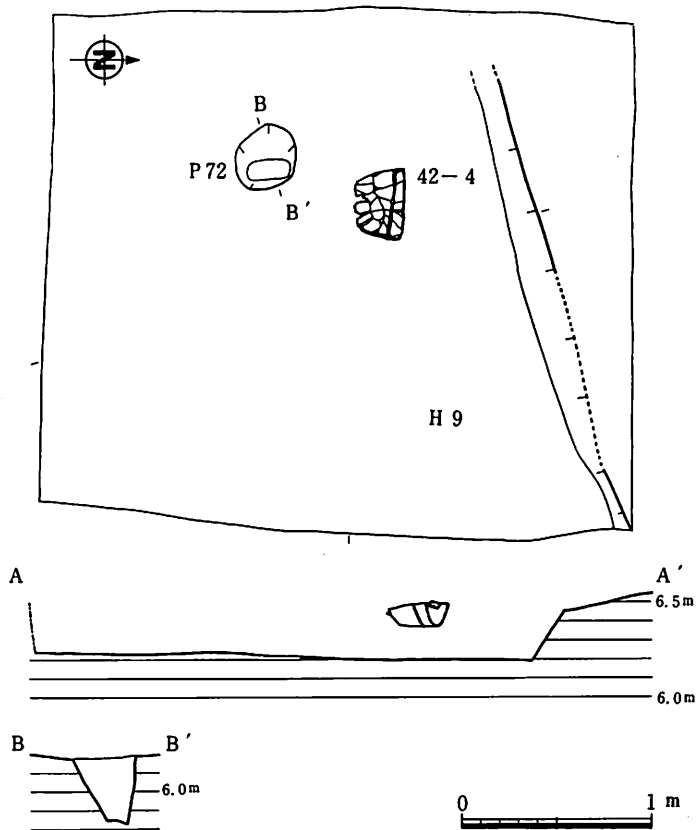
4・5は甕である。4は口縁部で、くの字状に屈曲し、内面に明瞭な稜線をもつ。また、口唇部はヨコナデによってくぼんでいる。5は脚台で、脚台内面の天井部は、体部内面に沿って迫り出している。6・7は壺の底部で、いずれも平底である。8は鉢である。口唇部は丸く仕上げ、平底から若干内湾しながら立ち上がる形態を呈し、底面は若干上げ底状を呈すると推定できる。9は、高杯の脚部である。杯部との接合部分で欠損している。10・11は杯の底部で、どちらとも高台をもつ。18図は偏平打製石斧である。くびれ部から半分を欠損している。

13トレンチ(第45~47図)

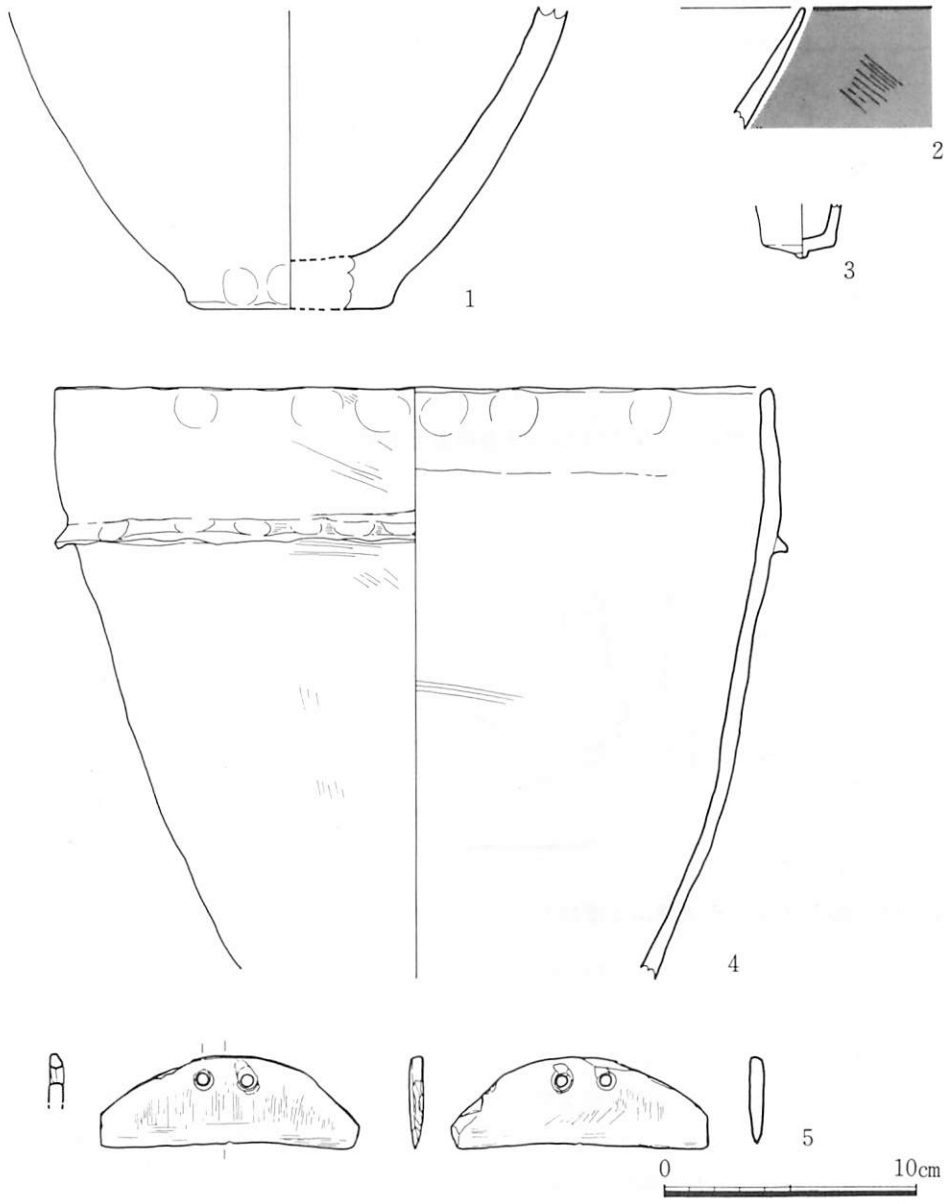
No.13トレンチではV層上面から3基の住居址と7基のピットを検出した。住居は互いに切り合っている。以下、遺構ごとに説明を加える。



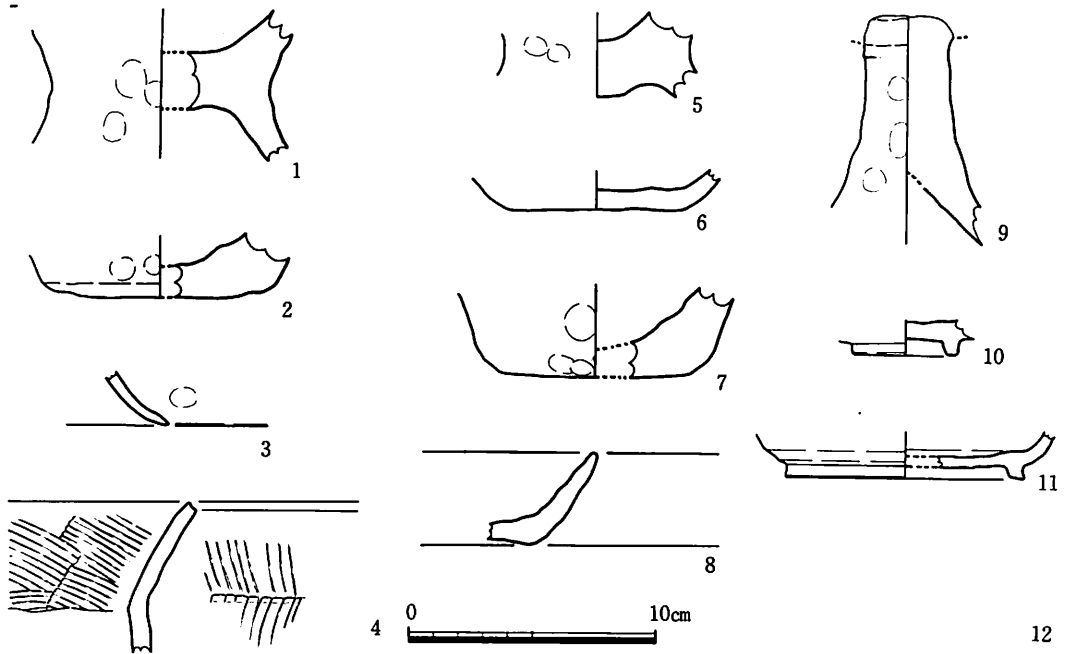
第40図 No.12トレンチ実測図(2) S = 1/40



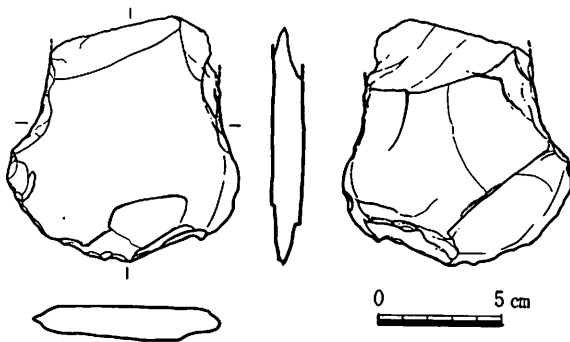
第41図 No.12トレンチ実測図(3) (1/40)



第42図 No.12トレンチ遺構出土遺物(1) (1/3)



第43図 No.12トレンチ遺構出土遺物(2) (1/3)



第44図 No.12トレンチ遺構出土遺物(1) (1/3)

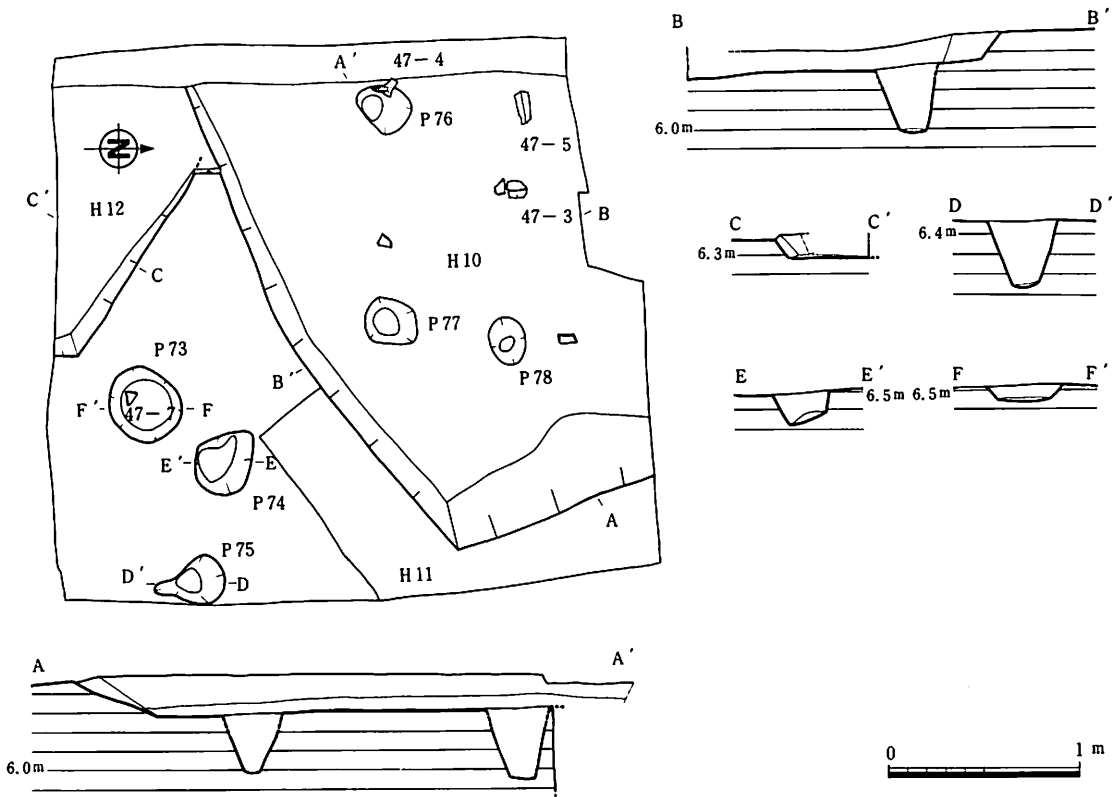
H10 (第45図)

No.13トレンチの南半分に位置し、H11・H12を切っている。平面プランは方形で、東コーナーをはさんで東壁と南壁の一部を検出した。検出面から床面までは深さ約20cmを測る。また、床面を検出面とするピットを3基確認している。

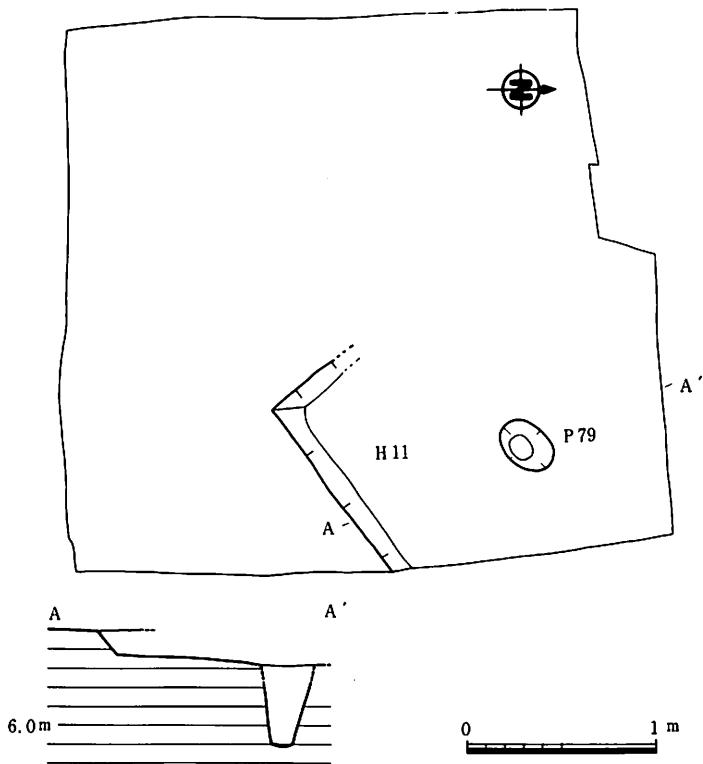
。埋土はⅢb層に似た砂混じりの黒褐色土で、小粒の軽石を含む。

出土遺物 (第47図 1~5)

1は鉢の口縁部である。口縁部下につぶれたような低い断面の刻み目突帯を1条施す。2は、甕の突帯部である。突帯はいわゆる絡縄突帯で、ユビオサエの痕が明瞭である。3は、鉢の口縁部で、直線的に外に開き、口縁部端部はユビオサエによって若干波状を呈する。4は、高杯の脚部である。外面は赤色顔料を施し、筒部は縦方向の、裾部は横方向のミガキを行っている。5は、敲打器ではないかと考えられる石器である。横断面は四角形を呈する。下面には敲打痕が、角には小さな剝離痕が顕著である。



第45図 No.13トレンチ実測図(1) (1/40)



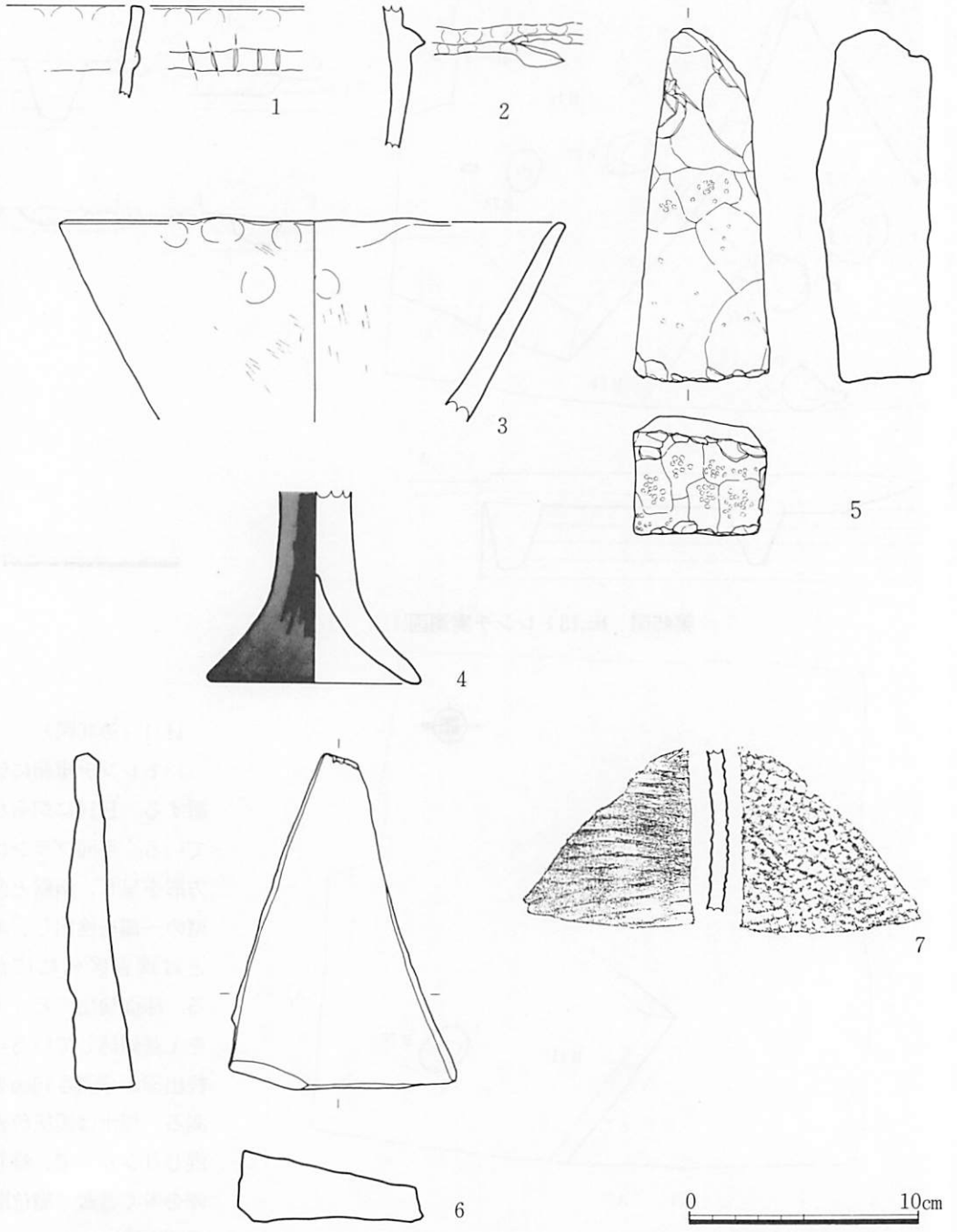
H11 (第46図)

13トレンチ東側に位置する。H10に切られている。平面プランは方形を呈し、南壁と西壁の一部を検出し、あとは調査区外に広がる。床面検出のピットを1基確認している。検出面から深さ15cmを測る。埋土は黒灰色砂混じりシルトで、軽石礫を多く含む(層位断面図中⑩)。

出土遺物(第47図6)

H11からは図示でき

第46図 No.13トレンチ実測図(2) (1/40)



第47図 No.13トレンチ遺構出土遺物(1) (1 / 3)

るものは砥石が出土している。三角形を呈し、断面は扁平で上面は若干くぼんでいる。

H12 (第45図)

No.13トレンチで西側に位置する。平面プラン方形を呈すると考えられるが、攪乱による掘削のため、東コーナーをはさんで北壁と東壁の一部を残すのみで西側は失われている。検出面からの深さは約10cmを測る。埋土は黒灰色砂混じりシルトで、H11とよく似ているが、軽石礫が少ない(層位断面図中㊸)。

ピット出土遺物 (第47図7)

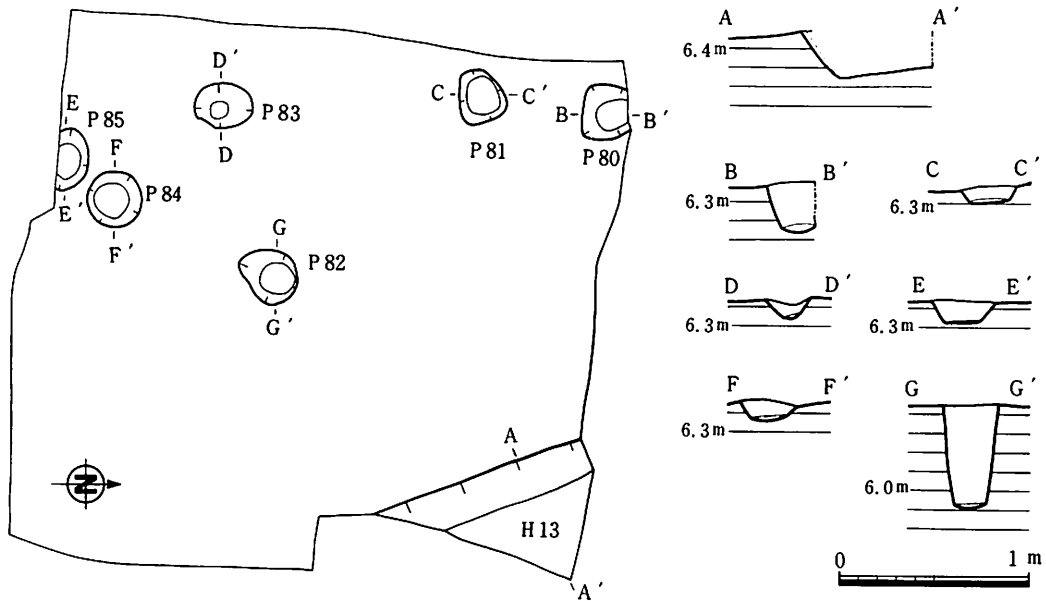
P73の埋土中より須恵器の胴部片が出土している。表面は格子目文状のタタキ痕が、内面には当て具痕が明瞭である。胴部片のため器種は不明だが、大甕ではないかと推定できる。

No.14トレンチ (第48・49図)

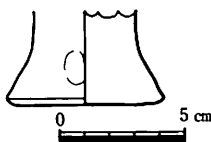
No.14トレンチからはV層上面から住居址13基、ピット6基を検出している。

H13 (第48図)

No.14トレンチ北東隅に位置する。西壁の一部を検出している。検出面から床面までの深さは24cm



第48図 No.14トレンチ実測図 (1/40)

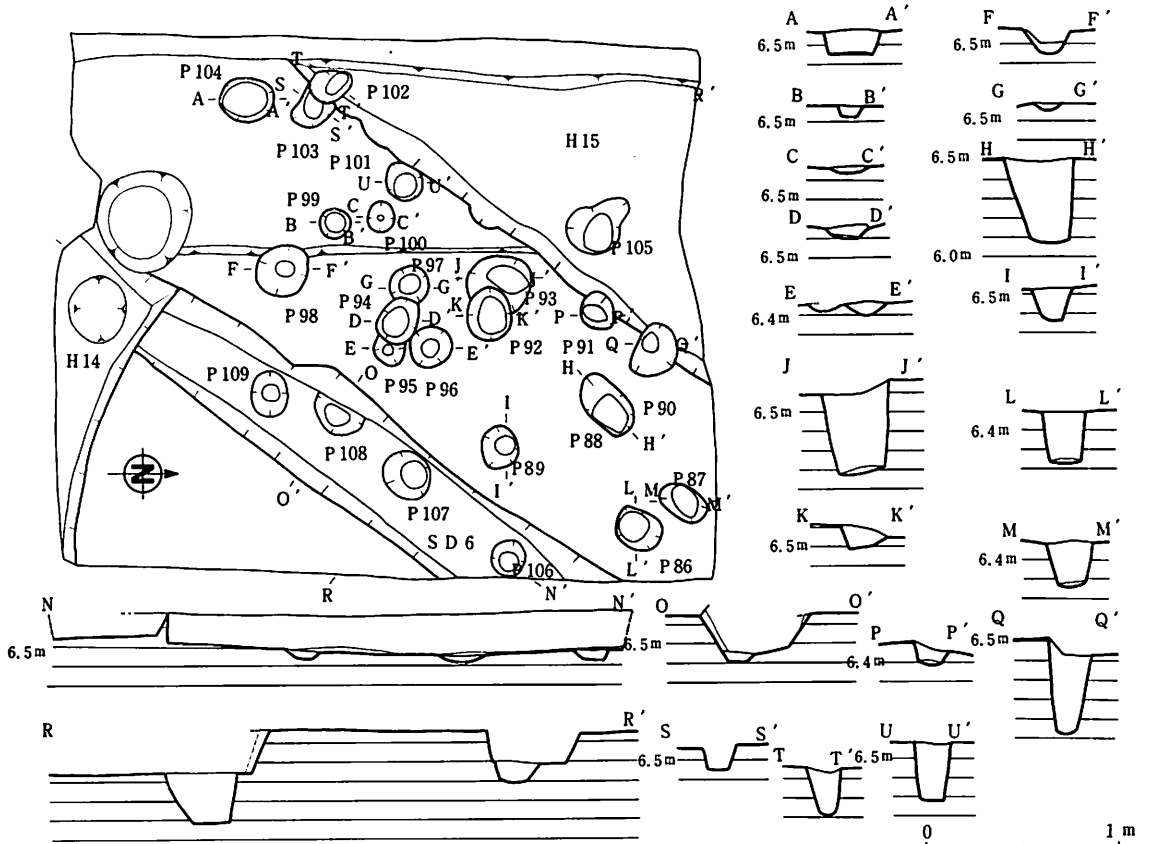


第49図 No.14トレンチ遺構出土遺物 (1/3)

を測る。埋土は、黒色のシルト質砂である(層位断面図中㊸)。

出土遺物 (第49図)

甕の脚台部である。いわゆる充実した脚台である。ここでは図示できるものがこの1点であった。



第50図 No.15トレンチ実測図 (1/40)

No.15・16トレンチ (第50～53図)

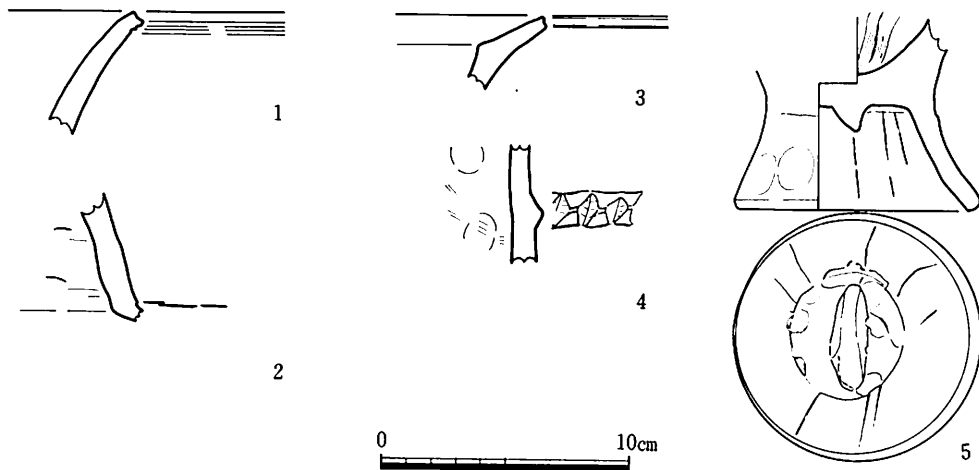
No.15・16トレンチではIV層上面から住居址3基、溝状遺構2条、土塙1基、ピット28基を検出した。ここではH15が両トレンチにまたがって検出したため、まとめて説明することにする。

H14 (第50図)

No.15トレンチ南側に位置する。北コーナーをはさんで一部の壁を検出し、あとは調査区外に広がっている。一部は攪乱墳によって掘削されている。コーナーに接してSD6がのびる。検出面から床面までは約10cmを測る。

H15 (第50・52図)

No.15・16トレンチ両方にまたがって検出した。No.15トレンチでは東壁の一部が、No.16トレンチでは北東壁が確認できた。発掘調査時には別々の住居として扱っていたが、調査区全体の遺構平面図を作成した結果(第23図)、検出レベルや床面のレベルが大体一致することから、同一住居として確認した。検出面から床面までは約20cmを測る。床面検出のピットを1基、壁検出のピットを3基確認している。



第51図 No.15トレンチ遺構出土遺物

出土遺物（第51図1・2）

1は口縁部で、外面端部はヨコナデによって2条の沈線が認められる。2は、高杯の脚部である。裾部は欠損しているが、屈曲して、外開きの形態を呈する。

H16（第52図）

おそらく住居址の一部と考えられる落ち込みをNo.16トレンチ北東隅に確認したが、調査区内では床面までは達しなかった。確認した検出ラインはH11とSD7に平行である。埋土は暗褐色と黒褐色シルトの混土である（層位断面図中㊸）。

SD6（第50図）

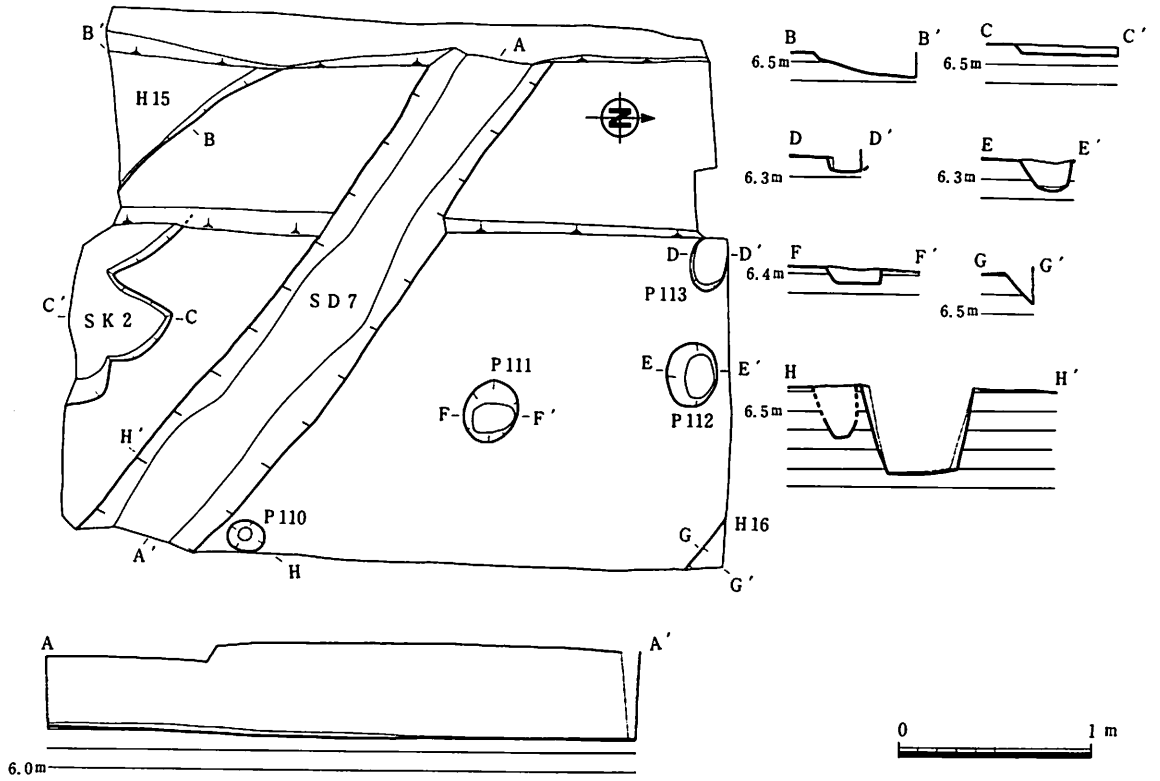
No.15トレンチの東側に位置し、H14の北東壁と接している。幅約50cm、深さ10～20cmを測る。床面検出のピットを3基検出した。埋土は暗褐色砂質シルトで、小粒の軽石を含む（層位断面図中㊸）。

SD7（第52図）

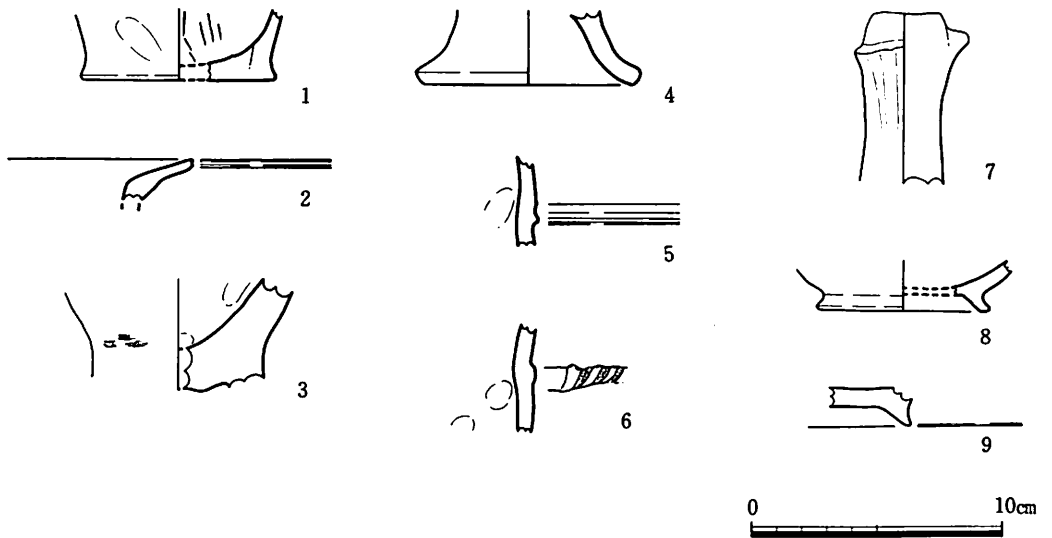
H15とH16に平行に走る。幅約55cm、検出面から床面までの深さは45cmを測る。断面形は台形状を呈する。調査区外においてもまっすぐに延びると想定すると、SD6と直交、またはSD3につながり、H15を囲むことも考えられる。埋土は黒褐色砂混じりシルトで、フカフカしている。小粒の軽石も含む（層位断面図中㊸）。

出土遺物（第53図）

1は深鉢の底部で、平底を呈する。外面は、底面が張り出している。2～7は甕である。2は口縁部で、頸部以下を欠損しているが、ゆるやかにL字状に屈曲するようである。口唇部はヨコナデのためくぼんでいる。3は体部下半で脚台内面天井部は少し張り出す形態を呈する。4は脚台部で、湾曲しながら開き少し低めである。鉢の可能性もある。5・6は突帯部である。両者とも低くつぶれたような突帯であるが、6は刻み目をもつハケの原体によるものようである。7は高杯である。杯部との接合部で欠損している。外面には赤色顔料を施し、縦方向のミガキ調整を施している。8は土師器の高台である。低く踏んばるような形態を呈す。



第52図 No.16トレンチ実測図 (1/40)



第53図 No.16トレンチ遺構出土遺物 (1/3)

土壌

SK 2 (第52図)

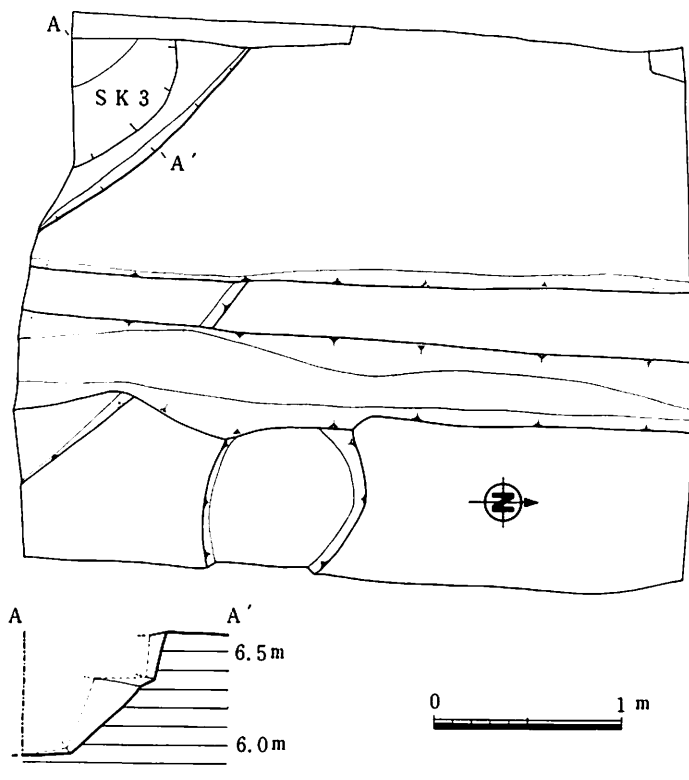
No.16トレンチの南に位置する。不定形の土壌で、西側は掘削されて不明である。深さは検出面から約5 cmを測る。埋土は黒灰色シルトで、少し黒褐色土が混じり、フカフカしている(層位断面図中㊸)。

出土遺物 (第53図 9)

杯の底部である。非常に摩滅しているが、赤色顔料が外面にわずかに残存しているのが認められる。底部は高台状を呈する。

ピット出土の遺物 (第51図 3～5)

3は甕の口縁部である。口縁部は上向きで、口唇部はヨコナデのためくぼんでいる。P 88から出土した。4はP 104埋土中から出土した甕の突帯である。刻みを施している。5は甕の脚台部付近である。ハの字状に広がる脚部をもち、脚台部内面の天井部には一文字の突起が貼付しており、調整は非常に荒い。P 105埋土中より出土した。



第54図 No.17トレンチ実測図 (1/40)

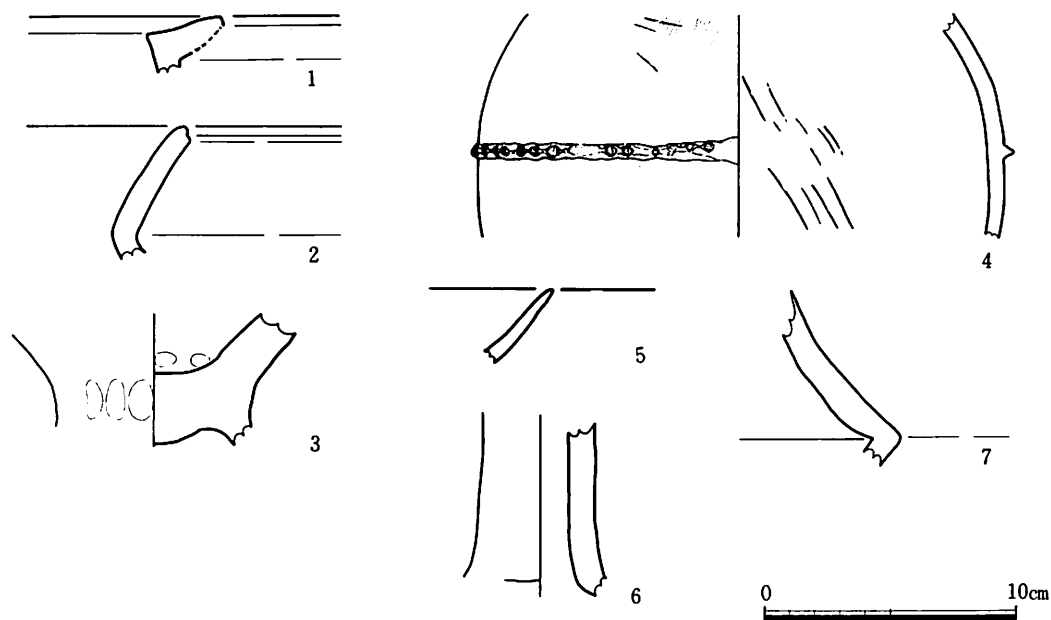
No.17トレンチはV層検出面直上まで掘削を受けていた。V層上面から土壌1基が確認できた。以下、その説明を行う。

SK3 (第54図)

平面プランは方形を呈すると考えられるが、断面は25cm程の段を1段有してさらに落ち込んでおり、検出面から床面までの深さは約65cmを測る。下段の落ち込みの平面形は円形を呈すると考えられる。埋土は2層にわかれる。上層は暗灰褐色シルトにブロック状の黒色シルトを含んでおり、フカフカである。下層は暗褐色シルトで、これもフカフカである(層位断面図中34・35図)。

出土遺物 (第55図)

1・2は甕の口縁部である。1は、少し上向きの口縁部で、内面屈曲部を上面と内面からユビオサエによって稜線を作り出している。端部はナデによって先端を平坦に仕上げている。2は、頸部がくの字状に屈曲するもので口唇部はヨコナデによって凹んでいる。3は甕の脚部である。脚台天井部は体部内面に沿って迫り出している。4は壺である。最大径付近に1条の刻み目突帯を施す。突帯は巡らした先端の接合部が認められる。刻み目はハケ目原体によるものである。5・6は高杯である。5は口縁部で、端部は若干外反する。6は、脚部である。7は、埴の胴部屈曲部である。内・外面ともに明瞭な稜線をもつ。外面には赤色顔料を施している。



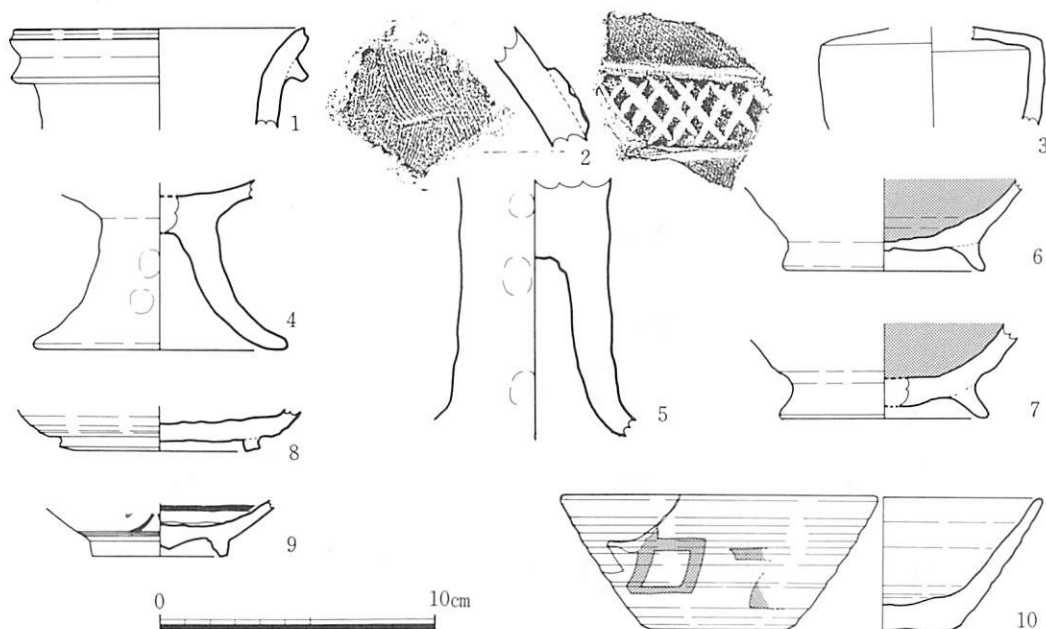
第55図 No.17トレンチ遺構出土遺物(1/3)

6. 包含層出土遺物

I層出土の遺物 (第56図)

1は壺の口縁部である。口唇部下に突帯を1条施し、2重口縁状を呈する。2は壺の胴部上部付近の突帯部である。いわゆる幅広突帯で、へら描きで格子目文を施す。3は長頸壺の肩部付近であ

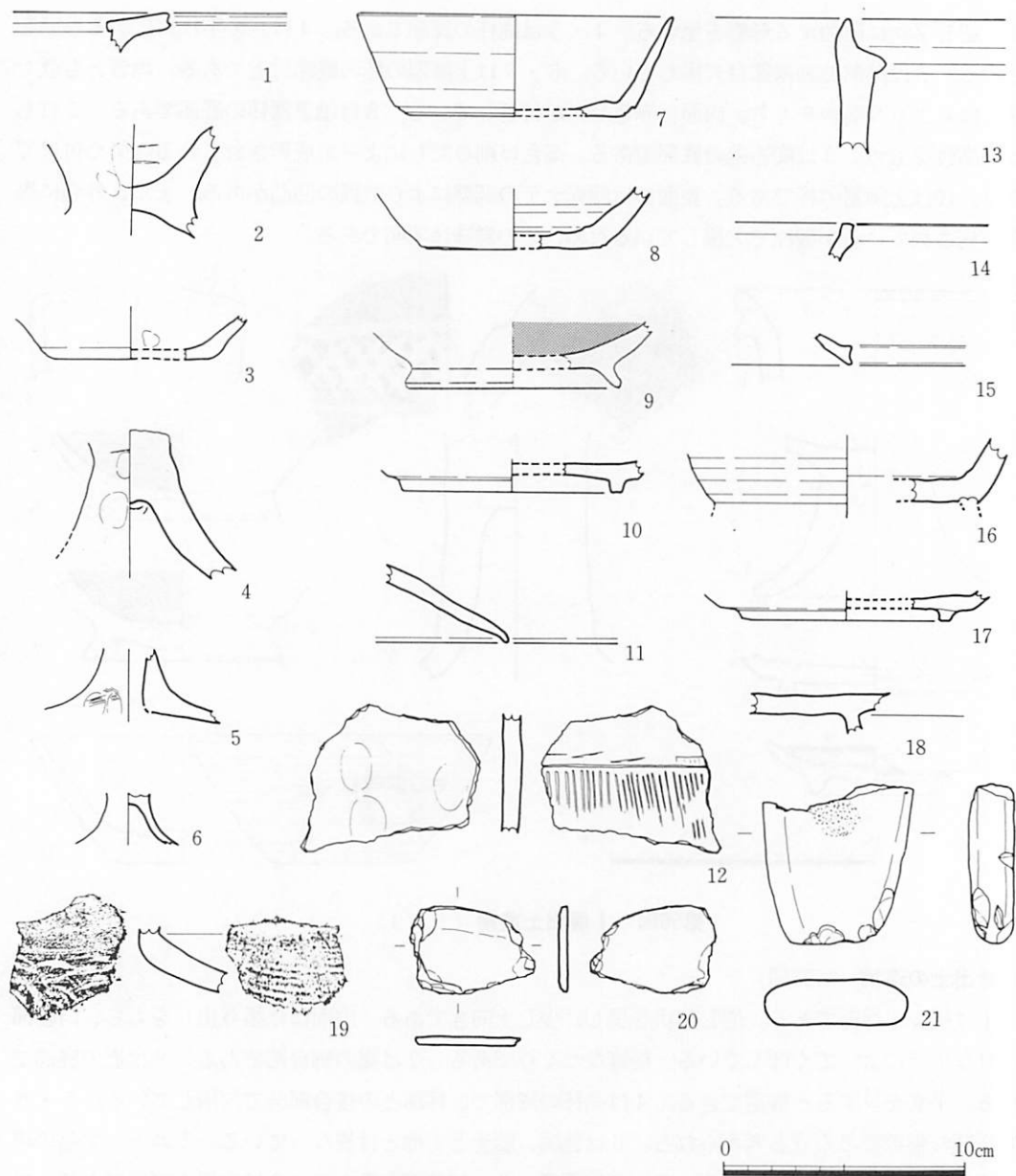
る。逆L字状に屈曲する形態を呈する。4・5は高杯の脚部である。4はハの字状に広がる形態を呈する。5は筒部で脚裾部は欠損している。6・7は土師器の杯の底部付近である。両者とも低く踏んばるような高台をもち、内面は赤色顔料が付着している。8は須恵器杯の底部である。これも低い高台をもつ。9は陶器碗の底部である。高台は削りだしによって成形されている。染め付けである。10は土師器の杯である。表面には回転ナデの調整により数段の凹凸がある。また、外面に墨書が施されているが破片で欠損しているため、その意味は不明である。



第56図 I層出土遺物 (1/3)

II層出土の遺物 (第57図)

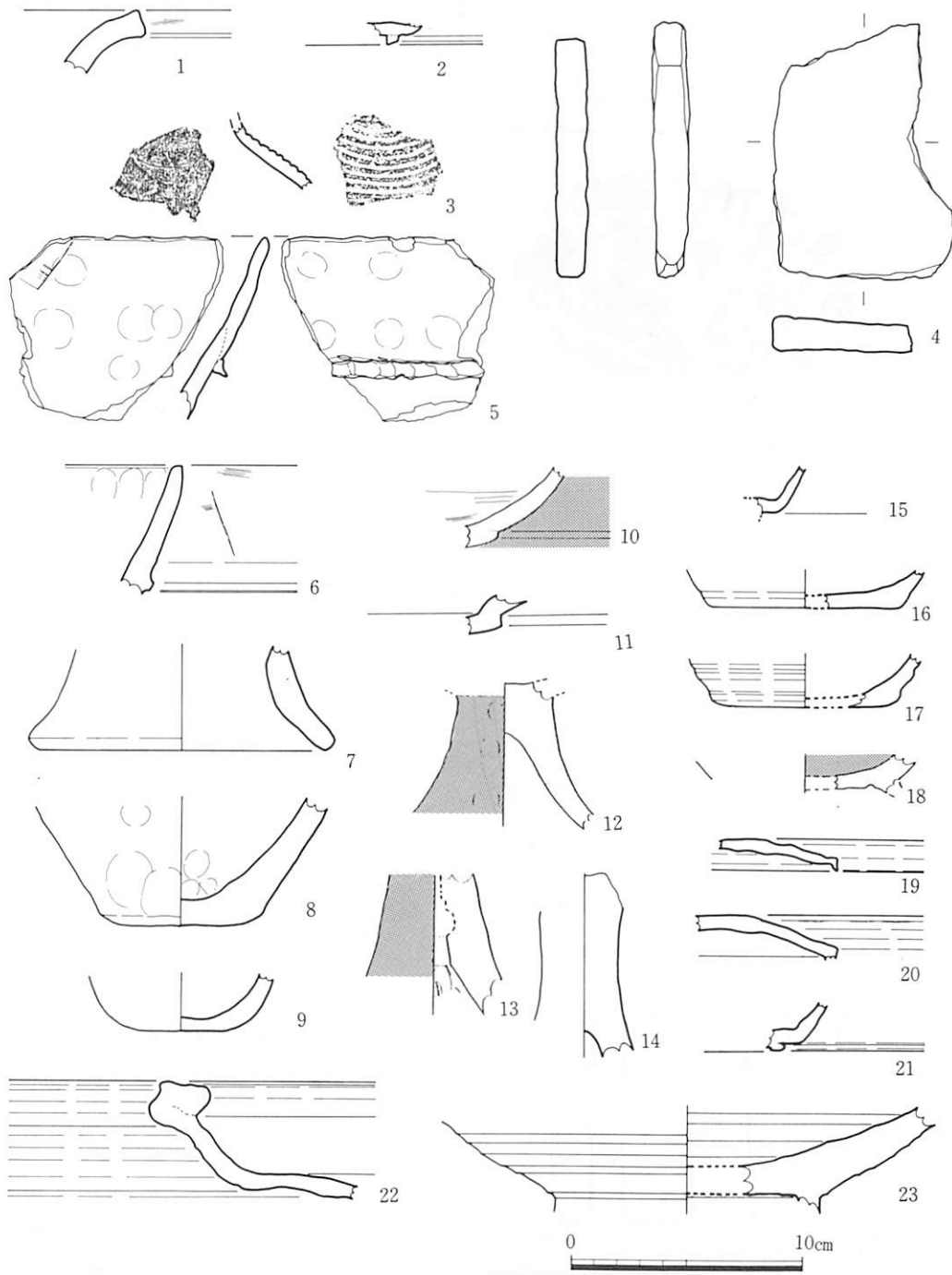
1は甕の口縁部である。逆L字状を呈し、少し上向きである。内面には張り出しをもち、口唇部はヨコナデによってくぼんでいる。粗雑な作りである。2は甕の脚台部である。3は壺の底部である。平底を呈すると推定できる。4は高杯の脚部で、杯部との接合部分で欠損している。5・6も高杯の脚部であろうと考えられる。6は色調、胎土とも他とは異なっている。ミニチュア品の可能性がある。7～10は杯である。7・8は平底、9・10は高台をもつ。9は内黒土師器である。11は土師器の蓋である。12は器種は不明であるが、横方向の細沈線を1条、その下に縦方向の細沈線を櫛描き状に施す。13～19は須恵器である。13は器種は不明だが、口縁部である。口縁部下に突帯を1条施す。14は器種は不明だが口縁部である。端部は垂直に屈曲している。15は高杯の脚部部であろう。先端が拡張している。16～18は杯の底部付近である。16は高台が欠損している。19は壺の肩部である。外面・内面ともに叩き痕が認められる。自然釉が付着している。20は扁平の石器であり、石庖丁ではないかと考えられる。21は石斧である。中央部に敲打痕が認められ、若干くぼんでいる。下部には小さな剝離面がある。



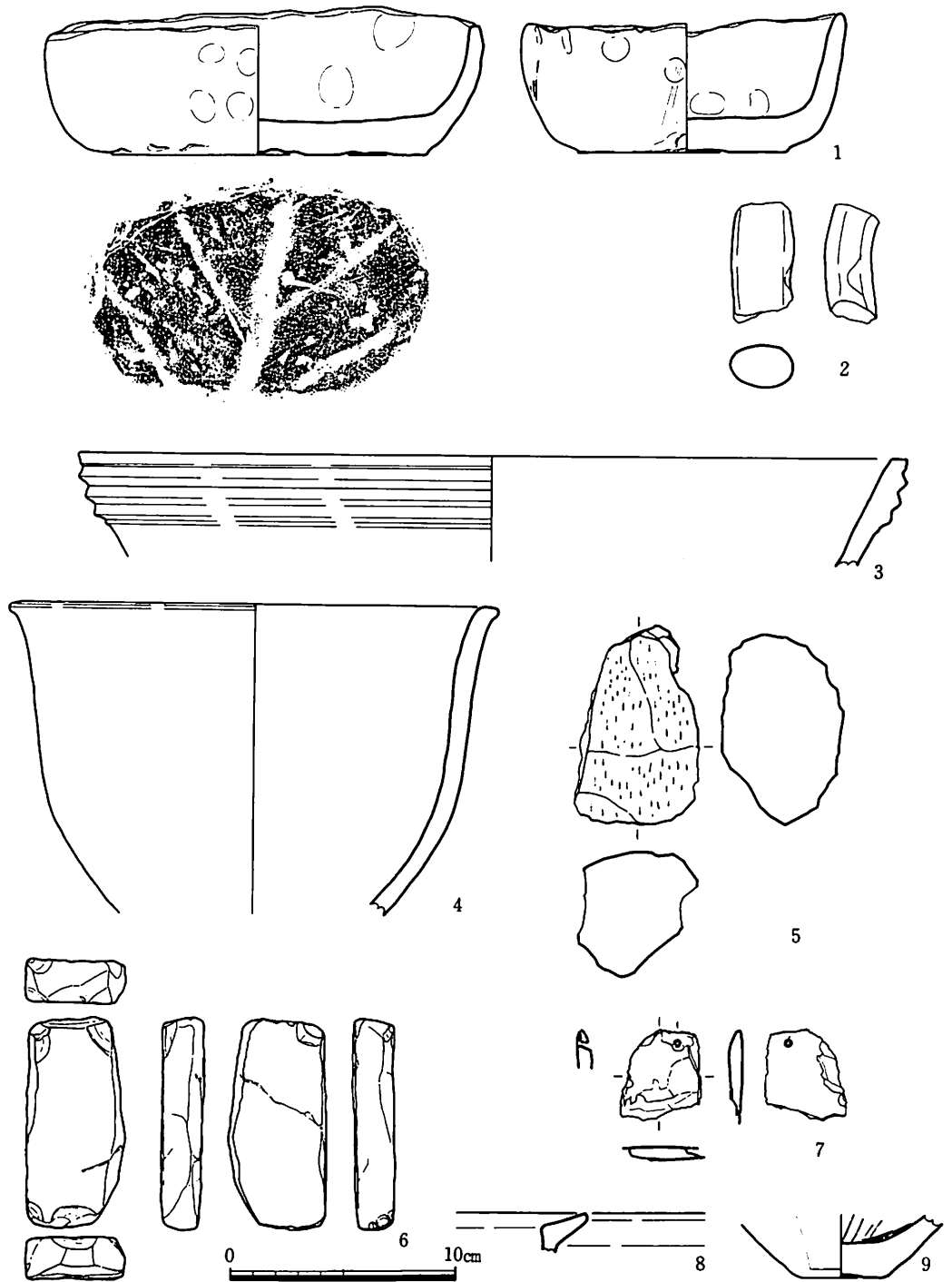
第57図 II層出土遺物 (1/3)

III層出土の遺物 (第58・59図)

1～3はIII a層、4～第59図4は3 b層から出土したものである。1は口縁部である。器種は不明だが、口唇部は拡張し、外反する口縁部である。2は須恵器杯の底部である。3は肩部に数条の沈線を横方向に施しており、免田式土器の長頸壺の肩部ではないかと考えられる。4は表面が平滑で、緩やかにくぼんでおり、砥石であると考えられる。5～7は甕である。5・6は笹貫式の口縁部で突帯を1条施している。5は絡縄突帯である。7は脚台部である。8は壺の底部である。底面



第58圖 III層出土遺物 (1/3)



第59图 III·IV层出土遗物 (1/3)

はずかにふくらみ、凸レンズ状を呈する。9は埴の底部である。外面はミガキを施している。平底である。10～14は高杯である。11は杯部で段をもつ形態を呈する。10・12は外面に、13は外面・内面ともに赤色顔料が付着している。15～17・19～21は須恵器である。15は器種は不明だが、杯の底部付近ではないかと推定できる。16～17は杯の底部である。16・17は平底で、外面には回転ナデによる凹凸が数段認められる。19・20は杯蓋である。19はかえりを持つ。20は端部を欠損しているが、同じくかえりを持つようである。21は杯の底部で、断面の丸い高台を付着している。22・23は陶器である。18は内黒土師器の底部である。高台部は欠損しているが、器種は杯であろうと考えられる。22は壺の口縁部である。頸部は内傾し、肩部が張る形態を呈する。内面には回転ナデによる凹凸が顕著である。23は逆ハの字状に外へ開く形態を呈するが、器種は不明である。欠損のため不明であるが、底部は高台をもつようである。第36図1は鉢である。平面形は隅丸方形を呈する。平底で、底面には木の葉圧痕が認められる。口縁部はユビオサエによって波打っており、非常に粗雑な作りである。2は把手の一部と考えられる。断面は楕円形を呈する。3は須恵器である。器種は不明だが、口縁部直下に3条の三角突帯を施している。4は鉢の口縁部から胴部付近である。緩やかに外反する形態を呈する。5は軽石製品である。用途は不明だが、表面に平坦な磨面が認められる。6は石鹼石条を呈する石器である。砥石であろう。7は偏平な磨製石器である。穿孔を1つ有し、石庖丁ではないかと考えられる。

IV層出土の遺物（第59図8・9）

IV層からはごく少数の遺物が出土し、その中で図示できるもののみについて説明を加える。8は甕の口縁部で、上向きである。非常に摩滅している。9は壺の底部である。底面は少し上げ底状を呈する。

7. まとめ

本調査区では、住居址・溝状遺構などの遺構と、古墳時代を中心とする遺物が出土した。遺構についてはどの遺構も床面着の遺物はなく、約20cmほど床面から浮いた状態で出土し、埋土中の遺物も破片がほとんどである。ただし、混入はあるが古墳時代の、土器様式名でいうと笹貫式の時期の遺物が大半を占めるという点から、遺構の時期は古墳時代の新しい時期であろうと考えられる。また、No.12トレンチの住居址H9から石庖丁が出土した（第21図5）が、これも埋土中出土のものである。本調査区での住居址出土の遺物をみると、混入しているものもみられるため、笹貫式の土器に伴うものなのかは不明である。ただし、鹿児島大学構内遺跡（郡元団地）においては、当該期の住居址からやはり石庖丁が出土している⁽¹⁾。これは、住居址の貼床内からの出土であり、やはり時期については確定できないが、今後類例を待って、検討する必要があるだろう。

遺構はIV層上面とV層上面検出のものがあり、前者が3・4・15・16トレンチ、後者が2・12・13・14・17トレンチで検出した。前者は遺構が切り合うのに対し、後者は比較的切り合わないという傾向がある。しかし、両者に明確な時期差は認められないようである。一方、溝状遺構と住居址はNo.13トレンチ以外では互いに切り合わず、溝状遺構が住居址に平行かそれを巡るように配置しているのが特筆できる。しかし、今回の調査はトレンチによるものであったため、どの遺構も部分的

な調査に終わり、各遺構の関係が十分に把握できなかった。そのため溝と住居址の関係も不明な点を残すこととなった。本調査区の周辺地域において当該期の遺構が教育学部附属中学校プール上屋建設予定地における発掘調査などで確認されている⁽²⁾が、このような類例はなく、今後の調査でも十分検討する必要があると考える。また、小規模な発掘調査にも関わらず住居址などの遺構が多く確認できた。これは、北側に位置する教養部・理学部一帯から本調査地点周辺まで広がる古墳時代の集落址の一部であると考えられ、周辺の当該期の多くの遺構の存在が推定できるものである。

註

- (1) 郡元団地 I・J-9・10区（理学部1号館増築地）における発掘調査で6号住居址の貼床土内から出土している。「第IV章 昭和60年度鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告 1. 郡元団地 I・J-9・10区（理学部1号館増築地）の発掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 I 昭和60年度』1986 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- (2) 「第4章 鹿児島大学郡元団地 Q-9・10区における（附属中学校プール上屋建設に伴う）発掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 V』1990 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

表1 ピット 一覧表

No	トレンチ	遺構	深さ (cm)	埋 土
1	1		22.5	黒色砂混じり砂質、シルト小粒の軽石を含む
2	1		11.4	黒色砂混じり砂質、シルト小粒の軽石を含む
3	1		17.9	黒色砂混じり砂質、シルト小粒の軽石を含む
4	1		17.4	黒色砂混じり砂質、シルト小粒の軽石を含む
5	2	H 2	32.0	黒褐色砂混じりシルト
6	2	H 2	28.0	黒褐色砂混じりシルト
7	2	H 2	29.5	黒褐色砂混じりシルト
8	2		28.5	黒褐色砂混じりシルト
9	2		14.0	黒褐色砂混じりシルト
10	2	H 5	23.0	黒褐色砂混じりシルト
11	2	H 4	20.0	黒褐色砂混じりシルト
12	3		28.0	黒褐色砂混じりシルト
13	3		5.0	黒色シルト質砂
14	3		4.0	黒色シルト質砂
15	3		14.0	黒色シルト質砂
16	3		18.0	暗褐色砂混じりシルト
17	3		26.0	黒色シルト
18	3		8.0	黒褐色シルト
19	3		10.0	黒褐色シルト
20	3		49.0	黒色シルト、軽石を含む
21	3		7.0	黒褐色シルト
22	3		6.0	黒色シルト
23	3		6.0	暗褐色砂質シルト
24	3	H 6	32.0	黒褐色砂混じりシルトと褐色粘質土との混土
25	3	H 6	16.0	黒褐色砂混じりシルトと褐色粘質土との混土
26	3	H 6	25.0	黒褐色砂混じりシルトと褐色粘質土との混土
27	4		8.0	黒色シルト質砂
29	4		14.0	黒色シルト質砂
30	4		6.0	黒色シルト質砂
31	4		8.0	黒色シルト質砂
32	4		5.0	黒色シルト質砂
32	4		30.0	黒色シルト質砂
33	4		7.0	黒色シルト質砂
34	4		26.0	黒色シルト
35	4	H 7	10.0	黒色シルト
36	4	H 7	20.0	黒色シルト
37	4	S D 3	3.0	黒色シルト
38	4	S D 3	44.0	黒色シルト
39	4	S D 3	37.0	黒色シルト
40	5		9.0	黒褐色砂混じりシルト質砂
41	5		13.0	黒褐色砂混じりシルト質砂
16	6		9.0	黒色シルト質砂
17	6		23.0	黒色シルト質砂
18	6		17.0	黒色シルト質砂
19	6		9.0	暗褐色砂混じりシルト質砂
32	6		9.0	黒色シルト質砂
45	6		9.0	黒色砂混じりシルト質砂
42	7		30.0	黒色砂質シルト
43	7		4.0	黒色砂質シルト
44	7		16.0	黒色砂質シルト
51	9		3.0	黒褐色砂質シルト
52	9		26.0	黒褐色砂質シルト
53	9		49.0	黒褐色砂質シルト

No	トレンチ	遺構	深さ (cm)	埋 土
54	9		23.0	黒褐色砂質シルト
55	9		17.0	黒褐色砂質シルト
56	9		49.0	黒褐色砂質シルト
57	9		7.0	黒褐色砂質シルト
58	9		16.0	黒褐色砂質シルト
59	9		19.0	黒褐色砂質シルト
60	9		48.0	黒褐色砂質シルト
61	9		7.0	黒褐色砂質シルト
62	9		38.0	黒褐色砂質シルト
63	9		44.0	黒褐色砂質シルト
64	10		41.0	黒褐色砂混じりシルト
65	11		48.0	黒褐色砂混じりシルト
66	11		33.0	黒色砂混じりシルト
67	11		25.0	黒色砂混じりシルト
68	11		13.0	黒色砂混じりシルト
69	11		17.0	黒色砂混じりシルト
70	11		6.0	黒色砂混じりシルト
71	11		22.0	黒色砂混じりシルト
72	12	H 9	35.0	黒色砂混じりシルト
73	13		8.5	黒色砂混じりシルト
74	13		17.0	黒色砂混じりシルト
75	13		35.0	黒色砂混じりシルト
76	13	H 10	37.0	黒色砂混じりシルト
77	13	H 10	36.0	黒色砂混じりシルト
78	13	H 10	31.0	黒色砂混じりシルト
79	13	H 11	44.0	黒色砂混じりシルト
80	14		24.0	黒褐色砂混じりシルト
81	14		9.0	黒褐色砂混じりシルト
82	14		53.0	黒褐色砂混じりシルト
83	14		12.0	黒褐色砂混じりシルト
84	14		10.0	黒褐色砂混じりシルト
85	14		12.0	黒褐色砂混じりシルト
86	15		26.5	黒褐色シルト質砂にIV層土混じり
87	15		24.0	黒褐色シルト質砂にIV層土混じり
88	15		16.0	黒褐色シルト質砂にIV層土混じり
89	15		43.0	黒褐色シルト質砂にIV層土混じり
90	15		49.0	黒褐色シルト質砂にIV層土混じり
91	15		11.0	黒褐色シルト質砂にIV層土混じり
92	15		12.0	黒褐色シルト質砂にIV層土混じり
93	15		41.0	黒褐色シルト質砂にIV層土混じり
94	15		7.0	黒褐色シルト質砂にIV層土混じり
95	15		3.0	黒褐色シルト質砂にIV層土混じり
96	15		7.0	黒褐色シルト質砂にIV層土混じり
97	15		3.0	黒褐色シルト質砂にIV層土混じり
98	15		12.0	黒褐色シルト質砂にIV層土混じり
99	15		6.0	黒褐色シルト質砂にIV層土混じり
100	15		3.0	黒褐色シルト質砂にIV層土混じり
101	15		30.0	黒褐色シルト質砂にIV層土混じり
102	15		24.0	黒褐色シルト質砂にIV層土混じり
103	15		13.0	黒褐色シルト質砂にIV層土混じり
104	15		13.0	黒褐色シルト質砂にIV層土混じり
105	15	H 15	27.0	黒色シルト、軽石の小粒混じり
106	15	S D 6	5.0	黒褐色シルト質砂
107	15	S D 6	10.0	黒褐色シルト質砂
108	15	S D 6	6.0	黒褐色シルト質砂
109	15	S D 6	4.0	黒褐色シルト質砂
110	16		27.0	黒褐色シルト
111	16		5.0	黒褐色シルト
112	16		15.0	黒褐色シルト
113	16		8.0	黒褐色シルト

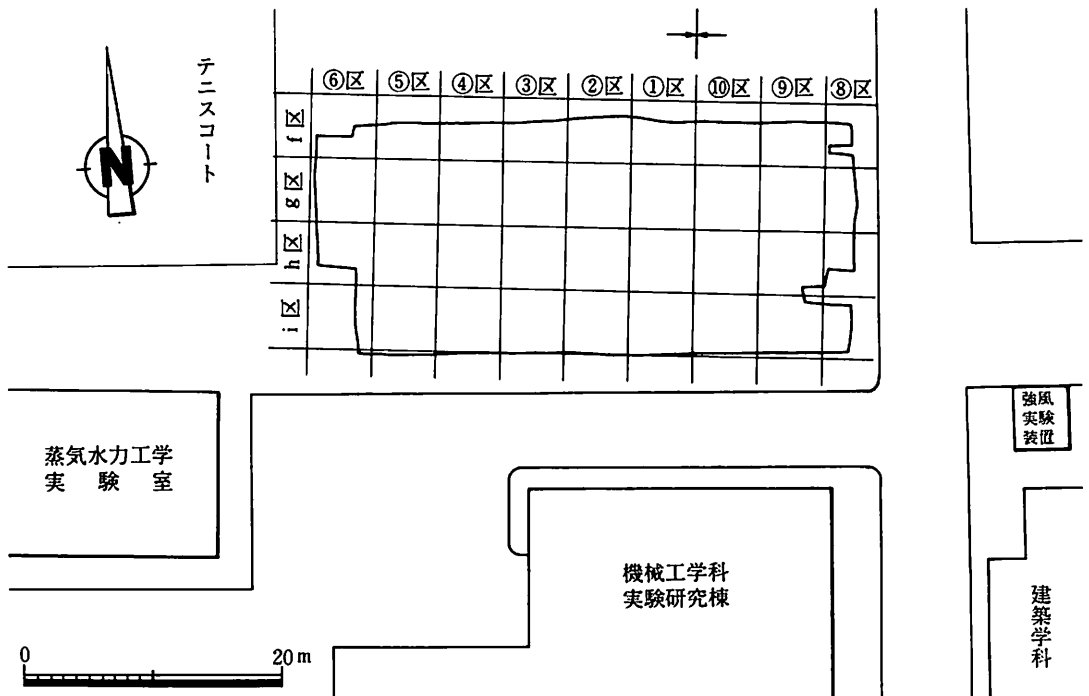
II. 鹿児島大学郡元団地H-11・12区（工学部情報工学科 校舎建設予定地）における発掘調査報告

1. 調査に至る経過

鹿児島大学工学部では平成元年4月に情報工学科を新設し、平成2年10月には同学科専攻性を学部へと迎えている。これに伴い新校舎の建設が計画され、建設地として機械工学科実験研究棟北側空地が選ばれた。

同予定地の東約100mに位置する情報処理センター、及び南に隣接する工学部機械工学科実験研究棟は、その建設に伴う事前の発掘調査によって、それぞれ古墳時代以降を中心とする遺構・遺物が検出されている。このため埋蔵文化財調査室では本予定地において埋蔵文化財包蔵の有無の確認を目的とし、平成2年3月22日から同30日にかけて試掘調査を実施したが、この結果、中近世の土師器・須恵器や陶磁器を埋土に含む河川痕の存在を確認することができた⁽¹⁾。

以上の調査結果から、新校舎の建設にあたっては、建設予定地において、事前に埋蔵文化財発掘調査を行うこととなり、下記の体制で、平成2年12月6日から平成3年3月19日にかけて本調査を実施した。



第60図 調査地点位置図 (1/600)

調査主体者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室長 上村俊雄

調査担当 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

室長 上村俊雄

室員 松永幸男・中村直子・栗林文夫・黒木綾子

発掘調査作業員

安部松イツコ・石谷キヨコ・石谷サチコ・石谷トキエ・岩戸エミコ・請園アキエ・請園チリ・上床クミコ・大平カナエ・大平ヤスコ・岡崎カオル・何艶・坂口ミエコ・寺光ミツコ・末吉フクエ・末吉ミヤ・諏訪田フサエ・田中ヨシ・中原チツコ・名越ヒデコ・西村チエコ・野下マリコ・野下ヨシエ・野下ヨブコ・林キヨコ・福永シノブ・福永ハナエ・牧島トモコ・増満ミエコ・松下ミチ・盛満アイコ・横山アヤコ

2. 調査の経過

調査にあたっては、まず試掘調査結果をもとに表土を重機によって除去し、その後、郡元団地の構内座標に従ってグリッドを設定した。本調査区は構内座標の50m方区では、H-11区とH-12区とに跨ることになり、このため5m方区は東西方向には、東から順に⑧・⑨・⑩・①・②・・・⑥区と呼称されることとなった。また、南北方向は北から順に、f・g・h・i区と呼称している(第60図)。

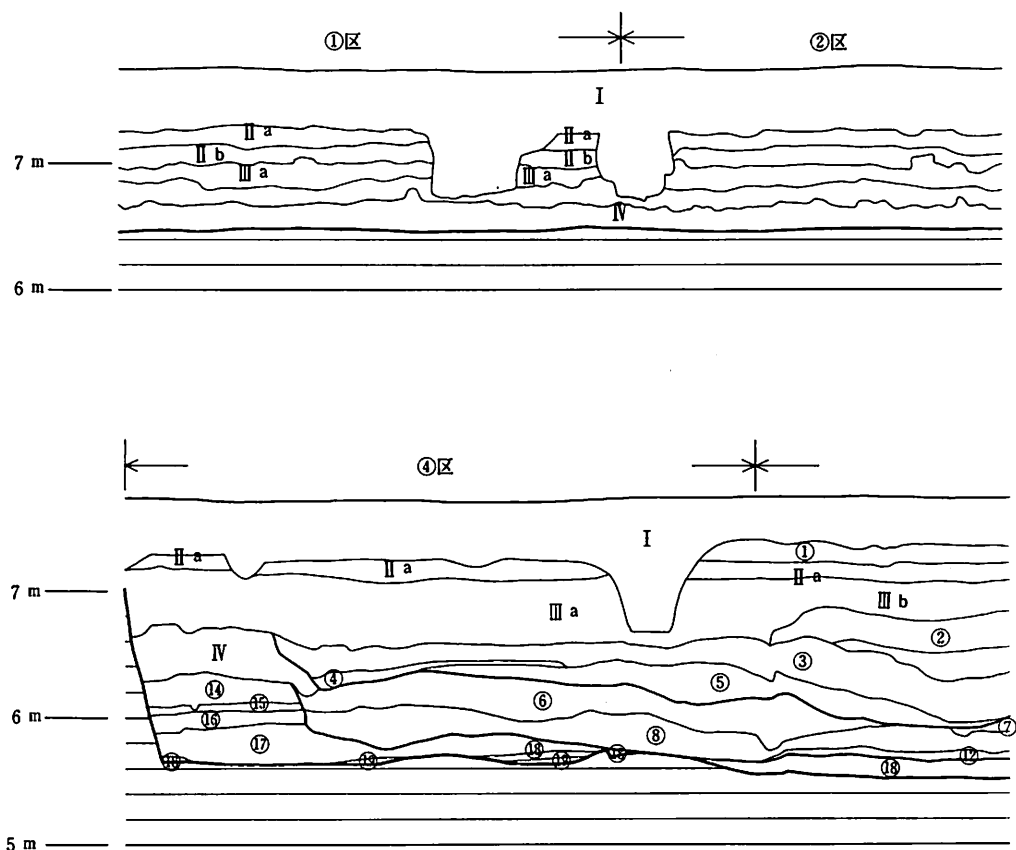
掘り下げにあたっては、南北方向に二本、東西方向に一本、土層観察用ベルトを残すこととしたが、調査が進むにつれ自然河川の流路が東西方向に向きをとることが明かとなったため、同方向のベルトを除去することとした。また、調査区東端の幅4mほどの部分は南北方向に現在利用中の汚水管やガス管等が密に敷設されており、以後の掘り下げを断念することとなった。

本調査区は、調査時には空地となっていたが、昭和55年ぐらまでは、木造の実験室や実験工場が8棟ほど建ち並んでいた地域である。表土を除去した直下には、これらの基礎であったと思われる塊石を充填した土壌や柱穴、さらに建築材や瓦を含む大量の塵を埋めた穴が検出されている。

今回の調査では、以上の現代の所産である遺構の他に、遺物を多量に包含した自然河川痕を検出している。表土を除去した時点で、既に一部では河川埋土と思われる粗砂が顔を覗かせていたが、包含層の掘り下げが進むにつれ、西北西から東南東方向の流路と、西南西から東北東方向の流路とが、前者が後者に重なる形で検出された。このため、前者を河1、後者を河2とした。

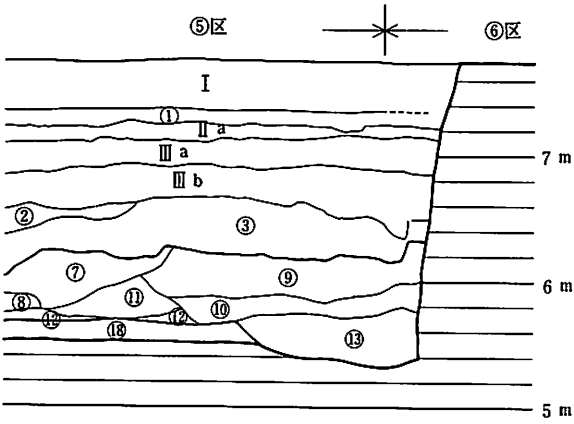
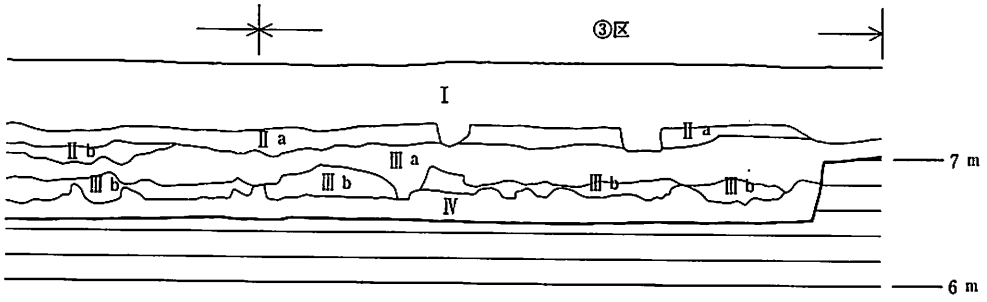
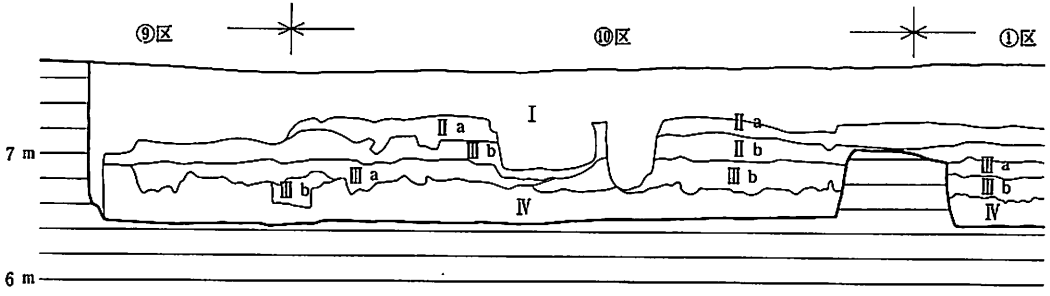
当初、河1については、その北岸が調査区外に存在するものと考え、河1の北側に既に露出していた河2の埋土まで連続的に掘り下げてしまい、このため土層の観察によって北岸を確定することとなった。河2は、調査区中央部付近でその流れを変え、東半部においては、流路の方向を河1のそれとほぼ同じくする。土層の観察によると、河2には4期以上の流れを認めることができるが、残念ながら、今回の調査時においては、このうちのIV a層上面とV層上面とで確認した二期分についてのみ確認し得ただけであった。IV層上面においては、さらに、h・i-④～⑥区において河3とした南北に流れる自然河川痕が検出され、これについても新古二期の河川の存在を認めることができた。これらの河川痕はいずれも河底までかなり深く、大量の埋土の掘り下げ・排出に多大な時

- | | |
|------------------------------------------------|--------------------------|
| ① 淡濁褐色砂混じり砂質シルト層 | ⑩ 淡灰白色砂層 (軽石礫を含む) |
| ② 淡灰白褐色砂混じり粘質土層 | ⑪ 褐色粗砂層 (黒色薄砂層を含む) |
| ③ 灰白色～淡褐色の砂層 (上部は砂質シルトに近い) | ⑫ 淡褐～白色粗砂層 (5mm大弱の小石も含む) |
| ④ 明白褐色細砂混じりシルト層 (鉄分を含む) | ⑬ 淡褐～白色粗砂層 (黒色の砂を部分的に含む) |
| ⑤ 淡灰白褐色細砂層 (上部に茶褐色のマンガンを含み、部分的に明褐色を呈する) | ⑭ 灰褐色粘土層 (硬質) |
| ⑥ 灰白色砂混じり粘土 (⑩層土をブロック状に含む) | ⑮ 黄白色粘土層 (基本土層VI層に酷似する) |
| ⑦ 褐色砂層 (上部は細砂、中部は2～5mm大の小石、下部は褐色砂に黒色砂の薄層が含まれる) | ⑯ 黒灰色砂混じり砂質シルト層 (軽石を含む) |
| ⑧ 灰白色の砂混じり粘質シルト層 (⑩～⑭層土がブロック状に含まれる) | ⑰ 暗灰褐色粗砂層 (小粒の軽石を含む) |
| ⑨ 褐色粗砂層 (軽石礫を多数含む) | ⑱ 黒褐色粘質シルト層 |
| | ⑲ 黒灰色粘土層 |

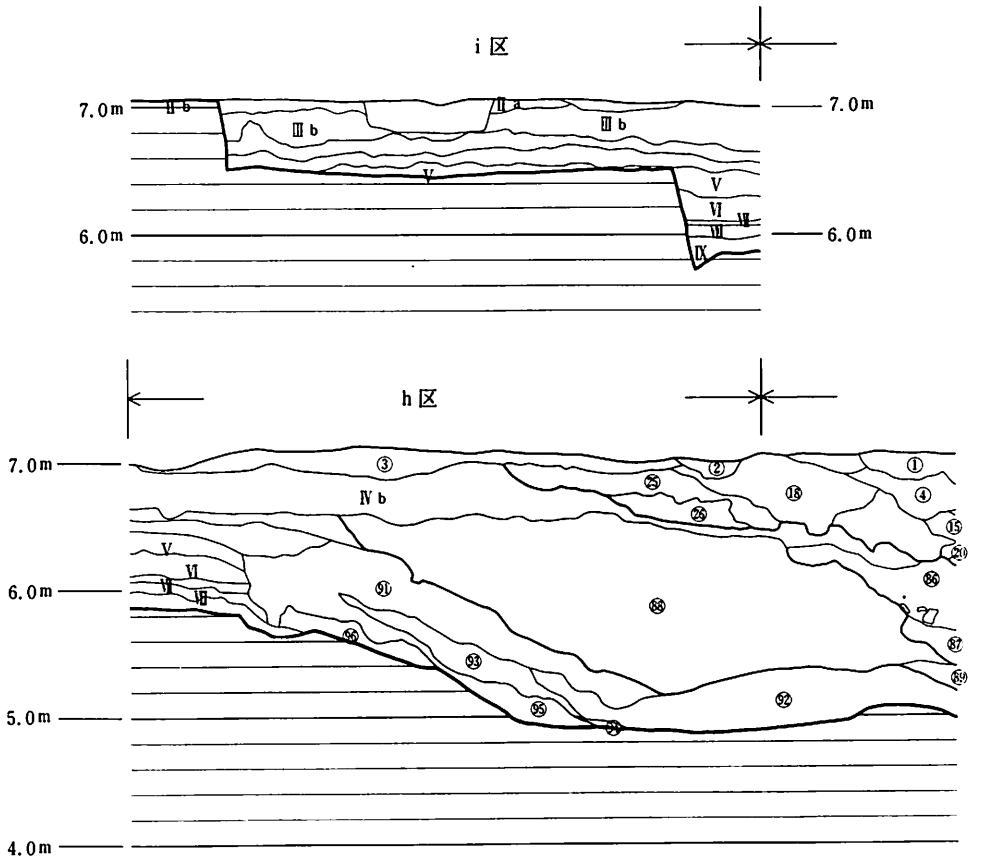


- ※ 土層図中のローマ数字は基本土層を示す。
 ※※ 土層図横の数値は海拔高である。

第61図 調査区南壁土層図 (1/60)



- ① 淡褐色粗砂層 (軽石礫を含む)
- ② 淡褐色砂層
- ③ 淡褐色粗砂層 (1cm前後の軽石を含む)
- ④ 濁灰色砂層
- ⑤ 白色～淡褐色粗砂層 (上部に2～3cm大の軽石からなる層をもつ)
- ⑥ 淡褐色粗砂層
- ⑦ 淡褐色～白色粗砂層
- ⑧ 5層と同じ
- ⑨ 淡褐色砂層
- ⑩ 7層とほぼ同質であるが、黒色の白砂層を含んでいる
- ⑪ 灰褐色粗砂層
- ⑫ 淡褐色～白色粗砂層
- ⑬ 淡褐色～白色粗砂層
- ⑭ 淡褐色粗砂層
- ⑮ 11層とほぼ同質 (色調が若干褐色味が強い)
- ⑯ 灰色～白色の粗砂層
- ⑰ 11層と同じ
- ⑱ 濁灰色の砂混じり砂質シルト層
- ⑲ 灰色砂混じり砂質シルト層
- ⑳ 明褐色粗砂層 (下半部は淡灰白色の2～3cm大の軽石粒からなる)
- ㉑ 淡濁灰色砂混じり砂質シルト層
- ㉒ 濁灰色砂混じりシルト層
- ㉓ 灰色粗砂層
- ㉔ 淡褐色～白色の粗砂層 (灰色の砂混じり砂質シルトをブロック状に含む)
- ㉕ 淡濁褐色粗砂層 (1cm前後の軽石粒をブロック状に含む)
- ㉖ 灰褐色砂混じりシルト層
- ㉗ 褐色砂層 (粗砂と細砂からなり、部分的に5～10cm大の軽石礫を含む)
- ㉘ 褐色粗砂層
- ㉙ 濁褐色砂と灰色砂質シルトの混土
- ㉚ 淡褐色粗砂層 (黒色の1cm大の小石を多数含む。5～10cm大の軽石礫を含む)
- ㉛ 淡褐色粗砂層 (30層より若干色が淡い。30層と異なり、小石や軽石礫は含まない)
- ㉜ 淡褐色粗砂層
- ㉝ 淡褐色粗砂層 (31層とほぼ同質であるが、若干色調が暗い)
- ㉞ 淡褐色粗砂層 (32層とほぼ同質であるが、色調が白色味を帯びる)
- ㉟ 淡褐色粗砂層 (径1～2mmの黒色石粒を含む)
- ㊱ 淡褐色粗砂層 (表面に黒色の付着物のある小石が薄い層をなして入っている)
- ㊲ 淡褐色粗砂層 (表面に黒色の付着物のある小石が薄い層をなして入っている)
- ㊳ 淡褐色粗砂層
- ㊴ 灰白色粗砂層
- ㊵ 淡濁灰色砂層 (表面に黒色の付着物の認められる軽石の細粒をブロック状に含む)



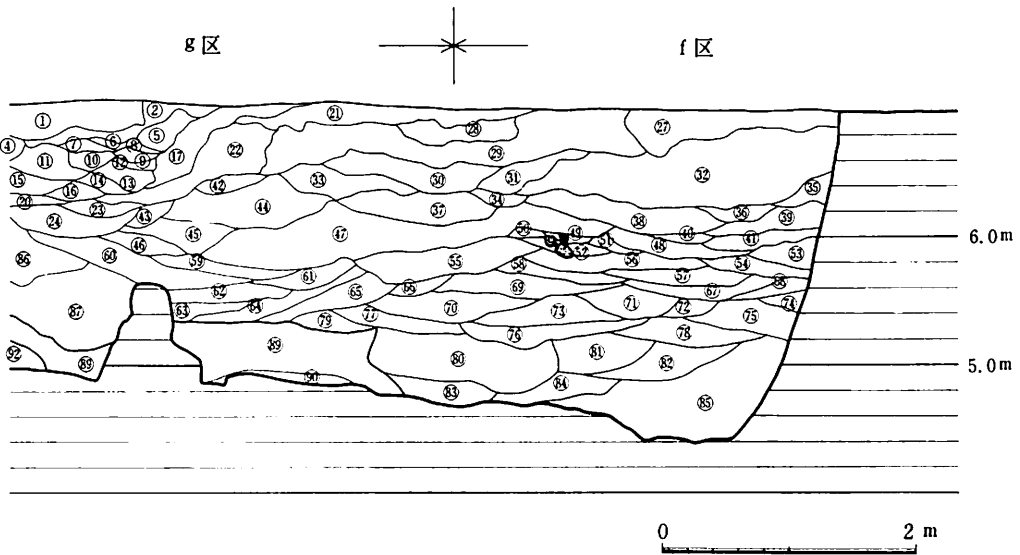
※ 土層図中のローマ数字は基本土層を示す。
 ※※ 土層図横の数値は海拔高である。

第62図 f～i-⑩区西壁土層図 (1/60)

間を費やすこととなった。しかし、これらの埋土中には多数の遺物が包含されており、多くの貴重な資料を得ることができた。

- ④① 灰白色砂層 (39層より砂粒が若干大きめ)
- ④② 淡褐色～白色の粗砂層 (灰色の砂混じり砂質シルトをブロック状に含む)
- ④③ 淡濁褐色粗砂層
- ④④ 淡褐色粗砂層 (軽石礫を下部に含む)
- ④⑤ 黒色の1cm前後の小石を含む淡褐色粗砂層 (軽石礫を含む)
- ④⑥ 淡灰褐色砂層
- ④⑦ 淡濁褐色～白色の粗砂層 (1～10cm大の軽石礫を含む。黒色の1～2cm大の小石を層状に含む)
- ④⑧ 淡濁褐色～白色粗砂層 (黒色の薄砂層が入る)
- ④⑨ 淡灰白色粗砂層
- ④⑩ 淡灰白色粗砂層
- ④⑪ 淡白褐色粗砂層
- ④⑫ 淡褐色粗砂層
- ④⑬ 淡白褐色砂層 (10cm大の軽石礫を含む。黒色の薄砂層を含む)
- ④⑭ 淡灰白色～淡濁褐色粗砂 (淡灰白色砂層を含む)
- ④⑮ 明褐色粗砂層 (0.5～1cm大の石粒を多数含む。5～10cm大の軽石礫も含む)
- ④⑯ 褐色～暗褐色粗砂層 (1cm前後の石粒を多数含む)
- ④⑰ 淡明褐色砂層 (黒色薄砂層を含む)
- ④⑱ 57層にはほぼ同じ (黒色薄砂層の入る方向が違う)
- ④⑲ 淡褐色～白色の粗砂層 (黒色の薄砂層を含む)
- ④⑳ 淡灰白色粗砂層
- ④㉑ 褐色粗砂層 (黒色の薄砂層を数枚含む)
- ④㉒ 褐色粗砂層 (黒色の5cm前後の小石を多数含む。淡灰褐色の粘質シルトのブロックを含む)
- ④㉓ 褐色粗砂層 (下部に軽石礫を含む。85層と同質)
- ④㉔ 褐色粗砂層 (61層とはほぼ同質。色調が褐色味を帯びている)
- ④㉕ 黒色の1cm大の小石を多数含む褐色粗砂層 (軽石礫を含む)
- ④㉖ 淡褐色粗砂層 (黒色と白色の薄砂層を数枚含む)
- ④㉗ 暗濁褐色～褐色粗砂層 (黒色の小石を多数含む)
- ④㉘ 1cm大の褐色小粒軽石からなる層 (おそらく鉄分が付着したのか。軽石礫も含む)

- ④㉙ 白色～淡褐色粗砂層 (黒色の薄砂層が数枚含まれる)
- ④㉚ 褐色の1cm大の軽石礫と白色粗砂層からなる互層 (1～2cm大の小石を部分的に含む)
- ④㉛ 1～2cm大の小石を多量に含む濁褐色粗砂層 (20cm大の軽石礫を1個含む)
- ④㉜ 白色粗砂層 (黒色薄砂層を含む。10cm大の軽石礫を含む)
- ④㉝ 白色～褐色の粗砂層 (5cm大の軽石を含む)
- ④㉞ 白色粗砂層
- ④㉟ 濁褐色～白色粗砂層 (1cm前後の小石を含む)
- ④㊱ 白色粗砂層 (一部褐色を帯びる部分もある)
- ④㊲ 淡濁褐色砂層 (1cmほどの軽石をブロック状に含む)
- ④㊳ 褐色粗砂層 (1cm前後の石を薄い層状に含む)
- ④㊴ 褐色粗砂層 (部分的に灰色砂層を含む。黒色砂も若干含む)
- ④㊵ 1～20cm前後の軽石礫を多量に含む粗砂層 (1cm前後の小石も含み。部分的に軽石礫で構成される)
- ④㊶ 褐色粗砂層 (黒色砂を層状に含む)
- ④㊷ 1cm前後の小石を多量に含む粗砂層
- ④㊸ 1cm前後の小石からなる層 (粗砂をまじえる)
- ④㊹ 褐色粗砂層 (部分的に1cm前後の小石からなるところがある)
- ④㊺ 淡褐色～白色粗砂層
- ④㊻ 淡褐色～淡灰白色砂層(Ⅲb層土をブロックとして最下部に含む。軽石礫も若干含む)
- ④㊼ 褐色粗砂層
- ④㊽ 淡灰褐色砂層 (下半部には暗灰色の粘質シルトの薄層を数枚含む)
- ④㊾ 灰色砂層
- ④㊿ 白色粗砂層 (黒色砂をまじえる)
- ⑤① 暗灰色粘質シルト層 (植物遺存帯を含む)
- ⑤② 暗濁灰色～暗灰色砂層
- ⑤③ 暗灰白色砂層
- ⑤④ 明褐色砂層
- ⑤⑤ 膏灰色砂混じり粘質シルト層
- ⑤⑥ 暗膏灰色粘質シルト層 (基本土層Ⅳ・Ⅴ層が落ち込んだもの)



包含層の掘り下げは、河川部分の掘り下げとはほぼ平行し、その肩部分を破壊しない範囲で取りあえず進めた。遺物の出土はⅢ層の下部からⅣ層にかけて最も多くみられ、特にⅣ層は成川式土器の単純な包含層とみなして良いと考えられる。

なお、調査期間中、宮崎大学農学部藤原宏史教授にプラント・オパール分析資料の採取をお願いした。この資料の分析結果については、本章第6節に掲載している。

3. 基本土層

既述のように、本調査区においては、表土を除去すると、北側では自然河川の埋土である砂層が露出した。このため、自然堆積層が残存する南半部において、基本土層の堆積を観察した。観察は、i-⑩区南壁、及びf~i-⑩区西側に設けた土層観察用トレンチによって行った。この結果、基本土層として12層を認めることとなったが、このうちのⅢa~Ⅳb層から主として遺物が出土している。特に、Ⅳa・Ⅳb層は成川式土器を多数出土しており、その単純層と考えられる。また、Ⅰ層・Ⅲb層・Ⅳb層についてはプラント・オパール分析によって、水田址である可能性が指摘されている。

以下、基本土層を上から順に説明するが、自然河川の埋土に相当する層については、各層の説明を土層図中に付記している（第61・62図）。

Ⅰ 層：客土

Ⅱa層：明褐色砂混じりシルト層（灰色シルトを混じえる。）

Ⅱb層：灰色砂混じりシルト層（鉄分の浸透が見られ、部分的に暗褐色味を帯びる。）

Ⅲa層：明茶褐色砂混じりシルト層（小粒の軽石を少量含む。）

Ⅲb層：灰白色砂混じりシルト層（鉄分の浸透が見られ、部分的に褐色味を帯びる。また、径1cm大ぐらいの軽石を多数含む。）

Ⅳa層：濁灰色砂質シルト層（硬くしまっており、鉄分の浸透が顕著である。）

Ⅳb層：濁灰色砂質シルト層（硬くしまっており、Ⅳa層よりも褐色味が強い。）

Ⅴ 層：暗灰色粘質土層

Ⅵ 層：淡褐色砂層（粗砂や軽石小粒を含む細砂層である。）

Ⅶ 層：淡褐色粘土層

Ⅷ 層：黒灰色砂質シルト層（粘質である。）

Ⅸ 層：淡濁灰白色細砂層

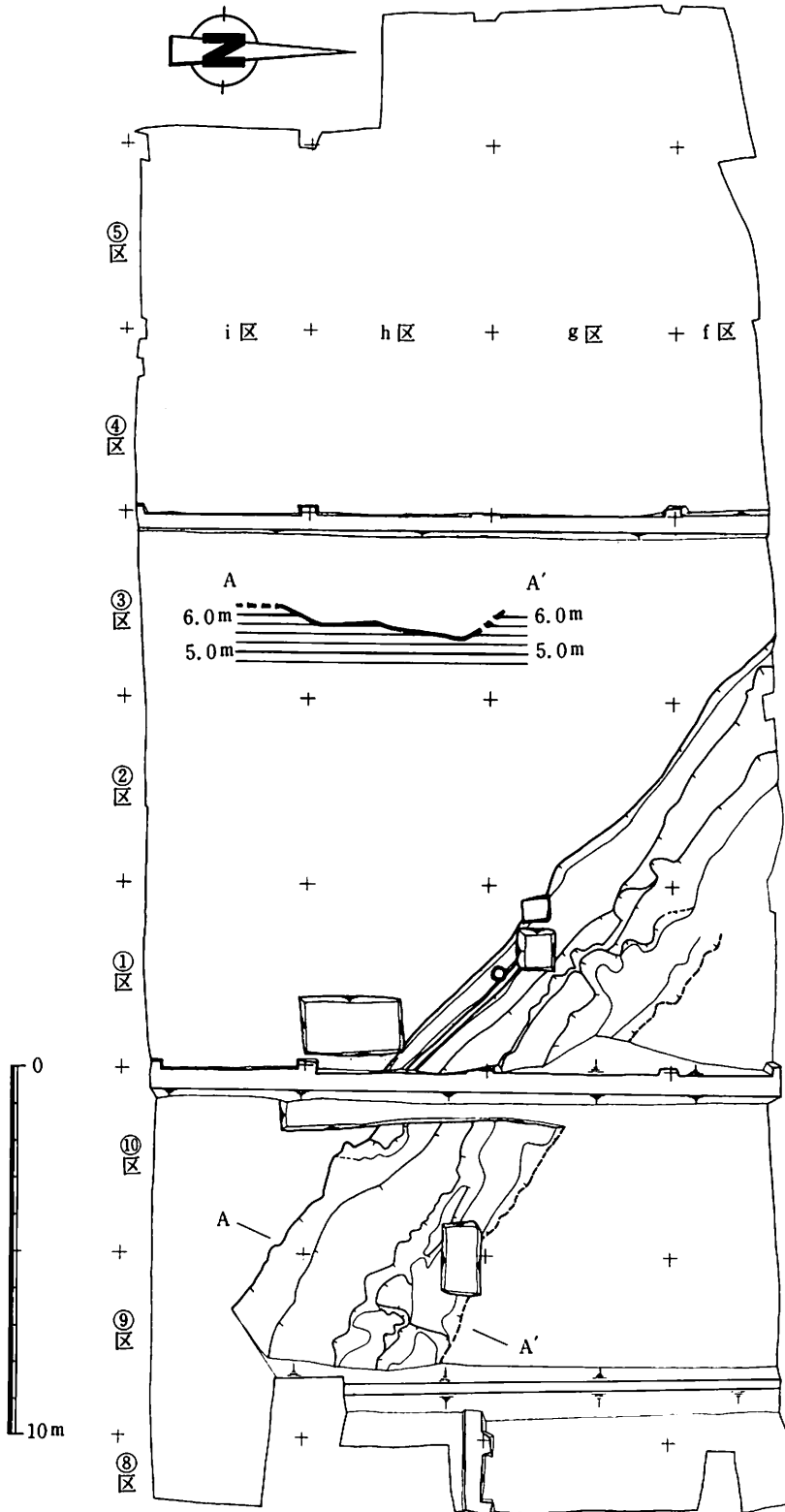
X 層：粗砂層

4. 遺構と遺構出土遺物

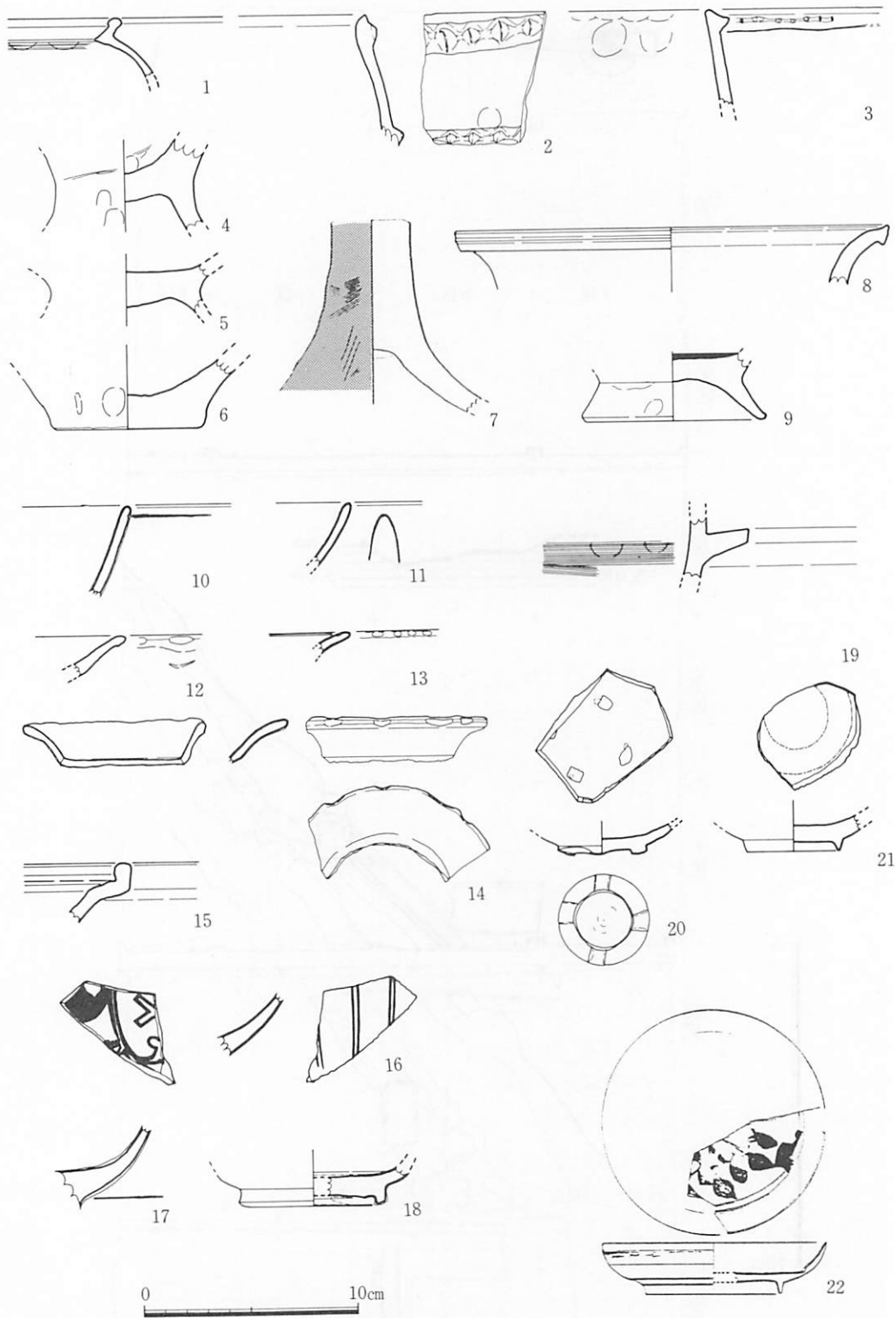
今回の調査においては、表土直下から鹿児島大学工学部の木造校舎の基礎をなしたであろうと考えられる塊石を多数入れた土塊と、これに関連すると思われる南北方向に並ぶピット列、そして、塵捨ての穴を検出した他は自然河川の痕を検出したのみであった。自然河川には大きく三つの流路方向がみられ、検出順に1・2・3の番号を付している。このうち、河2については4期以上の、河3については2期以上の変遷が想定される。以下、河1・2・3の順に説明を行う。

河1（第63図）

河1は、f-③区からi-⑨区へとほぼ直線的に伸びる自然河川で、検出面から川底までの深度は約1.1mほどである。先述のように、河1埋土の掘り下げにあたっては、河1の北岸の位置を調査区外に想定していたため、平面的に北岸を検出することはできなかった。埋土は全体的に灰褐色味を帯びており、その下部にはほぼ同じレベルに同一個体の播鉢片が出土し、やはりこのレベル付



第63图 河1 实测图 (1/200)



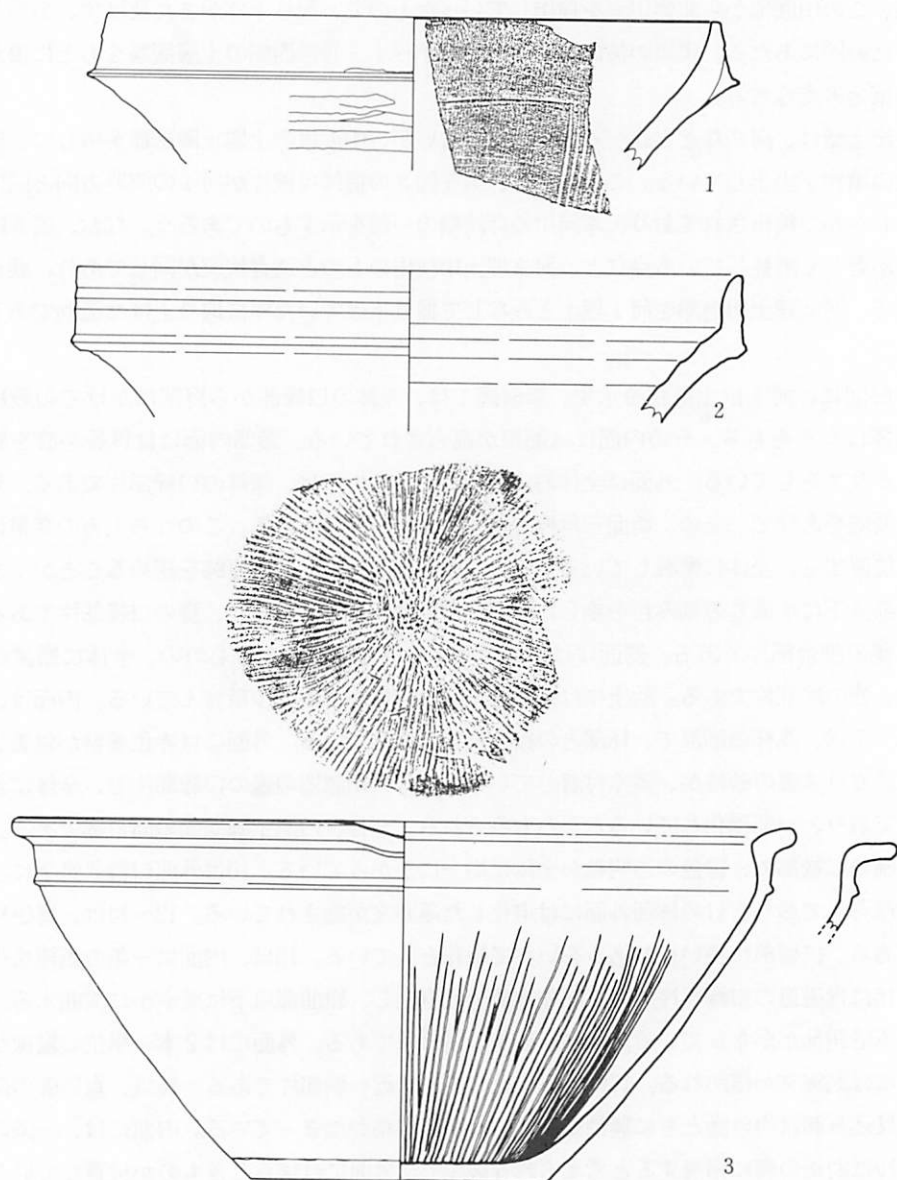
第64图 河1出土遺物(1) (1/3)

近が川底であったことを示しているものと考えられる。なお、第4図中に破線で示している北岸のラインは、この川底部から北側川岸を検出していったもので、掘り下げがまだ及ばず、辛うじて残存していた範囲にあたる。実際の検出面での幅は、f～i-⑩区西側の土層観察をもとに復元すると、約6mと考えられる。

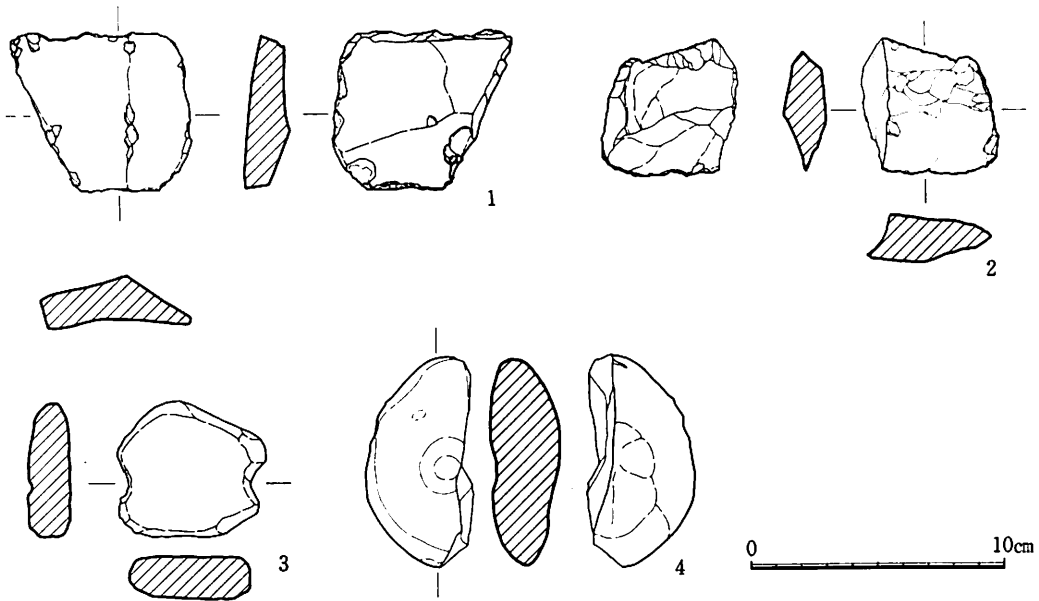
遺物の出土量は、河2などと比べるとかなり少ないが、中近世の土器・陶磁器を中心に、縄文晩期～近世の遺物が出土している。この中でも、第5図3の播鉢は破片が河1の流路方向と同方向にほぼ同じレベルで検出されており、本河川の存続期の一端を示すものであろう。なお、第5図1～7は外面が著しく磨耗している点など、河2埋土中検出のものと遺存状況が同じであり、調査の初期の段階で、河2埋土相当部を河1埋土とみなして掘り下げていた際に取り上げた遺物である可能性がある。

第64～66図に、河1出土遺物を示す。第64図1は、浅鉢の口縁部から肩部にかけての破片である。口唇部は丸みをもち、その内面には圏線が巡らされている。頸部内面には貝殻条痕を施した後、ユビオサエをしている。外面は全体的に摩滅している。2は、深鉢の口縁部片である。外面には、やや間隔をあけて二条の、断面三角形を呈する突帯が貼付される。このうち上方の突帯は口唇部直下に位置する。全体に摩滅しているものの、器面にユビオサエの痕跡を認めることができる。3は口唇部直下に小振りの刻み目を施した断面三角形の突帯を貼付した、甕の口縁部片である。4・5は、甕の脚台部片である。器面にはユビオサエの痕を観察できるものの、全体に摩滅が著しい。6は、壺の底部片である。胎土には砂粒を多数含むほか、礫も少量含んでいる。内面は、摩滅が激しい。7は、高杯の脚部で、杯部との接合部で欠損している。外面には赤色顔料が付着している。また、ガラス質の砂粒が、多く付着している。8は、須恵器の壺の口縁部片で、全体に自然釉がかかっており、一部風化しているところもみられる。9は、内黒土師器碗の高台部である。10・11は青磁碗の口縁部で、緑色の透明釉が全体に均一にかかっている。10は外面口唇部直下に、一条の圏線を巡らしており、11の体部外面には退化した蓮弁文が施されている。12～14は、青磁杯の口縁部片である。口唇部に浅い切り込みをいれて輪花としている。13は、内面に一条の圏線を巡らせている。15は青磁皿の口縁部片で、口縁先端部分は直立し、屈曲部以下は緩やかに湾曲する。全体に均一な不透明釉がかかっている。16は青磁碗の胴部片である。外面には2本一単位の縦線が施され、内面には刻線文が描かれる。17は、青磁皿の高台に近い胴部片である。18は、青磁碗の高台部である。見込み部は内外面ともに無釉で、畳付け部には釉がたまっている。内面には、一条の圏線が巡る。19は羽釜の鏝に相当すると考えられる破片で、外面には煤らしきものが付着している。20は、陶器碗の底部で、内面には重ね焼きの痕が四方に斑点状に残り、この部分については釉が剥けている。畳付け部にも、無釉の部分がみられる。21は、青磁碗の高台部である。内面見込み部分外周には、幅1.2cmの無釉部が輪状にみられる。22は、染め付け皿の底部で、外面口唇部直下、体部下端、及び高台上部には、それぞれ圏線が一条巡る。内面見込み部には花弁文が描かれており、体部への屈曲部には2本の圏線が描かれている。

第65図には、播鉢を図示している。1は、一単位7本以上の播目が間隔をおいて施されている。なお、拓本左縁部は、隣接する播目の右縁部にあたる。内面が回転ナデによって平滑に仕上げられ



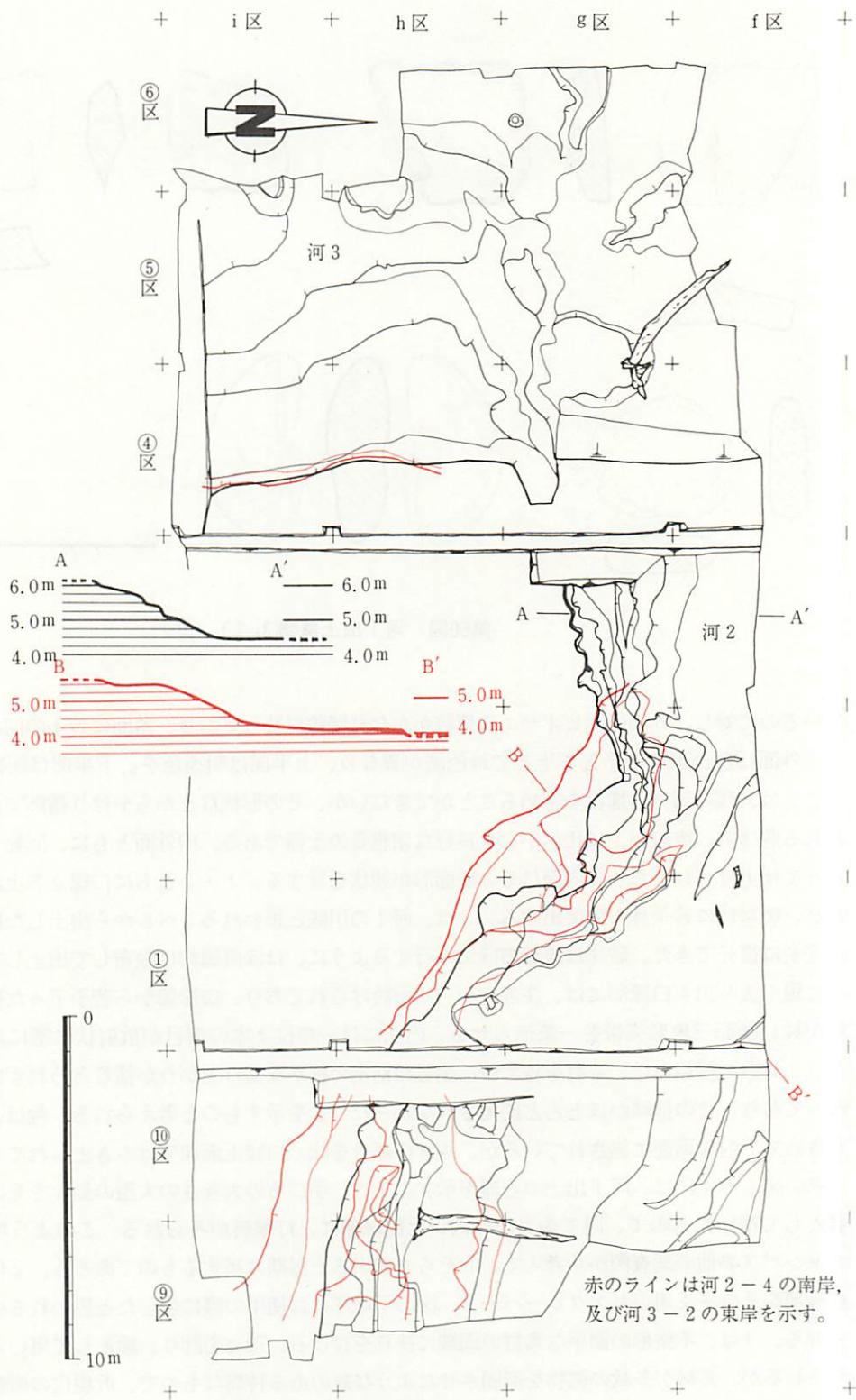
第65図 河1出土遺物(2) (1/3)



第66図 河1出土遺物(3) (1/3)

ているのに対し、外面はユビオサエの痕跡がかなり明瞭に残っており、器面に若干の凹凸がみられる。外面は残存部の上半と下半とでは色調が異なり、上半部は明褐色を、下半部は灰褐色を呈する。2は、残存部分に播目を認めることができないが、その形状などからやはり擂鉢であると考えられる個体で、焼成が1に比べかなり良好な須恵質の土器である。内外面ともに、回転ナデ調整によって仕上げられており、内面はその断面形が波状を呈する。1・2ともに口縁立ち上がり部の下端が、突帯状に若干外方に突出する。3は、河1の川底と思われるレベルから出土した擂鉢で、ほぼ完全に復元できた。破片は流路方向に平行するように、ほぼ直線的に散布して出土している。水平に短く張り出す口縁部には、注ぎ口が一ヶ所設けられており、口縁部から若干下った位置に、稜線が鈍い断面三角形突帯を一条巡らせる。内面には一単位4本の播目が放射状に密に施されている。これらの播目には、これを施す際に生じた粘土の細かな盛り上がりか播りとられずにそのまま残っており、この擂鉢がほとんど使用されなかったことを示すものと考えられる。釉は、底部外面も含めて、内外両面に施されているが、注ぎ口部分を除く口縁上面部分はふきとられている。

第66図1～4には、河1出土の石器を示す。1は、手ごろの大きさの大型の剥片をそのまま敲打器として用いたもので、図で中央部に向けた側縁部に、打撃痕がみられる。このような石器は本キャンパスの他の調査例から考えて、おそらく成川式土器期に属するものであろう。2は、鋭利な側縁部をそのまま用いたスクレーパーで、図の下縁部には使用の際に生じたと思われる小剥離がみられる。3は、不整形の偏平な素材の両端に抉りを設ける。79gを計り、錘として用いられたと考えられるが、素材が多数の鉱物を凝固させたような観のある特異なもので、近現代の所産である可



第67図 河2・3実測図 (1/200)

能性もある。4は、卵形の平面形を呈する自然石をそのまま利用したものと思われる凹石で、片面のほぼ中央部にごく浅い凹部が形成されている。

河2（第67図）

調査区北半部を東西に流れる自然河川の痕である。調査区中央付近で流れる方向を変えており、当初、方向を若干異にする2本の河川が重複して存在するものと考えた。しかし、平面的に境界をなすラインを検出できなかったこと、及び北壁土層の観察においても、河川の切り合い関係を確認できなかったため、同一河川と判断された。

河2は土層観察用トレンチの観察から、4期以上の変遷があったものと考えられる。検出順に、便宜的に、河2-1、河2-2、河2-3、河2-4とする。

河2-1は表土直下に埋土である砂層が接していたもので、埋土の大部分が粗砂であり、59層に細分された。本埋土中からは、成川式土器が多数出土している他、縄文土器・弥生土器も多数出土している。しかしながら、成川式土器以外は破片の大きさも比較的小さく、著しく磨滅していることから考えて、上流から流されてきた可能性が強い。弥生時代以前の包含層が本郡元キャンパスにおいては確認されていないことを考え合わせると、西方の唐湊周辺に本来の該期の遺物包含層が存在したと考えられる。一方、成川式土器については形態をよくとどめているものが多く、おそらく、本調査区で第Ⅲ・Ⅳ層とした遺物包含層に由来するものであろう。2m以上に及ぶ粗砂の厚い堆積は、かなり大規模な水流が当地点を流れたことを推測させ、これによって包含層が削り取られたものと思われる。

河2-2は、河2-1と同様、粗砂を埋土とする。この埋土の直上にはⅢb層が堆積しており、河2-1との間に時期差を想定し得る。

河2-3はⅣa層上面で検出されたもので、現存部で灰色を基調とする細砂層を埋土としている。埋土の質も河2-1・2とは異なり、また、この層中からの遺物出土量もこれらと比べかなり少ない。

河2-4は、Ⅴ層上面に現存肩部があり、その埋土は砂層と粘質土層とが互層をなす。これについても遺物の出土は少ない。埋土中、㊸層としたものには、植物遺存体が多量に含まれていた。

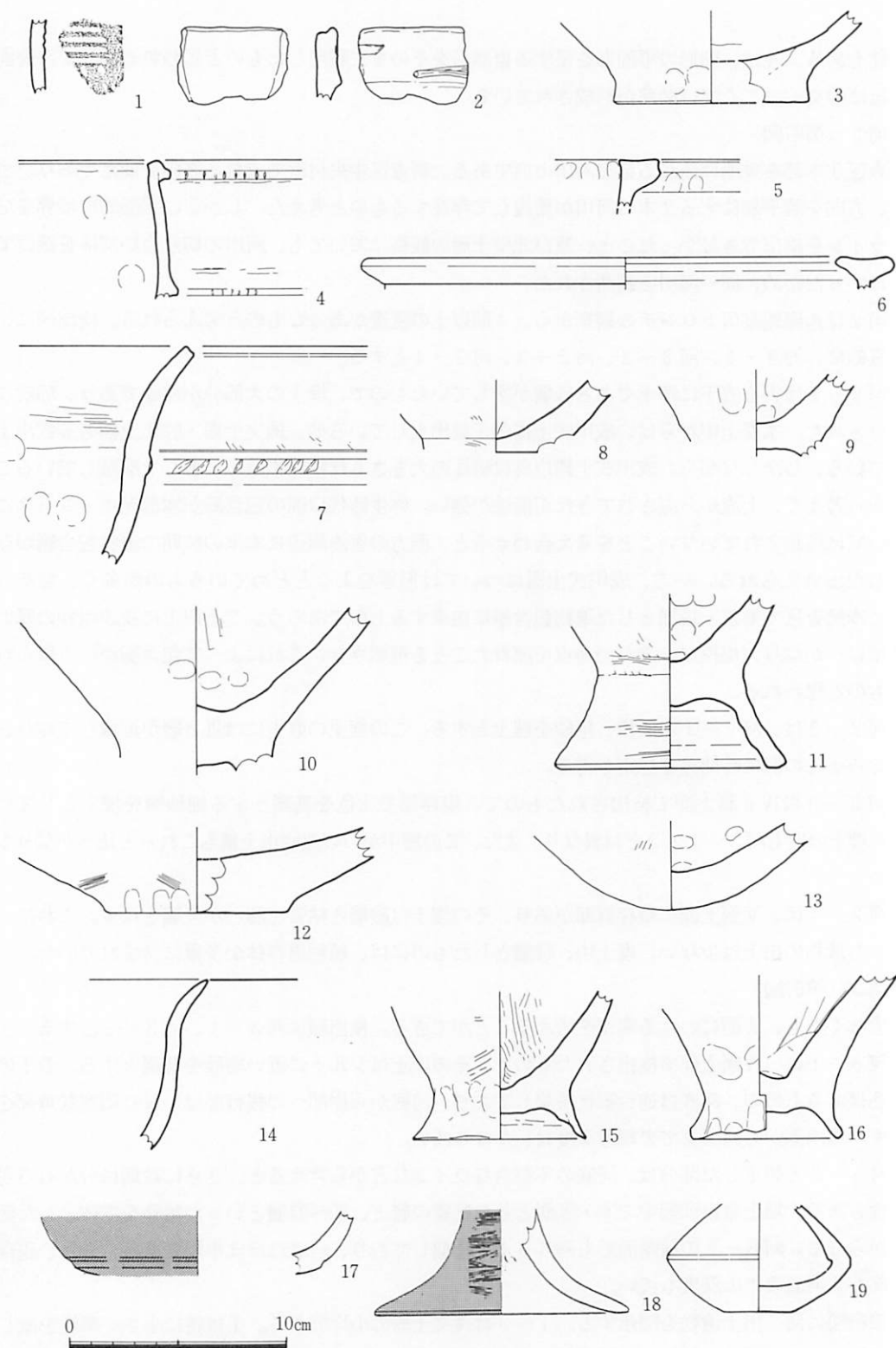
河3（第67図）

少なくとも、2期にわたる変遷を考えることができる。検出順に河3-1、河3-2とする。

河3-1は、Ⅳ層上面で検出されたもので、その埋土はシルトに近い細砂を基調とする。若干の凹凸はあるものの、河底は逆台形状を呈しており、河底から岸部への移行部はかなり明瞭な角部をなす。検出面から河底までの現存深度は、かなり浅い。

河3-2と想定した部分は、河底の不整合なラインなどから考えると、さらに数期に分かれる可能性もある。埋土は第㊸図中で㊸・㊸層とした粘質の層と、㊸～㊸層といった粗砂を主体とした部分からなる。河3-2の横断面形も河3-1と類似しており、河底はほぼ平坦である。また、現存肩部から河底までの深度も浅い。

第68図に河3出土遺物を図示する。1～3は縄文土器の小片である。1は特に小さく摩耗を激しく受けているものの、外面には単沈線及び刺突列からなる文様がみられる。2は若干肥厚させた口



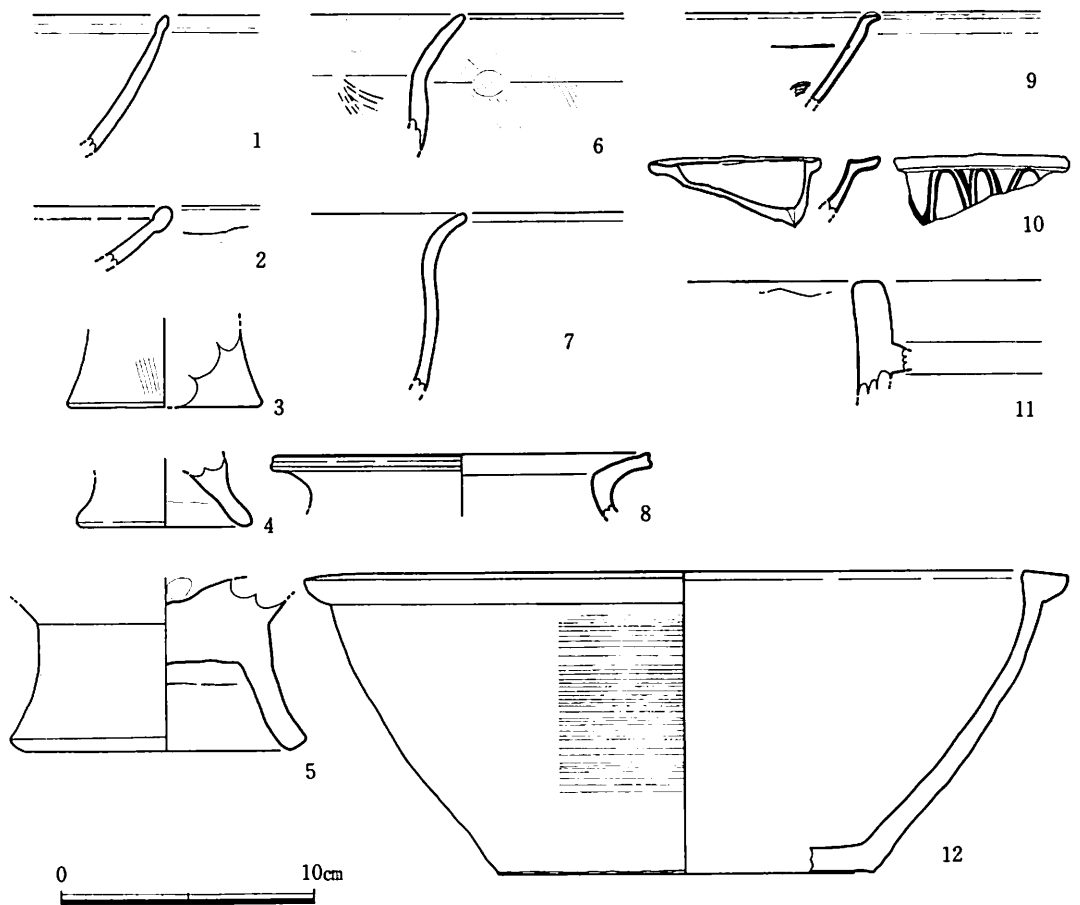
第68图 河3出土遺物 (1/3)

縁部小片で、外面には端部を刺突によって止めた横走沈線文が施されている。縄文時代後期の市来式土器であろうか。3はかなり外開きする体部に続く底部片で、内面には接合線がみられる。1～3はいずれも摩耗が激しく、調整痕などについては不明である。4～6は、弥生土器甕口縁部片である。4は、口縁端外面、及びその下方に断面三角形の突帯を付すもので、突帯上には小振りの刻み目が施される。若干内傾する口縁部である。5は、口縁部が断面「コ」字状に張り出す甕で、その上下両面にはユビオサエ痕が比較的明瞭に残る。6は口縁部が内外両方向に拡張される甕の口縁部片で、口縁部上面中央部は若干なめらかにくぼむ。摩耗が特に著しいが、口縁部上面にユビオサエが施されていることは観察される。7～11には、成川式土器甕を示す。7は、緩やかにカーブを描きながら外反する口縁部片で、下方には断面カマボコ状のやや低い突帯を付す。突帯上には斜位の刻み目を施している。内外面ともにユビオサエの後、ナデを行っているが、口縁端部付近はヨコナデによって仕上げられている。8～11は脚を付す甕の底部片である。ただし、8は体部の開き具合が他の個体と比べてやや大きく、鉢である可能性も考えられる。8～10は全て脚部を欠損する。いずれも内外面ともにユビオサエの後、ナデ調整を施す。10については、この他、内面に板状の調整具痕を認めることができる。11は、底部に緩やかに外開きする脚を付ける。内外面とも比較的丁寧なナデ調整が施されており、体部内面にはユビオサエ痕も明瞭に残る。12・13は壺の底部で、12は平底を、13は丸底を呈する。12は底面の調整は内外面ともに雑であるが、胴部外面はナデ調整により、やや丁寧に仕上げられている。13も内外面ともナデ調整によって仕上げているが、内面には粘土紐の形状を残すような、波状の凹凸が断面に観察される。14は、なだらかなカーブを描いて短く外反する、鉢の口縁部片である。口縁部の直下が、ごくわずかに外方へ張り出し、これ以下、胴部から底部にかけてゆるやかにすぼまるようである。15・16は、鉢の底部である。ともに脚部をもつが、これは甕の脚に比べるとかなりきゃしゃな感じのするものである。15の脚内側には、補強のためと思われる粘土の付加がみられる。17は、高杯杯部小片で、底面から立ち上がり部への屈曲部にあたる。外面には丹が塗られており、横方向のケンマ痕もみられる。18は高杯脚部片で、裾が緩やかなカーブを描いて広がる。外面には横方向のケンマが丁寧に施され、丹が塗られる。内面は、ナデによって仕上げられている。19は、埴の胴部で、算盤玉状の形態を呈する。口縁以下がほぼ完全に残存しているものの、内外面とも著しく摩耗しており、器面調整などについては不明である。

河1～河3の時間的な関係について述べるならば、基本土層との関係、及び堆積順をもとに古い方から順に、河2-4・河3-2→河2-3・河3-1→河2-2→河2-1→河1、となる。河2-4と河3-2、河2-3と河3-1のそれぞれの先後関係については、調査区南・西・北壁の観察において切り合い関係を確認できなかったことから、それぞれ同時に存在していたものと考えるのが妥当であろう。従って、南から北流してきた河3が、東西に伸びる河2と本調査区内で合流し、東へと流れていったことが考えられる。

5. 包含層出土遺物

本調査区では、I層、III層、IV層から遺物を出土した。ここでは包含層ごとに遺物の説明を加え



第69図 I層出土遺物 (1 / 3)

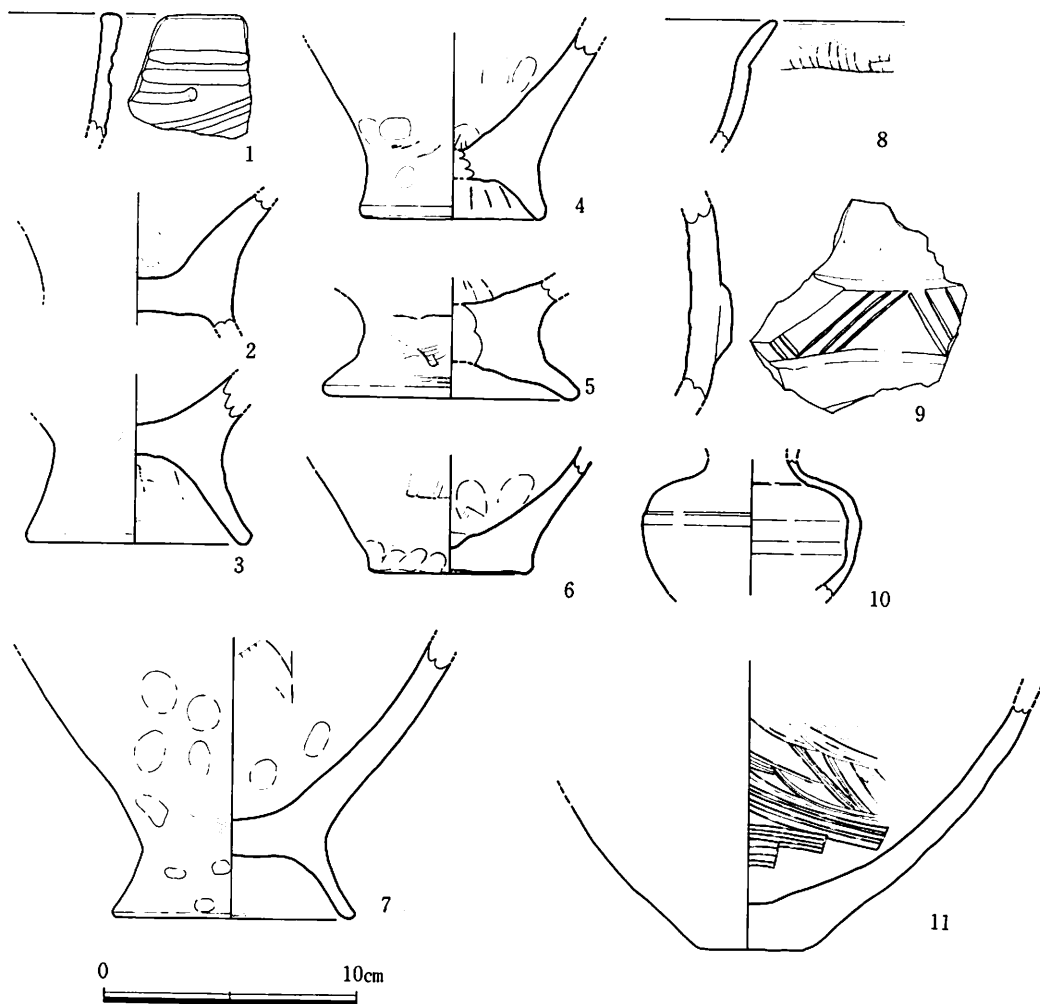
ることにする。

I層出土遺物 (第69図)

第69図にはI層出土の遺物を図示した。

1・2は浅鉢の口縁部である。口唇部を丸く肥厚する形態を呈し、いずれも非常に摩滅している。3～5は甕の脚台付近である。3はいわゆる「充実した」脚台である。4は脚台内面はゆるやかに立ち上がる低い脚台である。非常に摩滅している。5は、脚台内面の天井部が平坦で、脚端部は外へ反り返っている。体部への立ち上がり部に稜線をもつ。6・7は鉢の口縁部である。6はゆるやかに外反する形態を呈し、屈曲部にゆるい稜線をもつ。7は口縁部が外反するが、S字状に屈曲し、端部も短い。8は甕の口縁部である。口唇部はヨコナデによってくぼみ、内面屈曲部に明瞭な稜線をもつ。

9は、白磁碗の口縁部で、磁胎の口縁端部は水平だが、釉のため丸みを帯びている。内面には圈線が一条と、その下に櫛目文が施されている。10は青磁皿の口縁部である。L字状に屈曲する口縁



第70図 Ⅲ層出土遺物(1) (1/3)

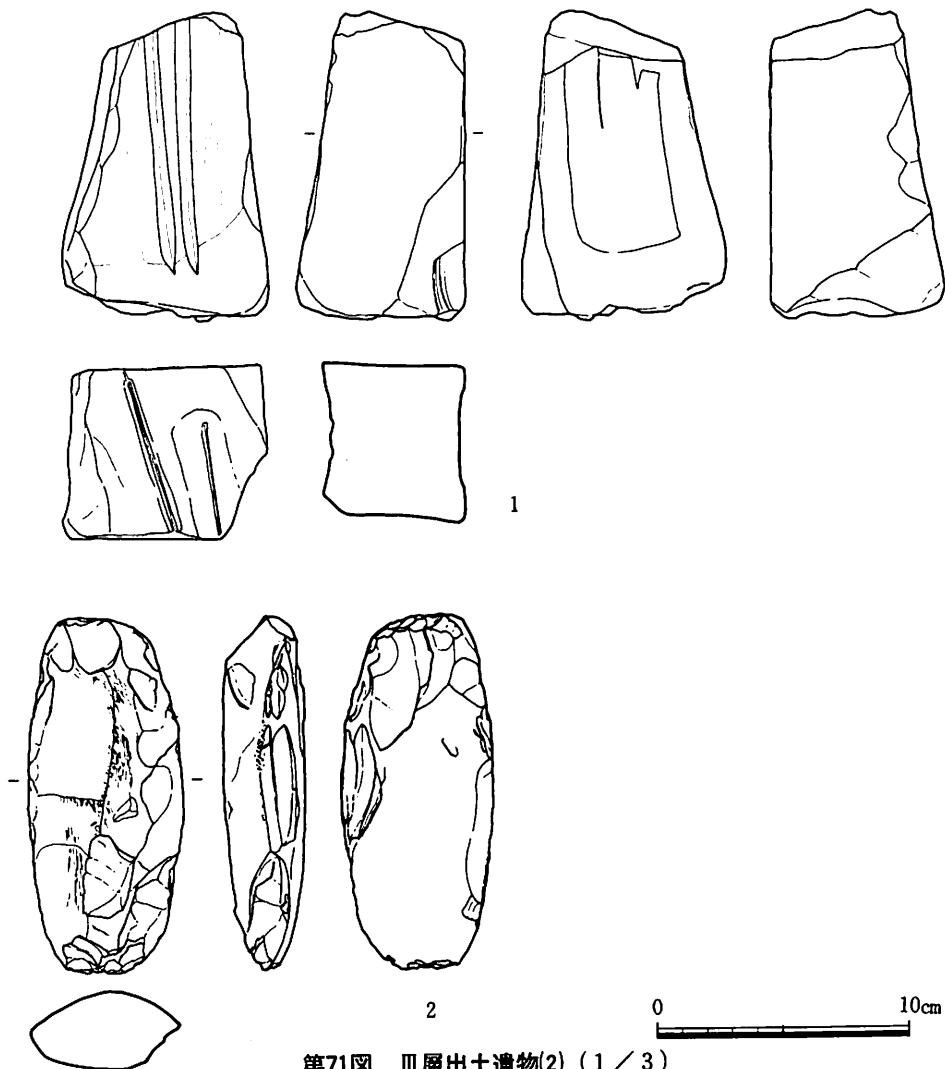
部形態を呈し、外面には片彫りの連弁文が施されている。

11は滑石製の石鍋の口縁部である。口縁部は若干内湾し、突帯端部は欠損している。外面にはススが付着している。

12は陶器の深鉢である。口縁部は断面三角形に肥厚し、口縁部上面は釉をかき取っている。

Ⅲ層出土遺物 (第70図)

1は深鉢の口縁部である。外面には、凹線文が施されている。非常に摩滅している。2～4・7は甕の脚台付近である。2は、脚部を欠損しているが、2・4・7は脚台内面天井部が平坦な形態を呈す。4は、脚台内面にハケ状の工具痕が認められる。3は脚台内面の空洞部がドーム状を呈する。5・6は鉢の底部である。5は、低く、ハの字状にふんばるような脚部をもつ。6は若干上げ底気味の平底である。なお、4も胴部のバランスに比べて脚部が低いため、鉢の可能性もある。8は鉢の口縁部である。口縁部はくの字状に屈曲する。9は壺の胴部突帯である。いわゆる「幅広突帯」である。3条を一組とする鋸歯文が施されている。



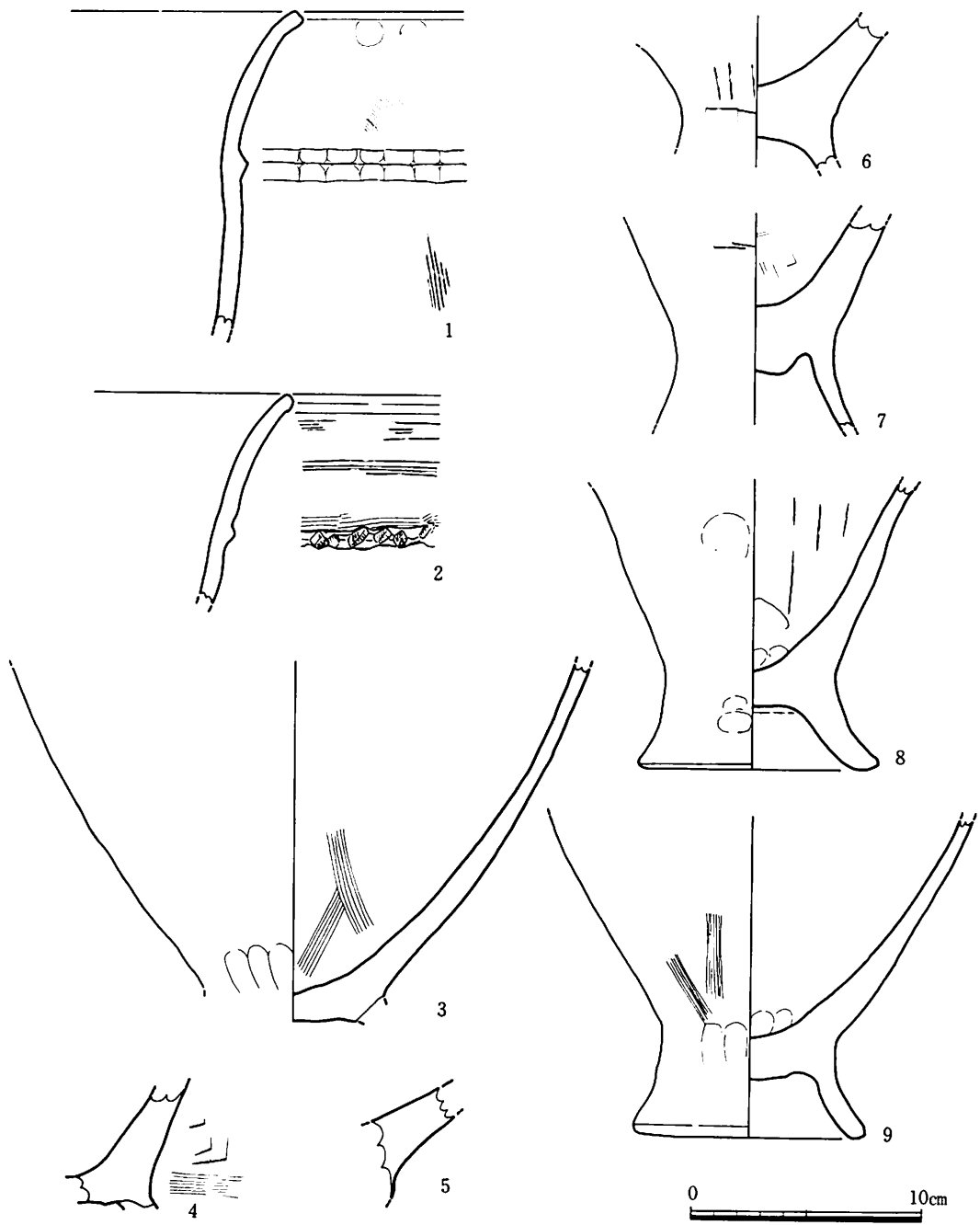
第71図 III層出土遺物(2) (1 / 3)

10は須恵器の甕の胴部である。外面には風化しているが、自然釉が残存している。11は壺の底部である。小さな平底である。

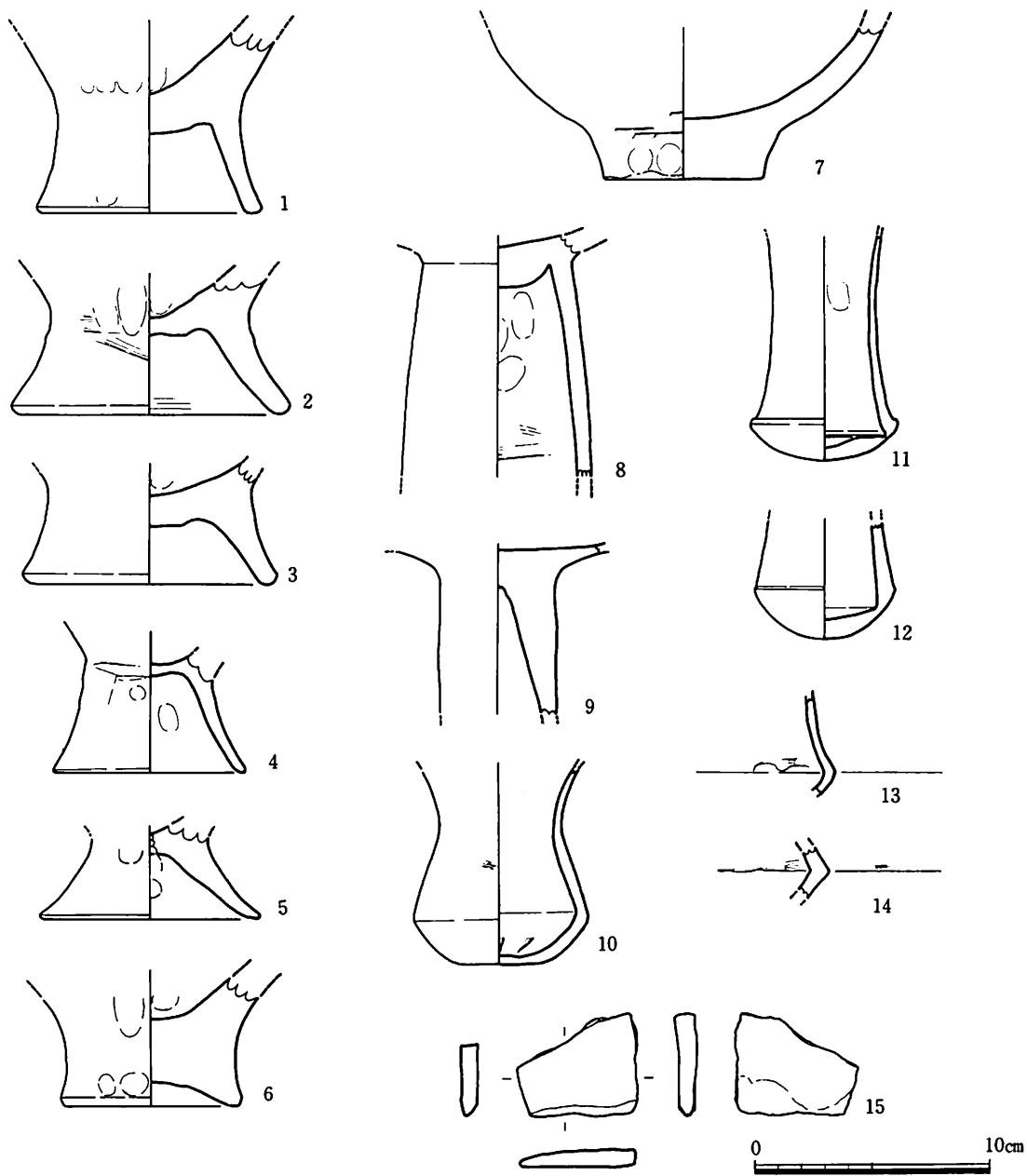
第71図には石器を示す。1は砥石である。半欠品であるが、残存部から考えて全形は中細りの直方体状を呈するものと考えられる。残存部において5面を観察することができるが、下端面を含め全面を砥面として利用していたことがわかる。このうち4側面と下端面には、溝状の凹部が二条ずつ認められる。また、下端面の敲打痕から考えて本砥石は砥石として利用された後、敲打器として再利用されたことがわかる。2は石斧である。表裏に剝離痕が認められる。両刃を成すと思われるが、表面の摩滅が激しく判然としない。刃部は使用のために欠損している。

IV層出土遺物

第72図1～第73図5は甕である。1・2は口縁部で、ゆるやかに外反する形態を呈する。屈曲部付近に一条の突帯を施す。1は、断面三角形の突帯だが、若干ユビオサエの痕が残っている。2は刻みをハケ原体で施している。3～5は胴部である。3・4の脚部は接合部で欠損している。6～



第72圖 IV層出土遺物(1) (1 / 3)



第73圖 IV層出土遺物(2) (1/3)

第73図5は甕の脚台付近である。6・7は脚端部が欠損している。7は、脚台内面天井部は、つぼ状に張り出している。8は、天井部が平坦部である。9～第73図3は脚台内面天井部は平坦だが、脚部との接合部付近にヨコナデを施しているため、少し張り出す。4・5は他の脚台部に比べて径が小さく、器壁も薄い。5は、ふんばるように開く脚をもつ。6は鉢の底部と思われる。底面は少し上げ底気味である。7は壺の底部である。平底で、厚い底部から屈曲して体部へ立ち上がる。8・9は高杯の脚部である。8は脚部外面がエンタシス状に膨らみ、内面天井部はこぶ状に張り出した形態を呈する。10～14は埴である。10は平底で、胴部は算盤珠状を呈し、頸部は緩やかに屈曲する。11・12は胴部屈曲部外面に段をもつ。両者とも丸底である。13・14は胴部の屈曲部で、どちらも内面の屈曲部に接合線が認められる。15は磨製石器で、下部に刃部が認められるが、それは鈍く、厚い。

6. プラント・オパール分析結果

本遺跡の調査にあたり、宮崎大学農学部藤原宏志教授にプラント・オパール分析資料の採取、及びその分析を依頼した。その結果、第74図並びに表2・3に示したような分析結果を御報告いただいた。なお、この分析結果については、併せて以下のようなコメントをいただいている。

分析結果に関するコメント

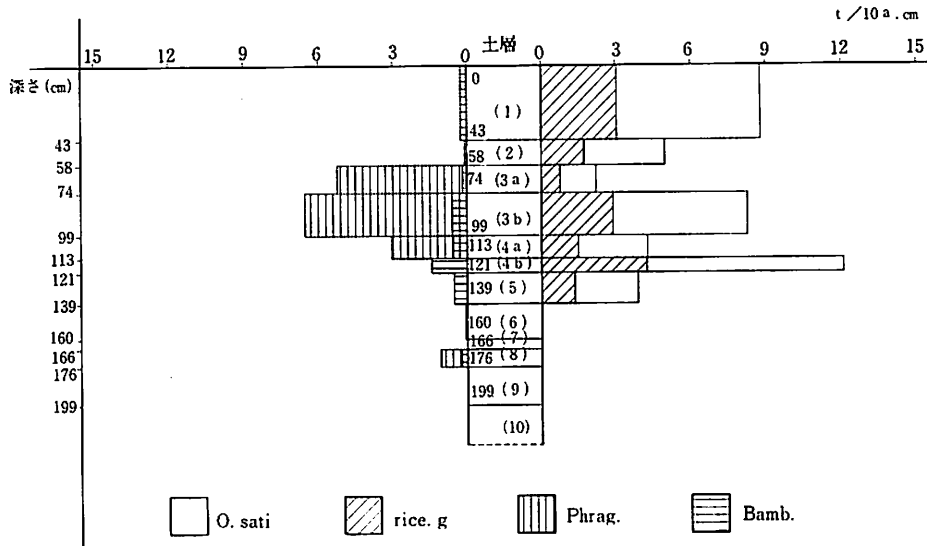
- (1) 1層、3 b層および4 b層にイネ (*Oryza sativa*) 生産総量のピークが認められる。これらの土層はその生産総量から見て、それぞれイネの生産面であったと推定される。
 - (2) 3 a層、3 b層および4 a層はヨシ (*Phragmites comuniss*) のピークを形成しており、これらの土層の堆積環境が比較的湿潤だったことを示している。
- 4 b層で水田が開かれたとすると、灌漑施設（水路など）の敷設による周辺環境変化の結果と

表2. 鹿児島大学構内遺跡郡元団地H-11・12区におけるプラント・オパール定量分析結果

層名	イネ (<i>O. sati.</i>)	イネ粃 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani. seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
1	8.789	3.079	12.157	5.520	0.000	0.239	3.707
2	4.984	1.746	9.191	4.174	0.000	0.090	2.102
3 a	2.225	0.780	18.469	8.387	5.246	0.182	1.408
3 b	8.288	2.904	15.286	6.941	6.512	0.601	1.165
4 a	4.287	1.502	0.000	0.000	4.042	0.560	1.808
4 b	12.115	4.244	10.773	4.892	0.000	1.413	3.285
5	3.890	1.363	29.597	13.440	0.000	0.529	5.743
6	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.079	0.204
7	0.000	0.000	14.137	6.420	0.000	0.000	2.515
8	0.000	0.000	5.779	2.624	1.094	0.227	1.958
9	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.500
10	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000

表3. プラント・オパール分析による生産量推定結果

層名	深さ (cm)	層厚 (cm)	GB数/g	植物名	PO/GB	PO数/g	仮比重	PO数/cc	地上部乾重 (t/10a, cm)	種実重 (t/10a, cm)	種実生産総量 (t/10a)
1	0	43	307595	イネ	12/145	25456	1.174	29893	8.789	3.079	132.397
				キビ族	4	8485		9964	4.000	5.520	237.371
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	2	4243		4982	0.239		
				ススキ	12	25456		29893	3.707		
2	43	15	301267	イネ	9/178	15233	1.113	16951	4.984	1.746	26.189
				キビ族	4	6770		7534	4.000	4.174	62.605
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	1	1693		1883	0.090		
				ススキ	9	15233		16951	2.102		
3 a	58	16	299551	イネ	2/81	7396	1.023	7569	2.225	0.780	12.474
				キビ族	4	14793		15139	4.000	8.387	134.120
				ヨシ	2	7396		7569	5.246		
				タケ	1	3698		3785	0.182		
				ススキ	3	11095		11354	1.408		
3 b	74	25	303466	イネ	9/97	28157	1.001	28190	8.288	2.904	72.590
				キビ族	4	12514		12529	4.000	6.941	173.528
				ヨシ	3	9386		9397	6.512		
				タケ	4	12514		12529	0.601		
				ススキ	3	9386		9397	1.165		
4 a	99	14	303648	イネ	5/124	12244	1.191	14583	4.287	1.502	21.028
				キビ族	0	0		0	0.000	0.000	0.000
				ヨシ	2	4898		5833	4.042		
				タケ	4	9795		11666	0.560		
				ススキ	5	12244		14583	1.808		
4 b	113	8	301056	イネ	14/117	36024	1.144	41208	12.115	4.244	33.955
				キビ族	3	7719		8830	3.000	4.892	39.136
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	10	25731		29434	1.413		
				ススキ	9	23158		26491	3.285		
5	121	18	302141	イネ	6/136	13330	0.993	13232	3.890	1.363	24.533
				キビ族	11	24438		24260	11.000	13.440	241.916
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	5	11108		11027	0.529		
				ススキ	21	46654		46314	5.743		
6	139	21	300000	イネ	0/164	0	0.901	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	0	0		0	0.000	0.000	0.000
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	1	1829		1647	0.079		
				ススキ	1	1829		1647	0.204		
7	160	6	303436	イネ	0/91	0	0.869	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	4	13338		11588	4.000	6.420	38.518
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	0	0		0	0.000		
				ススキ	7	23341		20279	2.515		
8	166	10	299461	イネ	0/182	0	0.960	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	3	4936		4737	3.000	2.624	26.242
				ヨシ	1	1645		1579	1.094		
				タケ	3	4936		4737	0.227		
				ススキ	10	16454		15789	1.958		
9	176	23	299820	イネ	0/132	0	0.888	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	0	0		0	0.000	0.000	0.000
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	0	0		0	0.000		
				ススキ	2	4543		4033	0.500		
10	199	...	303648	イネ	0/254	0	1.381	0	0.000	0.000
				キビ族	0	0		0	0.000	0.000
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	0	0		0	0.000		
				ススキ	0	0		0	0.000		



第74図 プラント・オパール資料分析結果
グラフの見方について

1. layres: 採取地点の土層模式図, () 内の数字は土層番号, 左すみの小数字は表層からの深さをcmで表したものの。
2. O. sati: *Oryza sativa*. 栽培稲の地上部乾物重。
rice. g: *Oryza sativa*の穎果(稲)乾物重。
Phrag.: *Phragmites communis*. ヨシの地上部乾物重。
Bamb.: *Bambaceae*. タケ亜科の地上部乾物重。
各植物体重はそれぞれの植物により異なる珪酸体密度係数と土壤中から検出された各植物に由来するプラント・オパール密度をもとに算出されたものである。
3. 土中模式図の右側に栽培植物, 同左側に野・雑草を示している。単位 $t/10 a \cdot cm$ はその土層の厚さ 1 cm, 面積 $10 a$ ($1,000 m^2$) に包含されるプラント・オパールの数から推定した各植物の乾物量を t (トン, $1 \times 10^3 kg$) で表したものである。例えば, その土層が 10 cm の厚みであると, グラフで示された値に 10 を乗じた量の植物体とその土層の堆積期間中に生産されたことになる。生産量が年間生産量ではないことに注意されたい。
4. 水田址が埋蔵されている土層では o. sati の値がピークを形成する 경우가多い。土層の堆積状況により一概にいえない水田址の層位はこのピークと一致するのが通である。
5. Phrag. (ヨシ), Bamb. (タケ) の乾物量変遷はその地点における土壤水分状況の時代的変遷を知るうえに役立つ。ヨシは比較的水分の多い湿った環境に生育し, タケ(ササ)は比較的乾燥した環境下で繁茂する。両者の象徴をみると, その地点の乾湿変化を推定できる。

も考えられる。

- (3) 5層から大量のキビ族 (*Panicaceae*) が検出された。同族にはヒエやアワなど重要な物が含まれており, これらの作物が栽培されていた可能性も否定できないことを示唆しているが, 今回の調査ではこれらの植物種を特定するには至らなかった。

7. まとめ

今回の調査地点は, 郡元キャンパスの西側, ほぼ中央北寄りに位置する。表土直下において, 自然河川が検出され, 以下, 数期にわたる自然河川の痕が検出されている。

自然河川の埋土中からは多数の遺物が出土しているが, これらは成川式土器を中心とするものの, この他に少数ながら縄文時代前期以降, 弥生時代までの遺物もみられる。該期の遺物は, 本地

域では未だ資料数が少なく、貴重な資料を得ることができた。包含層中からも、成川式期以降の遺物が出土している。特に、基本土層Ⅲ層下部からⅣ層にかけては、出土量自体も多いが、かなりまとまった形で出土する個体も多く、Ⅳ層は成川式土器の単純層であろうと考えられた。

鹿児島大学郡元団地において、小規模な流路は別として自然河川の確認し、その調査を行った地点としては、情報処理センター建設地⁽²⁾、及び理学部2号館増築地⁽³⁾をあげることができる。前者においては、大小数条の流路を検出しているが、このうち3 a号溝、3 b号溝としたもの⁽⁴⁾は、ほぼ同様な位置に重複して存在する、西から東へ水が流れたと思われる自然河川である。3 b号溝は埋土の下半部が灰白色を呈する細砂層からなっており、流路方向、及び埋土の状況等において、本調査地点検出の河2-3に類似する。また、河底が植物遺存体を含む泥炭層であることも共通する点である。出土遺物については、河2-3を単独に調査していないので比較できないが、両地点の河川はその特徴をほぼ同じくするものと言えよう。

一方、理学部2号館増築地において検出された河川痕は、発掘調査時の写真や、調査の際に剥ぎ取られた土層サンプルをみると、河川内には粗砂が多量に埋土として堆積していたことがわかる。また、この埋土中からは、成川式土器を主体として、夥しい数の遺物が出土している。このような状況は本調査地点検出の河2-1・2に共通するものである。

以上、三地点から得られた調査所見をもとに、今回の情報工学科校舎建設予定地と情報処理センター、及び理学部2号館増築地とを結ぶ二河川が、時期を異にして存在したことが想定される。特に、後者の場合については、両地点の中間に位置する電子工学科校舎南側の立合調査⁽⁵⁾でも、成川式土器を包含する同様な粗砂層の存在が確認されていることから、このような想定成り立つ可能性は高い。また、理学部2号館の東方に存在する玉利池について、これをかって存在した自然河川の名残とみなす考えもある⁽⁶⁾。

現在、鹿児島大学の西方を南流する新川は、田上川の下流にあたるが、これは文化3年人工河川としてつけかえられたもので、それ以前の田上川の下流部は、より北方を流れていたことなどが「三国名勝図絵」に記されている。これによれば、田上川の下流部は旧中村と旧荒田村との境になっていたという。今回、河2について想定した自然流路はその位置から考えて、これに当てても大過ないものと考えられるのである。

以上のことから、旧田上川下流部が、現鹿児島大学郡元キャンパス内を、時期によって流路を変えながら東流していたこと⁽⁷⁾が改めて確認されたわけである。この流路が存在した部分は、郡元団地内の1 m等高線地図でみた場合、南北二ヶ所にみられる低地部の北側のものに当たる。そして、その南側の若干比高差のある部分に、古墳時代の集落址が広がる。現在、古墳時代にさかのぼる自然河川痕は確認されていないが、存在したとすれば、当地域ではやはりこの低地部を流れていたことは十分に考えられることであろう。池畑耕一氏は古墳時代の本キャンパスの想像図を示しているが⁽⁸⁾、その図には河に南接して集落が展開し、その北側には水田が広がる光景が描かれている。今後の調査にあたっては、このような景観を考慮にいれながら、遺構の検出にあたることも必要であろうと考えられる。

註

- (1) 松永幸男「鹿児島大学郡元団地H-11・12区（工学部情報工学科校舎建設予定地）における試掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報VI』1991年
- (2) 池畑耕一「Ⅲ. 鹿児島大学電子計算機室新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（昭和58年度 鹿児島県教育委員会調査）」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報VI』鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1991年
松永幸男「鹿児島大学郡元団地G・H-9・10区（電子計算機室増築地）における発掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅲ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1988年
- (3) 昭和51年 鹿児島県教育委員会調査（未報告）
- (4) 註(2)文献松永1988に同じ。
- (5) 松永幸男「第4章 昭和60年度（昭和61年2～3月）鹿児島大学構内における立合調査」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅱ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1987年
- (6) 池畑耕一「熊襲から単人へー古墳時代の南九州人(14-1)」『みなみの手帖57号』みなみの手帖社 1989年
- (7) これについては平田信芳氏、池畑耕一氏が既に指摘している。
平田信芳「釘田遺跡（釘田第1地点遺跡）」1975年（事業報告）
池畑耕一「熊襲から単人へー古墳時代の南九州人(14-1)」『みなみの手帖57号』みなみの手帖社 1989年
- (8) 池畑耕一「熊襲から単人へー古墳時代の南九州人(14-1)」『みなみの手帖57号』みなみの手帖社 1989年

表4 郡元団地B-8・9区出土土器観察表

図番号	器種	出土区	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
4-1	甕	No1トレンチ	II	外面・内面；淡褐色。	5mm大の砂粒を含む。角閃石、黒曜石小片。	外面；ユビオサエのちナデ。内面；ユビオサエのちハケ？のちナデ。底面；ユビオサエのちナデ。	
4-2	甕	No1トレンチ	II	外面・内面；淡濁黄褐色。	砂粒(径1~8mm)を多数含む。	外面；ユビオサエのち？内面；ユビオサエのちナデ。	内外面とも磨耗が著しい。脚径11.5cm
4-3	甕	No2トレンチ	II	外面；暗橙褐色。内面；黒褐色。脚部内面；明灰褐色	細砂粒を含む。角閃石、黒曜石。	ユビオサエのちナデ。	
4-4	甕	No2トレンチ	II	外面；明茶褐色。脚部内面；黄白色。	細砂粒を含む。石英、角閃石、赤色粒、黒色粒。	ユビオサエのちナデ。	
4-5	碗	No3トレンチ	II	外面；明橙褐色。内面；黒褐色。	微細。黒色粒を微量含む。	ナデ。	
4-6	皿	No1トレンチ	II	外面・内面；青白色。	微細。	施釉。	口径(10.7)cm。
4-7	碗	No3トレンチ	II	緑色。	淡灰緑白色を呈する。	外面・内面；施釉。外面；蓮弁文(片切彫)	
4-8	碗	No3トレンチ	II	透明。	緑灰色を呈する。	外面；回転ケズリのち施釉。内面；回転ナデのち片切彫のち施釉。	
4-9	皿	No1トレンチ	II	若干青みがかった淡緑白色。	淡灰白色を呈する。	高台皿付部を除き全面施釉。	釉の厚さは内面→外面→高台見込みの順に薄くなる。口径10.7cm。底径(6.6)cm。
4-10	碗	No3トレンチ	II	淡灰白色釉。	淡灰白色を呈する。	全面；施釉。	
4-11	深鉢	No3トレンチ	II	外面・内面；暗茶褐色。	細砂粒を多く含む。	全面；ケズリのち回転ナデ。	
4-12	鉢	No1トレンチ	II	外面；暗茶褐色。一部スス付着。内面；明橙褐色。	細砂粒を含む。赤色粒、黒色粒。	外面・内面；丁寧なナデ。底面；粗いナデ。	口径23.6cm。底径20.2cm。
4-13	皿	No1トレンチ	攪乱層	外面；黄白色。内面；緑色~黄緑色。	堅緻。	外面；回転ココナデ。一部施釉。内面；施釉	陶器。回転糸切り底。口径10.2cm。底径4.2cm。
4-14	甕		表採	外面・内面；灰褐色。(不透明釉)	微細。細砂粒を少量含む。	施釉。	外面；光沢がある。口径(29.9)cm。
5-1	土製人形			黄橙色。	微細。	型作り。	高さ4.1cm。幅3.2cm。厚さ1.9cm。
5-2	土製人形			黄橙色。	微細。	型作り。	

表5 郡元団地B-8・9区出土土器計測表

図番号	出土トレンチ	出土層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
6-1			16.0	15.5	2.6	250
6-2			17.0	14.7	8.6	710

表6 平成2年度立合調査時出土土器観察表

図番号	器種	出土区	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
8-1	深鉢	⑥	排土中採集	外面；黒褐色。内面；茶褐色	石英、角閃石、白色粒、赤色粒、黒色粒を含む。	外面；条痕文+3.5mm幅の沈線。内面；条痕文。	焼成；良好。
8-2	深鉢	①~④	排土中採集	茶褐色。	石英、角閃石、白色粒、黒色粒を含む。	外面；貝殻腹縁刺突による擬縄文。内面；条痕文。	焼成；良好。
8-3	鉢？	①~④	排土中採集	外面；黄褐色。内面；灰褐色。	微細粒を含む。	外面；ヘラナデ。内面；ナデ。	焼成；良好。底径(7.0)cm
8-4	どろめんこ	①~④	排土中採集	外面；黒色。内面；暗赤褐色。	石英、角閃石、白色粒を含む。	外面；ナデ。貝殻腹縁刺突。内面；ヘラケズリ状条痕のちナデ。	

図番号	器種	出土区	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
8-5	深鉢	⑦	③	外面：黒褐色。 内面：茶褐色。	角閃石、白色粒を含む。	外面：1.5~2.0mm幅の沈線。内面：ケズリのちナデ+ユビオサエ。	内面にはナデたときに付いたと思われる、擦過痕が残る。
8-6	深鉢	①~④	③	外面：黒褐色。 内面：茶褐色。	石英、角閃石、白色粒を含む。	外面：1.5~2.0mm幅の沈線。内面：ケズリのちナデ+ユビオサエ。	
8-7	甕	マンホールC	排土中採集	明茶褐色。	石英、角閃石、白色粒、黒色粒を含む。	外面：ヨコナデ。内面：ユビオサエ+ヘラケズリ。	
8-8	甕	⑥	不明	橙灰白色。	石英、角閃石を多く含む。黒色粒を含む。	外面：ヨコナデ+ヘラケズリ。内面：ヨコナデ+ユビオサエ。	
8-9	甕	①~④	排土中採集	外面：明赤褐色。内面：暗赤褐色。	角閃石、白色粒を含む。	ヨコナデ。	
8-10	碗?	⑥	②	外面：橙白色。 内面：灰白色。	細砂粒を含む。赤色粒、黒色粒を含む。	摩滅のため不明。	摩滅が激しい。
8-11	壺?	②⑦	濁灰色砂混じり砂質シルト(盛土)	外面：橙色。 内面：明灰色。	微細粒を含む。黒色粒。	摩滅により不明。	
10-1	甕	C	④	外面：明茶褐色。内面：黄白色。	砂粒を多く含む。石英、角閃石。	ナデ。突帯部；ユビオサエのちナデ。	
10-2	甕	B	④	外面：灰白色~黒色。内面：灰白色。	細砂粒を含む。石英、角閃石。	ナデ。	スス?付着。
10-3	甕	B	④	外面：赤褐色。内面：灰褐色。	砂粒を含む。石英、角閃石、黒色粒。	外面：ユビオサエのちナデ。内面：ナデ。	
10-4	甕	D	④	外面：灰黄褐色。内面：橙褐色。	砂粒を多く含む。石英、角閃石。	ユビオサエのちナデ。	
10-5	甕	B	④	橙白色。	石英、角閃石、白色粒、赤色粒、黒色粒。	ハケ。	
10-6	壺	F	④	明灰褐色。	砂粒~細砂粒を含む。角閃石、赤色粒、黒色粒。	ユビオサエのちナデ。	
10-7	壺	B	④	外面：淡橙白色。内面：淡橙白色~黒色。	石英、角閃石、黒色粒。	外面：ナデ。内面：ユビオサエ。	
10-8	大甕	B	④	灰白色。	白色粒を含む。	外面：タタキ?内面；同心円状あて具痕	外面が摩耗している。

表7 平成2年度立合調査時出土石器計測表

図番号	器種	出土区	出土層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
10-9	叩き石	B	④	9.5	6.9	5.6	580	

表8 平成3年度立合調査時出土遺物観察表

図番号	器種	部位	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
18-1	甕	胴部	排土中	外面：橙白色。内面：橙白色。	砂粒を含む。角閃石、黒色粒。	外面：ナデ。内面：ユビオサエのちナデ。	胴部に一条の絡繩突帯。傾き不明。
18-2	甕	脚部	排土中	外面：橙褐色。内面：茶褐色。外底面：橙白色。	砂粒~細砂粒を含む。角閃石、黒色粒。	外面：ナデ。内面：ナデ。外底面：ユビオサエのちナデ。	
18-3	甕	脚部	排土中	外面：暗橙褐色。内面：茶褐色。	砂粒~細砂粒を含む。角閃石。	外面：ナデ。内面：ユビオサエのちナデ。外底面：ユビオサエのちナデ。	外底面に板状工具痕が数条残る。

図番号	器種	部位	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
18-4	甕	脚~底部	排土中	外面; 橙褐色. 内面; 橙褐色.	細砂粒を含む. 角閃石, 黒色粒.	外面; ユビオサエのちナデ. 内面; ユビオサエのちナデ.	底径 (6.9) cm.
18-5	高坏	脚部	排土中	橙褐色. 一部, 赤色顔料が残存.	微細. 赤色粒.	外面; ケンマ?	器面全体が摩滅しており, 調整が判然としない.
18-6	大甕?	胴部	排土中	外面; 灰色. 内面; 灰色.	微細. 灰色.	外面; 格子状タタキ痕. 内面; 同心円あて具痕.	須恵器. 傾き不明.
18-7	插鉢	底~胴部	排土中	暗茶褐色釉.	赤褐色.	外面; 施釉. 内面; 施釉. 底面; ナデ.	底径 (12.5) cm.

表9 郡元団地S・T-6・7区出土遺物観察表

図番号	器種	出土区	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
28-1	甕	No2トレンチ	H1	外面; 暗茶褐色. 内面; 明茶褐色.	粗砂粒~細砂粒を含む. 角閃石, 金雲母.	ユビオサエのちナデ.	
28-2	鉢	No2トレンチ	H1	外面; 灰白色~濁白色, 内面; 灰色.	細砂粒を含む.	外面; 自然釉が風化している. 内面; 同心円状あて具痕.	底径 (4.8) cm.
28-4	甕	No2トレンチ	H2	外面; 暗褐色~灰褐色. 内面; 灰褐色.	石英, 角閃石を含む.	外面; ユビオサエのちハケのちナデ, 突帯部; ユビオサエのちココナデ. 内面; ユビオサエのちケズリのちナデ.	
28-5	壺	No2トレンチ	H5	明橙褐色	粗砂粒~砂粒を多く含む. 石英, 角閃石, 白色粒, 赤色粒.	外面; 横方向のハケのちナデ. 内面; (ハケ?)のちナデ.	口径 (15.3) cm.
28-6	壺	No2トレンチ	H5	外面; 橙白色~黒色. 内面; 橙白色.	砂粒を含む. 石英, 角閃石, 白色粒.	外面; ハケ. 内面; ユビオサエのちハケ.	口径11.6cm.
28-7	壺	No2トレンチ	P8	暗赤褐色.	石英, 角閃石, 白色粒, 黒色粒.	外面; ケンマ. 内面; ハケのちナデ.	若干摩滅している.
30-1	壺	No3トレンチ	H6	外面; 明橙褐色. 内面; 明灰褐色.	砂粒~細砂粒を含む. 石英, 角閃石, 赤色粒, 黒色粒.	外面; ヘラナデ. 内面; 摩滅のため不明.	
30-2	高坏	No3トレンチ	SD2	(赤色顔料付着のため) 赤色.	粗砂粒~細砂粒を含む. 石英, 角閃石, 赤色粒, 黒色粒.	外面; ハケのちナデ. 内面; ヨコハケ.	ハケ目はほとんど消えている. 外面; 赤色顔料付着.
30-3	不明	No3トレンチ	SD2	明橙褐色.	粗砂粒~砂粒を含む. 石英.	外面; ナデ. 内面; ナデ.	
30-4	高坏	No3トレンチ	P20	暗茶褐色.	粗砂粒~細砂粒を含む. 角閃石, 白色粒, 赤色粒.	口唇部付近; ヨコナデ. 外面下部; ケンマ, 他; ナデ.	
32-1	甕	No4トレンチ	H7	淡明褐色.	角閃石.	外面; ハケのちナデ. 内面; ユビオサエのちナデ.	
32-2	甕	No4トレンチ	H7	淡明褐色.	砂粒を含む. 角閃石, 黒曜石.	外面; ユビオサエのちナデ. 内面; ユビオサエのちナデ.	脚径10.8cm.
42-1	壺	No12トレンチ	H8	外面; 暗茶褐色. 内面; 橙褐色.	粗砂粒~細砂粒を含む. 石英, 白色粒, 赤色粒, 黒色粒.	外面; ハケのちナデ. 摩滅のため不明.	内面; 摩滅している. 底径 (8.3) cm.
42-2	高坏	No12トレンチ	H8	外面; 赤色顔料付着. 内面; 黄白色~黒色.	石英, 角閃石, 白色粒, 赤色粒, 黒色粒.	外面; ハケのち横方向のケンマ. 内面; ナデ.	
42-3	小形丸底壺	No12トレンチ	H8	外面; 黒褐色. 内面; 明灰褐色.	細砂粒を含む.	ナデ.	底径 (2.95) cm.
42-4	甕	No12トレンチ	H9	外面; 明褐色~明灰褐色. (ススのため) 黒色. 内面; 明褐色.	砂粒を含む. 石英, 角閃石, 白色粒, 赤色粒.	外面・内面; ハケのちナデ. 口唇部付近; ナデ.	外面; 突帯より下位スス付着. 内面; 若干剝落. 口径28.8cm, 26.7cm.
43-1	甕	No12トレンチ	SD4	淡濁褐色.	微砂粒を含む. 角閃石, 黒曜石.	ユビオサエのちナデ.	
43-2	壺	No12トレンチ	SD4	外面; 淡濁黄白色. 内面; 淡黄白色.	石英, 角閃石.	外面; ユビオサエのちナデ. 内面; ユビオサエのちナデ.	底径 (8.2) cm.
43-3	高坏	No12トレンチ	SD4	淡黄白色.	微細な砂粒を含む.	ユビオサエのちナデ.	

図番号	器種	出土区	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
43-4	甕	No12トレンチ	S D 5	褐色.	5mm大の砂粒含む. 石英.	外面; ユビオサエのちハケのちナデ. 内面; ユビオサエのちハケのちナデ. 口唇部付近の; ヨコナデ.	
43-5	甕	No12トレンチ	S D 5	外面; 淡褐色. 内面; 濁灰褐色.	石英, 角閃石.	ユビオサエのちナデ.	
43-6	壺	No12トレンチ	S D 5	淡濁褐色.	微細な砂粒を含む.	内面見込; ユビオサエ. 底部外面; 回転ヘラ切り痕.	底径 (7.2) cm.
43-7	壺	No12トレンチ	S D 5	外面; 黄褐色. 内面; 淡濁褐色.	角閃石.	ユビオサエのちナデ.	底径 (7.8) cm.
43-8	鉢	No12トレンチ	S D 5	外面; 濁褐色. 内面; 淡黄白色.	微細な砂粒を含む. 角閃石.	内面; 一部回転ナデ痕残存.	
43-9	高坏	No12トレンチ	S D 5	外面; 淡黄褐色. 内面; 濁灰褐色.	角閃石.	ユビオサエのちナデ.	
43-10	碗	No12トレンチ	S D 5	淡黄白色.	微細な砂粒を含む.	外面; 高台部 回転ナデ. 見込部 回転ケズリのちナデ. 内面; ユビオサエのちナデ.	底径 (4.1) cm.
43-11	杯	No12トレンチ	S D 5	淡青灰白色.	1mm大の砂粒もごくわずか含まれる. 微細な砂粒を含む.	外面; 回転ナデ. 内面; 体部; 回転ナデ. 見込ケズリのちナデ. 高台内側; 回転ケズリのちナデ.	須恵器. ろくろ回転は時計回り. 底径 (9.5) cm.
47-1	甕	No13トレンチ	H 10	明茶褐色.	砂粒~細砂粒を含む. 石英, 黒色粒.	ナデ. 口縁部付近; ユビオサエのちナデ.	
47-2	甕	No13トレンチ	H 10	外面; 暗茶褐色. 内面; 暗黄褐色.	砂粒~細砂粒を含む. 石英, 角閃石.	ナデ. 突帯付近; ユビオサエのちナデ.	外面; スス付着.
47-3	鉢	No13トレンチ	H 10	明橙褐色.	細砂粒を含む. 角閃石, 黒色粒.	口縁部付近; ユビオサエのちナデ. 他; ケズリのちナデ.	口径 (22.3) cm.
47-4	高坏	No13トレンチ	H 10	外面; (赤色顔料付着のため) 赤色. 内面; 明灰褐色.	砂粒~細砂粒を含む. 赤色粒, 黒色粒.	外面; 縦方向のケンマ. 内面; ナデ.	外面; 赤色顔料. 脚径 (9.4) cm.
47-7	大甕?	No13トレンチ	P 73	外面; (自然釉) 暗灰褐色. 内面; 明灰褐色.	細砂粒を含む. 赤色粒.	外面; 格子目状のタタキ. 内面; 同心円状のあて具痕.	須恵器. 傾き不明.
49-1	甕	No14トレンチ	H 13	外面; 明黄褐色. 内面; (欠損のため) 不明.	細砂粒を含む. 黒色粒.	外面; ナデ.	底径6.3cm.
51-1	甕?	No15トレンチ	H 14	外面; 黒色. 内面; 暗茶褐色.	砂粒を含む. 石英, 角閃石, 白色粒, 赤色粒.	外面; 横方向のナデ. 内面; ヨコナデ.	
51-2	高坏	No15トレンチ	H 14	淡橙白色.	砂粒~細砂粒を含む. 石英, 角閃石, 白色粒, 赤色粒, 黒色粒.	ナデ.	
51-3	甕	No15トレンチ	P 88	外面; 暗赤褐色. 内面; 茶褐色~黒色.	砂粒を含む. 石英, 角閃石, 白色粒.	外面; ナデ. 内面; 横方向のナデ.	
51-4	甕?	No15トレンチ	P 104	外面; 淡赤褐色. 内面; 赤褐色.	砂粒~細砂粒を含む. 石英, 角閃石, 白色粒, 赤色粒, 黒色粒.	外面; ナデ. 内面; ユビオサエのちナデ.	刻み; ハケ目原体による.
51-5	甕	No15トレンチ	P 105	外面; 橙白色~灰白色. 内面; 黄灰白色.	石英, 角閃石, 白色粒, 赤色粒, 黒色粒.	外面; ユビオサエのちナデ. 内面; ヘラケズリのちナデ.	脚径9.7cm.
53-1	深鉢	No16トレンチ	S D 7	外面; 暗黄灰黒色. 内面; 茶褐色.	粗砂粒を含む. 石英, 白色粒.	外面; ユビオサエ. 内面; ハケ.	底径 (7.6) cm.
53-2	甕	No16トレンチ	S D 7	橙白色.	石英, 角閃石, 白色粒を含む.	ナデ.	
53-3	甕	No16トレンチ	S D 7	外面; 明橙白色. 内面; 灰黒色.	石英, 角閃石, 白色粒, 赤色粒, 黒色粒.	外面; ハケ. 内面; ユビオサエ.	
53-4	甕?	No16トレンチ	S D 7	明黄褐色.	粗砂粒を含む. 石英, 角閃石.	ヨコナデ.	脚径 (9.1) cm.
53-5	甕?	No16トレンチ	S D 7	外面; (赤色顔料付着のため) 赤色. 内面; 黒色.	石英, 角閃石, 黒色粒.	外面; ヨコナデ. 内面; ユビオサエ.	外面; 赤色顔料付着.
53-6	甕?	No16トレンチ	S D 7	外面; (赤色顔料のため) 赤色. 内面; 明橙褐色.	石英, 角閃石, 白色粒, 黒色粒.	外面; 横方向のナデ. 内面; ユビオサエのち横方向のナデ.	外面; 摩滅している.

図番号	器種	出土区	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
53-7	高坏	No16トレンチ	S D 7	外面; (赤色顔料 付着により) 赤色。 内面; 橙白色。	石英, 角閃石, 白色 粒, 赤色粒, 黒色粒。	外面; 縦方向のミガキ。	外面; 赤色顔料付 着。
53-8	碗	No16トレンチ	S D 7	明茶褐色。	石英, 角閃石, 白色 粒, 赤色粒。	ナデ。	脚径 (6.9) cm。
53-9	甕	No16トレンチ	S K 2	明橙白色。	細砂粒を含む。	ヨコナデ。	一部に赤色顔料が 付着している。
55-1	甕	No17トレンチ	S K 3	外面; 明灰褐色。 内面; 明茶褐色。	砂粒を含む。石英, 赤色粒。	内面; ヨコナデ。外面; 剝落のため不明。	傾き不明。
55-2	甕	No17トレンチ	S K 3	外面; 明橙褐色。 内面; 明橙褐色~ 明灰褐色。	砂粒~細砂粒を含む。 角閃石, 黒色粒, 赤 色粒。	(摩滅のため) 不明。	傾き不明。
55-3	甕	No17トレンチ	S K 3	外面; 明橙褐色。 内面; 明茶褐色。	砂粒~細砂粒を含む。 石英, 白色粒, 黒色 粒。	ユビオサエのちナデ。	
55-4	壺	No17トレンチ	S K 3	外面; 暗橙褐色。 内面; 茶褐色。	2-4mm大の*を微 量含む。細砂粒を含 む。石英, 黒色粒。	外面; ハケのち丁寧な ナデ。内面; ハケのち ナデ (ハケ具の押え痕 が数条残存)。	胴部最大径 (10.7) cm。
55-5	高坏?	No17トレンチ	S K 3	明灰褐色。	細砂粒を含む。	ヨコナデ。	傾き不明。
55-6	高坏	No17トレンチ	S K 3	外面; 明橙褐色。 内面; 明橙褐色~ 暗灰褐色。	砂粒~細砂粒を含む。 角閃石, 赤色粒, 黒 色粒。	摩滅のため不明。	
55-7	埴	No17トレンチ	S K 3	外面; (赤色顔料 付着のため) 赤橙 色。内面; 暗橙褐色。	細砂粒を含む。石英, 角閃石, 白色粒, 黒 色粒。	ナデ。内面; ユビオサ エ。	外面; 赤色顔料付 着。
56-1	壺	No 9 トレンチ	I	濁褐色。	石英, 角閃石を含む。	外面; ユビオサエ。内 面; ユビオサエのちナデ。	口径 (12.0) cm。
56-2	壺	No 8 トレンチ	I	外面; 暗褐色。内 面; 淡黄白色。	石英・角閃石。	外面; ナデ。内面; ハ ケのちナデ。	
56-3	長頸 壺?	No 8 トレンチ	I	外面; 淡青灰白色。 内面; 濁青灰褐色。	微細な砂粒を含む。 角閃石。	外面; 回転ナデ。内面; ユビオサエのちナデ。	
56-4	高坏	No 8 トレンチ	I b	淡濁白褐色。	ごく微細な砂粒を含 む。雲母?	外面; ユビオサエのち ナデのちケンマ。内面; ユビオサエのちナデ。	脚径 (10.2) cm。
56-5	高坏	不明	I	褐色。	砂粒を多く含む。	外面; (縦方向の) ケ ンマ。内面; ユビオサ エのちケズリのちナデ。	
56-6	碗	No 8 トレンチ	I b	淡黄白褐色。	微細な砂粒を含む。	外面; 回転ナデ。内面; 回転ナデ。見込部分に はユビオサエ痕もみら れる。	内・外面; 赤色 (外面; 摩滅のた め不詳) 脚径 (8.05) cm。
56-7	碗	No 8 トレンチ	I b	淡黄白色。内面; 一部赤褐色 (摩滅 のため不詳)	微細な砂粒を含む。	外面; ユビオサエのち ナデ。高台付近; 回転 ナデ。内面; ハケのち 丁寧なナデ。	内面; 赤色。脚径 8.3cm。
56-8	坏	不明	I	外面; 青灰色。内 面; 青灰白色。	微細な砂粒を含む。	外面; 回転ナデ。高台; 回転ナデ。高台見込; ユビオサエのちナデ。 内面; ナデ。	須恵器。脚径 (8.1) cm。
56-9	碗	No 2 トレンチ	I	淡青白色。	砂粒を若干含む。胎 土の色調は淡黄白色。	外面; ケズリのち回転 ナデのち施軸。内面; 回転ナデのち施軸。高 台; 削りだし。	脚径 (5.4) cm。
56-10	坏	No 4 トレンチ +No 9 トレン チ	I	淡黄白色。	微細な砂粒を含む。	外面・内面; 回転ナデ。 底面; ヘラ切りケズリ のちナデ。	外面; 赤。墨書あ り。口径 (12.7) cm。底径6.22cm。 器高5.3cm。
57-1	甕	No14トレンチ	II	暗茶褐色。	細砂粒を含む。黒色粒。	ヨコナデ。	
57-2	甕	No14トレンチ	II	外面・内面; 明橙 褐色。脚部内面; 暗灰褐色。	粗砂粒~細砂粒を含 む。石英, 角閃石, 白色粒, 黒色粒。	ユビオサエのちナデ。	
57-3	坏	No11トレンチ	II	外面; 明橙褐色。 内面; 橙褐色。	細砂粒を含む。赤色 粒, 黒色粒。	内面; ユビオサエのち ナデ。外面; ナデ。	底径 (6.3) cm。
57-4	高坏	No14トレンチ	II	明橙褐色。	細砂粒を含む。白色 粒, 黒色粒。	ユビオサエのちナデ。	
57-5	高坏?	No12トレンチ	II	外面; 暗黄茶褐色。 内面; 黒色。	角閃石, 白色粒, 黒 色粒を含む。	外面; ユビオサエのち ナデ。	

図番号	器種	出土区	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
57-6	高坏	不明	Ⅱ	外面：淡黄白色。 内面：淡濁褐色。	微細な砂粒を含む。	ナデ。	
57-7	坏	No10トレンチ	Ⅱ	灰褐色。	細砂粒を含む。黒色粒。	回転ナデ。	口径(13.3)cm。底径4.2cm。底径(9.3)cm。
57-8	壺?	No16トレンチ	Ⅱ	灰色。	微細な砂粒を含む。白色粒。	外面体部；ケズリのちナデ。底面；ナデ。内面；回転ナデ。	底径(7.8)cm。
57-9	碗	No12トレンチ	Ⅱ	外面：淡黄白色。 内面：黒褐色。	微細な砂粒を含む。石英、角閃石。	外面；不明。内面；ユビオサエのちケンマ?	内黒土師器。内外面とも摩滅。底径(9.1)cm。
57-10	坏	No10トレンチ	Ⅱ	灰褐色。外面；自然釉。	微細な砂粒を含む。白色粒。黒色粒。	ヨコナデ。	底径(9.2)cm。
57-11	浅鉢	No13トレンチ	Ⅱ	外面；暗茶褐色。 内面；黒褐色。	細砂粒を含む。赤色粒。	ケンマ。	
57-12	甕	No10トレンチ	Ⅱ	外面；暗橙褐色。 内面；明茶褐色。	粗砂粒～細砂粒を含む。石英、角閃石、赤色粒、黒色粒。	外面；一条の横位の沈線と下位に縦方向のハケ目あり。	傾き不明。
57-13	不明	No10トレンチ	Ⅱ	外面；暗灰褐色。 内面；灰褐色。	砂粒を含む。白色粒。黒色粒。	ヨコナデ。	
57-14	不明	No10トレンチ	Ⅱ	外面；黒褐色。内面；灰白色。	微細な砂粒を含む。	ヨコナデ。	須恵器。
57-15	高坏?	No10トレンチ	Ⅱ	暗灰褐色。	微細な砂粒を含む。	ヨコナデ。	須恵器。
57-16	坏	No11トレンチ	Ⅱ	淡濁灰色。	微細な砂粒を含む。黒色粒。	外面；ケズリのち回転ナデ。底面；高台周縁回転ナデ。見込部ナデ。内面；体部回転ナデ。見込ナデ。	
57-17	坏	No11トレンチ	Ⅱ	灰白色。	微細な砂粒を含む。	外面；ナデ。回転ナデ(高台部)内面；回転ナデ。ナデ。	底径(8.6)cm。
57-18	坏	No10トレンチ	Ⅱ	明灰褐色。	微細な砂粒を含む。明灰褐色。	ナデ。脚部；ヨコナデ。	一部自然釉付着。
57-19	大甕?	No11トレンチ	Ⅱ	外面；(釉付)明緑灰色。内面；灰色。	砂粒を少量含む。白色粒。	外面；タタキ。内面；同心円状のタタキ。	外面；自然釉付着。
58-1	不明	不明	Ⅲ a	外面；茶褐色。内面；淡茶褐色。	石英、角閃石、白色粒、赤色粒、黒色粒。	ナデ、ハケ。	
58-2	坏	不明	Ⅲ a	灰白色。	微細な砂粒を含む。	回転ナデ。	
58-3	長頸壺	No13トレンチ	Ⅲ a	外面；明灰褐色。 内面；灰褐色。	砂粒を含む。角閃石、白色粒、赤色粒。	外面；ミガキ。内面；ナデ。	
58-5	甕	No13トレンチ	Ⅲ b	外面；暗褐色。内面；黄褐色。	石英、角閃石。	外面；ユビオサエのちナデ。内面；ユビオサエのちハケのちナデ。	
58-6	甕	No1トレンチ	Ⅲ b	明橙白色～暗橙白色。	粗砂粒を含む。石英、角閃石。	外面；ハケ。内面；ユビオサエ。	
58-7	甕	No1トレンチ	Ⅲ b	外面；赤褐色。内面；赤褐色～黒色。	粗砂粒を含む。石英、角閃石、白色粒、赤色粒、黒色粒。	ヨコナデ。	
58-8	壺	不明	Ⅲ b	外面；淡褐色。内面；淡灰褐色。	石英、角閃石を含む。	ユビオサエのちナデ。	底径(7.0)cm。
58-9	埴	No13トレンチ	Ⅲ b	外面；(丹塗りのため)赤色。内面；淡褐色。	微細な砂粒を含む。	外面；研磨(横方向)、底面はナデ。内面；丁寧なナデ。	底径(3.5)cm。
58-10	高坏	No11トレンチ	Ⅲ b	外面；(丹塗りのため)赤色。内面；灰褐色。	微細な砂粒を含む。角閃石、黒色粒。	外面；ケンマ。内面；ハケのちナデ。	外面；赤色。
58-11	高坏	No13トレンチ	Ⅲ b	黒灰色。	細砂粒を含む。白色粒。	外面；ミガキ。内面；ナデ。	
58-12	高坏	No11トレンチ	Ⅲ b	淡褐色。	石英、角閃石を含む。	ユビオサエのちナデ。	外面；赤色顔料付着。
58-13	高坏	No11トレンチ	Ⅲ b	(丹塗りのため)赤褐色。	細砂粒を含む。赤色粒、黒色粒。	外面；ナデのちケンマ。内面；ユビオサエのちナデ。	外面；赤色顔料付着。内面；爪跡(?)あり。
58-14	高坏	No11トレンチ	Ⅲ b	明橙褐色。	砂粒～細砂粒を含む。赤色粒、黒色粒。	(摩滅のため)不明。	摩滅している。
58-15	坏	No13トレンチ	Ⅲ b	外面；青灰色。内面；青灰白色。	砂粒を少し含む。白色粒。	外面；体部ナデ。底面；回転ナデ。	須恵器。
58-16	碗	No11トレンチ	Ⅲ b	橙白色。	細砂粒を含む。	ナデ。	底径(8.2)cm。
58-17	坏	No11トレンチ	Ⅲ b	外面；黄白色。内面；黄褐色。	石英を含む。3mm大の砂粒を含む。	外面；回転ナデ。底面；ユビオサエのちナデ。内面；回転ナデ。	底径(8.2)cm。

図番号	器種	出土区	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
58-18	坏	不明	Ⅲ b	外面；黄白色。内面；黒灰色。	微細な砂粒を含む。白色粒。	外面；回転ナデ。内面；ナデ。	
58-19	坏蓋	No12トレンチ	Ⅲ b	淡濁灰色。	微細な砂粒を含む。雲母。	回転ナデ。	
58-20	坏	No12トレンチ	Ⅲ b	外面；灰褐色。内面；明茶褐色。	微細な砂粒を含む。白色粒。	外面；回転ケズリのちナデ。内面；ユビオサエのちナデ。	須恵器。
58-21	坏	不明	Ⅲ b	淡青灰色。	微細な砂粒を含む。白色粒。	回転ナデ。	
58-22	壺	不明	Ⅲ b	内外面とも緑色釉かかる	微細な砂粒を含む。	ユビオサエのちナデ。	釉は風化している。
58-23	大皿	No11トレンチ	Ⅲ b	色調；褐色。釉調；暗茶褐色。	微細な砂粒を少量含む。	回転ケズリ。	
59-1	鉢	No13トレンチ	Ⅲ b	橙褐色。	砂粒～細砂粒を含む。石英、角閃石、黒色粒。	ユビオサエのちナデ。	底面；木の葉圧痕あり。口径；長径19.4cm。短径14.3cm。器高6.4cm。底径；長径13.9cm。短径9.5cm。
59-2		No11トレンチ	Ⅲ b	(丹塗りのため) 赤色。	細砂粒を含む。石英、白色粒。	ユビオサエのちナデ。	摩滅している。
59-3	鉢?	不明	Ⅲ b	外面；黒色。内面；灰黒色。	粗砂粒を含む。白色粒、黒色粒。	ヨコナデ。	
59-4	甕	No14トレンチ	Ⅲ b	外面；暗褐色。一部(ススのため) 黒色。内面；褐色。	粗砂粒～砂粒を含む。石英、角閃石。	外面；ケズリのちユビオサエのちナデ。	外面上部にスス付着。口径(21.5)cm。
59-8	甕	不明	Ⅳ	茶褐色。	砂粒を含む。金雲母、白色粒。	ヨコナデ。	
59-9	壺	No16トレンチ	Ⅳ	内面；明橙褐色。外面；明茶褐色。	砂粒～細砂粒を含む。石英、角閃石、白色粒、赤色粒。	外面；ケズリのちナデ。内面；ハケ。	外面；ナデが粗雑でケズリ痕残る。

表10 郡元団地S・T-6・7区出土石器計測表

図番号	器種	出土トレンチ	出土層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
57-20	石庖丁?	No12トレンチ	2	5.1	3.5	0.4	16.0
57-21	石斧	No11トレンチ	2	6.5	6.2	1.9	140
58-4	砥石?	No10トレンチ	3 b	11.0	7.5	1.5	200
59-5	不明	No13トレンチ	3 b	6.7	5.4+α	5.5	50
59-6	砥石	No11トレンチ	3 b	9.3	4.3	1.8	150
59-7	石庖丁	No14トレンチ	3 b	3.6	3.9	0.6	10
44	石斧	No12トレンチ	S D 5	9.8+α	9.2	1.4	154
28-3		No2トレンチ	H 1	3.3+α	3.9+α	0.7+α	8
42-5	石庖丁	No12トレンチ	H14	3.7	9.3	0.6	50
47-5	敲打器	No13トレンチ	H10	15.3	5.9	4.8	690
47-6	砥石	No13トレンチ	H11	2.9	14.6	3.2	302

表11 郡元団地H-11・12区出土遺物観察表

図番号	器種	出土区	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
64-1	浅鉢	f・g-10	河1	外面；暗茶褐色。内面；黒褐色。	細砂粒を含む。	内面；貝殻状痕、ユビオサエ。	外面は摩滅している。
64-2	甕	f・g-10	河1	外面；黄褐色。内面；灰褐色。突帯部；明茶褐色。	微細。角閃石を含む。	ユビオサエ。	摩滅が激しい。
64-3	深鉢	f・g-10	河1	暗茶褐色。	砂粒～細砂粒を含む。角閃石を含む。	ユビオサエのちナデ。	突帯に刻みが入る。摩滅が激しい。
64-4	甕	i-8	河1	外面；明橙赤色。内面；黒灰色。脚内面；明橙赤色。	石英、角閃石、金雲母、白色粒、黒色粒、小礫を含む。	ユビオサエ、ナデ；脚内面；ナデ。	
64-5	甕	h-9	河1	明橙褐色。	微細。黒色粒を含む。	摩滅のため不明。	
64-6	壺	g-1	河1	外面；明橙褐色。内面；灰褐色。	砂粒を多く含む。石英、角閃石を含む。礫を少量含む。	外面；ユビオサエ	底径6.6cm。内面；は摩滅のため調整不明。
64-7	高坏	f-2	河1	赤色顔料付着のため褐色。	微細砂粒を含む。	外面；ハケのちナデ。内面；ナデ。	外面に砂粒が多数付着している。

図番号	器種	出土区	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
64-8	壺	f-g.10	河1	口唇部；黒色。口唇部以下；暗茶紫色。内面；緑黒色。	微細。	自然釉がかかる。	須恵器。口径(20)cm。
64-9	碗	h-10	河1	内面；灰黒色。脚外・内面；橙白色。	石英、角閃石、黒色粒を含む。	外面；ユビオサエのちナデ。内面；ナデ。脚内面；ナデ。	内黒土師器。底径8.2cm。
64-10	碗	f-1	河1	透明釉。緑色。	白色。	施釉。	青磁。
64-11	碗	f-1	河1	透明釉。緑色。	灰褐色。	施釉。内面；退化した連弁文。	青磁。
64-12	坏	h-9	河1	不透明釉。青白色。	灰褐色。	施釉。	青磁。釉が風化している。
64-13	坏	h-9	河1	透明釉。青色。	灰褐色。	施釉。	青磁。
64-14	坏	f-2	河1	透明釉。青色。	灰褐色。	施釉。	青磁。
64-15	皿	h-9	河1	不透明釉。緑白色。	明灰色。	施釉。	青磁。
64-16	碗	h-9	河1	不透明釉。緑色。	明灰色。	施釉。	青磁。内面には図柄あり。
64-17	皿	g-10	河1	透明釉。緑灰色。貫入あり。	明灰色。	施釉。	青磁。外面に一条の横線。
64-18	碗	f-2	河1	透明釉。青色。	灰白色。	施釉。外面、内面の見込み部分は無釉。	底径(7.1)cm。
64-19	羽釜?	h-9	河1	外面；暗灰褐色。内面；明灰褐色。	微細。	外面；ユビオサエ。内面；ナデ。	
64-20	碗	f-2	河1	透明釉。白色。	白色。	施釉。	重ね焼の跡が残る。底径4.2cm。
64-21	碗	g-1	河1	透明釉。薄緑色。	灰褐色。	施釉。	底径(4.3)cm。
64-22	碗	f-1	河1	透明釉。灰色がかつた青緑色。貫入あり。	微細。黄白色～白っぽい赤褐色。	高台皿付け部のみ無釉(かきとり)。	染め付け。口径(10.3)cm。底径(6.3)cm。器高2.35cm。
65-1	擂鉢	f-2	河1	外面；赤褐色～暗茶黒褐色。内面；茶褐色～黒色。	白色、黒色の粗砂粒を含む。	ヨコナデ。	口径(24.6)cm。
65-2	鉢	f-1	河1	外面；暗褐色。内面；黒灰色。	白色粒を含む。	ヨコナデ。	口径(26.6)cm。
65-3	擂鉢	不明	河1	外面；不透明釉。暗茶褐色。内面；不透明釉。暗褐色。	微細。茶褐色。	外面；ハケ目状工具による調整。内面；ナデ。口縁部上面；工具による調整。	口縁部注口部分には施釉。口径30.9cm。底径12cm。器高14.2cm。
68-1	不明	h-6	河3	明茶褐色。	石英、角閃石、白色粒、赤色粒、黒色粒を含む。	外面；沈線。内面；ナデ。	縄文土器?
68-2	深鉢	i-5	河3	外面；茶褐色。内面；暗灰褐色。	粗砂粒を多く含む。石英、角閃石、白色粒、黒色粒を含む。	摩滅のため不明。	摩滅が激しい。
68-3	深鉢	不明	河3	底面外面；明茶褐色。他；黒色。	砂粒を非常に多く含む。石英、角閃石、白色粒、小礫を含む。	ナデ?(摩滅のため不明)	摩滅が激しい。底径(8.96)cm。
68-4	甕	h-6	河3	茶褐色。	砂粒を多く含む。石英、角閃石、白色粒を含む。	口唇部付近・突帯付近；ヨコナデ。他外面；ハケ(?)のちナデ。内面；丁寧なナデ。	接合線とハケ原体の跡が残る。
68-5	甕	h-6	河3	外面；黄褐色。内面；暗茶褐色。	石英、角閃石、白色粒、赤色粒、黒色粒を含む。	ユビオサエ、ナデ。	
68-6	甕	不明	河3	茶褐色～灰褐色。	砂粒を多く含む。金雲母、雲母、白色粒、黒色粒を含む。	ヨコナデ?	摩滅している。口径(24.6)cm。
68-7	甕	i-4	河3	外面；暗褐色。内面。口唇部下部；黒色。内面他；褐色。	粗砂粒～砂粒を多く含む。石英、角閃石、金雲母、白色粒を含む。	口唇部。突帯付近；ヨコナデ。他；ハケ(?)のちナデ。	外面にスガが付着している。
68-8	甕	i-4	河3古	外面；黄褐色～橙褐色。	砂粒を多く含む。石英、角閃石、白色粒を含む。	外面；ハケのちナデ?内面；摩滅のため不明。	摩滅が激しい。
68-9	甕	h-5	河3古	外面；明茶褐色。内面；黒褐色。	細砂粒を含む。赤色粒、黒色粒を含む。	ユビオサエのちナデ。	

図番号	器種	出土区	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
68-10	甕	i-5	河3古	外面；橙褐色～黄灰色，一部黒灰色。内面；暗褐色。	粗砂～砂粒を多く含む。石英，角閃石，白色粒，赤色粒を含む。	外面；ナデ。内面上部；ハケ(?)のちナデ。内面下部；ナデ。脚台内；ナデ。	外面；二次焼成を受ける。
68-11	甕	i-4	河3古	外面；明橙褐色～黄褐色。内面；暗褐色～黒灰色。脚台内面；黒灰色～灰褐色。	粗砂～砂粒を多く含む。石英，角閃石，雲母，白色粒を含む。	脚端部付近；ヨコナデ。外面；ハケのちナデ。内面；ナデ。脚台内面；ナデ。	脚径 (10.65) cm.
68-12	壺	g-6	河3 P ilt	明茶褐色。	石英，角閃石，白色粒，黒色粒を含む。	外面；ハケ目，ナデ，ユビオサエ。内面；摩滅のため不明。	底径 (8.0) cm
68-13	壺	i-4	河3古	外面；輪状に黒色。他赤褐色。内面上部；黒灰色。内面下部；褐色。	礫。粗砂粒を非常に多く含む。石英，角閃石，白色粒，赤色粒を含む。	外面上部；ハケ(?)のちナデ。他；ナデ。	外面；2次焼成を受ける。
68-14	鉢	i-5	河3	外面；橙褐色。下部黒灰色。内面；黄褐色。横半分黒色。	粗砂粒，砂粒を含む。白色粒，赤色粒を含む。	外面；ナデ？内面；ハケ？のちナデ。(摩滅のため不明)。	摩滅が激しい。
68-15	鉢	不明	河3	明褐色。	砂粒を多く含む。石英，角閃石，白色粒，赤色粒を含む。	体部外面；ハケ(5本/cm)のちナデ。脚部内・外面；ナデ。体部内面；はけ(5本/cm)のちナデ。	
68-16	鉢	h-5	河3	外面；赤褐色。内面；赤褐色～黒灰色。	石英，角閃石，白色粒，黒色粒を含む。	外面；ユビオサエ，ナデ。内面；ヘラミガキ。	底径6.7cm
68-17	高坏	h-6	河3	外面；丹塗りのため赤色。内面；明茶褐色。	微細な砂粒を含む。白色粒，黒色粒を含む。	外面；ミガキ。内面；丁寧なナデ。	赤色顔料付着。
68-18	高坏	i-4	河3	外面；丹塗りのため赤色。内面；灰白色。	砂粒・細砂粒を含む。石英，金雲母，白色粒，赤色粒を含む。	外面；ハケのちミガキ(主に横方向)。内面；(ハケ?)のちナデ。	赤色顔料付着。脚径 (11.8) cm.
68-19	柑	h-5	河3	橙白色～乳白色。	石英，白色粒，黒色粒を含む。	ナデ。	底径3.2cm.
69-1	深鉢	h-6	1	暗褐色。口縁部付近；黒褐色。	砂粒～細砂粒を含む。角閃石。	(摩滅のため)不明。	
69-2	深鉢	不明	1	暗紫灰色。	砂粒を多く含む。石英，角閃石。	(摩滅のため)不明。	摩滅が著しい。
69-3	甕	h-6	1	明橙褐色。	砂粒～細砂粒を含む。石英，角閃石，黒色粒。	外面；ハケ？他；不明。	摩滅が著しい。脚径 (7.7) cm.
69-4	甕	f・g-6	1	外面；茶褐色。内面；暗褐色。	砂粒～細砂粒を含む。角閃石，赤色粒。	(摩滅のため不明)ナデ？	摩滅が著しい。脚径 (6.8) cm.
69-5	甕	不明	1	外面・脚台内面；灰色。内面；赤褐色。	砂粒を多く含む。石英，角閃石，白色粒。	外面；横方向のハケのちナデ。内面・脚台内面；ナデ。	脚径 (11.1) cm.
69-6	鉢？	f・g-6	1	外面；明灰褐色。内面；黒色。	粗砂粒～細砂粒を含む。角閃石，白色粒。	外面；ハケ。内面；ハケのちユビオサエ。	摩滅している。
69-7	鉢？	f・g-6	1	赤褐色。	細砂粒を含む。白色粒，黒色粒。	(摩滅のため)不明。	摩滅が著しい。
69-8	壺	h-6	1	外面；明橙色。内面；淡褐色～黒灰色。	粗砂粒～細砂粒を多く含む。石英，角閃石，金雲母，白色粒，赤色粒，黒色粒。	ヨコナデ。	口径 (15.2) cm.
69-9	碗	不明	1	白色の透明釉。	白色。	施釉。	白磁。
69-10	皿	不明	1	青白色の透明釉。	灰白色。微細な白色粒を少し含む。	施釉。	青磁。
69-11	石鍋	不明	1	明灰褐色。		ケズリ。	滑石製。
69-12	深鉢	不明	1	緑褐色の不透明釉。(外面；風化している。)	細砂粒を含む。赤褐色。	外面；横位のカキ目のち施釉。内面；施釉。	口径 (32.2) cm。 底径 (14.9) cm。 器高11.85cm

図番号	器種	出土区	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
70-1	深鉢	h-4	Ⅲ	外面；淡赤褐色。内面；淡赤褐色～灰褐色。	砂粒を多く含む。石英，角閃石，白色粒，赤色粒，黒色粒。	(摩滅のため)不明。	摩滅している。
70-2	甕	i-10	Ⅲ	外面；黄白色。脚台内面；橙白色。内面；黒灰色。	粗砂粒～砂粒を多く含む。石英，角閃石，白色粒，黒色粒。	外面；ハケのちナデ。内面；脚台内面；ナデ。	
70-3	甕	i-10	Ⅲ	外面；黄白色。内面；黒灰色。	粗砂粒～砂粒を多く含む。石英，角閃石，白色粒。	外面；ハケのちナデ。内面；ナデ。	摩滅が著しい。脚径(9.2)cm。
70-4	甕	i-9	Ⅲ	外面；明橙赤色。内面；黒褐色。	粗砂粒を多く含む。石英，角閃石。	外面・脚台内面；ハケのちナデ。内面；ナデ。	脚径(7.4)cm。
70-5	鉢	i-2	Ⅲ	外面・脚台内面；橙白色。内面；橙白色～黒灰色。	砂粒を多く含む。石英，角閃石，赤色粒，黒色粒。	ナデ。	脚径(10.2)cm。
70-6	鉢?	i-10	Ⅲ	外面；黄白色～黒灰色。内面；黒灰色。	粗砂粒～砂粒を多く含む。石英，角閃石，白色粒。	ナデ。	底径8.9cm。
70-7	甕	i-2	Ⅲ	橙白色。	砂粒を多く含む。石英，角閃石，白色粒，赤色粒，黒色粒。	ナデ。	脚径②
70-8	鉢	g-10	Ⅲ	外面；黄白色。内面；褐白色。	細砂粒を含む。赤色粒，黒色粒。	外面；ハケのちナデ。内面；ナデ。	
70-9	壺	i-9・10	Ⅲ	外面；黄褐色。内面；茶褐色。	礫・粗砂粒を多く含む。石英，角閃石，白色粒。	外面；ナデ。内面；(摩滅のため)不明。	
70-10	甌	h-5	Ⅲ	外面；暗灰白色～灰白色。内面；灰白色。	粗砂粒～細砂粒を少し含む。黒色粒。	回転ナデ。外面；自然釉が部分的に付着。	須恵器。胴部最大径(8.7)cm。
70-11	壺	h-2	Ⅲ	明橙褐色。	細砂粒を含む。角閃石，白色粒。	外面；ナデ。内面；ハケのちナデ。底部内面；ユビオサエ。	底径3.9cm。
72-1	甕	h-3	Ⅳ	黄白色。一部；明橙褐色。	粗砂粒～細砂粒を含む。石英，角閃石，黒色粒。	外面；ハケのちナデ。口縁部・突帯部；ユビオサエのちナデ。内面；ナデ。	摩滅している。
72-2	甕	i-10	Ⅳ	黄白色～橙白色。一部；黒色(黒斑)。	砂粒を多く含む。石英，角閃石，白色粒。	ヨコ方向のハケのちナデ。	
72-3	甕	i-10	Ⅳ	橙白色。	砂粒を含む。石英，角閃石，白色粒，黒色粒。	外面；ナデ。ユビオサエ。内面；ハケのちナデ，ユビオサエ。	黒斑あり。
72-4	甕	i-9	Ⅳ	外面；明褐色。内面；暗褐色。	粗砂粒～細砂粒を多く含む。石英，角閃石，赤色粒，黒色粒。	外面；(ハケ?)のちナデ。内面；ナデ。	
72-5	甕	i-10	Ⅳ	外面；暗黄褐色。内面；黒色。	粗砂粒を含む石英，角閃石。	ナデ。	
72-6	甕	i-10	Ⅳ	外面；明茶褐色。内面；暗褐色。	粗砂粒～細砂粒を含む。石英，角閃石。	外面；ハケのちナデ。内面；ナデ。	外面；スス付着。
72-7	甕	i-10	Ⅳ	外面；橙褐色。内面；黒褐色。脚台内面；灰褐色。	砂粒～細砂粒を含む。石英，角閃石，黒色粒。	(ハケ?)のちナデ。	
72-8	甕	h-1	Ⅳ	橙白色。	砂粒～細砂粒を多く含む。石英，角閃石，白色粒，赤色粒，黒色粒。	ナデ。	脚径10.35cm。
72-9	甕	i-2	Ⅳ	外面；橙白色。一部；黒灰色(黒斑のため)。	砂粒を多く含む。石英，角閃石，白色粒，黒色粒。	外面；ハケのちナデ。内面；ユビオサエのちナデ。	脚径10.0cm。
73-1	甕	i-9	Ⅳ	外面・脚台内面；黄褐色。内面；黒色。	粗砂粒～細砂粒を含む。石英，角閃石，黒色粒。	ユビオサエのちナデ。	脚径5.6cm。
73-2	甕	i-4	Ⅳ	外面；脚台内面；橙褐色。内面；明灰褐色。	粗砂粒～細砂粒を含む。石英，角閃石，黒色粒。	ナデ。	摩滅している。脚径11.9cm。
73-3	甕	i-10	Ⅳ	外面；脚台内面；橙褐色。内面；灰褐色。	粗砂粒～細砂粒を含む。礫を少し含む。石英，角閃石，赤色粒。	ナデ。	脚径10.9cm。

図番号	器種	出土区	出土層	色調・釉調	胎土・磁胎	調整・施文	備考
73-4	甕	i-9	IV	外面；明褐色～橙白色。内面・脚台内面；黒色。	粗砂粒～細砂粒を含む。石英、角閃石、白色粒、軽石粒。	外面；(ハケ?)のちナデ。脚台内面；ナデ。	脚径(8.2)cm。
73-5	甕	h・i-10	IV	外面；明橙褐色。内面；明灰褐色。	細砂粒を含む。石英、黒色粒。	ユビオサエのちナデ。	脚径9.4cm。
73-6	鉢	i-10	IV	黄褐色。一部；黒灰色。	砂粒～細砂粒を含む。石英、角閃石。	(?)のちナデ	底径7.7cm。
73-7	壺	i-9	IV	橙褐色。	粗砂粒を含む。角閃石、赤色粒、黒色粒。	(ハケ?)のちナデ。	底径6.75cm。
73-8	高坏	i-4	IV	外面・脚台内面；橙褐色。内面；明橙白色。	細砂粒～微砂粒を含む。角閃石、赤色粒、黒色粒。	ユビオサエのちナデ。	
73-9	高坏	i-9	IV	明灰白色。	細砂粒を含む。石英、角閃石、白色粒。	ナデ。	摩滅している。
73-10	柑	i-9	IV	黄白色。	砂粒～細砂粒を含む。石英、赤色粒、黒色粒。	(?)のちナデ。	胴部最大径7.55cm。底径3.2cm。
73-11	柑	不明	IV	明橙白色～明黄白色。	細砂粒～微砂粒を含む。赤色粒、黒色粒。	ナデ。	胴部最大径5.2cm。
73-12	柑	h-4	IV	灰白色。	細砂粒～微砂粒を含む。黒色粒、赤色粒。	ナデ。	胴部最大径6.0cm。
73-13	柑	i-10	IV	橙白色。	細砂粒を含む。角閃石、白色粒、赤色粒。	ナデ。	
73-14	柑	i-9	IV	外面；黒灰色。内面；明黄白色。	細砂粒を含む。角閃石、雲母、赤色粒。	外面；ナデ。内面；ハケのちナデ。	

表12 郡元団地H-11・12区出土石器計測表

図番号	器種	出土区	出土層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
66-1	不明	h-10	河1	6.3	6.6	1.7	930
66-2	スクレイパー	g-1	河1	5.1	5.0	1.8	48
66-3	石すい	f-2	河1	5.8	5.3	1.6	79
66-4	凹み石	不明	河1	8.3	4.3+ α	2.8	88
71-1	砥石	h-4	Ⅲ	12.1	6.9	5.8	930
71-2	石斧	g-2	Ⅲ	14.0	6.1	3.2	379

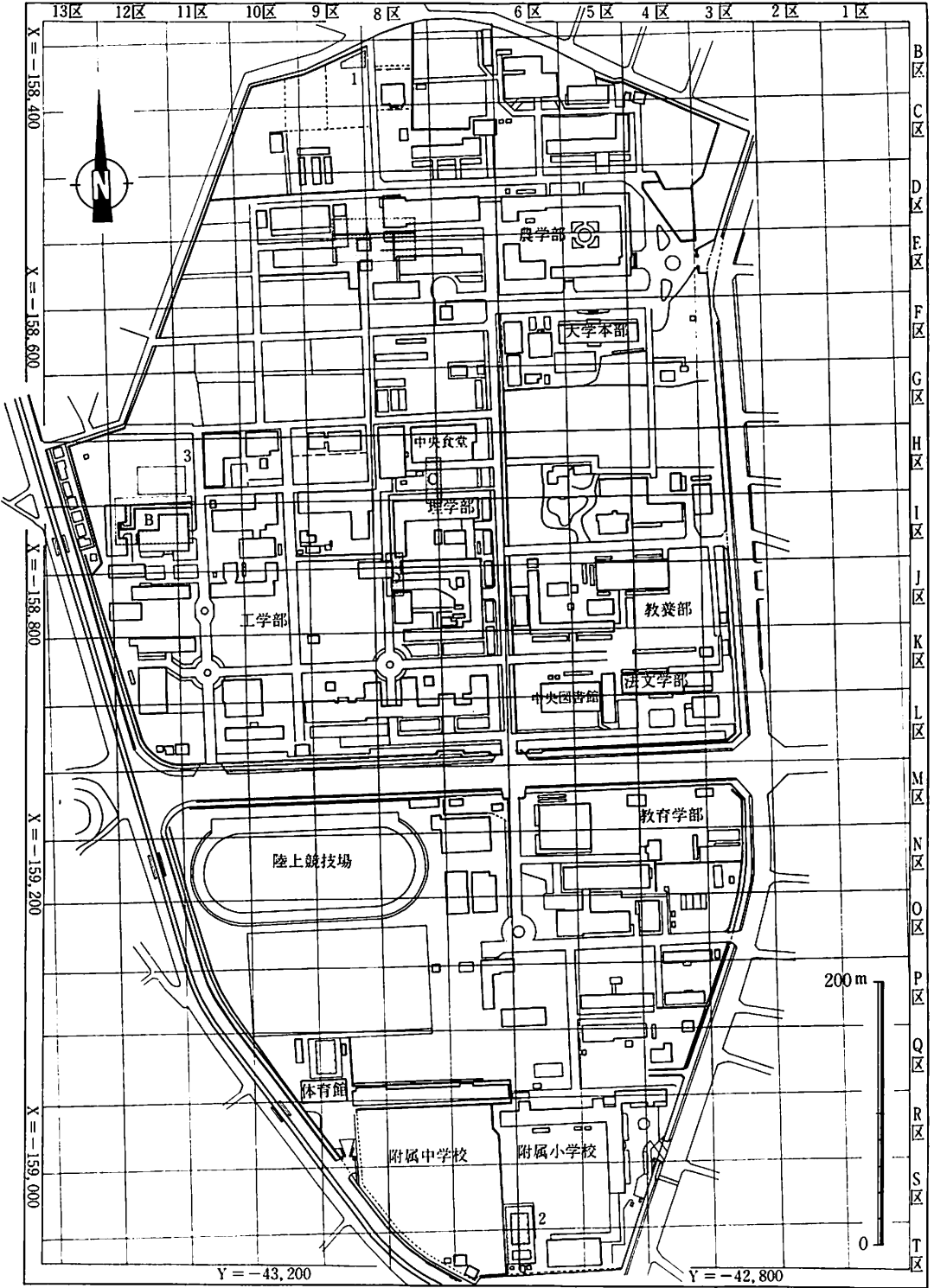
凡例：(外) - 外面, (内) - 内面

備考：() 付法量は、復原したものである。

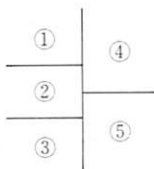
胎土…砂粒の大きさを〈微砂粒・細砂粒・砂粒・粗砂粒・礫〉の5段階で、砂粒の混入の多さを〈少し含む・含む・多く含む〉の3段階で示した。

圖 版

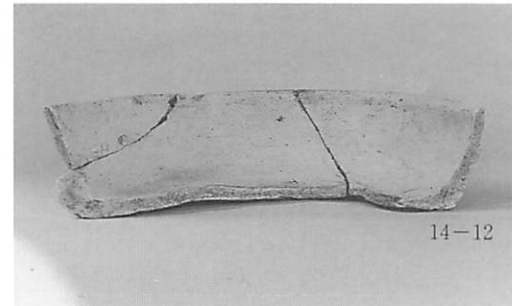
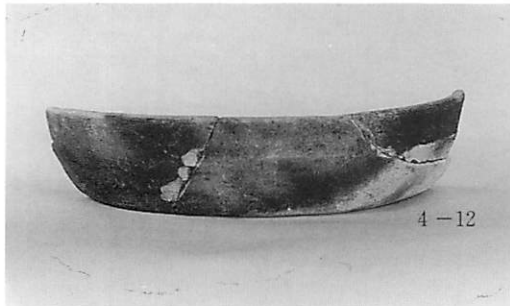
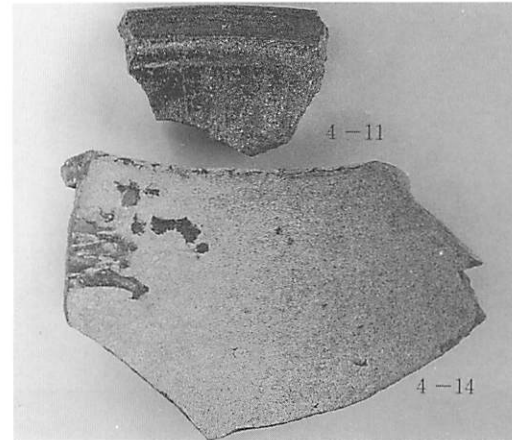
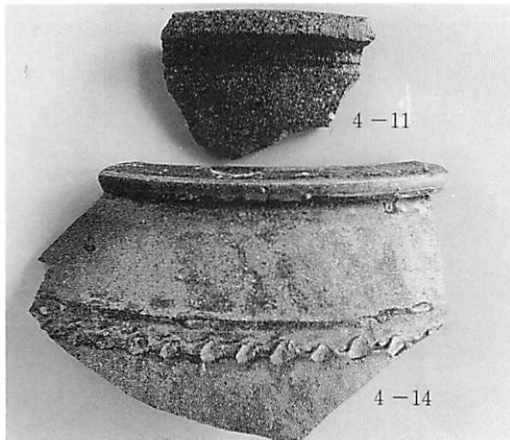
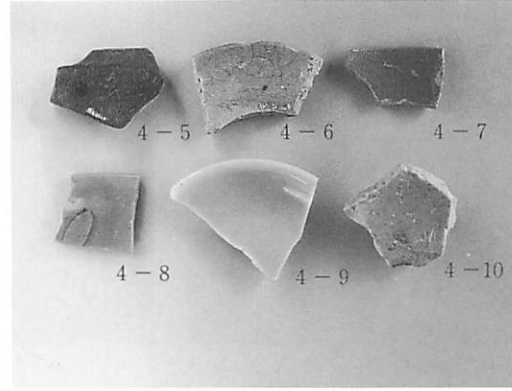
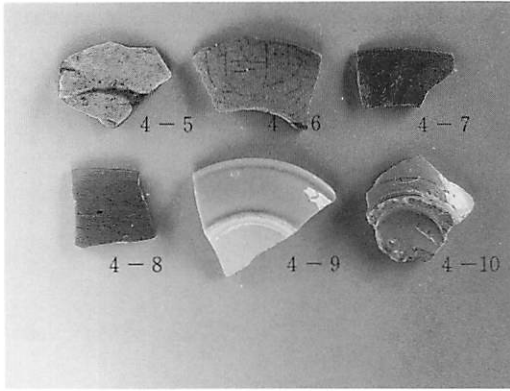
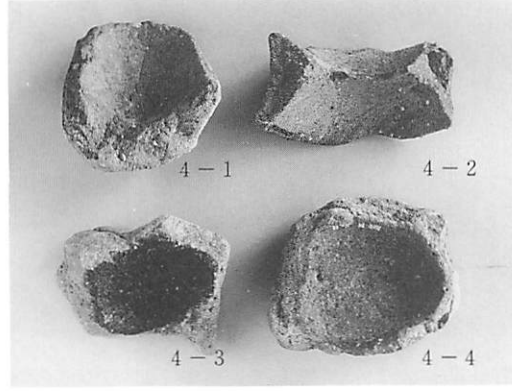
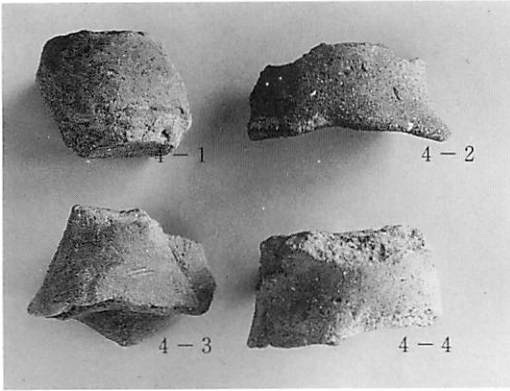
図版1 鹿児島大学郡元団地構内図 (1/5,000)



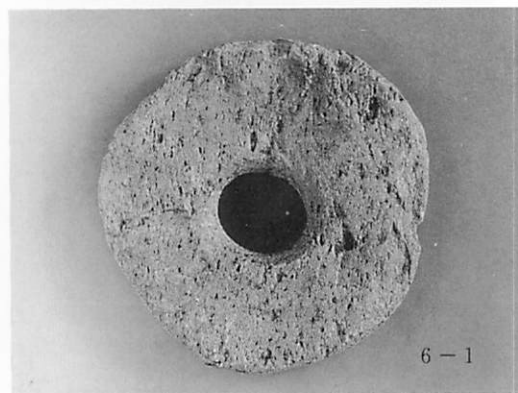
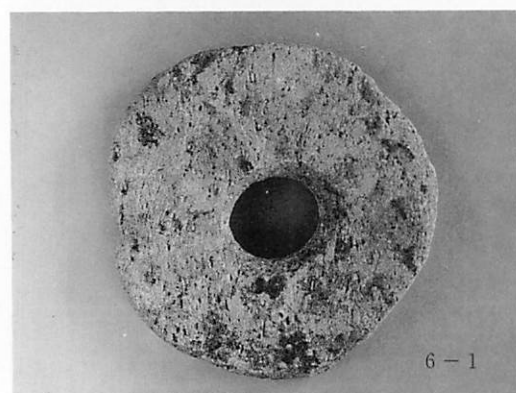
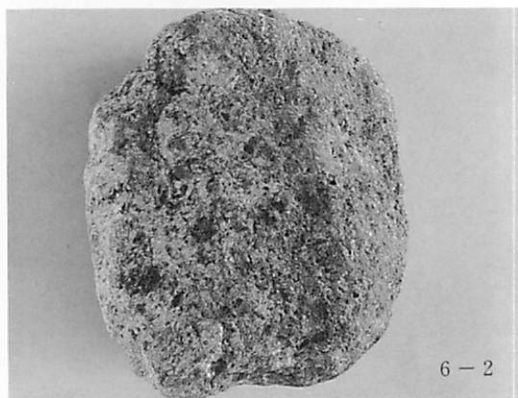
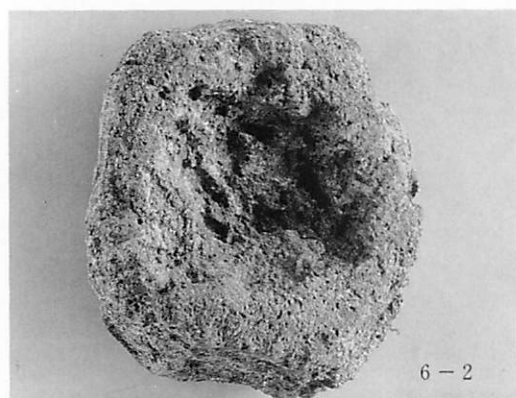
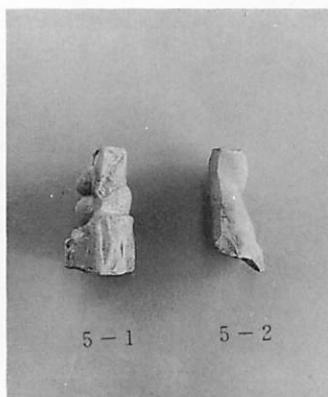
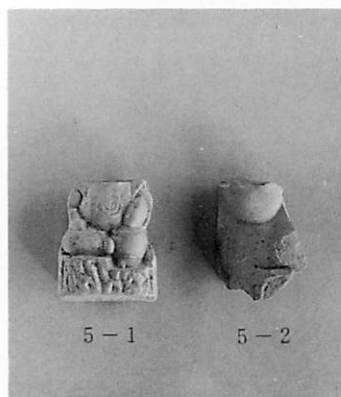
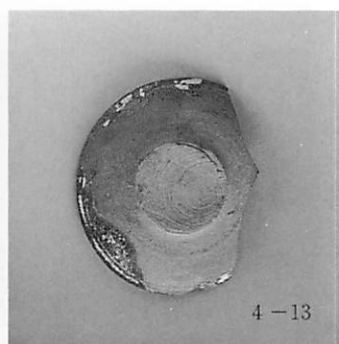
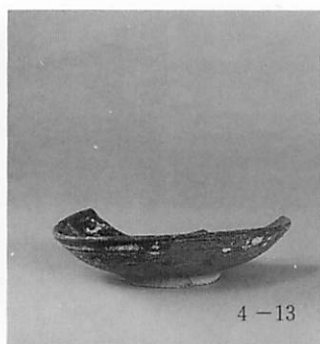
1. 課外活動施設 (仮舎) 建設予定地
 2. 教育学部附属小学校プール上屋取設予定地
 3. 工学部情報工学科校舎建設予定地
- A～D. 鹿児島大学郡元地区市水 (飲料) 配管工事に伴う立合調査地点



- ① 調査地点全景 (北東から)
- ② No.1 トレンチ東壁
- ③ No.1 トレンチ北壁
- ④ No.1 トレンチ4層上面検出遺構 (西から)
- ⑤ No.2 トレンチ完掘状況 (西から)

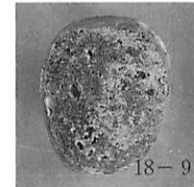
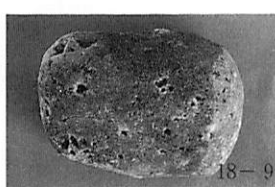
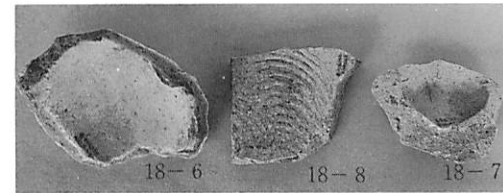
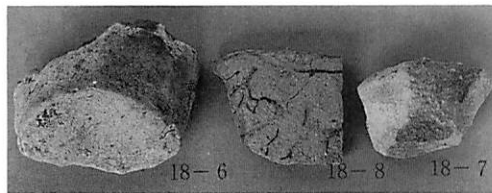
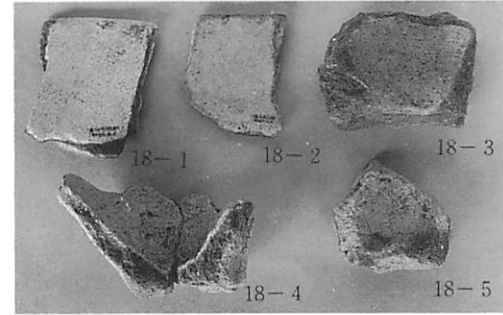
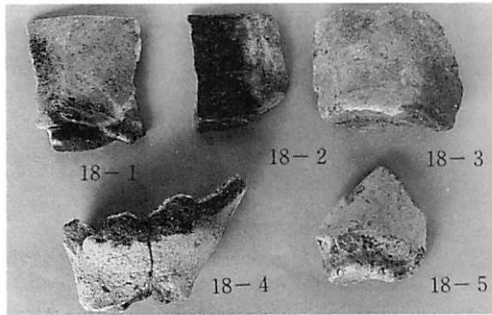
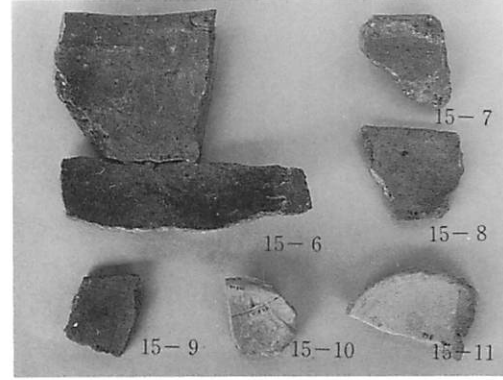
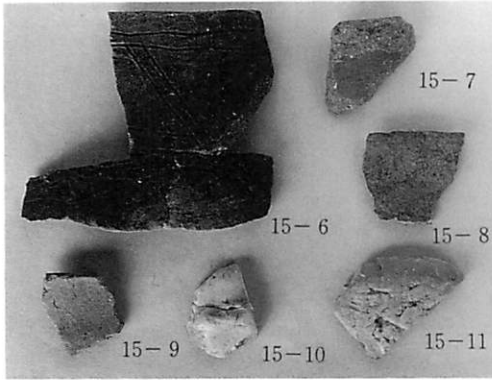
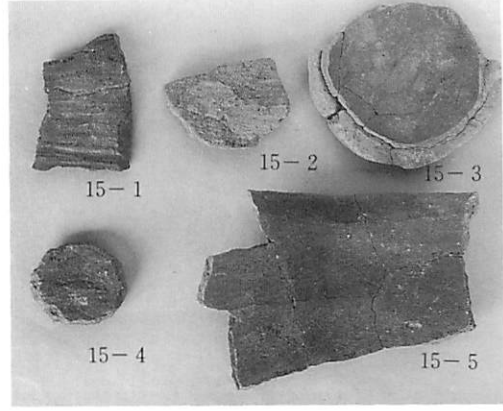
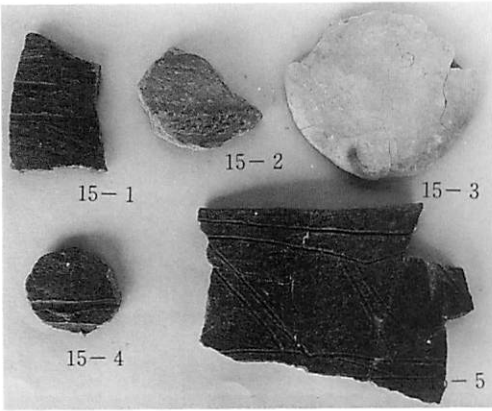


出土遺物(1)



出土遺物(2)

図版 5
平成2年度立合調査時出土遺物

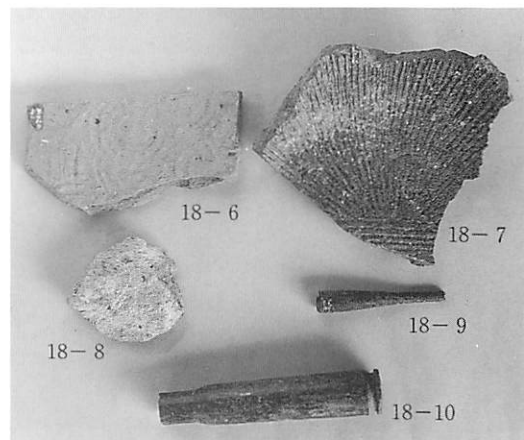
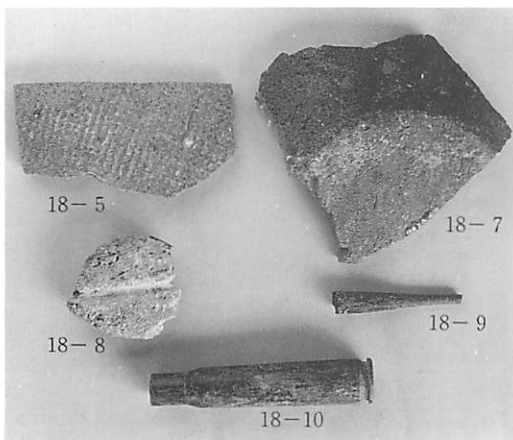
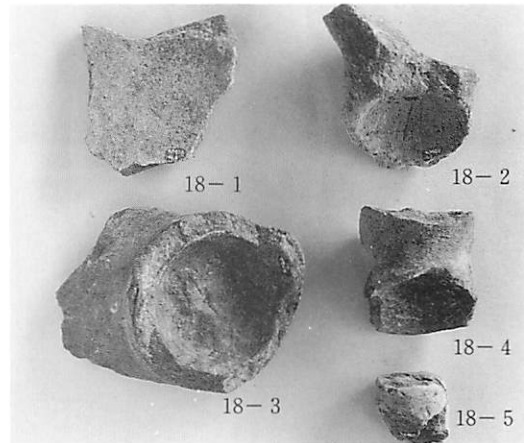
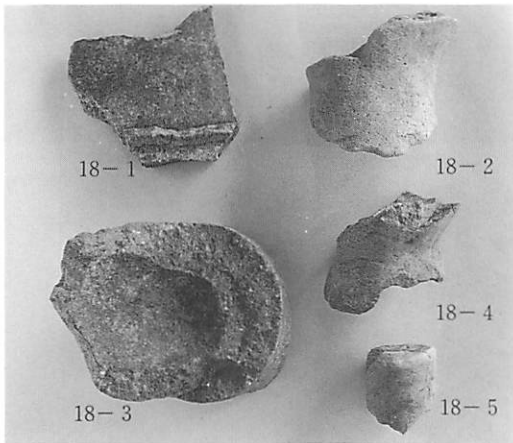
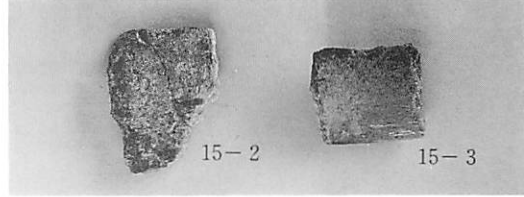
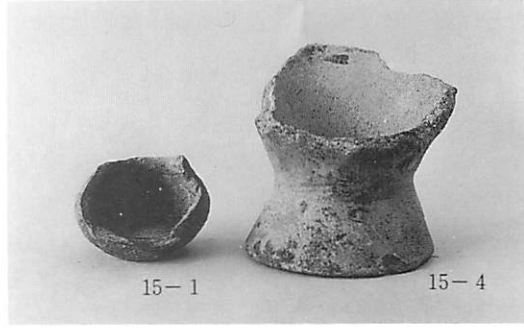
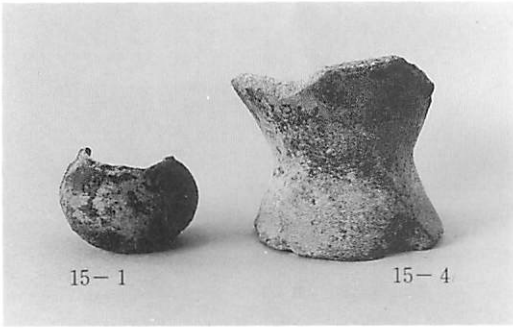


図版6 寺山実習地における試掘調査

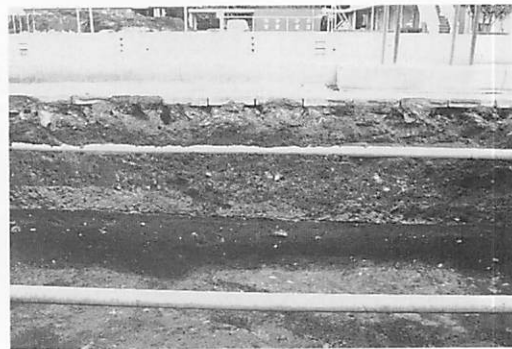
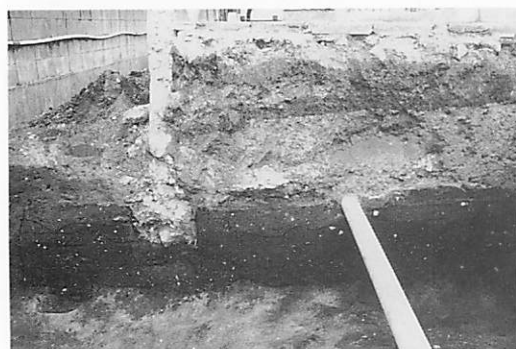
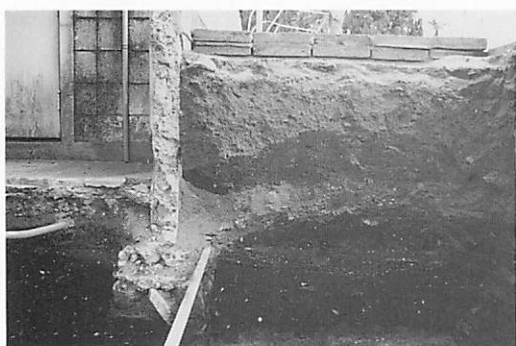


①	②
③	④
⑤	⑥
⑦	⑧

- ① 調査地点全景（南から）
- ② No. 1 トレンチ南壁
- ③ No. 1 トレンチ西壁南側
- ④ No. 1 トレンチ西壁北側
- ⑤ No. 2 トレンチ北壁
- ⑥ No. 2 トレンチ東壁
- ⑦ No. 3 トレンチ西壁
- ⑧ No. 3 トレンチ北壁



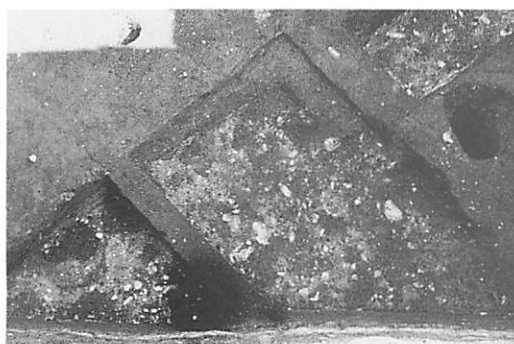
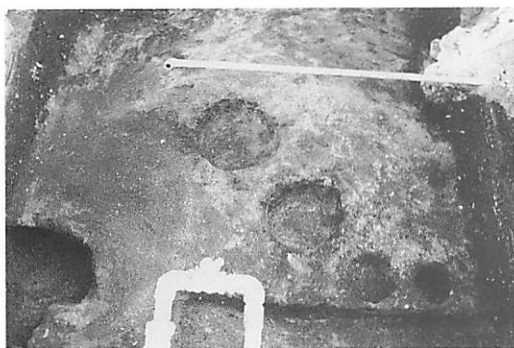
図版 8 郡元団地S・T-6・7区発掘調査(1)



①	②
③	④
⑤	⑥
⑦	⑧

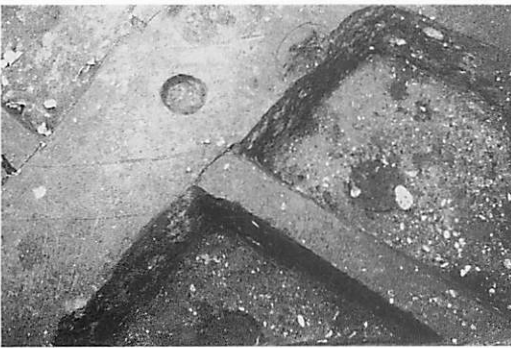
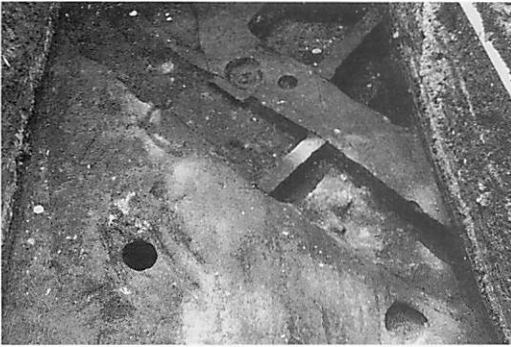
- ① 調査区全景 (東から)
- ② 調査区全景 (北から)
- ③ No.1 トレンチ西壁
- ④ No.3 トレンチ南壁

- ⑤ No.4 トレンチ南壁
- ⑥ No.13 トレンチ南壁
- ⑦ No.14 トレンチ北壁
- ⑧ No.15 トレンチ東壁



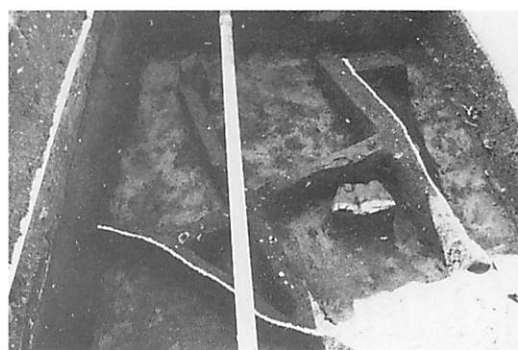
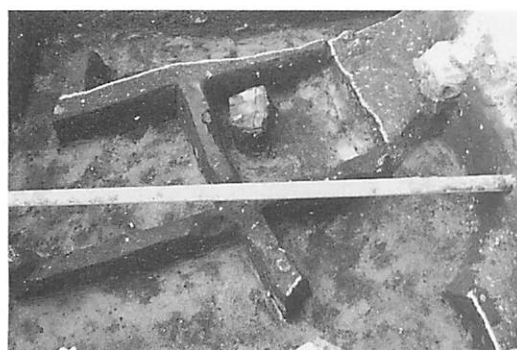
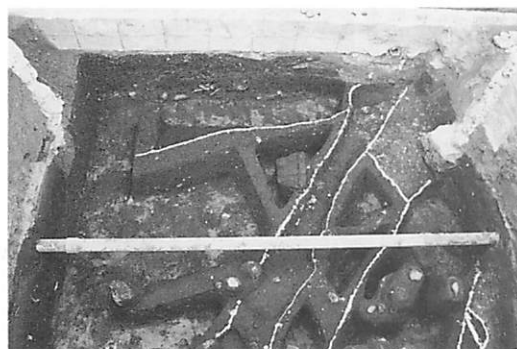
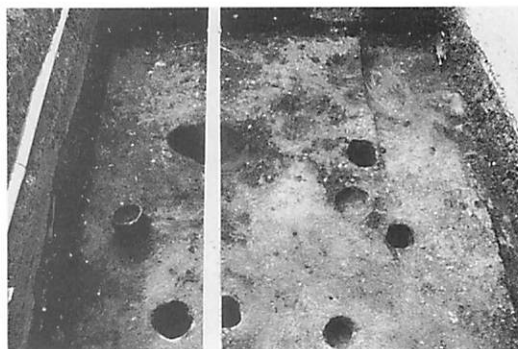
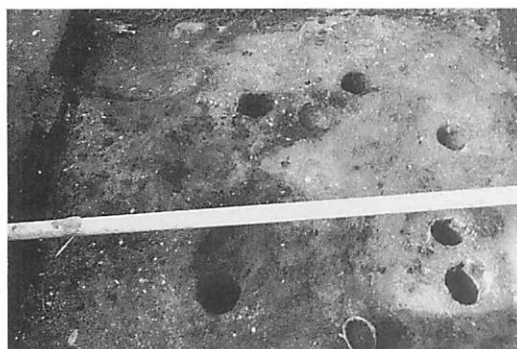
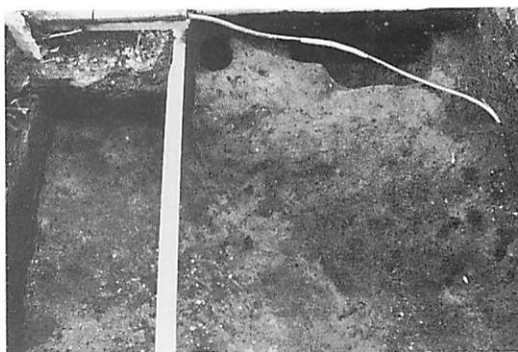
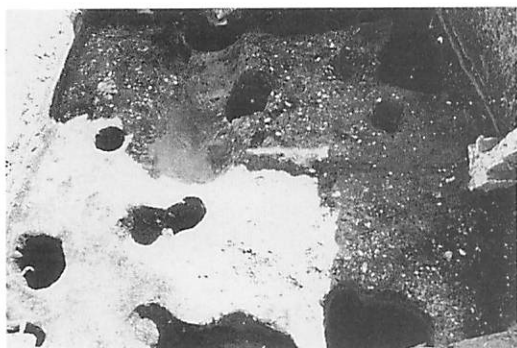
①	②
③	④
⑤	⑥
⑦	⑧

- ① No.1 トレンチ遺構 (北から)
- ② No.2 トレンチH 1 (西から)
- ③ No.2 トレンチH 2 (東から)
- ④ No.2 トレンチH 3・H 5 (西から)
- ⑤ No.2 トレンチSD 1・H 4 (西から)
- ⑥ No.3 トレンチ遺構 (北から)
- ⑦ No.3 トレンチH 6 (西から)
- ⑧ No.3 トレンチSD 2 (北から)



①	⑤
②	⑥
③	⑦
④	⑧

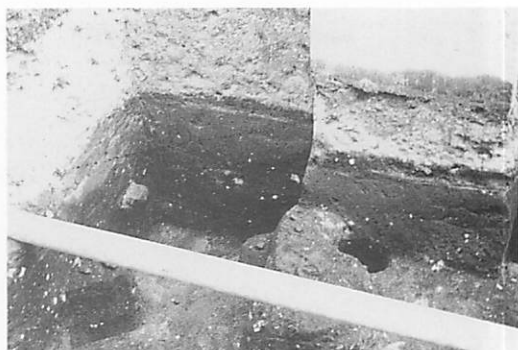
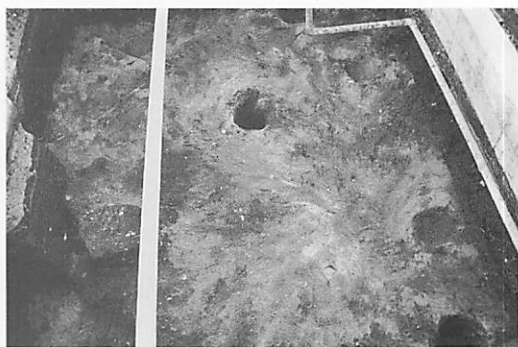
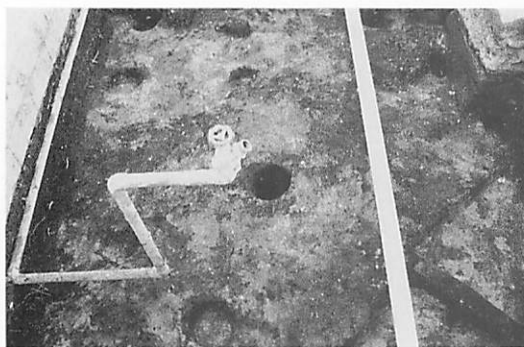
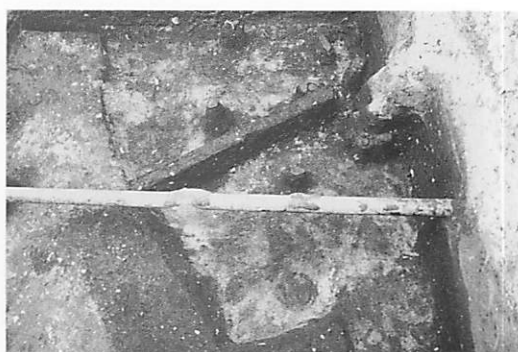
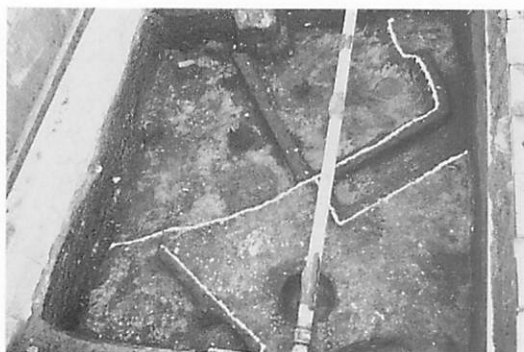
- ① No. 4 トレンチ遺構 (西から)
- ② No. 4 トレンチSD 3 (北から)
- ③ No. 4 トレンチH 4 (西から)
- ④ No. 5 トレンチ完掘状況 (北から)
- ⑤ No. 6 トレンチV層上面 (北から)
- ⑥ No. 7 トレンチV層上面 (西から)
- ⑦ No. 7 トレンチH 17 (西から)
- ⑧ No. 7 トレンチH 17埋土



①	②
③	④
⑤	⑥
⑦	⑧

- ① No.9トレンチ遺構 (西から)
- ② No.10トレンチ遺構 (西から)
- ③ No.11トレンチ遺構 (東から)
- ④ No.11トレンチ遺構 (南から)

- ⑤ No.12トレンチ遺構 (東から)
- ⑥ No.12トレンチS D 5 (東から)
- ⑦ No.12トレンチH 8・H 9 (東から)
- ⑧ No.12トレンチH 8・H 9 (北から)



①	②
③	④
⑤	⑥
⑦	⑧

① No.13トレンチ (南から)

② No.13トレンチH10 (東から)

③ No.13トレンチH12 (西から)

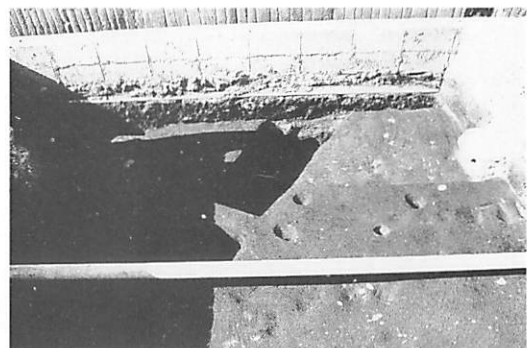
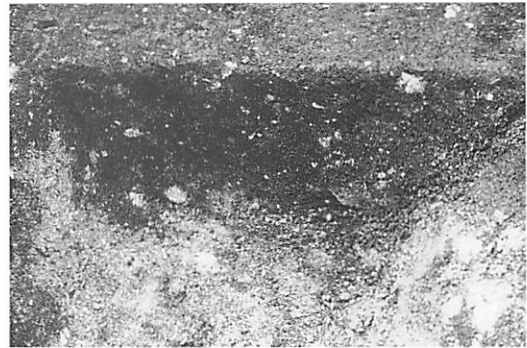
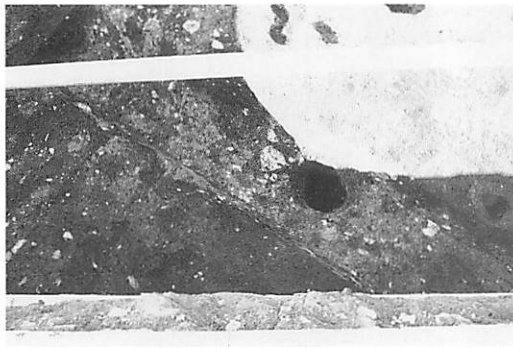
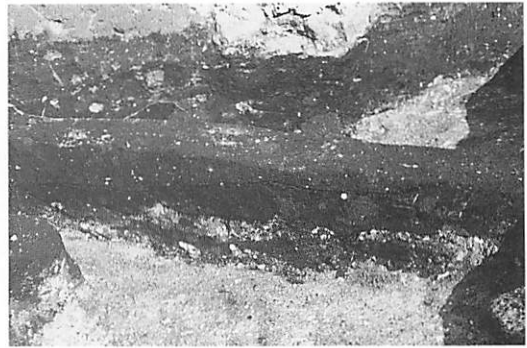
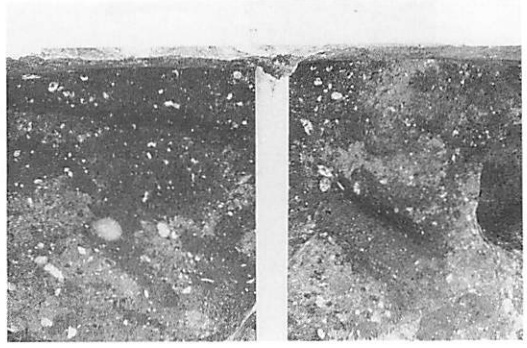
④ No.13トレンチH11 (北から)

⑤ No.14トレンチ遺構 (南から)

⑥ No.14トレンチ遺構 (北から)

⑦ No.14トレンチH13 (西から)

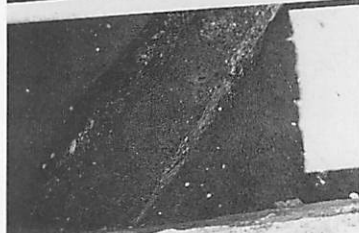
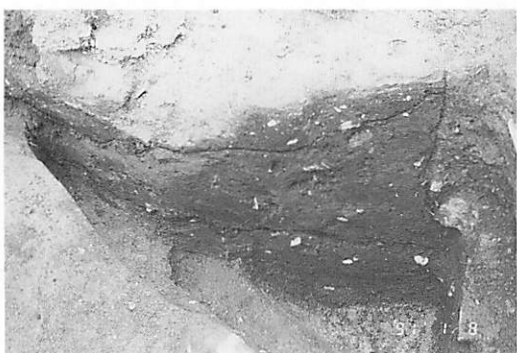
⑧ No.14トレンチH13 (東から)



①	②
③	④
⑤	⑥
⑦	⑧

- ① No.15トレンチ遺構 (東から)
- ② No.15トレンチH14 (南から)
- ③ No.15トレンチH15 (西から)
- ④ No.15トレンチH15埋土

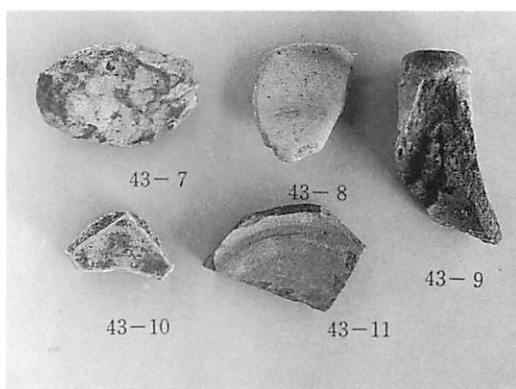
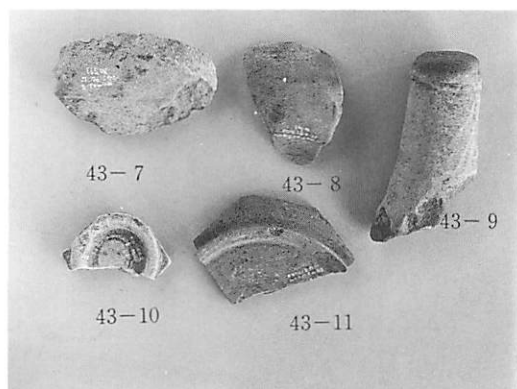
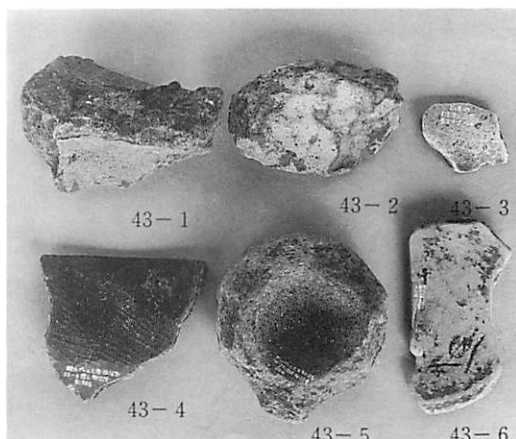
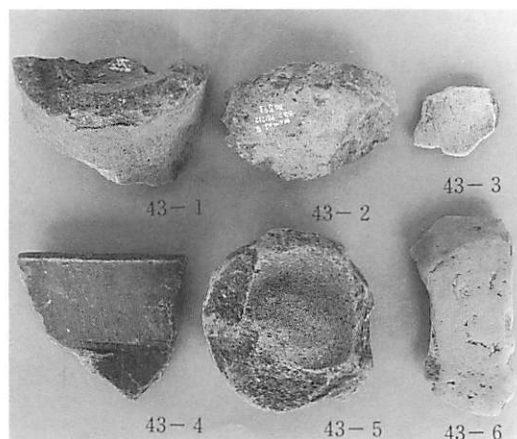
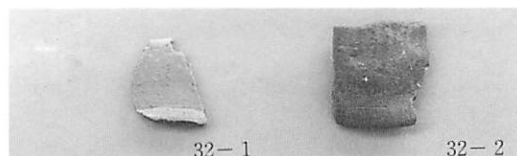
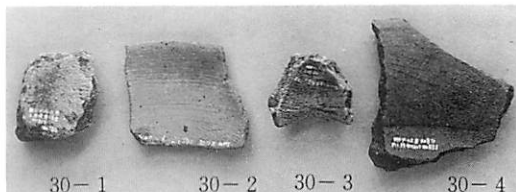
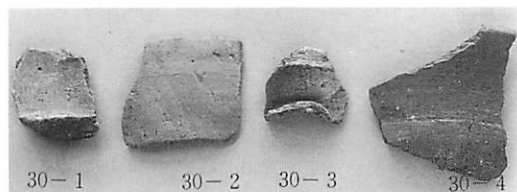
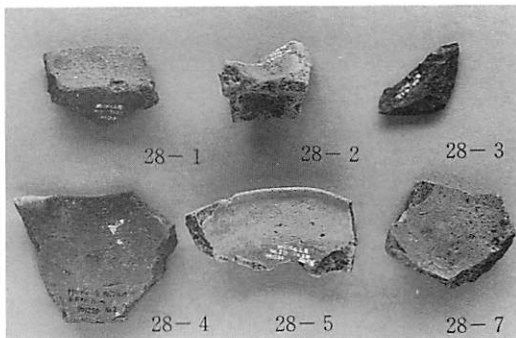
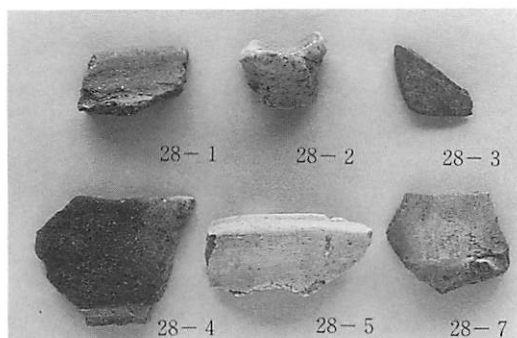
- ⑤ No.15トレンチSD6 (東から)
- ⑥ No.15トレンチSD6埋土
- ⑦ No.15トレンチPit (北から)
- ⑧ No.16トレンチ遺構 (東から)



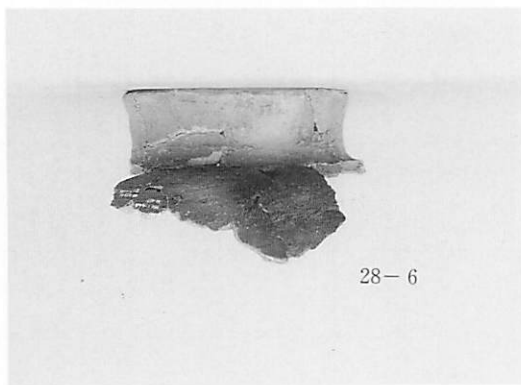
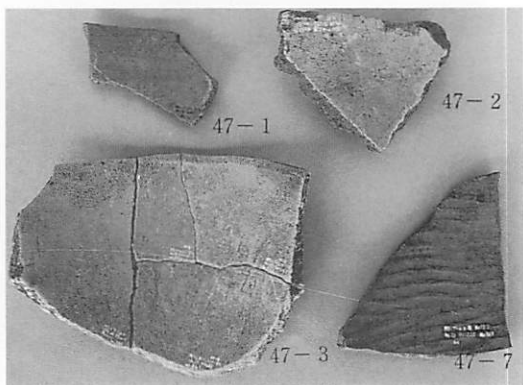
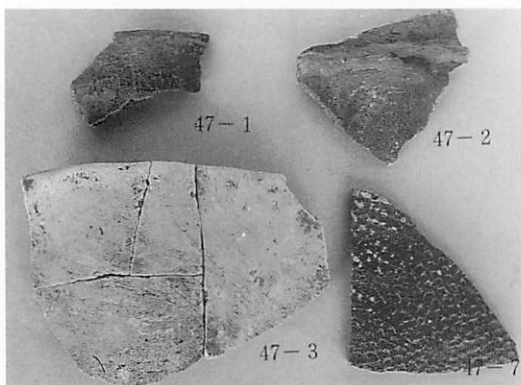
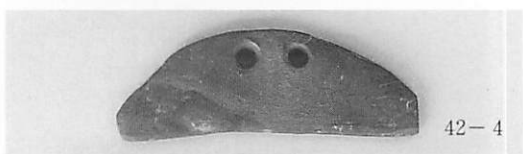
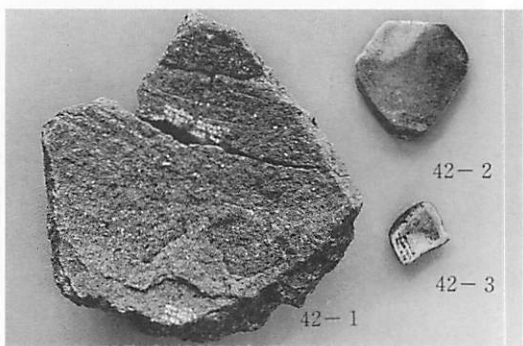
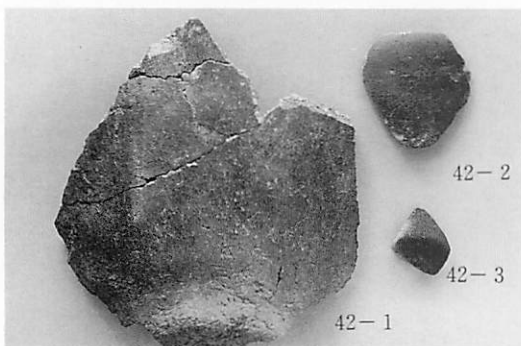
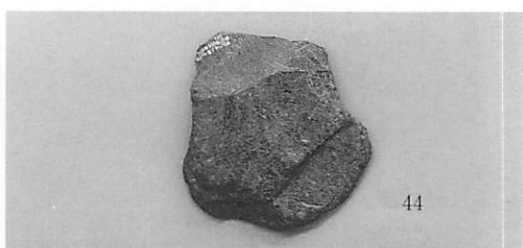
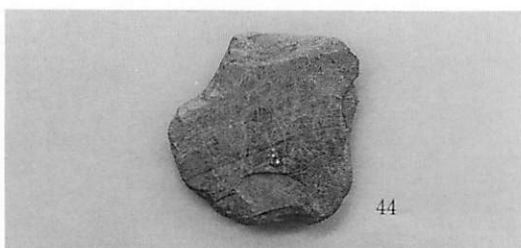
①	②
③	④
⑤	⑥
⑧	⑦

- ① No.16トレンチH15 (東から)
- ② No.16トレンチSD7 (東から)
- ③ No.16トレンチSK2 (西から)
- ④ No.16トレンチH16

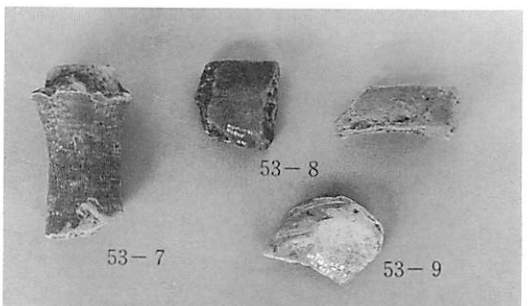
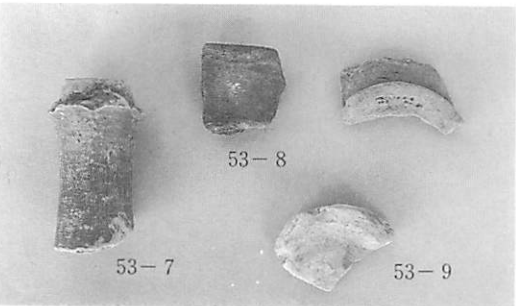
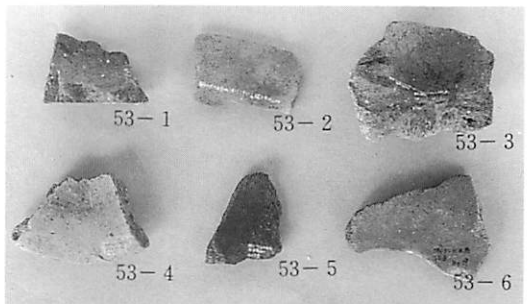
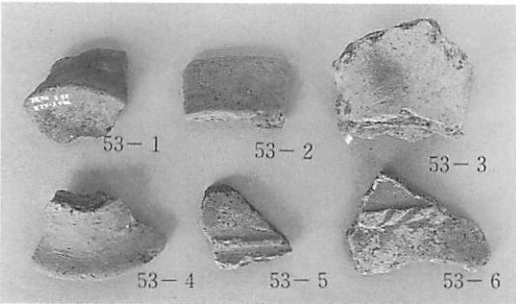
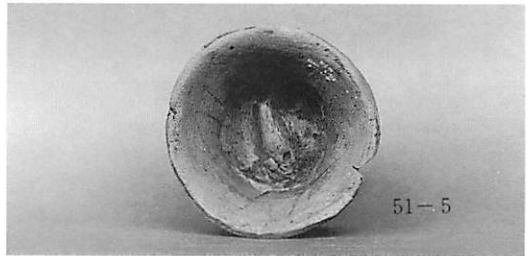
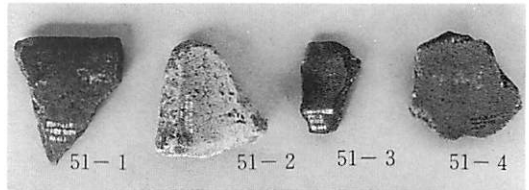
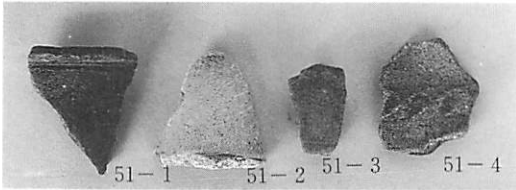
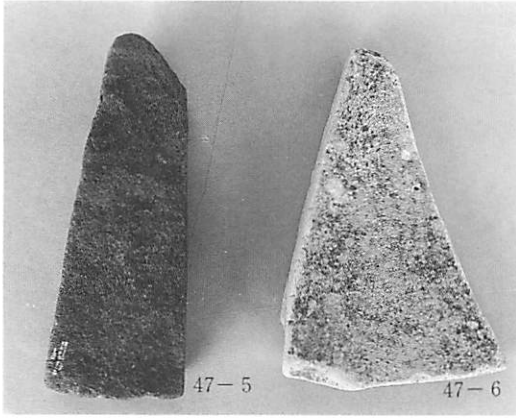
- ⑤ No.17トレンチ遺構 (東から)
- ⑥ No.17トレンチSK3 (北から)
- ⑦ No.17トレンチSK3 (西から)
- ⑧ No.17トレンチSK3埋土



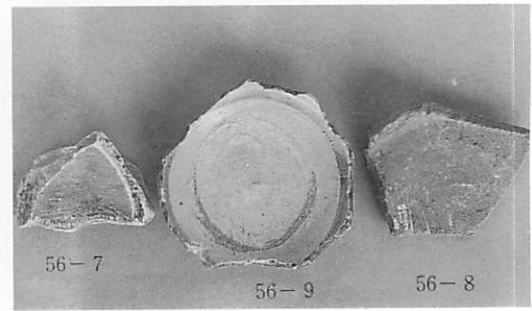
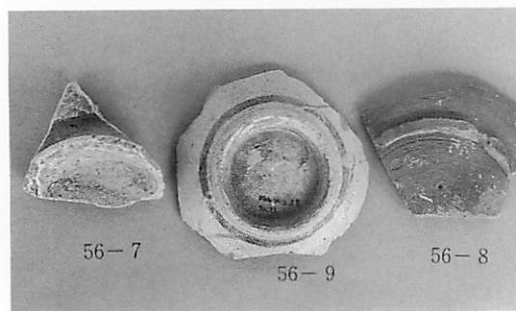
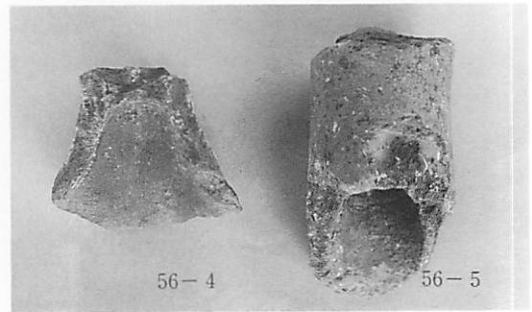
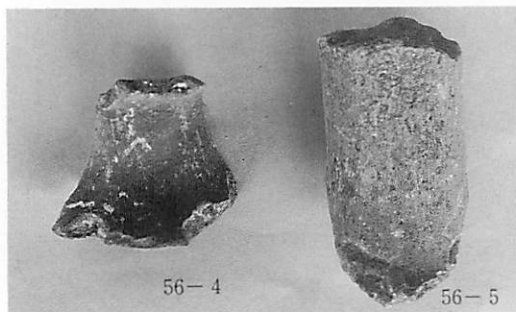
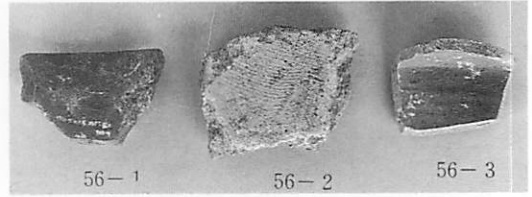
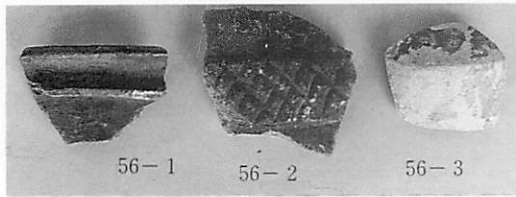
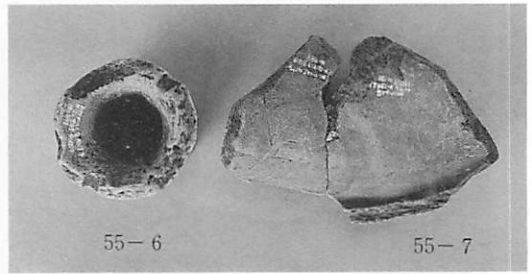
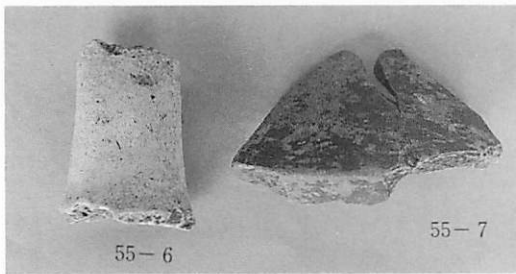
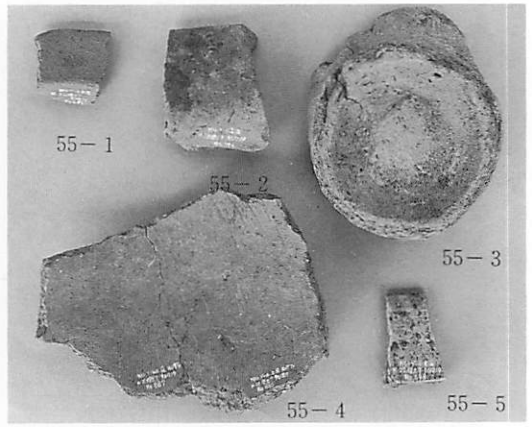
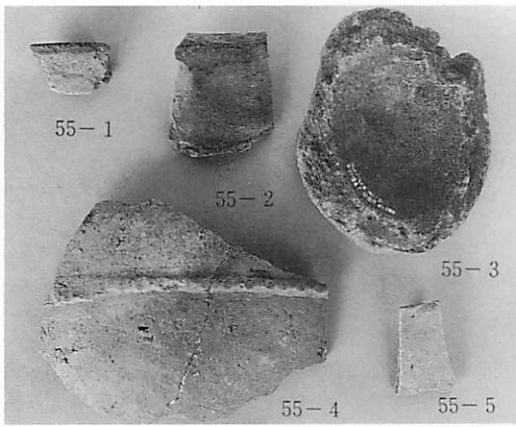
出土遺物(1)



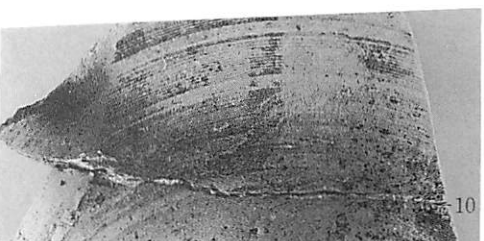
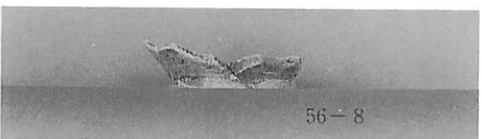
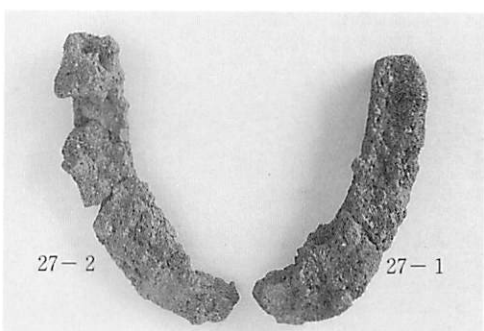
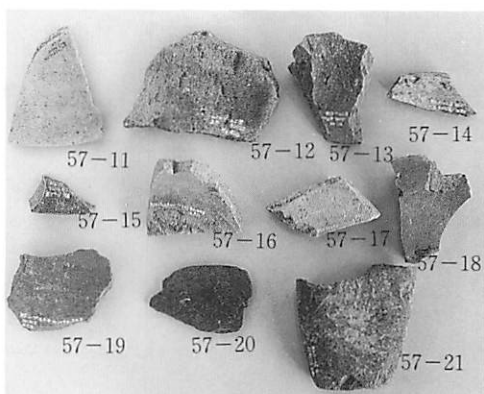
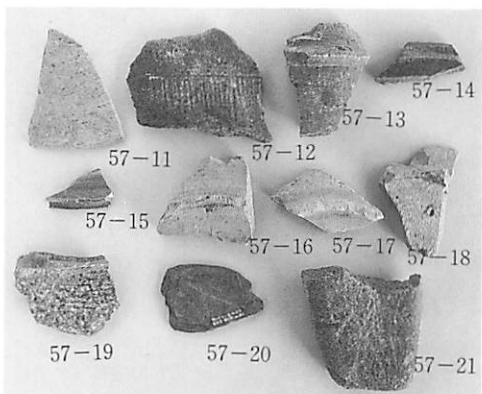
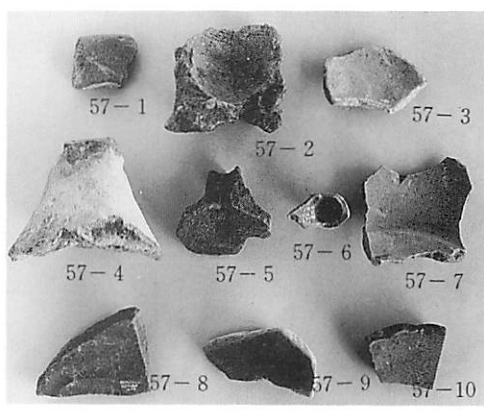
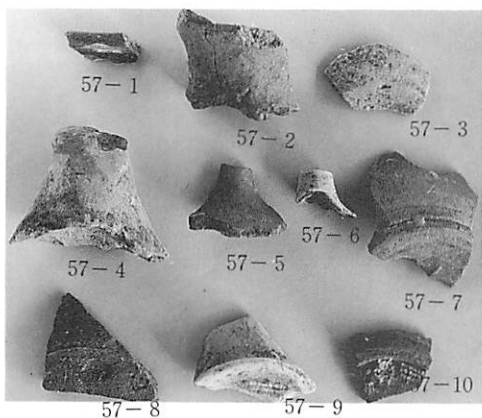
出土遺物(2)



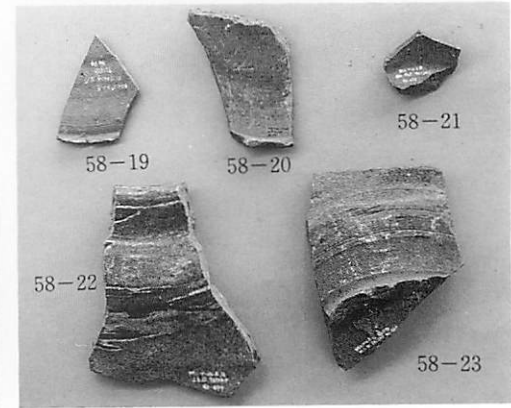
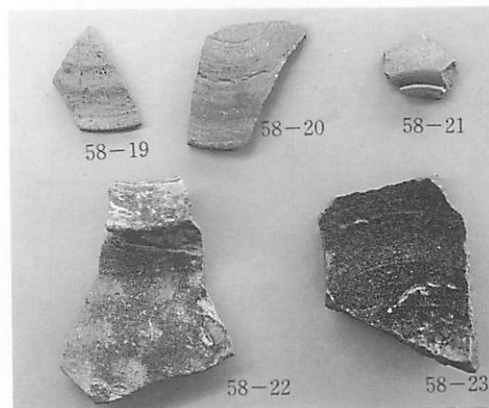
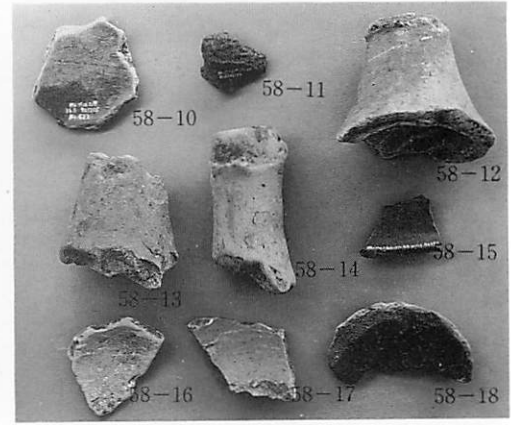
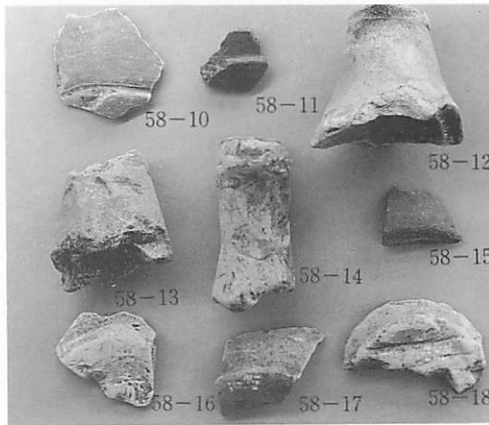
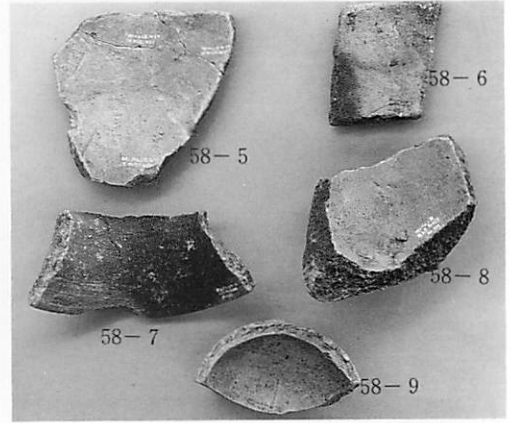
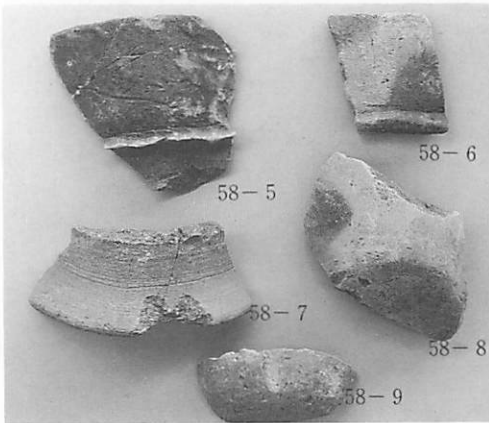
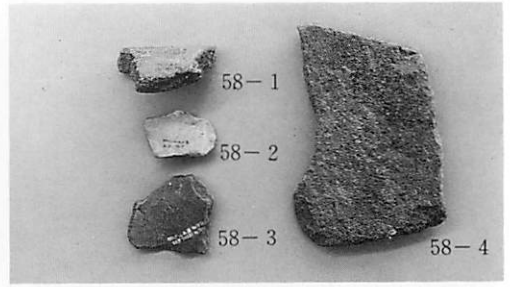
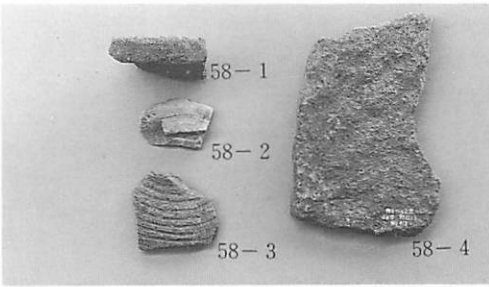
出土遺物(3)



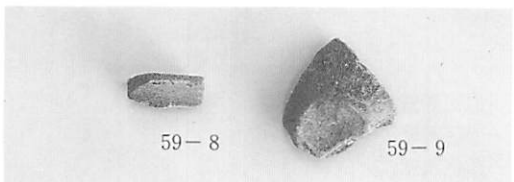
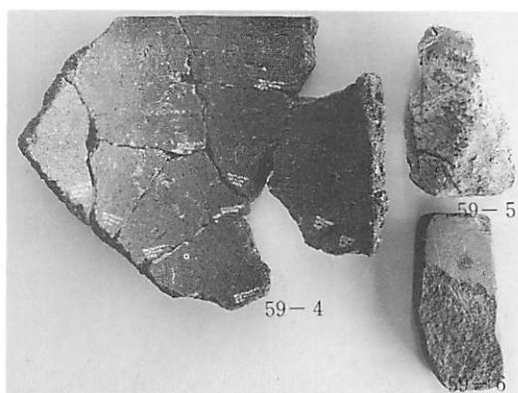
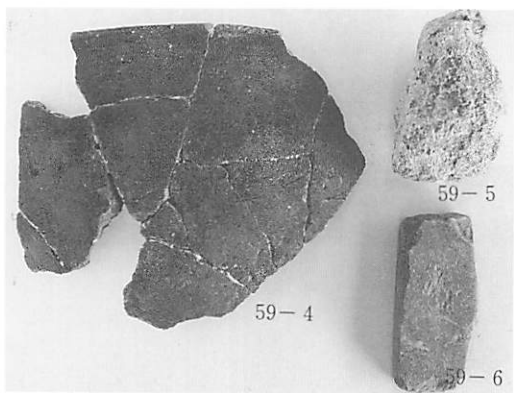
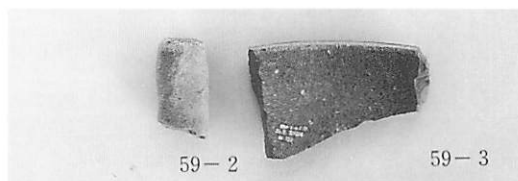
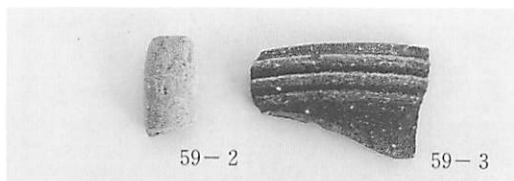
出土遺物(4)



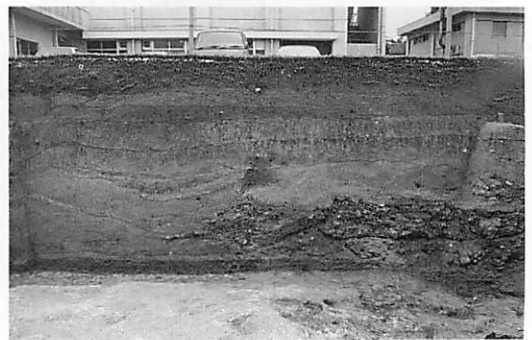
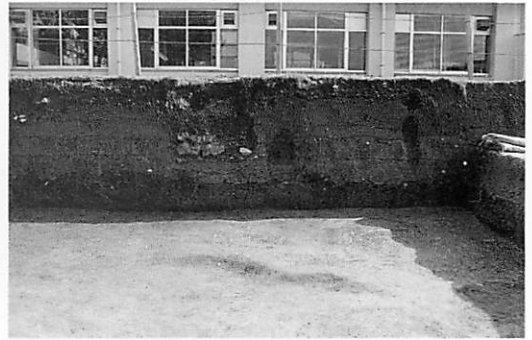
出土遺物(5)



出土遺物(6)



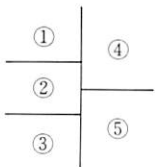
出土遺物(7)



①	②
③	④
⑤	⑥
⑦	⑧

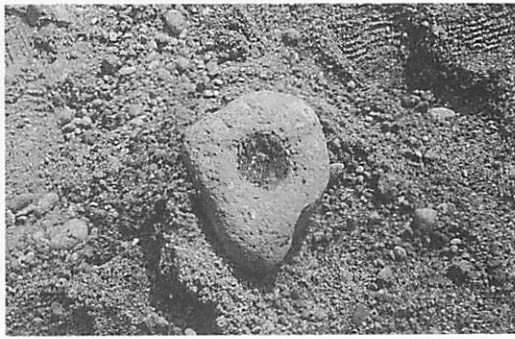
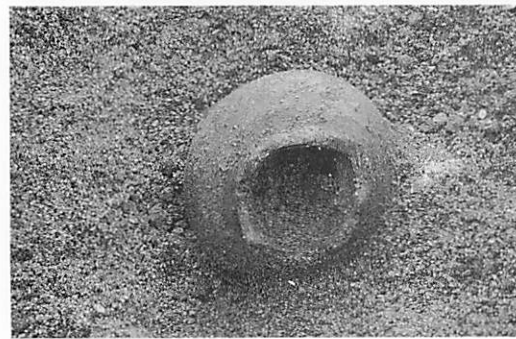
- ① g-10区西壁
- ② f-10区西壁
- ③ h-10区西壁
- ④ i-10区南壁
- ⑤ i-2区南壁
- ⑥ i-3区南壁
- ⑦ i-4区南壁
- ⑧ i-5区南壁

図版23 郡元団地H-11・12区発掘調査(2)



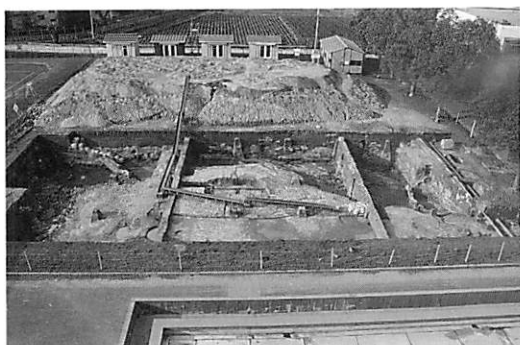
- ① 河1完掘状況(南から)
- ② 河1完掘状況(南から)
- ③ 河1完掘状況(南東から)

- ④ 河1完掘状況(北西から)
- ⑤ 河1埋土遺物出土状況



①	②
③	④
⑤	⑥
⑦	⑧

① 河2調査状況(西から)
 ② 河2調査状況(西から)
 ③~⑧ 河2埋土遺物出土状況



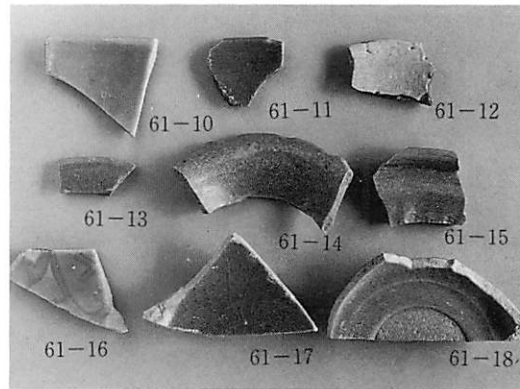
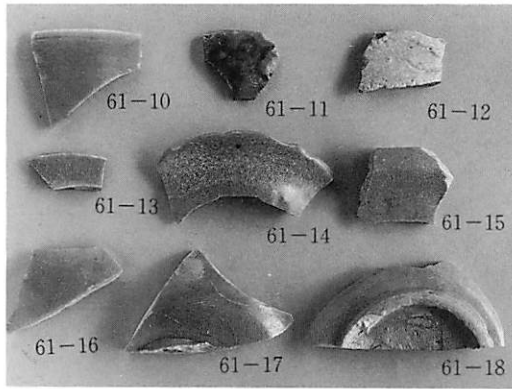
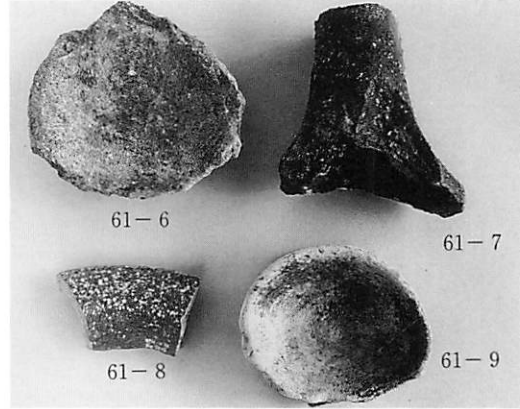
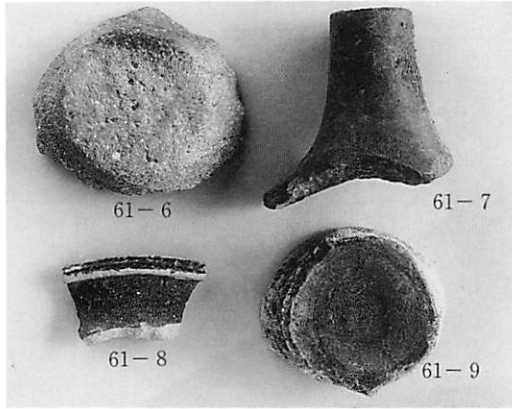
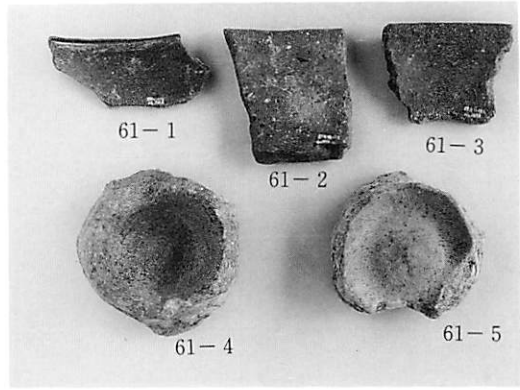
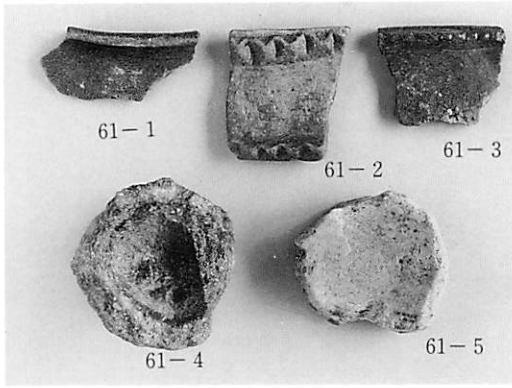
①	②
③	④
⑤	⑥
⑦	⑧

- ① 河 2-3 全景 (南から) ② 河 2 埋土
 ③ 河 2-3 中央部 (西から) ④ 河 2-3 中央部 (北から)
 ⑤ 河 2-3 中央部 (東から) ⑥ 河 2-3 東側部分 (南から)
 ⑦ 河 3-1 (南東から) ⑧ 河 3-1 (北から)

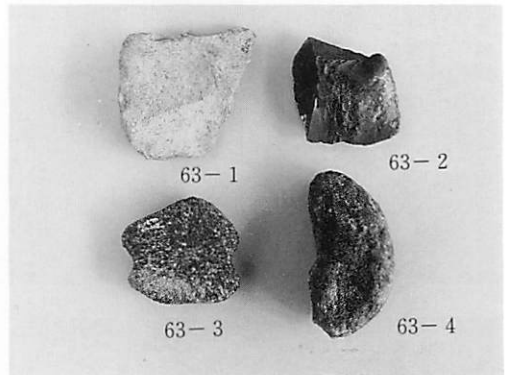
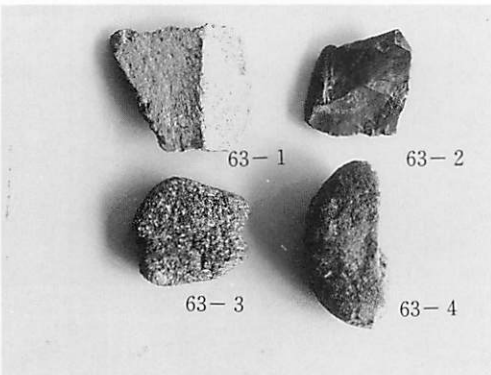
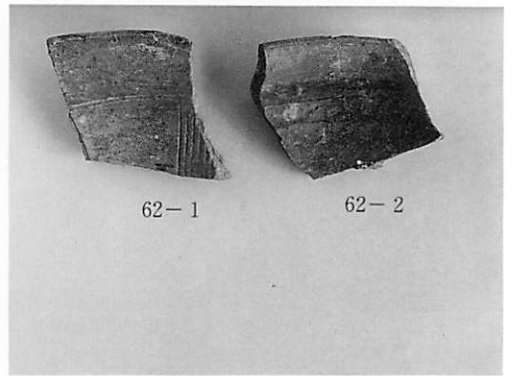
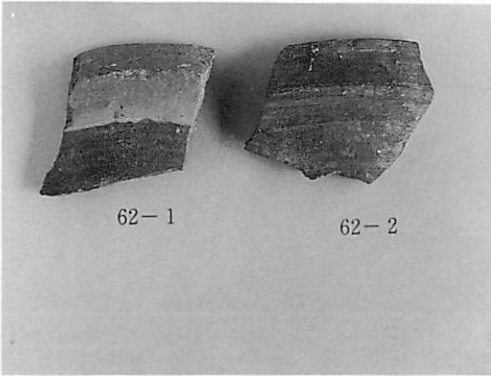
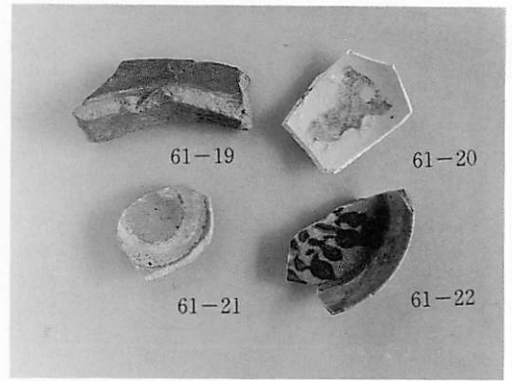
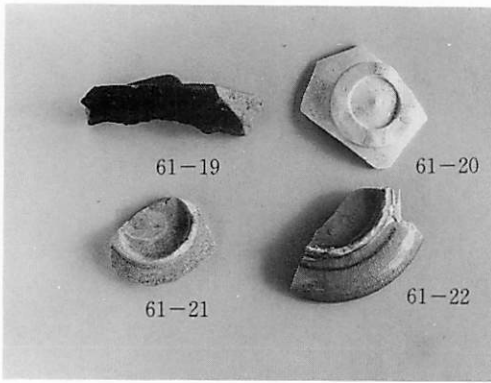


①	②
③	④
⑤	⑥
⑦	⑧

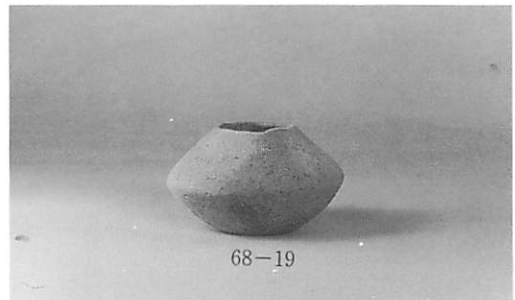
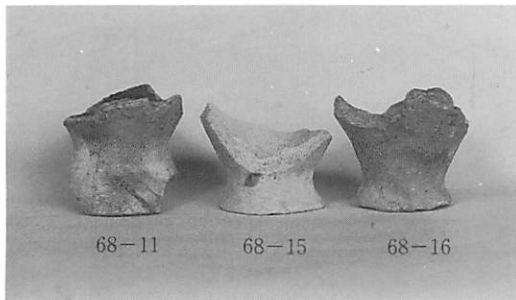
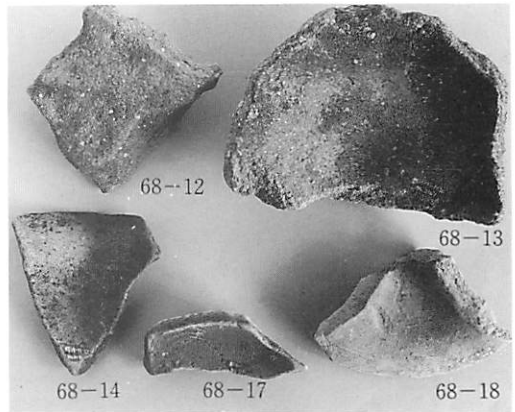
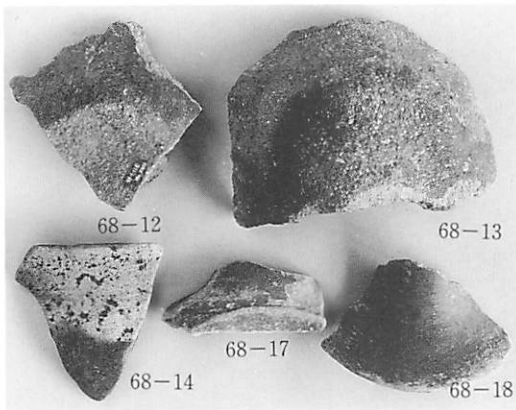
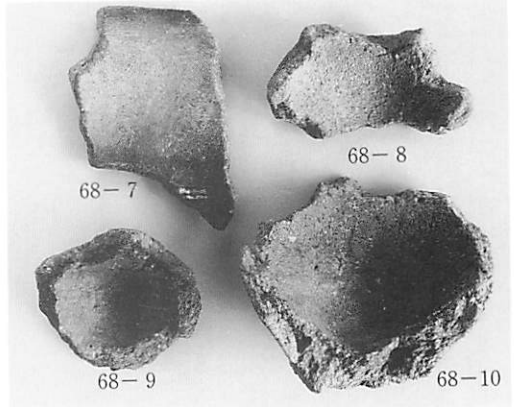
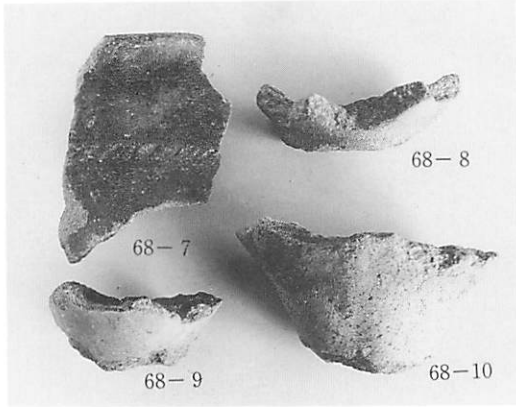
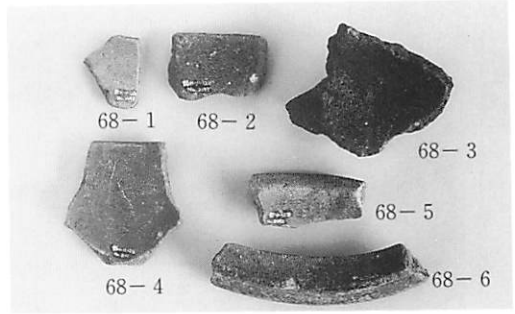
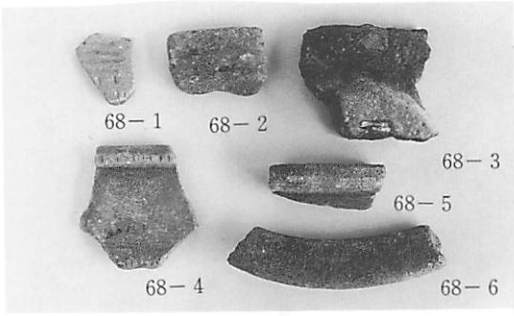
- ① 河2-4 全景 (南から) ② 河2-4 全景 (東から)
 ③ 河2-4 全景 (南東から) ④ 河2-4 東側部分 (南から)
 ⑤ 河2-4 西側部分 (南から) ⑥ 河2-4 中央部分 (南から)
 ⑦ 河3-2 完掘状況 (北西から) ⑧ 河3-2 完掘状況 (北から)



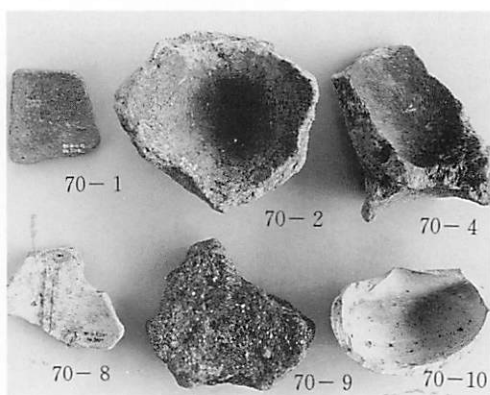
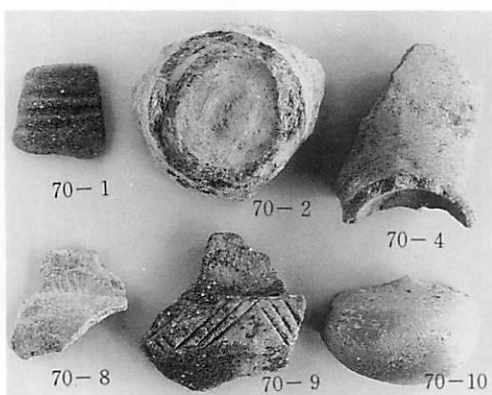
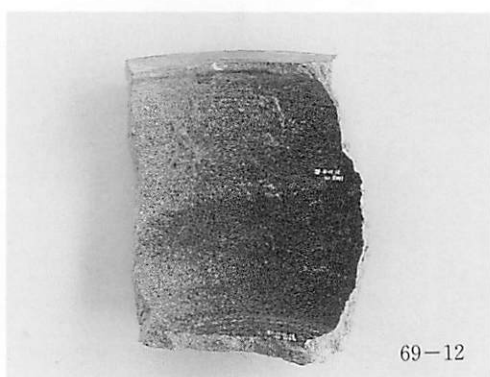
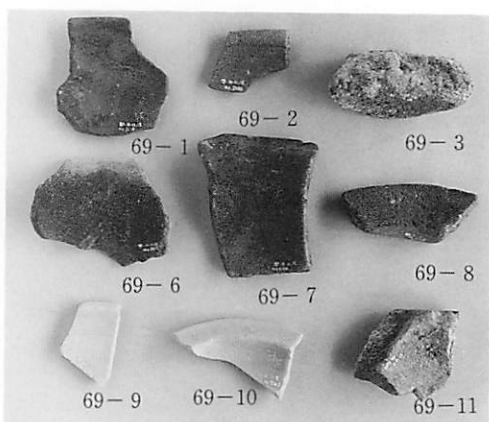
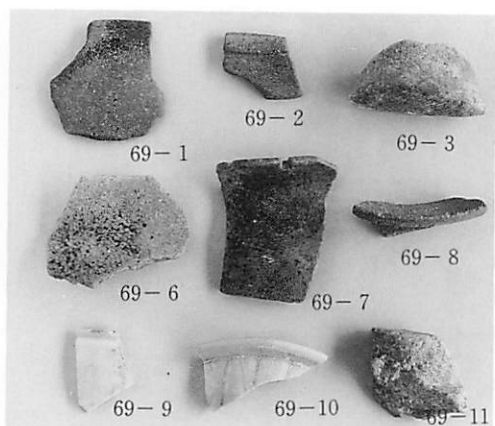
出土遺物(1)



出土遺物(2)



出土遺物(3)



出土遺物(4)



70-3



70-5



70-6



70-7



70-11



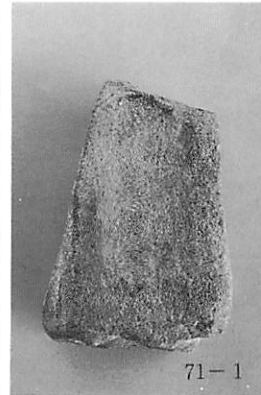
70-11



71-1



71-1



71-1



71-1



71-1

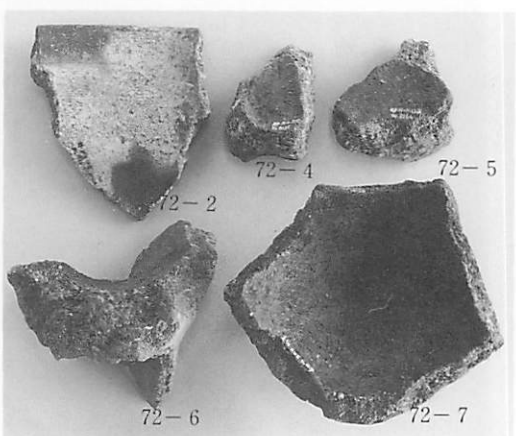
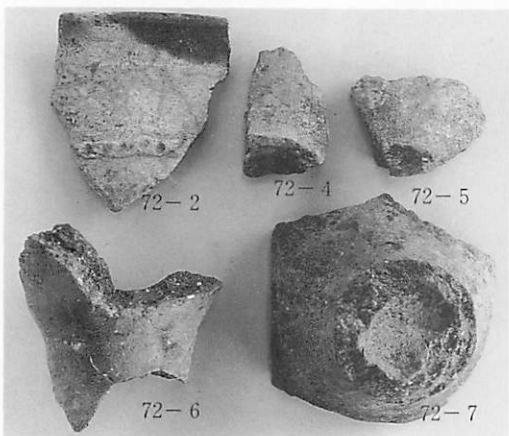
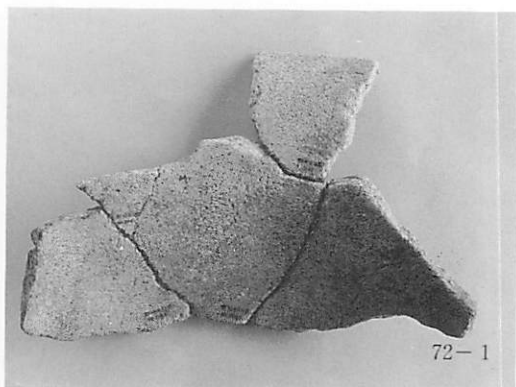


71-2

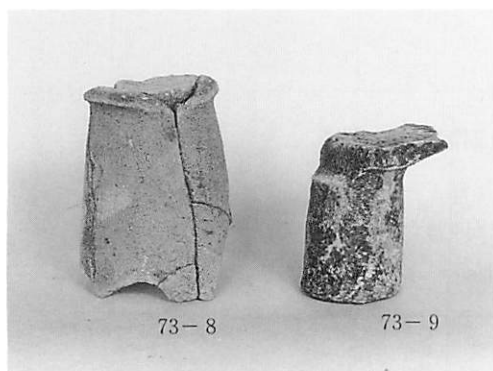
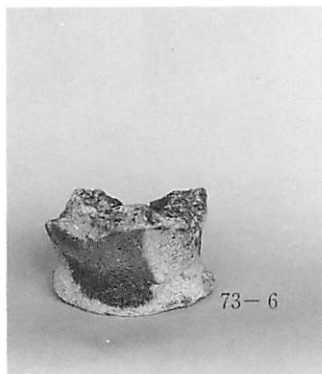
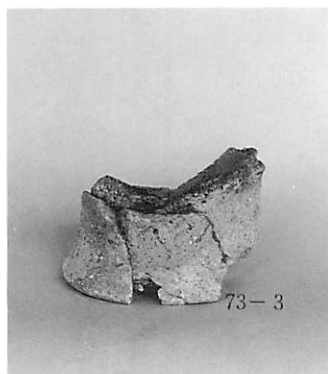
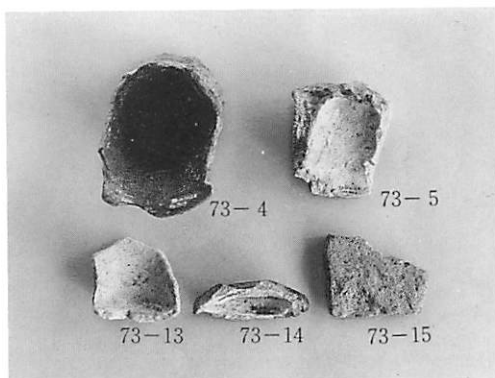
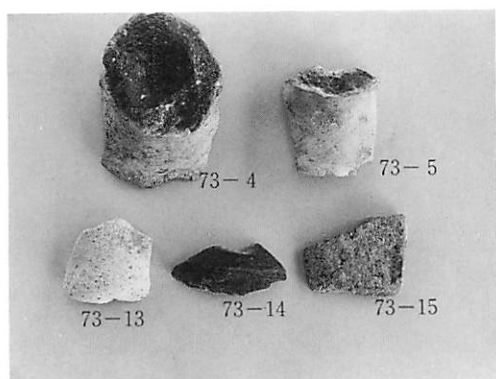


71-2

出土遺物(5)



出土遺物(6)



出土遺物(7)

鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅶ

1992年3月

編集発行 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
鹿児島市郡元一丁目21-24